SD

9804 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第403号1998年4月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

Versatile Architects of the New Generation:

New Design Environments Through Unit Activities

次世代のマルチ・アーキテクトたち

ユニット活動による新たな設計環境

I.C.U.
アトリエ・ワン
EPA 環境変換装置建築研究所
インテンショナリーズ
H DESIGN ASSOCIATES
F.O.B アソシエイション
クライン ダイサム アーキテクツ
CLIP
建築少年
パラボリック・ラボラトリ
みかんぐみ

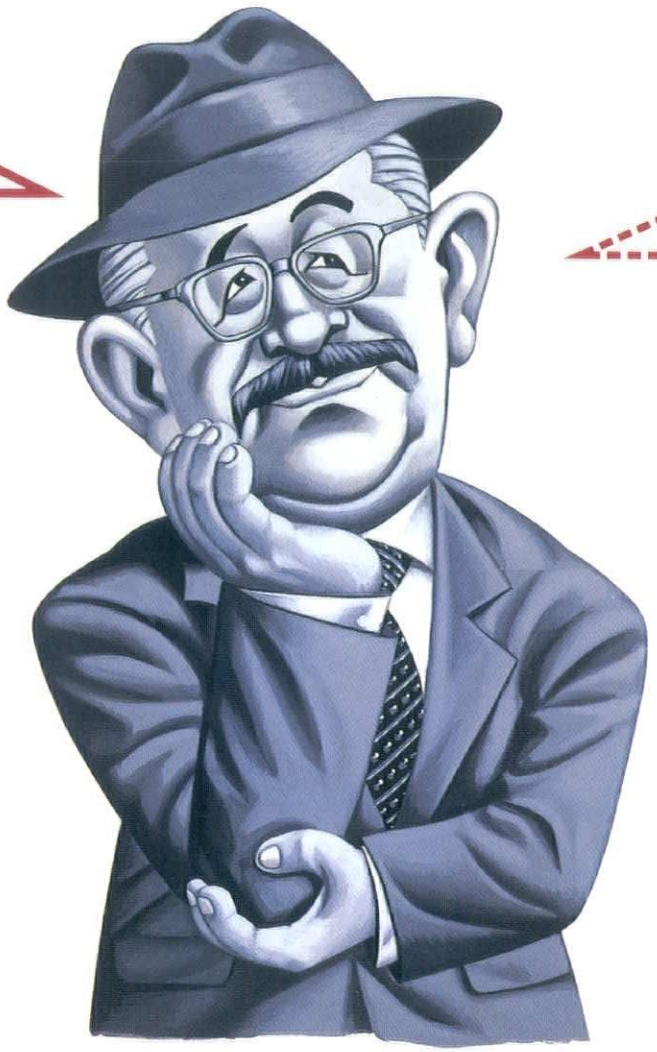


Monthly Journal of Art and Architecture

YAZAKI

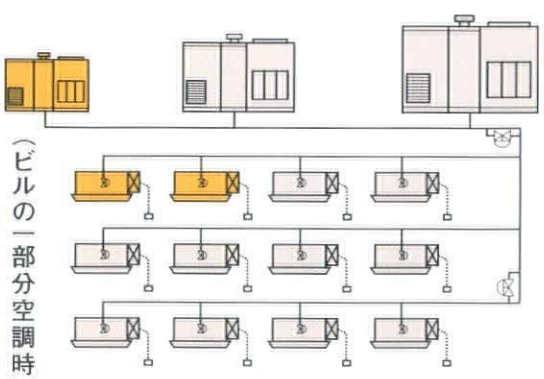
ノンフロン 省エネルギー

あっ もったいない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



（ビルの一部分空調時）

矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をいかんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコントロールパネル【DCP】のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

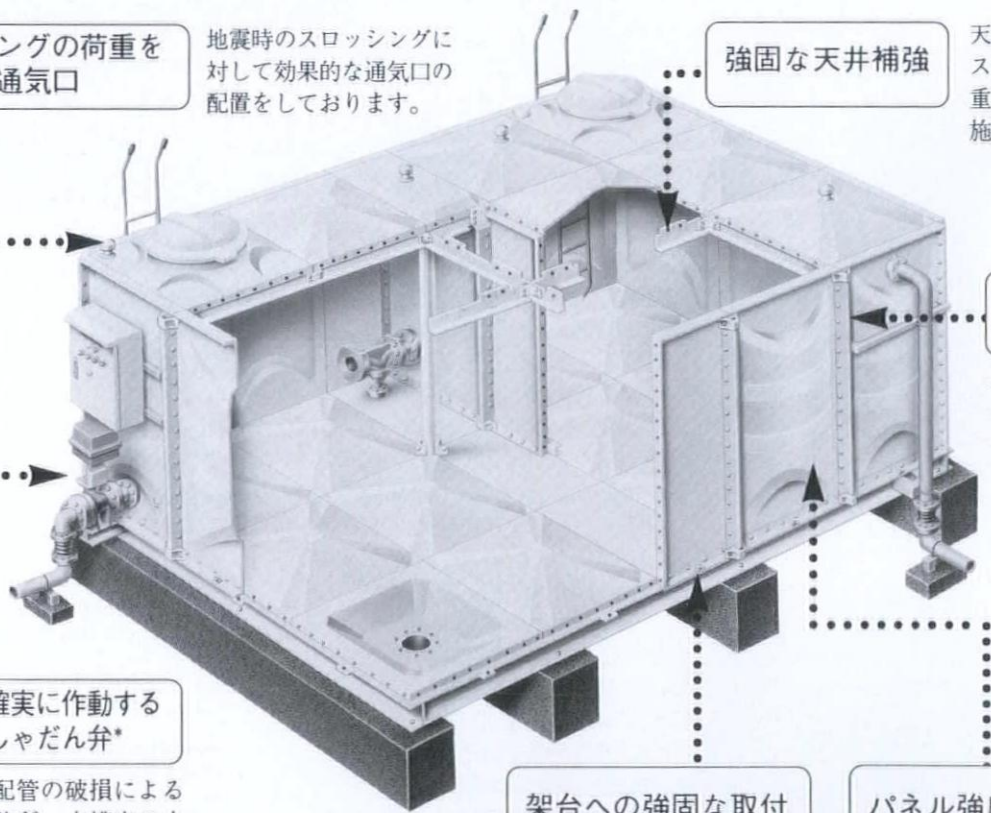
本社：〒108-8333 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8612
空調機器事業部：〒435-0015 静岡県浜松市子安町1370 TEL.053-461-5112

札幌支社 TEL.011-852-2914　名古屋支社 TEL.052-833-8415　中国支社 TEL.0829-23-2115
仙台支社 TEL.022-284-9115　大阪支社 TEL.06 - 458-4825　四国支社 TEL.0878-33-3336
東京支社 TEL.03-3298-3140　北陸支社 TEL.0764-41-6516　九州支社 TEL.092-411-4835

BRIDGESTONE

新・耐震基準
優れた耐震性でひとつ上をいく
安心をお届けします。

ブリヂストンパネル水槽は、衛生性、保温性、配管仕様、止水性といった独自の技術により高い評価を頂いております。そして、この度、求められる耐震基準に適合させ、緊急時には水槽内の水確保のために作動する緊急遮断弁も品揃えさせる等、皆様により安心してお使いいただける商品として生まれ変わりました。



スロッシングの荷重を回避する通気口

地震時のスロッシングに対して効果的な通気口の配置をしております。

強固な天井補強

天井には地震時のスロッシングの荷重に耐える補強を施しております。

水槽外壁面の連続補強

外壁面を連続した金属で補強してあります。

緊急時に確実に作動するスーパーしゃだん弁*1

地震時に、配管の破損による水の流出を防ぎ、水槽内の水を確保する事を目的とした緊急時の保水用遮断弁です。

*1 [オプション仕様]

架台への強固な取付

新耐震基準に基づいて本体と架台を確実に締結しています。

パネル強度アップ

耐震性に優れたパネルを採用しています。

スーパーウォータータンク H型 1.0G/1.5G/2.0G

スロッシング対策適合品

株式会社ブリヂストン 建築用品販売部 東京都中央区日本橋3-5-15同和ビル 〒103-0027 TEL. (03) 5202-6864 FAX (03) 5202-6869

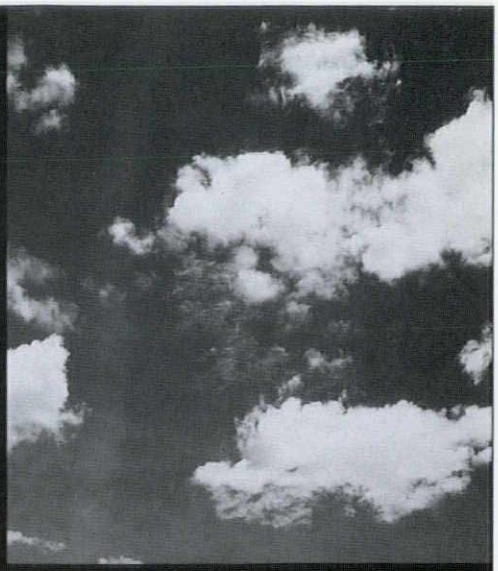
National/Panasonic

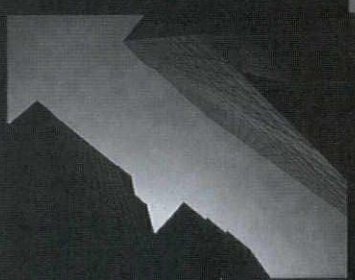
A
— AUDIO
音響システム

V&C
— VISUAL
映像システム

— COMMUNICATION
通信システム

— COMPUTER
コンピューターシステム





ここにはあります人と自然と技術の調和が

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR&AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

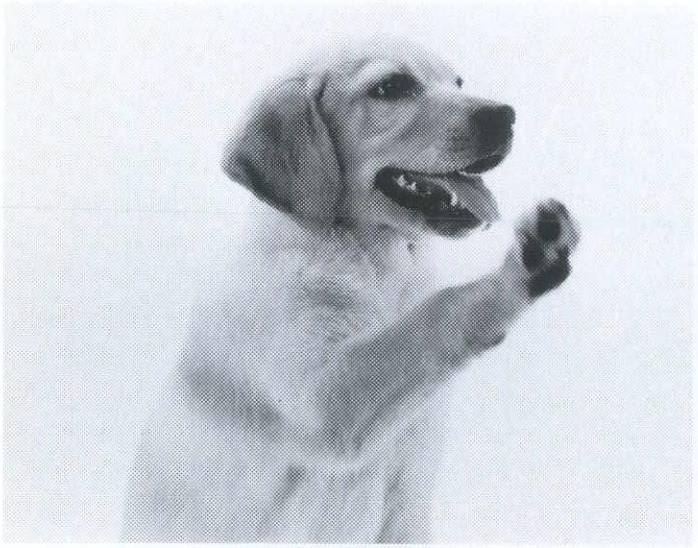
SOFTWARE&
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

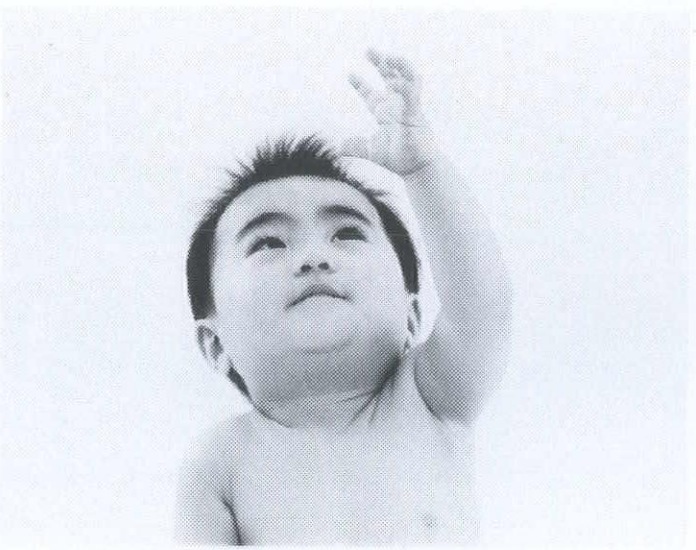


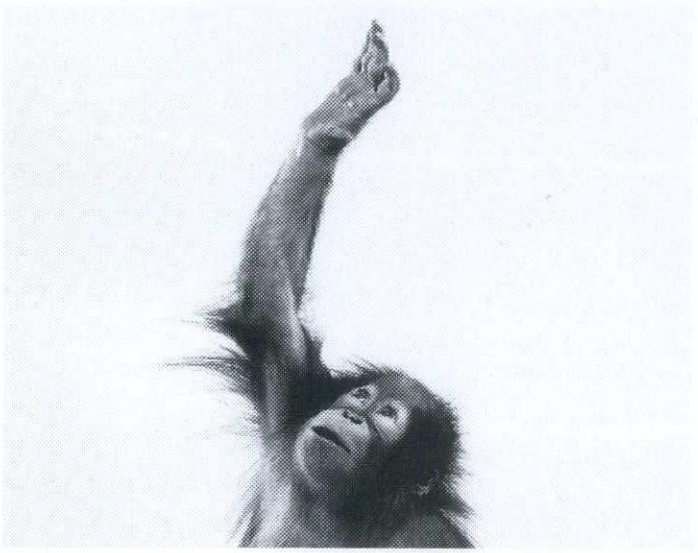
松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

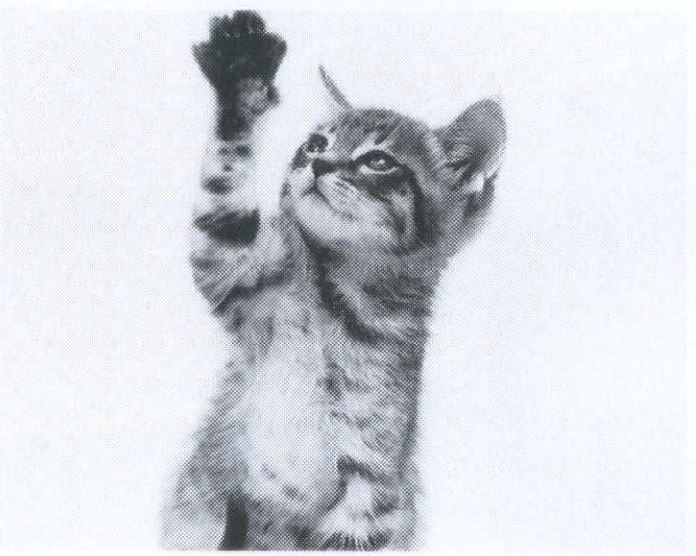
松下電器産業株式会社
建設システム営業本部 ☎03-5500-7504
北海道支店 ☎011-207-7722
東北支店 ☎022-711-3551
新潟支店 ☎025-246-1031
関東支店 ☎0286-37-2241
神奈川支店 ☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010
長野支店 ☎0262-26-3990
北陸支店 ☎0762-23-1121
静岡支店 ☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111
中国支店 ☎082-247-5272
四国支店 ☎0878-26-1711
九州支店 ☎092-431-1100
沖縄支店 ☎098-869-2926

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

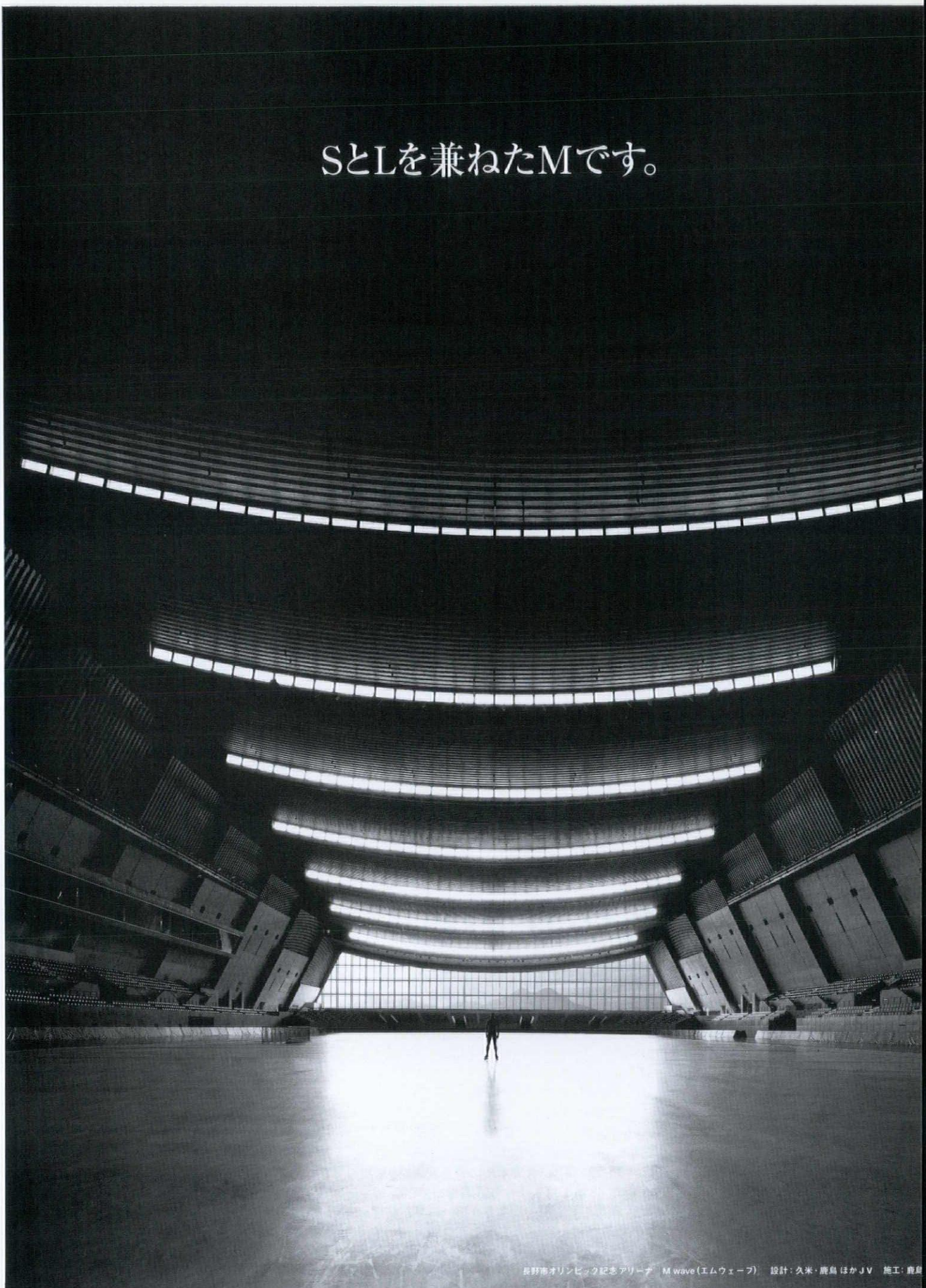
いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

SとLを兼ねたMです。



長野市オリンピック記念アリーナ　M wave（エムウェーブ）　設計：久米・鹿島 ほかJV　施工：鹿島

大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声・・・。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですよね。
というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることがはっきりしてきたからなんです。(プロ野球の本拠地になっているところでさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。)ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったり、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしなことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくろう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年もに渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立・・・。
いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称『M wave(エムウェーブ)』の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、'前代未聞の形'とか'日本らしさ'とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんですね。スタンドだけじゃなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。(もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露しにくいのでリンクに露がたれてこないし・・・と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。)

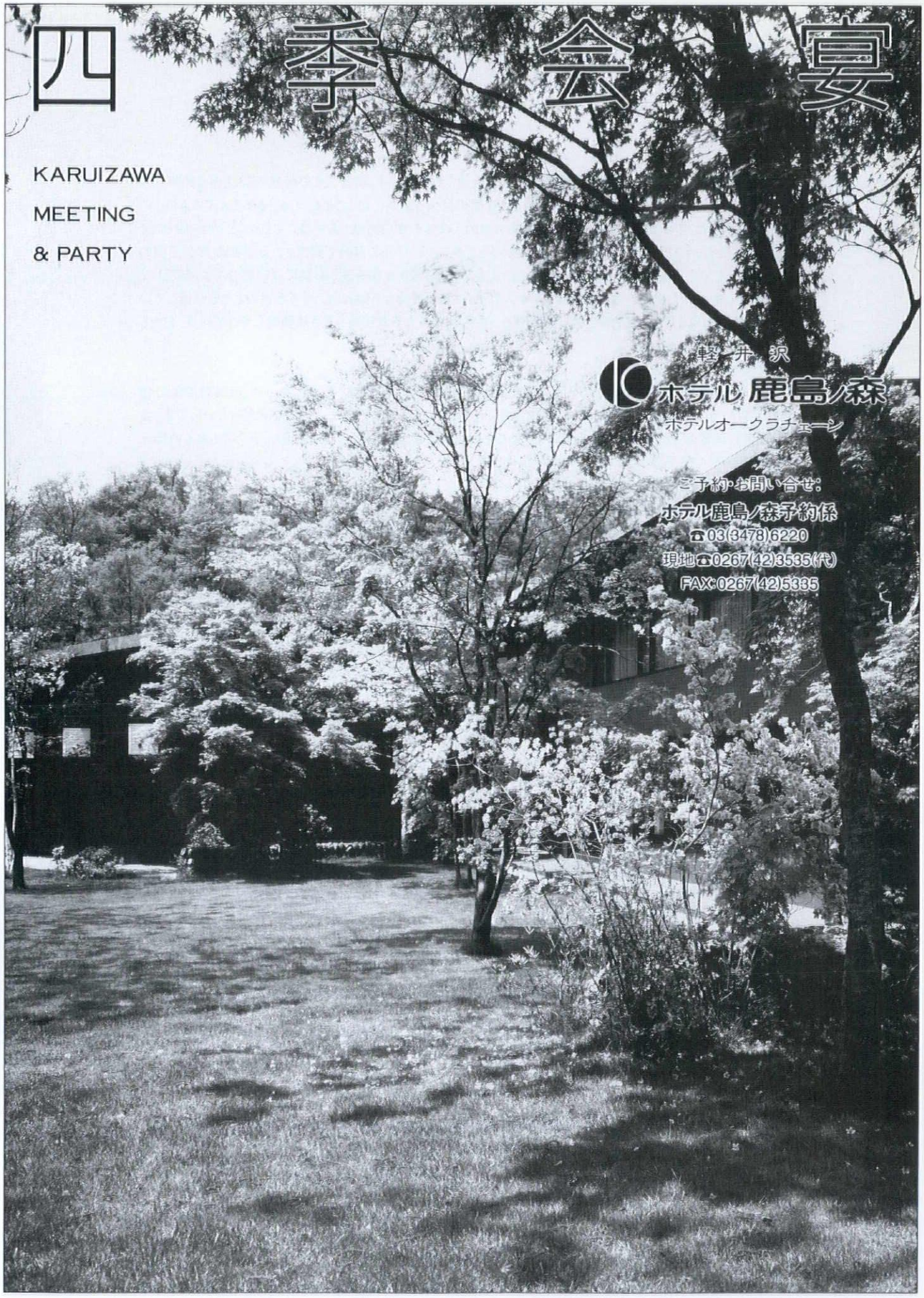
ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上。わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

〒107-8388 東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311(代表)
http://www.kajima.co.jp/


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

〔客室&施設〕

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿=やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

〔レストラン&バー〕

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

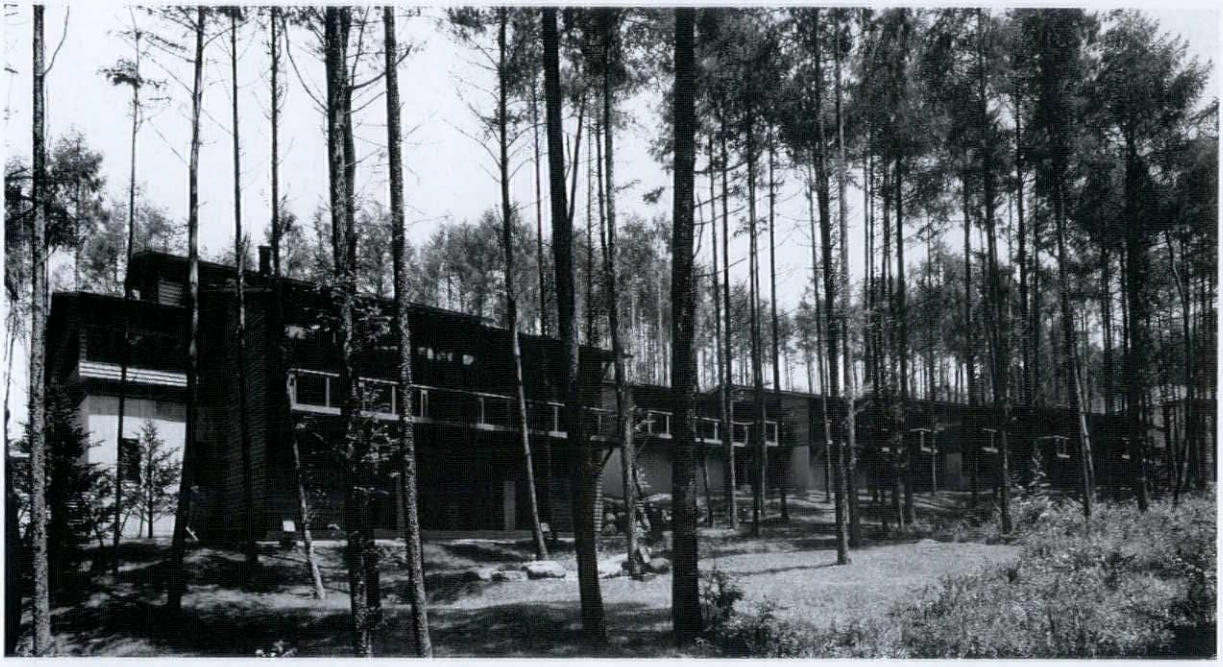
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)3423-2511	FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841	FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191	FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511	FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861	FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624	FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925	FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717	FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590	FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171	FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286	FAX(025)243-5248			
大阪支店	☎(06) 762-5661	FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221	FAX(082)249-9270			

マルチメディアのNEC

NEC

そして、新しい自分へ。

Begin! NX



写真のモデルはVS23D/S7

写真のモデルはLV20C/WS

VALUESTAR NX
［ バリュースターNX ］
標準価格268,000円（税別）より

LaVie NX
［ ラヴィNX ］
標準価格348,000円（税別）より

MMX® intel inside® pentium® PROCESSOR

MMX® intel inside™ pentium® II PROCESSOR

AT互換機[*1]をも包み込み さらに進化した世界標準、PC98-NXシリーズ。

次代を見据えた先進機能、バリュースターNX＆ラヴィNX 新登場。

AT互換機[*1]やPC-9800シリーズの既存資産が利用可能。

- Windows®95/Windows NT®4.0に対応したアプリケーションソフトや周辺機器が利用可能です。[※1]

※1 一部使用できないものもあります。詳しくは各商品の提供元にお問い合わせください。

Windows®98の操作環境を先取りした先進機能と使いやすさをフル装備。

- 周辺機器を接続するだけで、自動的に認識、設定可能な「Plug and Play」。
- 周辺機器ごとに異なっていたコネクタ形状を統一し、煩雑だった接続がすっきり「USB」。
- Plug and Playに対応した高速32ビットバス「PCI/CardBus」。
- サスペンド状態からのスピーディな起動を実現する「OnNow」。
- データ転送を高速化してグラフィック性能をいちだんと向上「AGP」。（VALUESTAR NXで対応※2）

※2 Pentium®II プロセッサ搭載モデル（VS26D/CX,CZを除く）

インターネットの魅力と威力を実感できる簡単無料体験[*]ソフトをインストール。

- モデムやインターネットの難しい設定は不要。画面の手順に従って操作するだけでインターネットを約5時間無料体験。

*無料体験時間は約5時間（累計）です。アクセスポイントまでの電話料金はお客様のご負担となります。はじめに接続してから31日間有効です。LaVie NXは一部モデルのみ搭載

安心操作をサポートするセキュリティソフトも充実。

- ユーザの習熟度に合わせてWindows®95の動作環境などを限定できる「CyberTrio-NX」。
- 誤操作によるファイル削除を防止する「CyberWarner-NX」。
- 駆除機能を持ったウィルスワクチンソフト「VirusScan for Windows®95」。

環境にやさしい性能もPC98-NXの特長です。

- 国際エネルギースタープログラムの基準に適合した「低消費電力」。（VS33Dを除く）
- 夜間の静かな部屋でも気にならない「静音設計」。
- 接続された周辺機器（ACPI対応）まで含めた「省エネルギー」。[※3]

※3 一部の機能はWindows®98またはWindows NT®5.0でサポート予定です。

Designed for Microsoft® Windows NT® Windows®95

Genuine Microsoft Products

●当社は国際エネルギースタープログラムの参加事業者として、本製品が国際エネルギースタープログラムの基準に適合していると判断します。（VS33Dを除く）

PC98-NX購入特典サービス

Windows®98 優待販売

VALUESTAR NX及び、LaVie NXに同梱されている「98 OFFICIAL PASS お客様登録申込書」または、インターネットユーザ登録[*]にて登録していただくと、Windows®98を特別価格で購入できます。（提供時期、提供商品、提供価格等については、Windows®98発売後に速やかにご連絡いたします。）

期間：Windows®98発売時まで
お問い合せは、特典サービス事務局
TEL:03-3798-8538
（土・日・祝日を除く9:00～17:00）

すでに上記の対象商品をご購入された方も対象になります。

※インターネットでのお客様登録は2月下旬より開始します。

*1 IBM PC / AT100%互換機　※ソフトウェア、周辺機器、増設ボード類等はWindows®95のもとで動作可能なものをご確認の上ご使用ください。Windows®95の正式名称はMicrosoft®Windows®95 Operating Systemです。Windows NT®4.0の正式名称はMicrosoft®Windows NT®Workstation Operating System Version4.0です。Microsoft, Windows, WindowsNTは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。Intel Insideロゴ, Pentium, およびMMXはIntel Corporationの商標または登録商標です。VirusScanは米国McAfee, Associates,Inc.の米国における登録商標です。画面はハメコミ合成です。本パーソナルコンピュータは、オペレーティングシステムを標準搭載しています。

PC-9800シリーズをお使いの皆様へ・・・・・PC-9800シリーズでお使いいただいているソフト、周辺機器の一部はPC98-NXシリーズでは使用できなくなります。詳しくはカタログ、インターネット等をご覧ください。

*ご使用の際は、必ず「取扱説明書」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

PC98-NX、PC-9800シリーズに関する情報を下記の情報提供サービスにより提供しています。

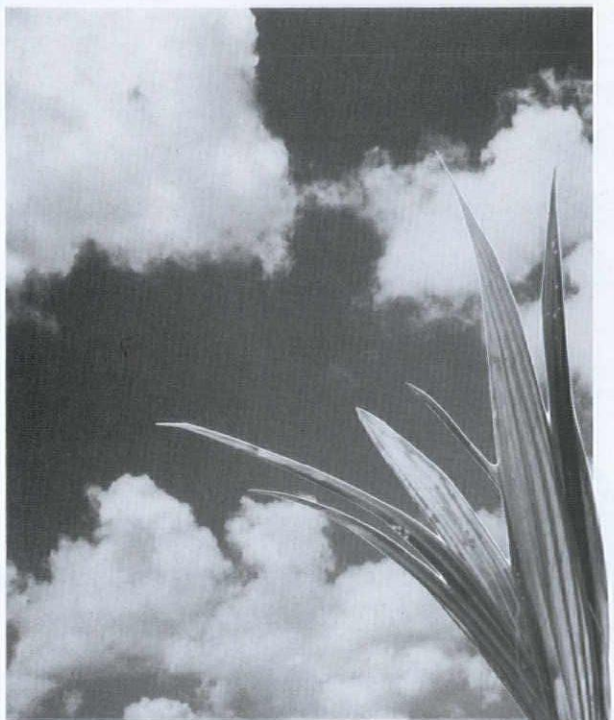
●NECパソコンインフォメーションセンター：フリーダイヤル 0120-60-9821 受付時間 9:00～17:00（祝日を除く）　●FAX情報サービス：「NECパソコン情報FAXサービス」 東京 03-3769-9821 大阪 06-304-9821

VALUE STAR NX 6015　VALUE STAR NX (VS16F) 6021　VALUE STAR 2182　LaVie NX 6013　Lavie 2181　総合メニュー 7001

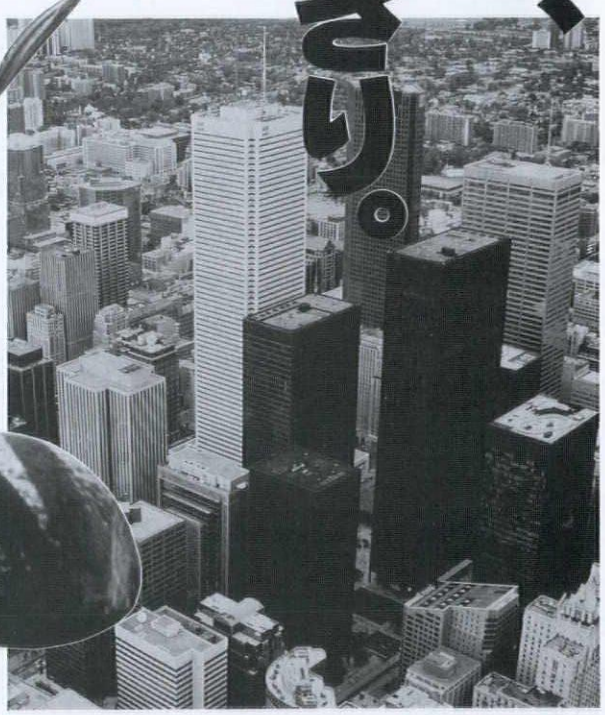
●インターネット：Infomation (http://www.nec.co.jp/98/)　●パソコン通信：BIGLOBE PC-VAN（J NECPC）Nifty-Serve（GO FNECINFO）

電話番号・FAX番号はよくお確かめの上おかけください。

〈本広告に関するカタログを差し上げます。〉ハガキに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、勤務先を明記のうえ、〒108-8001 東京都港区芝5-7-1 NEC10-28530 V/S & LaVie (SD 3/25)係までお送りください。



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部■〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎ 03 (5644) 7211 (代表)

札 幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙 台 ☎022(263)0315(代表)　金 沢 ☎0762(22)3321(代表)
大 宮 ☎048(642)5811(代表)　大 阪 ☎06(533)3191(代表)
東 京 ☎03(5644)7221(代表)　高 松 ☎0878(34)0336(代表)
千 葉 ☎043(227)9971(代表)　広 島 ☎082(294)6006(代表)
横 浜 ☎045(316)7885(代表)　福 岡 ☎092(451)1095(代表)



ミズ太郎

より快適な水環境をめざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18　TEL.(03)3452-7441大代表　支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋　事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［東京国際フォーラム］写真＝堀内広治

9604　大地と光の変様　オーストラリア建築1788-　1988円
1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。［ネクストジェネレーション in New York：スミス+ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダース］

9605　多様性と調和の建築　ゲルカン+マルクの最新作　1988円
コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。［海と建築――鈴木了二の最新作］物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

9606　建築家の椅子111脚　3059円
19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A. ガウディ、O. ワーグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他

9607　再考 建築家土浦亀城　1988円
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸（第1, 2）［スタジオ建築計画の集住考］最新作 FH-HOYA IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608　マイケル・ホプキンス　2447円
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他［光と空間の夢を語ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア］文＝南條史生

9609　デンマーク・モダンハウスの最盛期　1988円
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他［山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学］文＋写真＝芦川研究室

9610　中世の光と空間　1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［ふたつの都市考（近代都市と芸術展）（未来都市の考古学展）］［97の椅子プロジェクト］

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール+ベーター・ルーゲ、高橋晶巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。



9704
拡張するデジタル・デザイン
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他
3059円



9705　アフラ+トビア・スカルパと「ベネトン」
アフラ+トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文+インタビュー+写真＝豊田博之［都市ビサとカルマッシの仕事］カーサ・ムーティ、ヴェルティ劇場修復計画など
2000円



9706
柳澤孝彦：劇場の空間構成
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より］
2000円



9707
加速都市・香港
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則
2000円



9708
R.ヴェンチューリ+D.スコット・ブラウン：90年代の仕事
日本での処女作（メルパルク日光霧降）を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宣之、他［岐阜県営北方住宅プロジェクト］設＝磯崎新
2400円



9709
駅空間の新曲面
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして案目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、雲庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁
2000円



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×鎌滝和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。財雲公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+横尾宏直+重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再検証し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴+鈴木了二+栗生明+小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビズム・ロンドキュビズム建築
現存するプラハのキュビズム建築を描り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［香山壽夫のドローイングと空間］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木悠、青木淳
2000円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

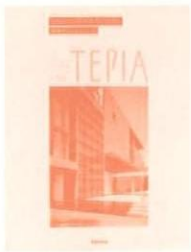
3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、研ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。綾陣 I、III、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、咋雪軒、呉別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、滝野義一郎、白井晟雄。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［輝々夫人］舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

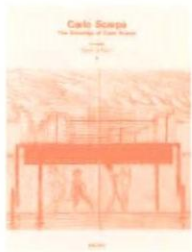
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトI・II、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて。槇 文彦×原広司×小澤恵一、他。

5000円

9804 Space Design

スペースデザイン 第403号
1998年4月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
次世代の
マルチ・アーキテクトたち
ユニット活動による新たな設計環境

6
越境する
アーバン・トライブ
五十嵐太郎

8
現象としての
アーキテクトたち
宇野 求

75
座談会：
制度と建築、そしてユニット活動の展望
曽我部昌史×長田直之×中村 潔×
大西若人×田路貴浩×中谷礼仁
司会＝杉山弘樹

78
「空間認識」についての
覚書
岸野雄一

9
インテンショナリーズ

15
みかんぐみ

21
建築少年

27
パラボリック・
ラボラトリ

33
EPA
環境変換装置建築研究所

39
クライン ダイサム
アーキテクツ

45
H DESIGN
ASSOCIATES

51
アトリエ・ワン

57
F.O.B アソシエイション

63
I.C.U.

69
CLIP

81
デスクトップ・コミュニティ
空間概念の変化とその記述
構成＋文＝吉松秀樹＋山家京子＋遠藤幹子＋藤村憲之

84
デスクトップ・
コミュニティ1995

86
ノーテーション

87
感覚の変容

88
コミュニケーションの
かたち

90
都市的身体

91
柔らかい建築
柔らかい都市

92
バディ・ハウス

94
都市でない都市

95
低密度都市モデル

98 連載：森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 4. 花見 森島紘史
101 連載：世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる 9. 天の窓——スカイライトという問題構制 渡辺真理
109 新刊紹介
110 書評
112 メトロポリタン・ライブラリー 渡辺武信
114 お知らせ

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世 健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス
アドバイザー：伊藤公文

発行人：平田暢那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-0052 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円
[本体1,905円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み

表紙：IDEE Workstation
表紙写真：木田勝久
表紙デザイン：小泉均

9804 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.403
April 1998

5 **Special Feature:**

Versatile Architects of the New Generation:

New Design Environments Through Unit Activities

6 The Borderless Urban Tribe — Taro Igarashi

8 Architects as a Phenomenon — Motomu Uno

75 Round-table Discussion: Institutions, Architecture, and the Prospects for Unit Activities — Masashi Sogabe, Naoyuki Nagata, Kiyoshi Nakamura, Wakato Ohnishi, Takahiro Taji, Norihito Nakatani; Moderater=Hiroki Sugiyama

78 Notes on the Perception of Space — Yuichi Kishino

9 Intentionallies

15 Mikan

21 Kenchiku-Shownen Partners & Associates

27 Parabolic Laboratory

33 EPA

39 Klein Dytham Architecture

45 H Design Associates

51 Atelier Bow - Wow

57 F.O.B Association

63 I.C.U.

69 Clip

81 **Desktop Community:**
Notation of the Future Space Perception
Design and Text by Hideki Yoshimatsu + Kyoko Yamaga + Mikiko Endo + Noriyuki Fujimura

84 Desktop Community: 1995

86 Notation of Space

87 The Transformation of Sensibilities

88 Forms of Communication

90 The Urban Body

91 Flexible Architecture, Flexible Cities

92 Buddy House

94 The City That is Not a City

95 Model of the Low-density City

98 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper
4. Cherry Blossom Viewing — Hiroshi Morishima

101 "Museums of the World" Series: The Museum Transforms
9. Windows on the Skies: The Structure of Skylight Problems — Makoto Watanabe

109 Book Information

110 Book Review — Takenobu Watanabe

112 Metropolitan Library

114 Announcements

Chief Editor: Koji Aikaw
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperatio
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/gui
SINKS Company LTD.
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirat
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publis
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Manage
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Manage
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.j
Group/publish/
index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

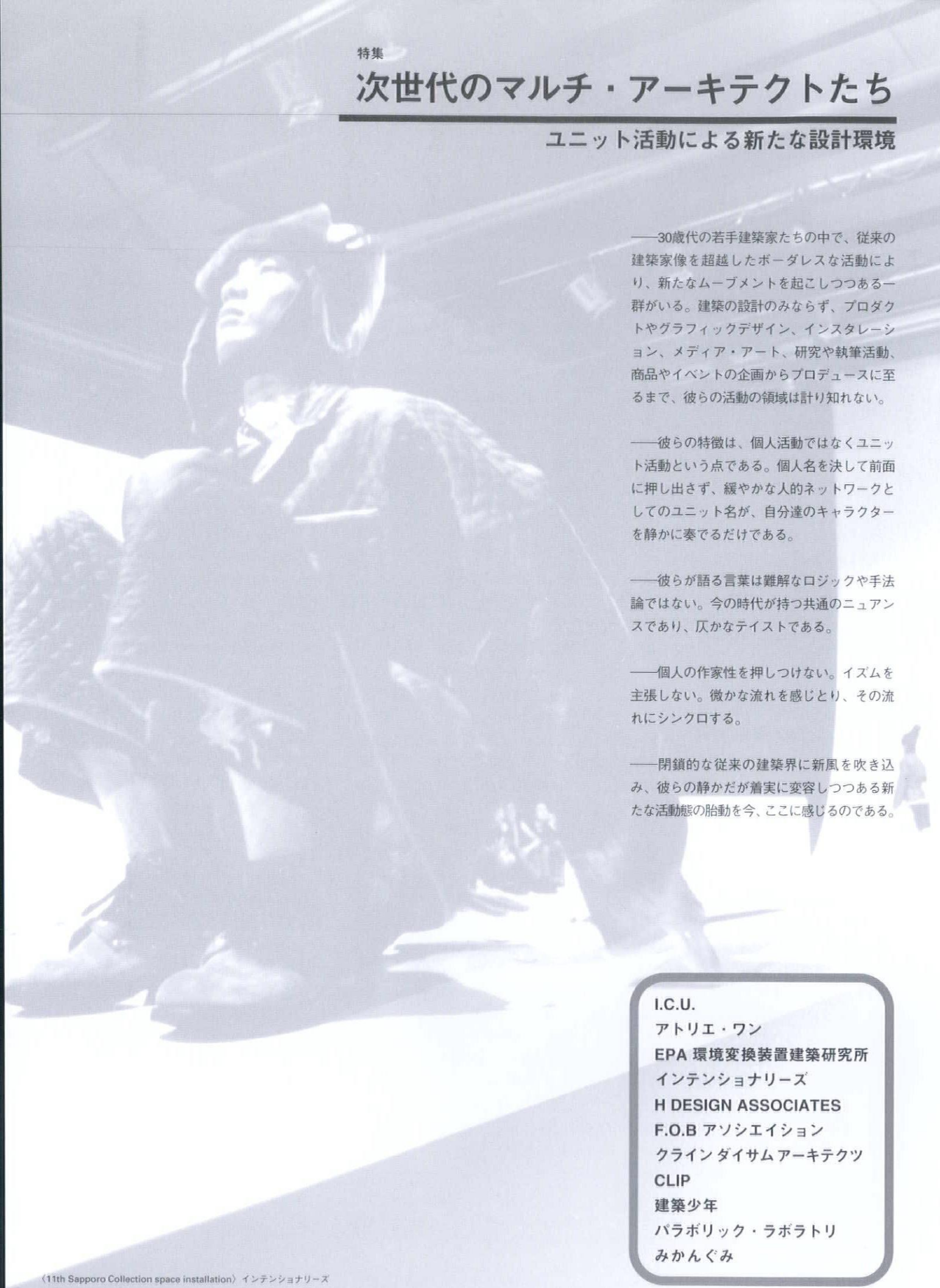
Order Form: Page124

Cover: IDEE Worksho
Cover Photo: Katsuhis
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

次世代のマルチ・アーキテクトたち

ユニット活動による新たな設計環境



——30歳代の若手建築家たちの中で、従来の建築家像を超越したボーダレスな活動により、新たなムーブメントを起こしつつある一群がいる。建築の設計のみならず、プロダクトやグラフィックデザイン、インスタレーション、メディア・アート、研究や執筆活動、商品やイベントの企画からプロデュースに至るまで、彼らの活動の領域は計り知れない。

——彼らの特徴は、個人活動ではなくユニット活動という点である。個人名を決して前面に押し出さず、緩やかな人的ネットワークとしてのユニット名が、自分達のキャラクターを静かに奏でるだけである。

——彼らが語る言葉は難解なロジックや手法論ではない。今の時代が持つ共通のニュアンスであり、仄かなテイストである。

——個人の作家性を押しつけない。イズムを主張しない。微かな流れを感じとり、その流れにシンクロする。

——閉鎖的な従来の建築界に新風を吹き込み、彼らの静かだが着実に変容しつつある新たな活動態の胎動を今、ここに感じるのである。

I.C.U.
アトリエ・ワン
EPA 環境変換装置建築研究所
インテンショナリーズ
H DESIGN ASSOCIATES
F.O.B アソシエイション
クライン ダイサム アーキテクツ
CLIP
建築少年
パラボリック・ラボラトリ
みかんぐみ

〈11th Sapporo Collection space installation〉インテンショナリーズ

越境するアーバン・トライブ

'60年代生まれのデザイナーは、いかに地図なき時代のリアリズムを生きるのか

五十嵐 太郎

トライブとは何か?

煽動的なマニフェストを掲げて、颯爽と建築界になぐり込みをかけたりはしない。洋行で得た経験や知識を糧に食いつないだりもしない。大文字の建築を論じるのでもなく、それに正面から反抗することもしない。反論のしにくい「自然」や「人間」が大事だと大マジメで力説することもしない。震災の体験を特権化して語ることもしない。モダニズムを教条主義的に語ることもしない。そして何々は終焉したと、したり顔で語ることもしない。

そう、僕たちは宣言しない(という宣言をしているのかもしれない)。

ほとんど否定形の文章によって定義されてしまう、同時代の若きデザイナーたち。60年代生まれの彼/彼女らが専門的な勉強を始めた頃、モダニズムは教科書の1ページに記述される対象だったし、クリティカルな役割を果たすはずだったポストモダンもすでに制度化されていた。「体制」や「権力」など、反抗すべき明確な相手がいないのだ(むろん、なくなったわけではない)。バブルの世代はその荒波に身をまかせれば、良かったかもしれない。でも、そんな大波は期待していない。ましてや大海にこぎだしていくための海図もない。

だから、身近な日常からつくりはじめること。

ぎこちない日常の裂け目にリアリティを現出させること。

出発点はそこにしかなかった。

今回の『SD』でとりあげる11組のデザイナーの特徴を一言に集約することは不可能に近いが、ひとりの個性を強く主張しないという点は共通している。特に、ほぼ10年前の『SD』(1987年10月号)の特集「40才前の建築家101人」ではグループのデザイナーが約1割しかいなかったが、逆に今回はほとんどがそうである。なるほど、これは雑誌の恣意的な選択の結果に過ぎないという見方もできなくない。実際、若手でも中尾寛のような孤高の建築家的イメージをもつ人物がいることも事実だ。とはいえ、他にもグループはまだまだ存在するし、これを契機に現在の徴候の一断面を見出すことは決して無意味な作業ではない。

彼/彼女らをアーバン・トライブと呼ぼう。

トライブ、すなわち各々の族は都市圏で活動し、ユニットやグループを組む。そして「建築」に定住することがない。創作の対象は多岐にわたる。また彼らはどこの学校の何学科だとか、誰の事務所で修行したとか、どこの国籍であるとかによって、アイデンティティを強く規定されることがない。既存のカテゴリーを自由に横断する主体性としてのトライブなのだ(詳しくは『10+1』8号の特集を参照されたい)。彼/彼女らはひとつに収斂することがない。つねに複数の動きがあり、複数の族が共存している。ときにはメンバーを交換したり、異種交配し、再結合することもあるだろう。トライブは越境し、そして動き続ける。

以下に地図なき時代の状況を確認するために、特集される11組について最低限の整理を行う。そこで3つに分けて、スタイリッシュ・トライブ、セオレティカル・トライブ、ノマディック・トライブと名付けよう。もちろん、これは11組の相対的な位置づけである。しかし、その特性からいってトライブの見取り図はすぐに変わるだろう。ゆえに、これはあくまでも1998年の初頭に切り取ったアーバン・トライブの分布図でしかない。

スタイリッシュ・トライブ

彼/彼女らは建築の空間ではなく、時代の空気をデザインしている。プロジェクトによってカメレオンのようにその表情を変えながら。だが、それは作家の表現としてのノン・スタイルを行う隈研吾とは違う位相にある。複数のデザイナーの個性のあらわれだったり、施主の意向をよく取り込んでの結果なのだ。ここでは3組のデザイナーを概観したい。

インテンショナリーズは、異なる3つの個性の集合体である。例えば、コーネリアスの武道館ライブの舞台やラフォーレ原宿のイベント会場を手がける遠藤治郎はポップ、垂直方向の抜けが心地よい〈木村邸〉を設計した大堀伸はより建築的な硬派、トイズファクトリーのインテリアをデザインする鄭秀和はセンシティヴというように。だが、最終的な成果物はインテンショナリーズとしての作品となる。方向性のやや違う3つのヴェクトルが、独特のフィールドを生むのだ。プロジェクトによっては積極的に外部とのコラボレーションも行う彼らだが、あえて共通点を見出すとすれば、素材へのユニークなアプローチだろうか。実際の作品では、青山の同潤会アパートの一室を改築した〈ギャラリー・ロケット〉が行きやすい。

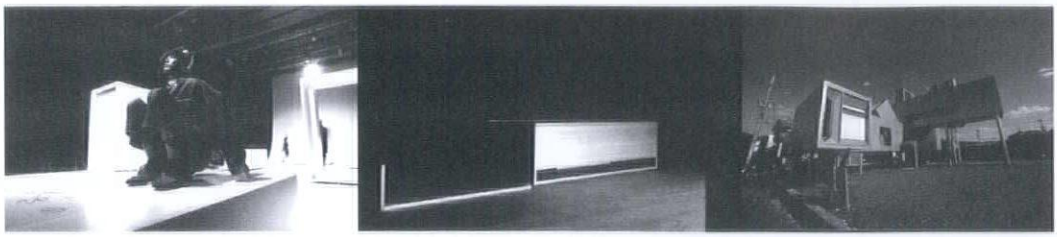
クライン・ダイサム・アーキテクツは、ヨーロッパからの男女二人組。日本に興味をもって訪れ、そのまま現在まで居着いてしまったという経歴は、過去の日本で活動した海外建築家とはおよそかけ離れている。彼/彼女らは、ふわふわとしたカラフルなお菓子のように楽しい建築や家具をつくる。ときにはキッチュぎりぎりでありながらミニマル。ユーモアのあるデザインだ。小さなガスステーションのまわりを包み込むように増築した祐天寺の〈イデー・ワークステーション〉は、新鮮な感覚にあふれている。ちなみに今回、充実したホームページによって、インターネットから最大の情報量をひきだすことのできたデザイナーだった。

H DESIGN ASSOCIATESは、二人組の家具・インテリアデザイナーだが、両者のデザインは強烈な主張をしない。渋谷、青山、自由ヶ丘、新宿、下北沢など、その気になれば都内だけでも、10近くの作品を簡単に見ることができるが、例えば、シックな〈INDIVI CAFE〉とタイヤがユーモラスな〈NO CONCEPT BUT GOOD SENSE〉では、かなり異なる印象をあたえる。店舗の性質にあわせてデザインを変えているからだ。とはいえ、可動性とフレキシビリティに富む設計思想や、家具の脚部の独特なディテール、そしてにじみでるようなニュートラルなイメージに、作家性の痕跡がうかがえるだろう。

セオレティカル・トライブ

次に感性だけではなく、言葉や理論による裏付けを試みるデザイナーをみていこう。

アトリエ・ワンは、相互補完的な関係がうまく機能している男女二人組。例えば、貝島桃代が黒田潤三らと協同した〈メイド・イン・トーキョー〉が非建築を発見すれば、塚本由晴が言葉をあたえてその論理化を試みて



左：スタイリッシュ・トライブ
インテンショナリーズ〈11th Sapporo Collection〉

中：セオレティカル・トライブ
I.C.U.〈ヒヨコハウス〉

右：ノマディック・トライブ
F.O.B アソシエイション〈ORGAN I〉

いる。特に塚本の文章は、建築家にありがちな小難しい表現に走らず、つねに具体的にモノを考える態度を崩さないという意味で貴重だ。高島平近くの〈ハスネ・ワールド・アパートメント〉は、とりたてて魅力があるとは思われない敷地の属性を引き受けつつ建築によってそれを再定義しており、ダーティ・リアリズム的な戦略を想起させるだろう。実際、都市の残余空間のような児童遊園から、このアパートが視界に入る瞬間は、建築雑誌のキレイな写真では表現され得ない魅力がある。

I.C.U.は、否定弁証法のような関係をめざして、離れた都市に住むふたりが主宰する。ミニマルを志向する彼らのデザインは、例えばその説明においてドナルド・ジャッドに言及していたように、他のグループに比べてはっきりした美意識が感じられるだろう。それをコントロールするのが明快なダイアグラムであり、特に出発点となる〈PLATON'S ORGEL〉展の会場構成（時系列を空間的に転化した）やSDレビューでの〈邯鄲ハウス〉の展示（建物と相同形に見えなくもないインスタレーション）に顕著にあらわれている。ただし、清水裕二によれば、明快な記述可能性はむしろその余剰との境界を意識させる手だてだという。

CLIPは個別に活動していた異なる個性の4人が集まって結成された。まだ建築の実作品こそないものの、互いに相手を説得する作業から生まれたデザインは、妥協の産物としての複雑なものではなく、驚くほどに単純な原理に支えられている。〈回転する振動体〉にしても〈TUBE-HOUSE〉にしても、題名以外のことは何もしていない。だが、そこから展開する現象はきわめて複雑な様相をもち、〈自己組織化する空間〉もそうした可能性を狙っている。これは彼／彼女らの世界観でもあるだろう。メタボリズムの隔世遺伝とみることもできなくないが、今後、最新の科学理論をいかにとり入れのりこえていくかが注目される。

ノマディック・トライブ

彼／彼女らからは、ガチガチの建築家なんて、SO WHAT!という答えがかえってくるかもしれない。最後は新しい職能や組織を模索するニュータイプたちをとりあげよう。

EPAは本特集において例外的に個人の建築家であるが、プロジェクトごとに最適の解を求め、強力な個性は押しつけない。インスタレーションの仕事も多い。むしろ、80年代の終わりにプロデュースを海外デザイナーと行って学んだ経験から、設計だけではなく建物のプログラムや運営にも積極的な提案をだし、必然的にコラボレーションの作業を生むところが特徴といえるだろう。ゆえに武松幸治は、彼にとってのユートピアではあるが、最終的には都市的な規模でそうした仕事を実現させたいと願っている。

F.O.B アソシエイションは、おおむね同じ建築へのヴィジョンを持ちながら、仕事の面では完全分業制の3人組。ランダムな形態の〈ORGAN〉や、ぐにゃぐにゃした〈AURA〉などの実作品では、コンピュータ・ジェネレイテッドなラディカルな形態が目を引くが、単なるデザインを超えて、消費社会に向けて展開する彼らの職能のあり方も興味深い。例えば、自分のプロジェクトで特別に発注した部材を商品化すること。商品としての建築、すなわちマンションの企画・プロデュースを計画していること。今後、消費社会の波に乗るだけではなく、いかにそれとクリティカルに関わっていくかを期待したい。

パラボリック・ラボラトリは、末野宏行が主宰する7名のクリエイター集団。作業の舞台はコンピュータの画面がほとんどであり、現実空間にモノをつくることはしていない。そのヴァーチャルスペースは、コロッセウムやロシア構成主義など、過去の建築を引用・翻案したものが多く目新しくはないが、これらをシャッフルした無国籍な感覚が特徴である。ホームページ上でも架空の島を建設しており、本特集ではW.ギブソンのSF小説『あいどる』に出てくる仮想都市に最も近いデザイナーだろう。今後、コンピュータによりデザインの真にヴァーチャル（潜在的な）可能性を引き出すことが望まれる。

建築少年は、京都をベースに活動する4人組。建築学科の出身だが、他とのコラボレーションを巻き込む活動はきわめて多彩である。建築アンデパンダン展の呼びかけ、工場跡のアトリエで行った身体論的に興味深いパフォーマンス〈CONVERSION〉、町屋を再活性させるデリバリーユニットの提案など、彼らは場所の特性を生かしつつ、建築や都市の隙間に注目しているようだ。彼らは個性のぶつかりあうパートナーシップの限界を見越して、1999年に解散を設定している。「建築少年」の看板を次世代の若手に譲ることも検討されているらしいが、興味深い組織のあり方といえよう。

みかんぐみは、平等の権利をもつ6人が集まったグループ。それぞれに個性をもちながらも、あえて多くの与条件を引き受けてプロジェクトを中性化していく姿勢は、非作家性というラディカルな問題を静かに突きつけている。例えば、旋回するチューブ状の構成をもつ相模原の〈小野邸〉は、ひとつの明快なコンセプトを前面に出すことよりも、施主とよく話あい、豊富なパラメータとつきあいながら設計するプロセスを重視している。それはおそらく見えにくい現代を可視化する最も自然な、そして普通の感覚なのだろう。彼／彼女らはここにしか確かなリアリティの所在を持てない時代の雰囲気をよく捉えている。

境界線の彼方に

アーバン・トライブは、建築の境界線をしなやかに移動する。建築というよりは、建築的であること。それはアトピックなボーダーラインのうえで踊り続けるタイトロープ・ダンサーのようだ。しかし、タイトロープ・ダンサーは油断すれば、綱から落ちる危険性がつきまとう。むろん、それは自ら建築の中心に定位しないことを選んだがために、もたらされた危険である。だが、彼／彼女らは恐れることなく、この綱渡りの向こうに渡っていくだろう。

●いがらし・たろう／建築史家、エディフィカーレ同人

現象としてのアーキテクトたち

宇野 求

この特集に紹介されている30代のアーキテクトたちの多彩な活動形態は、ふたつの意味で、パソコンがあってはじめて可能なもののように思われる。ひとつはプラクティカルに、もうひとつは感覚の問題として。

個性を尊重しながらも自己をあからさまに主張するのではなくバンドのノリで集まって活動をするという30代のアーキテクトたちに顕著に見られる傾向は、80年代に出現し90年代に普及したパソコンとリンクしているように思われる。複数の人間が、動きまわりながら、遠隔地にいながら、あるいは軽快なフットワークですばやくフォーメーションを変えながら建築活動するとき、個人が気軽に使えるパソコンはワーキングの道具として、コミュニケーションの手段として、発想をサポートするマシンとして重要な役割を果たす。彼／彼女たちのほとんどは20歳をすぎてからパソコンと出会ったはずで必ずしもパソコン世代と呼ぶにふさわしいとはいえないが、自分たちの建築あるいは建築的なるものを世に送りだすさまざまなステージでパソコンを友とし、あるいは有効な武器として活動してきているにちがいない。彼／彼女たちの建築自体にその影響が明確にあらわれて新しいものがうみだされるかどうかはいまだ定かではないけれども、活動形態と作品の気分の点で明らかに新しい試みが行なわれているということができる。

また、パソコンあるいはコンピュータのもたらすデジタル感覚を備えていることもこの世代に見られる傾向である。彼／彼女たちが表現しようとするものがフィジカルな建築というよりは建築を媒介とするイメージや気分やニュアンスに比重が置かれているのは、それを自覚していようと無自覚であろうと、おそらく、パソコンと無関係ではない。活動形態の多彩さと表現方法の多様さにもかかわらず、全体として、彼／彼女たちの活動の印象が強くはなくフィジカル感覚がなんとなく希薄であるのもそうした理由によるのではないかと思う（例外はある。F.O.Bの梅林克たちの造形感覚と確かな建築的技巧に僕はきわめて強い印象を受けていた）。気にはならず心地よい程度に流れているビデオの映像、インターネットのホームページや音楽のビジュアルなイメージといった自分好みの感覚を、彼／彼女たちは建築にも付加したいと考えているようでもあり、あるいは画像情報のような気分の建築にリアリティやシンパシィを感じ、そうしたものにひかれているようにも思える。現象がデジタル化されて画像や音となり直接的に人の感覚に入り込んでくる時代がこのようなアーキテクト群をうみだしたとすれば、彼／彼女たちこそ現代そのものがうみだした現象としてのアーキテクトたちだということができる。

散逸的に見える彼／彼女たちの活動や表現に通じるものを見出すのは容易なことではない。あえていえば、いずれもが、終わりなき日常のなかにあってささやかな建築的プレジャーを見い出し提供するための活動のようにも感じるし、彼／彼女たちの提示している作品やプロジェクトに、なにか郊外化が都市にいきわたった時代の乾いた精神風景のような雰囲気が感じられなくもない。活動形態の説明や創作上のモティーフとして語られるシミュレーション、環境変化装置（デバイス）、サンプリング、エディットといったことばには、デジタル化した情報の満ちた都市空間に彼／彼女たちが感じている空疎な時代の気分が現われてもいるように思える。個人的な体験や思考だけから語ろうとする建築へのアプローチや実体世界との距離感にみられる社会に対する態度と姿勢にも、ある種共通するところがある。彼／彼女たちは、自分にとってのきわめて個人的な日常から感じられるなにものかだけを頼りに、建築というメディアを通じてその感覚を表現しようとしているようであるし、また彼／彼女たちは、実体世界を形成構築しドライブさせている既成社会の構造とつきあう上で距離をとりながら実体には近づかないように心がけているようにもみえる。ことばをかえていえば、ジャンルを越えた活動を指向しているという点からすると、一見自分と異なる価値観や異なる感覚や異なるバックグラウンドをそなえた他者とコミュニケートしようとしているようであるけれども、その実、実体社会を生きる様々な個人たちとのコミュニケーションを拒んでいるようにも思えるのである。等質社会の同世代ばかりにではなく同時代を生きるさまざまな人間のこころの奥底にひそむ気持ちをつかむには、自己をつきはなして他者とコミュニケートすること、つまりダイアローグがもっと必要だ。彼／彼女たちの構えは現在のところモノローグにとどまっているように思われる。

建築についての共通認識を形成してきたこれまでのプラットフォーム（基盤）が、コンピュータというかつてない情報マシンの日常シーンへの登場によって古くなりうまく機能しなくなっているのだとすれば、新しい時代に適した次世代の建築的プラットフォームを開発することが必要なのではないか。新しいバージョンのアプリケーションを次々と立ちあげるためにも、新しい建築のOS（オペレーション・システム）こそが求められているのではないか。そのためには、新たな歴史認識、実体社会の冷静な分析、突出した感覚、徹底的な思考、根底からの洞察といったものが必要なのではないか。状況の新しさによって新しさが担保されるというのではなく、ラディカルでアクティブな新しい時代の建築を切り開いていくことこそ次世代のアーキテクトには期待されているのではないか。

●うの・もとむ／建築家、千葉大学助教授

インテンショナリーズ

ITL
INTENTIONALLIES

1995年8月
「ひとりで10年掛かる建築行為を3人で3年で実現させる」をスローガンに、遠藤治郎・大堀伸・鄭秀和で集合。

1995年9月1日
インテンショナリーズを「建築を通したものづくりのためのレーベル」として発足。事務所の準備開始。

1996年3月11日
インテンショナリーズを「有限会社インテンショナリーズ一級建築士事務所」として法人化。

1997年
東京のオフィスに続き、多岐に渡る業務の理にかなった推進のために、Factory I.T.L. [北海道] I.T.L. Room [大森] LOFT I.T.L. [羽田] を設定。

1998年
8月のレーベル発足3周年のインテンショナリーズ・ビッグバンに向けて、その次を現在デザイン中。

「インテンショナリーズはレーベルなんです」彼等は自らのアトリエをそう表現する。レーベルとしてのアトリエ——今までに無い設計事務所の概念である。というよりも彼等を設計事務所という範疇に縛り付けること自体がナンセンスであろう。主宰者である遠藤治郎、大堀伸、鄭秀和の3名は、当然「インテンショナリーズレーベル所属のアーティスト」ということになる。実際のプロジェクトでは個々の担当者ごとに仕事を行うのだが、そこでデザイナーとしての個性を生かした作風を優先するのではなく、レーベルとして共通したクオリティ、イメージ、微妙なテイストやニュアンス等がインテンショナリーズ・レーベルのオリジナリティを保証するという、極めて新しい考え方だ（もちろん他のデザイナーがインテンショナリーズ・レーベルから作品をリリースしても一向に構わないそうだ）。これらの点において彼等は従来の建築家グループとは明らかに一線を画する。華麗な人脈やセンセーショナルな言動など、とかくファッション的要素がクローズアップされがちな彼らだが、実際の活動は非常に実務的であり、合理的でビジネスライクな側面も合わせ持つ。クライアントの内部に深く入り込み、建築に限らず様々なクリエイティブなアクションを仕掛け、コストを算出し、それを自らの手でデザインし、時には自ら施工する。インテンショナリーズの仕事はまさしく「次世代型トータルプロデュース業」であり、社会の流れにフィットする「時代の申し子」である。



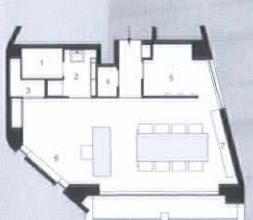
ITL main office

1 ITL poster
2 Printer
3 Cabinet
4 Closet
5 Shelf
6 Coffee corner
7 W.C.
8 Drawing case
9 Copy/Fax machine



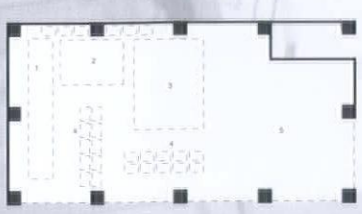
Factory ITL

1 Big table
2 Closet
3 Herb
4 Architectural materials
5 Erecta shelf
6 Bookshelf
7 Kitchen
8 Open-air bath



ITL room

1 Bathroom
2 Dressingroom
3 Closet
4 W.C.
5 Kitchen
6 Closet
7 Shelf



Loft ITL

1 Material stock : wood
2 Material stock : electric light
3 Material stock : steel
4 Tool box
5 Lot

●Main office
〒140-0013　東京都品川区南大井6-13-14　TAKビル3F
Tel 03-3768-9910　Fax 03-3768-9911
●ITL room
〒140-0013　東京都品川区南大井6-13-13　MHビル7F
●Factory ITL
〒052-0316　北海道有珠郡大滝村北湯沢温泉330-1　竜松庵内
Tel 0142-68-9017　Fax 0142-68-9018
●Loft ITL：東京都羽田
E-mail address：
鄭　秀和　teitl@a1.mbn.or.jp
大堀　伸　oitl@a1.mbn.or.jp
遠藤治郎　jiro@guesthouse-tokyo.com
Factory ITL　sitl@phoenix-c.or.jp
現在、http：//www.shift.jp.org にてインテンショナリーズの記事を参照できる。
結成年：1995年
スタッフの数：10数名
活動内容：建築設計、インテリア設計、グラフィックデザイン、その他クリエイティブな活動に関わることすべて



1.Music Seminor Tokyo Local '95
Lighting Direction at Laforet Museum Harajuku
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 526.00 square meters
Design : July / 1995
Construction : 31July / 1995
Live : 1 August ~ 3 August / 1995

2.Tsutaya Shinjuku project
Art Direction for advertizing and display
Location : Shinjuku ward Tokyo
Design : November / 1995
Unrealized

3.Mods R&B Collection
Space Design at Laforet Museum Harajuku
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 526.00 square meters
Design : December / 1995
Construction : 19 December / 1995
Live : 20 December / 1995

4.Internet Cafe Project
Salon planning for Internet provider
Location : Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 563.00 square meters
Planning : February / 1995 ~ January / 1996
Unrealized

5.Oume House Project
25House plans for housing development Prototype
Location : Oume ward Tokyo
Planning : April / 1996

6.Hyper DAX Interior Design
Interior design for computer shop
Location : Sendagaya Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 108.90 square meters
Design : January ~ March / 1996
Construction : March ~ April / 1996

7.Men's U- 19 Would Lacrosse Championships 1996
Art Direction,Design & Construction at Edogawa - Stadium
Site area : 18000 square meters
Design : April ~ July / 1996
Construction : 29 July ~ 3 August / 1996
Play : 4 August ~ 10 August / 1996

8.Music by Contemporary Production
Exhibition design at Laforet Museum Harajuku for the Graphic artist
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 526.00 square meters
Design : April ~ July / 1996
Construction : 31 July ~ 1 August / 1996
Exhibition : 2 August ~ 18 August / 1996

9.Art Laboratory Rocket
Interior design for art gallery at Dojunkai apartment
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 30.00 square meters
Design : September / 1996
Construction : September ~ 10 Norvember / 1996

10.Definition of Intentionallies
Exhibition of Intentionallies at Art Laboratory Rocket
Location : Shibuya ward Tokyo
Open : 10 October ~ 19 October / 1996

11.Apollo Interior Design
Club Apollo Interior Design
Location : Kitaaoyama Minato ward Tokyo
Total floor area : 186.00 square meters
Design : September ~ November / 1996
Construction : November / 1996

12.Doll Fruits Cafe / Christmas Display
Chistmas Display for Doll Fruits Cafe
Location : Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 25.00 square meters
Design : November / 1996
Construction : 28 November / 1996
Display : 29 November ~ 25 December / 1996

13.Sign Object Design for Art Laboratory Rocket
Sign Object Design for Art Gallery
Location : Shibuya ward Tokyo
Design : December / 1996

14.Apollo / Christmas Display
Chistmas Display for Club Apollo
Location : Kitaaoyama Minato ward Tokyo
Total floor area : 186.00 square meters
Design : December / 1996

15.Toy's Factory Booth Design
Toy's Factory Booth Design for MIDEM Music Festival
Location : Cannes
Design : December / 1996
Construction : January / 1997

16.Toy's Factory Office Interior Design 1
Interior Design for music company
Location : Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 351.10 square meters
Design : October ~ Norbember / 1996
Construction : December / 1996

17.Interior Design for Tycoon Graphics
Interior Design for Graphic designer's office
Location : Shibuya ward Tokyo
Design & Construction : December / 1996 ~ January / 1997

18.Music by Contemporary Production Exhibition Tour
Exhibition Remix for Graphic artist at Laforet Museum Kokura
Location : Kokura ward Fukuoka
Total floor area : 600.00 square meters
Design & Construction : December / 1996 ~ January / 1997

19. Mercian Project
Proposal for new alcoho
Planning : February / 1997

20.Restaurant & Bar/ Ebina-ya
Interior Design for Restaurant & Bar
Location : Date ward Hokkaido
Design : January ~ February / 1997
Construction : March ~ April / 1997

21.LOT-M Project
Space Design for MTV at Shibuya PARCO
Location : Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 180.00 square meters
Design : January ~ March / 1997
Construction : 27 March ~ 28 March / 1997
Exhibition : 29March ~ 29 April / 1997

22.MTV Night 12
Art Direction for club events at Club ASIA
Location : Shibuya ward Tokyo
Design : April / 1997 with Noboru Ekkutsu
PLAY : 19 April / 1997 ,26 April / 1997

23.The 5th Women's Lacrosse WORLD CUP 1997
Art Direction,Design & Construction at Edogawa Stadium
Site area : 18000 square meters
Design : January ~ April / 1997
Construction : 24 April ~ 27 April / 1997
Play : 28 April ~ 5 May / 1997

24.Music by Contemporary production Exhibition Tour
Exhibition Remix for CTPP at UMEDA LOFT
Location : Umeda Osaka
DesignConstruction : April / 1997 ~ June / 1997

25.11th Sapporo Collection
Space Design for Fashion Show
Location : Sapporo ward Hokkaido
Design : May / 1997
Construction : June / 1997

26.A Garden/ Endo House
Reforming house and Gardening design for courtyard
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 60.00 square meters
Design : January / 1996 ~ May / 1997
Construction : March / 1996 ~ June / 1997

27.Sound Museum Suit Design
ID design for Towa Tei
Design : May / 1997
Modeling : May ~ June / 1997

28. Shibuya Quattro
Display Design for Shibuya Quattro 1F
Location : Shibuya ward Tokyo
Design : July / 1997
Construction : July / 1997

29. Parco Grand Bazar '97
3D Tool Design for Parco Grand Bazar '97 (25 branches)
Design : May ~ June / 1997
Construction : July / 1997
Display : July / 1997

30. Luna Park '97
Beer gardening space Design at Korakuen Yuenchi
Location : Koraku Bunkyou ward Tokyo
Design : March ~ June / 1997
Construction : July / 1997
Open : July ~ August / 1997

31. Ryusyoan / Open- air Bath Project
Open-air Bath Design & Construction By Work Shop
Location : Ohtakimura Usugun Hokkaido
Design : July / 1997
Construction : August / 1997

32. WOWOW Super Soccer Serie A
Studio set & sign design
Location : Minato ward Tokyo
Design : July ~ August / 1997
Construction : 25 August / 1997
On air : Every Sunday night

new balance on intentionallies



33. avex Fasion Remix
Exhibition for avex Bland Debut
Location : Shibuya ward Tokyo
Design : September～August / 1997
Construction : 24 August / 1997
Exhibition : 28 August ～28 August / 1997

34.Toy's Factory Office Interior Design 2
Interior Design for music company
Location : Shibuya ward Tokyo
Total floor area : 559.00square meters
Design : April ～ July / 1997
Construction : July～August 1997

35. CAP Office Design
Interior Design for Editorial Designer's Office
Location : Minato ward Tokyo
Design : August ～ September / 1997
Construction : September / 1997

36.Christmas Display for Fuji TV
Christmas Display design for Television Station
Design : October / 1997
Unrealized

37.Laforet Harajuku Autumn Fair '97
Space Design for Autumn sales campaign
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Design : August ～ September / 1997
Construction : 19 September / 1997
Campain : 20 September ～ 13 October / 1997

38. STUDIO CUTIE
Exhibition for STUDIO CUTIE the 10th Anniversary
at Laforet Museum Harajuku
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Design : June ～ October / 1997
Construction : 9 October 1997
Exhibition : 10 October～12 October / 1997

39. Max Factor Booth Design
SP Booth Design for Cosmetic Company
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo STUDIO CUTIE
Design : september / 1997

40.Mitsui Bussan Booth Design
Booth Design for "Whole Item" Fashion
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo STUDIO CUTIE
Design : september / 1997

41.A's House Interior Design
Furniture design for one-room mansion
Location : Tokyo
Design : October / 1997
Construction : October / 1997

42.Kimura House
Private residence
Location : Nakanobu Shinagawa ward Tokyo
Site area : 123.63square meters
Total floor area : 180.82square meters
Sturucture : Reinforced concrete 1basement and 3stories
Completion date : October / 1997

43. Interior Design for computer school
Interior Design
Design : September / 1997
Unrealized

44. Fantasmatic World Tour
Stage Design for CORNELIUS Fantasmatic World Tour
Design : September / 1997
Tour : 13 October ～16 November / 1997 (Nihon Budokan and 10 places)

45. Opel Design Competition
Space Design for Opel Design Competition at Yebisu Garden Place
Location : Yebisu Shibuya ward Tokyo
Design : October / 1997
Construction : 18 October / 1997
Exhibition : 19 October ～ 14 November / 1997

46.Tokyo Game Show '97 Summer
Kodansya Booth Design for Tokyo Game Show
Design : June ～ November / 1997
Unrealized

47. Laforet Harajuku Xmas fair
Space Design for Christmas decoration
Location : Jingumae Shibuya ward Tokyo
Design : November / 1997
Construction : November 20 / 1997
Display : 21 November ～ 25 December / 1997

48. C.T.P.P. Office Interior Design
Interior Design for Contemporary Production
Total floor area : 196.00square meters
Location : Dogenzaka Shibuya ward Tokyo
Design : 10 November ～ 2 December / 1997
Construction : 10 November ～ 12 December 1997

49. Rana Design Office Project
Interior design for web designer's office
Location : Shibuya ward Tokyo
Design : December 1997～
Construction : December 1997～

50. Gravity's Rainbow
The 21st Century Advertizing System Design
for Parking Design System
Total floor area : 23,200 square meters
Location : Hokkaido ～ All over the world
Design : 1997～

51. WOWOW Rubel Soccer Serie A
Studio set & Logo Design (Nelson no.1)
Location : Minato ward Tokyo
Design : November ～ December / 1997
Construction : December / 1997

52. Shindou House Project
Interior design for art director's apartment house
Total floor area : 100.00square meters
Location : Meguro ward Tokyo
Design : December / 1997～January / 1998
Construction : December / 1997～January / 1998

53 Hassin Group Rehassin Project
Interior,Publishing & Shop code Design
Total floor area : Now designing
Location : All Hassin Shops in Japan
Design : 1997～
Construction : 1998～

54. I.S.Shop Interior Design
Interior Design for I.S. Shop
Location : Tokyo
Design : February / 1998
Construction : February / 1998

55.Inspiration Office Interior Design
Interior Design for Inspiration Office
Location : Ginza ward Tyuou ward Tokyo
Design : November / 1997～January / 1998
Construction : January ～February / 1998

56. LABORATOIRE Paris Collection'98
Space Design
Location : Paris France
Design : 1998

57. Akane Golf Club Project
Akane Golf Club Restaurant Operation design
Total floor area : 120 seats
Location : Date ward Hokkaido
Design : 1998～

58.Lake View Hotel Project
Resort Hotel renewal design & management design
Site area : 3,468 square meters
Total floor area : 1,035 square meters
Location : Hokkaido
Design : 1998～

59.Hayashi House
Private residence
Location : Kagamihara ward Gihu
Site area : 110.12 square meters
Total floor area : 169.36 square meters
sturucture : Reinforced concrete 1basement and 3stories
Completion date : August / 1998



Back to now, and make future classics.



遠藤治郎（えんどう・じろう）
1966年東京生まれ。'91年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。'91年一級建築士事務所ART ASU INC 入社。'95年退社。'95年Intentionallies を「レーベル」として立ち上げ。'96年有限会社インテンショナリーズ一級建築士事務所設立。'98年1月有限会社インテンショナリーズ取締役辞任退社。'98年2月Intentionalliesレーベルへは個人として参加を継続。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
わたしを捉えてやまない知り得る全ての事象。
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
デュシャンよりもゴッホ、ケイジというよりもレノン。福津宜人。そして、一緒に活動をしているスタッフ。
●よく読む雑誌は何ですか
Mimar(廃刊)
●よく聴く音楽は何ですか
状況に応じて色々と。と言いつつもSTUDIO ONEレーベルものは好きです。
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
KERARA, MODERN-TEI, OASIS（夏季のみ）、たぬき、ギャラリーロケット
●オススメホームページを教えて下さい
あまりチェックしていないので詳しくありません。
●今ハマっているものは何ですか
瞬間、瞬間常に様々な物事に。そのハマるドライブ感をレンジとデプスを拡大する契機として活用してます。
しいて言えば、その時どきに関わっているプロジェクトに最もハマっている様に感じます。
●好きな洋服のブランドは何ですか
あまりブランディング志向はありません。とりあえずNAIGEL CABOURNには好きなものがありました。
オーダーメイドを通貨の安い国でしたりもします（いくつかのPROJECTでの採用手法でもあります）。
●今の職業を選んだ動機は何ですか
当初DISCO建築家になろうかと思ったという噂は、嘘ではなく本当のことですが、時間と共にある機能する実体ある表現活動として建築と言われる職業領域を選び、またそれを結果自然に広げることができればと思ったからです。
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
個人の能力をより引き出すために。そして、緑とタイミング。経済性と社会性。期間限定という設定。単品多品種の量産。レーベルの可能性。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
「アカデミックNOW」しかしながら「オルタナティブ元年」の予感。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
バーバリーのマフラーを全員で巻くような事は、さすがになくなってゆくだろうと期待してます。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
デザインが、私と事象の間に紡がれるものごととすれば、興味を抱かせる様々な環境の経験を通じた、現在予測できない未来との出会って行き、その中で人と事象をとりもつ適切な「かたち」と「ありよう」を紡ぎだしたいと思っています。
●今の時代を一言で表して下さい
OUT OF JAL-PACK



大堀 伸（おおほり・しん）
1967年岐阜県生まれ。'92年武蔵野美術大学大学院造形研究科建築コース修了。'92年一級建築士事務所ART ASU INC 入社。'94年退社。'95年Intentionallies を「レーベル」として立ち上げ。'96年有限会社インテンショナリーズ一級建築士事務所設立。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
読書と散歩と人との会話。
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
矢萩喜従郎、杉本洋平、堀部安嗣、そしてうちのパートナーのふたり。
●よく読む雑誌は何ですか
店頭に並ぶ、ほぼすべてのデザイン、建築系の雑誌。
●よく聴く音楽は何ですか
bossa nova
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
神宮前 トンボー、宇田川町 中村屋、大森 更科、銀座 やす幸、吉祥寺 屋台のおでん屋。
●オススメホームページを教えて下さい
あまり利用しないのでわかりません。
●今ハマっているものは何ですか
仕事だと思います。
●好きな洋服のブランドは何ですか
あまり洋服で自分のキャラを出そうとは思ってませんので特別ないです。
●今の職業を選んだ動機は何ですか
理由ははっきり覚えてないですが、かなり幼い頃からそう決めていました。
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
非常に個性的で興味深いふたりがたまたま身近にいたから。個人的な縁だと思います。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
潮流かどうかわかりませんが、センス一発でインストで軽くこなす感じ。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
わかりません。ただどの様な状況になろうとも、正しくポジティヴな態度でまわりの世界に接しながら、着実にものを作り続けるスタンスを僕はクールだと思います。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
けれどポジティヴ・ドロップアウトも時には有効だと思います。
●今の時代を一言で表して下さい
"LESS IS A POSSIBILITY" by Douglas Coupland



鄭 秀和（てい・しゅうわ）
1968年横浜生まれ。'94年武蔵野美術大学大学院造形研究科建築コース修了。'94年 ARAI ARCHITECT においてプロジェクトに参加。'95年Intentionallies を「レーベル」として立ち上げ。'96年有限会社インテンショナリーズ一級建築士事務所設立。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
生活している瞬間すべてにおいて。
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
HAIM STEINBACK DENNIS OPPENHEIM ATELIER VAN LIESHOUT DROOG DESIGN ERIC BAINBRIDGE JOSEF MULLER-BROCKMANN EMIL RUDER JP, LW, DJ&G-MEN (1998.1.13.PM1.32 Limited Edition)
●よく読む雑誌は何ですか
多くの雑誌をよく眺めます。
●よく聴く音楽は何ですか
ジャンルやミュージシャンではなく、自分のセレクションを頼りに膨大な音源を聞いています
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
Eternal Echo
●オススメホームページを教えて下さい
あまりホームページは見ないので、逆に教えていただきたい位です。
●今ハマっているものは何ですか
性格的に「ハマル」タイプではないと思います。
●好きな洋服のブランドは何ですか
MACMILLAN MACKINTOSH BARBA ENZO BONAFE (1997～1998)
●今の職業を選んだ動機は何ですか
大地に柱を建てることの凄さを直感的に感じていたから。
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
自然に建築を捉えた場合、個人の力だけで創ることなどあり得ないと感じており、その事実を素直に受けとめた上での適切な方法だと考え、このように事務所の形態もデザインしました。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
潮流ということはすでに出来上がっていることですので、そこに焦点を当てることより、むしろ手つかずで存在しているものにどう光をさしてゆくのか、ということに興味があります。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
予言することに躍起になる事は得策だとは思いません。なぜなら、デザインのヴァリエーションは無限であり、過去が遠く輝く未来になりえたり、5分前がもはや無効になったりしてしまう事の方が自然の事なのかもしれませんから。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
建物をデザインすることはさることながら、建築することの「意義」も設計したいと思います（瞬間のデザイン vs 関係性のデザイン）。
●今の時代を一言で表して下さい
Back to now, and make future classics.

11th Sapporo Collection space installation

グラフィック・音楽・空間・ファッションが全て等価であることによって生まれるコラボレーションの結晶、「現在」のリアリティあるショーの在り方

作品フォーマット：Intentionallies B.L.T.（インテンショナリーズ・ベーコン／レタス／トマト）
所在地：北海道札幌市、ロイトン札幌
開催日：1997年6月26日
主用途：Object
共同設計者：Factory ITL all stars
延床面積：1,744m²

GSSS collaboration

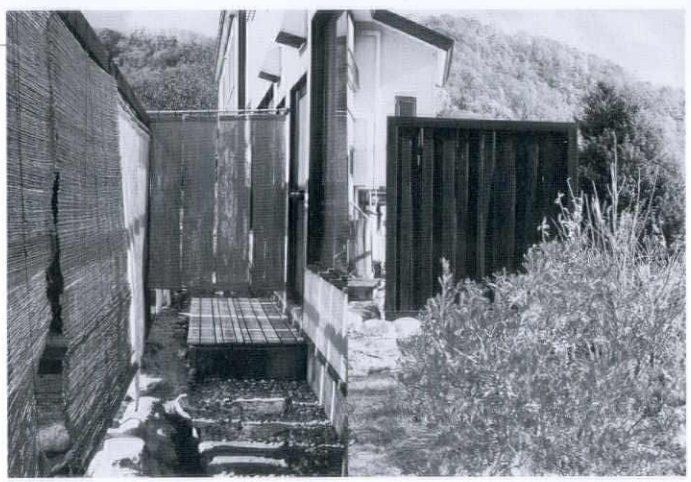


御宿竜松庵露天風呂新築工事

北海道有珠郡北湯沢温泉町「御宿竜松庵」で培われる設計行為の意味と、お客様の目線で考えることを教えられたワークショップによる露天風呂新築工事

作品フォーマット：Intentionallies B.L.T.（インテンショナリーズ・ベーコン／レタス／トマト）
所在地：北海道有珠郡大滝村北湯沢温泉町
主用途：Open air bath
共同設計者：Factory ITL all stars. Special thanks to workshop crews.
建築面積：15.84m²

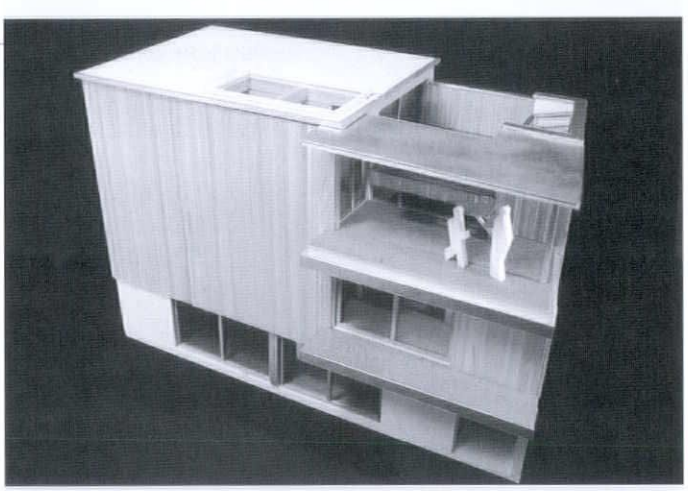
workshop communication



林邸

作品フォーマット：Intentionallies SD（インテンショナリーズ・スタンダードデザイン）
所在地：岐阜県各務原市
主用途：専用住宅
構造：鉄筋コンクリート造、鉄骨造
規模：地上3階建
敷地面積：110.12m²
建築面積：72.57m²
延床面積：166.36m²
竣工年：1998年7月（予定）

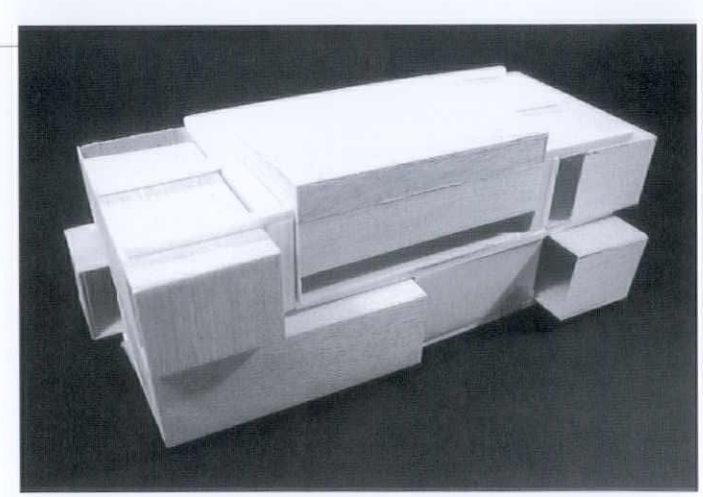
world standard design



井上邸

作品フォーマット：Intentionallies SD（インテンショナリーズ・スタンダードデザイン）
所在地：東京都町田市
主用途：専用住宅
共同設計者：Marc Tabacci
構造：鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木造
規模：地上2階建
敷地面積：334.17m²
建築面積：82.5m²
延床面積：153.5m²
竣工年：1999年1月（予定）

swiss box no.2 cupboard system

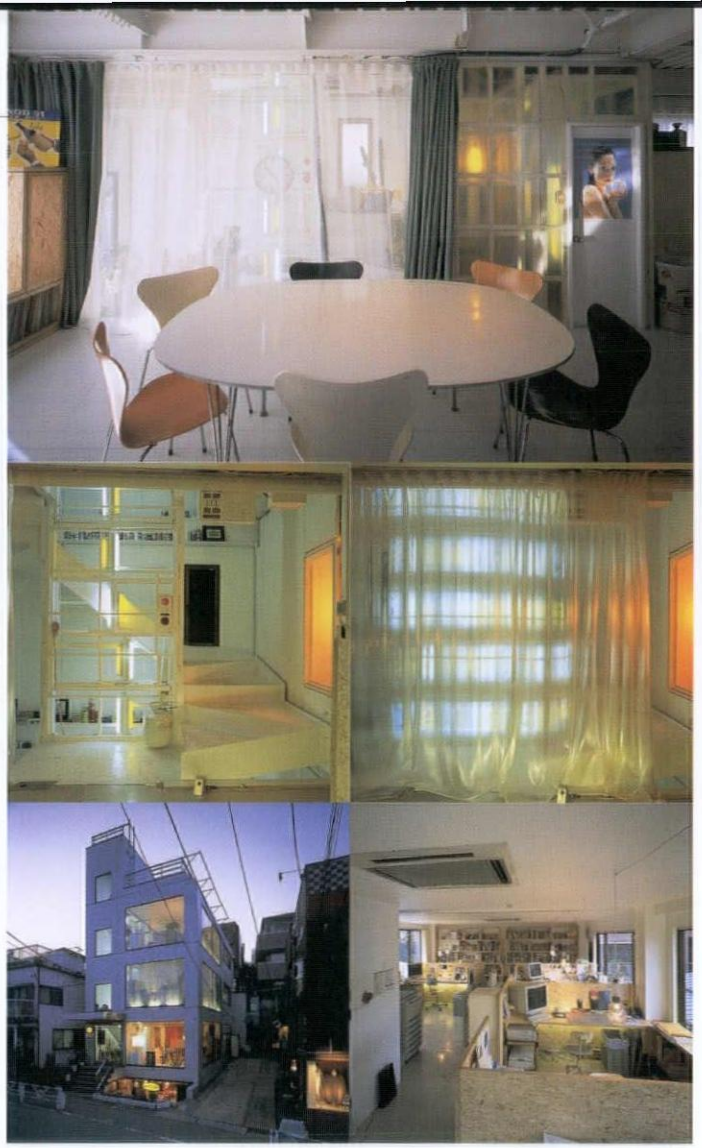


CTPP+CTPR+COMMUNE OFFICE

建築設計事務所自らが設計・監理のみならず90%以上の管理・施工・製作・運輸の一切を行った金字塔的PC物件。これまで試行してきた数々の物件での様々なTRY&ERORR経験を生かし坪10万をグロスで切ることに成功する。いわゆるインテリアデザインとセルフビルドの間隙を突く、ローコスト型スタンダードデザイン(LSD)のプロトタイプ。コンテクストとして、ALC &ブロンズアルミサッシという典型的かつ最も困難なインテリア敷地条件をいかに隠蔽させずに、施主所有の既存什器および備品、そしてCTPP展ツアーで使用された家具とのチューニングを計った。また、竣工後想定されるCTPP活動にともなうカオス化を受容する事務所のデザインを心がけた。竣工感なき竣工。

作品フォーマット：Intentionallies PC（インテンショナリーズ・パーソナルコンストラクション）
所在地：東京都渋谷区代官山7-5プリルビル1F～3F
建築用途：グラフィックデザイン事務所・マネジメント事務所（スタジオ、ビデオ編集室を含む）
協同設計者：住吉正文、高瀬夕子
構造：RC造、一部SRCおよびS造
敷地面積：66.5m²
延床面積：196.5m²
階数：3階
主構造：S造
設計施工期間：1997年10月20日～12月12日

ITL/SD by ITL/PC、ITL/SV (Stone & Vinyl)、ナイス逆富士(1F/PS)
オフィスエンターテイメントon余地、
「で、どこを設計したんですか」





断面劇場、Space for スター誕生！



STUDIO CUTiE

作品フォーマット：Intentionallies PC（インテンショナリーズ・パーソナルコンストラクション）
所在地：東京都渋谷区神宮前1-11-6ラフォーレ原宿6F ラフォーレミュージアム
主用途：雑誌CUTiE10周年イベント（フォトエキシビジョン・タレント展示ブース・公開モデルオーディション・公開モデル撮影・ビデオシアター・協賛企業展示ブースなど）
共同設計者：与田憲真、住吉正文、高瀬夕子、遠藤幹子、 Marc Tabacchi
敷地面積：600m²
主構造：スチールパイプフレームヒンジ構造、木造およびワイヤーサスペンション構造
施工期間：1997年10月9日
開催期間：1997年10月10日～12日
共同施工、舞台監督：Ball inc.
映像設計：Groove Vision
プロデューサー：大山ゆかり
家具協力：AGURA家具企画

Eternal Echo Interior project & EE remix site

サービスの奥深さから、設計というものを感じてもらうための場。そこで感じ得たものを現実の空間に反映させることのできる余白のある実験の場所

作品フォーマット： Intentionallies B.L.T.（インテンショナリーズ・ベーコン／レタス／トマト）
所在地：北海道伊達市錦町100-30
主用途：Restaurant & Bar Eternal echo
共同設計者：Factory ITL all stars.
延床面積：70.67m²

remix compilation

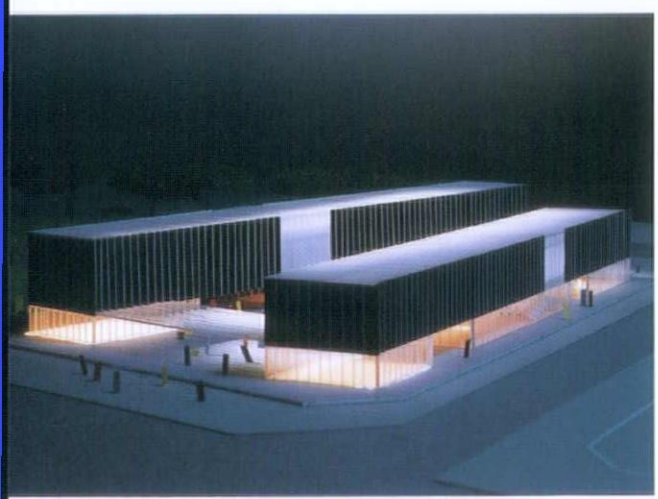


みかんぐみ

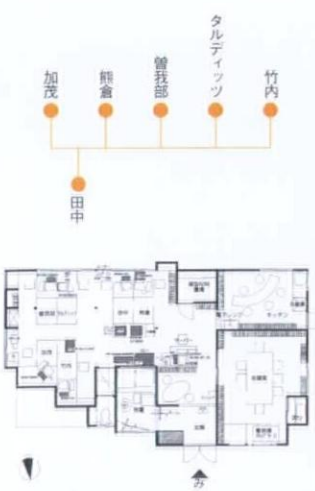


NHK長野放送会館

もともと加茂、曽我部、竹内は同じ研究室出身、タルディッツと加茂は夫婦、熊倉と竹内は雑誌の執筆仲間であったのが、1994年秋にNHK長野放送会館のコンペ参加がきっかけでみかんぐみは結成された。結成後も各個人が自分のアトリエを個々に持ちつつ、みかんぐみとしての仕事をバランスよく行う。従ってみかんぐみの拘束力はそれほど強いものではなく、組織のあり方としてはかなり緩やかだ。そして時には外部の建築家が仕事に参加してくることもある（実際、本特集でも紹介しているクライン・ダイサム・アーキテクツとのコラボレーションがある）。この緩やかで自然発生的な組織形態が非常に今日的であり、みかんぐみの大きな特徴のひとつといえよう。各スタッフ同士の関係やスタンスはニュートラルで、価値観やデザインのテイストもその人ごとにちがう。ただみかんぐみとして仕事を行う時は、スタッフ全員で徹底的に議論することにより、客観的な意見が徐々にストックされてゆく。時には朝始めた議論が夜まで及ぶこともあるという（実際編集部が取材に行った時も議論の真っ最中であった）。そしてこうした客観的な意見の蓄積の上にみかんぐみの作品は成立し、出来上がった作品は普遍的でありながら切れ味が鋭いのだ。ちなみにみかんぐみの名前の由来は「メンバーの娘が通っていた保育園のクラス名から拝借した」そうである。



コスタンティーン美術館コンペ案



事務所平面図

所在地：〒158-0094
東京都世田谷区玉川2-17-14
Tel：03-3707-7820　Fax：03-3707-7819
E-mail
加茂：iyokan@po.iijnet.or.jp
熊倉：kabosu@po.iijnet.or.jp
曽我部：ponkan@po.iijnet.or.jp
竹内：amanatsu@po.iijnet.or.jp
タルディッツ：kinkan@po.iijnet.or.jp
田中：sudachi@po.iijnet.or.jp
ホームページ：http://www.246.ne.jp/~mikan-/
アトリエ結成年：1995年3月
スタッフの数：6名
活動内容：建築の企画、設計、監理、翻訳、地域振興の援助

あアイドル	現在は居ませんね〜。	Her	kyon2	あきら	ビョーク	和
アイルトン・セナ	亡人になったときは悲しかった。	Not bad, but not as good as Prost.	天才は早く死ぬ	実は割と好きでした。	F1人気	あの日はショックでした。
足	26	30	26.5	27	24	24
アプリケーションソフト	minicad	minicad, ms word	minicad	ユードラ	minicad	minicad, exel
ウォーターフロント計画の好きなところ	最終成果物を見ていないのでコメントできません。	shapeless but organized strictly	建築がミニマルなところ	ビオトープとオートキャンプ	建築がない	エコロジー的な考え方。
ウォーターフロント計画のここをこうしたかった	同上。	———	特になし。	人工的に作るところはもっと少なくても良かった。	街とつなげたい	水際は建造物ではなく浄化されるべき。
映画	New Cinema Paradise	Blow up	最近見たのは「Shall we dance?」	恋する惑星	最新鑑賞は「ラヂオの時間」	シャイン、スワロウテイル
エコテン計画の好きなところ	最終成果物を見ていないのでコメントできません。	The impression given by the perspectives	風車	土と木のデッキ	風力発電	
エコテン計画のここをこうしたかった	同上。	Perspectives	特になし。	建物の量が増えすぎたかも。	デザインを現代的に	基本構想どまりで残念。
NHK長野放送会館の好きなところ	一言でいえません。	The relation to the urban environment	クールな立面。	周辺への対応（大きさとして）	ルーバー	エレガントなプロポーション、放送センターの広い空間。
NHK長野放送会館のここをこうしたかった	思いつきません。	Darker stones for the sound	インテリア全般をもっとコントロールしたかった。	アンテナが予想と違った。	NHKマークを昔のタイプに	照明での提案がもっとできたかもしれない。
オリジナリティー	画一的なことは重要ですか？	Not really, it is not an aim but may come as aresult.	別に	料理をつくるときは結構重要です。	イイエ	目的ではなく、結果的に現れるもの
か閣僚になるとしたら	内閣総理大臣	Foreign affairs	総理大臣	一番暇なのは何大臣？	建設大臣	科学技術庁長官
利き手						
京都駅	写真だけなので判断できない。	A patissery with too much cream	構成OK,ディテールNG。	原広司テーマパーク	ハデ	いつも人がいっぱいで何しているんだろう？
嫌いな建物	みかんぐみ長野現場事務所	Too many	ビッグ・ハット、都庁	RCのお城	メーカー住宅	たくさん
霧島彫刻ふれあいの森アートホールコンペ案の好きなところ	展示空間全体と建物が木々に埋められているところ。	One box but several spaces	建物のシークェンスが楽しいところ。	長いこと、木に埋まってること。	ルートの選択性	単純でありながら多様な空間であること。
霧島彫刻ふれあいの森アートホールコンペ案のここをこうしたかった	一等案より絶対に良いと思うので建てば良かった。	———	たてたかった。	もっと長くても良かったかな？	完ペキのはず。	完ペキ！
果物	やっぱり、みかんでしょう。	Nearly all.	いちご	ブドウ	メロン	みかん
くつろげる場所	夜の車の中	More a mood than a space	いえ	多摩川	自宅	天井が高い部屋
クラブ活動 中学	サッカー部	Acting,Singing,Biology	写真部	サッカー部	テニス部	美術部
クラブ活動 高校	サッカー部		サッカー部	軽音部	サウンド研	合唱部
クラブ活動 大学	1/4　ジャズ	Boxing	ヨット部	ジャズ研	ロック研	ちょっとバンド
血液型	A+	Unknown	O+	A+	O+	A+
合理的だと思うこと	終電の乗り継ぎがうまくゆくとき	The contrary to Kyoto station	デスクトップの整頓。	地下鉄の切符の磁気部分に日本とフランスの合理性	家庭菜園	カードでお買いもの

みかんぐみはその名のとおり、恣意的な作家性あるいは余計な主体性といったことの対極に存在する建築を目指しているグループであるが、建築の決定性には恣意的な作家性が必ず存在する、あるいは必要



ウォーターフロント計画

design period	construction period	operation	distance from Mikan
142days	0days	18people	23.7km
amount			



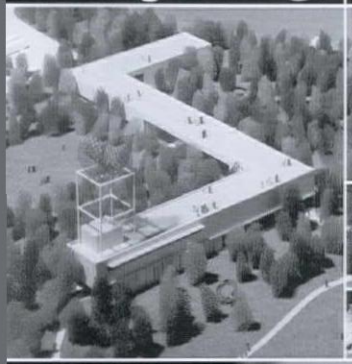
エコテン計画

design period	construction period	cooperation	distance from Mikan
65days	0days	21people	14.2km
amount			



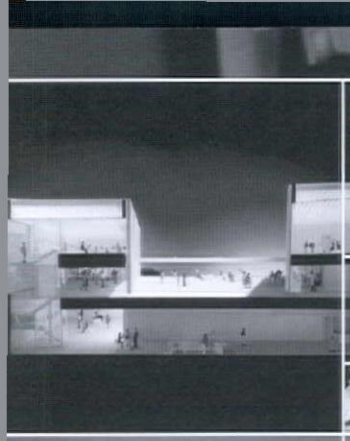
NHK長野放送会館

design period	construction period	cooperation	distance from Mikan
458days	515days	58people	165.1km
amount			



霧島彫刻ふれあいの森アートホールコンペ案

design period	construction period	cooperation	distance from Mikan
20days	0days	11people	942.9km
amount			



The Constantini Museum コンペ案の好きなところ

The Constantini Museum コンペ案のここをこうしたかった

最近買ったCD

最近買った本

相模原の家の好きなところ

相模原の家のここをこうしたかった

座右の銘

自家用車

信濃大町の家の好きなところ

信濃大町の家のここをこうしたかった

自分

事務所内で好きな場所

重要だと思うこと

職業

視力 右

視力 左

人種

身長

好きな建築

せんだいメディアテークコンペ案の好きなところ

せんだいメディアテークコンペ案のここをこうしたかった

生誕地

先生

オープンなelev.、plaza、等。

アイデアが出なかったという事もあるが公園に対して積極的な提案をしたかった。

清水靖晃

利己的な遺伝子

内部の空間における移動する楽しさと視点の豊富さ。

思いつきません。

怠慢

パンダのような小さな車がほしい。

facadeとfacadeからは想像できない内部の空間、ロケーション。

思いつきません。



自分の机

アフォーダンスという屁理屈

サラリーマン

0.1くらい

0.1くらい

新モンゴロイド

168cm

ハラ・ミュージアム・アーク

とうきょう

小嶋一浩氏

場のつくり方

現場を見たかった。

外壁のアイデアを考えなかった。

Urban rythm

The modern steel house

建物内のキョリ

思いつきません。

The entrance on the ground which is too tight

Shorten the upper bed room to allow

苦あれば楽あり

Impreza

The volume of the staircase no to end so straight

ナシ



Warm and sunny

The rose

Service

2.0

2.0

human

187cm

Bali-Eastaway House

Openness versus enclosure

床を平らにしたかった。

Paris

So iu funi yobareruto suki

広場

外観、特に夜景

ヴォリューム、外観

内部空間のつながりのスタディ

動線の多様性をもうちょっと

big soup / Luke Vibert

トム・ウェイツ

ブリッジ・トゥ・バビロン／ローリング・ストーンズ

日本・現代・美術／椹木野衣

宮台真司

「こころの旅」神谷美恵子、アンソニー・ブラウンの絵本

螺旋状の構成

明るさ

明るさ、家族の気配とプライバシーが両立していること、中庭

ディテール、材料の整理

サッシ、幅木の納まり

何とかなる

イイものはイイ

笑う門には福来たる！

自転車

黒のビートル

スバル・インプレッサ

敷地との関係（位置、大きさ）

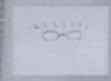
広々とした抜け

たたずまい、内部空間の豊かさ、自然との関係。

扉をもっと軽くしたかった。

木建具の機構は難しい！







暖かいところ

ストーブ前

（日が当たる）自分の席

朝、子供としゃべる時間

健康さ

元気

建築家

誰の職業？

自営業

自営業／サーヴィス業

1.5

2.0

測定不能

2.0

0.6

2.0

自分より悪い人を知らない

2.0

モンゴロイド

旧モンゴロイド

日本人

日本人

182cm

181cm

163cm

162.5cm

イームズ自邸

九州とかの小さい民家

ソーク・インスティテュート

たくさん

構成をはっきり表現できたこと。

ズルズルつながっているかんじ

斜路のコンセプト

セラヴィの現場が忙しく参加できませんでした。

床を平らにしたかった。

コアの構造はちょっとヤリヤリだったかも

ブレースやめたい

鎌倉

フクオカ

新潟

小倉

坂本一成

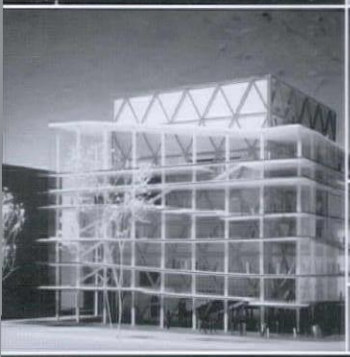
伊東豊雄、坂本一成

桐敷真次郎、小林克弘

（小学校の時の）下野先生



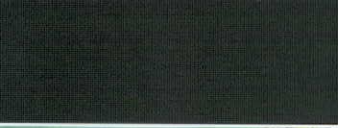




	The Constantini Museumコンペ案	相模原の家	信濃大町の家	せんだいメディアテークコンペ案
design period	28days	design period	design period	design period
construction period	0days	construction period	construction period	construction period
cooperation	8people	cooperation	cooperation	cooperation
distance from Mikan	15334km	distance from Mikan	distance from Mikan	distance from Mikan
amount		amount	amount	amount
		516days	153days	47days
		152days	335days	0days
		7people	6people	5people
		25.6km	157.9km	313.2km

彼らがその狭間でどのように決定作業を行っているかということは興味深いところであるが、イーヴンパートナー（実は親友）という関係の元にメンバーが互いの不必要な作家性を遠慮なく消しあう

やじ











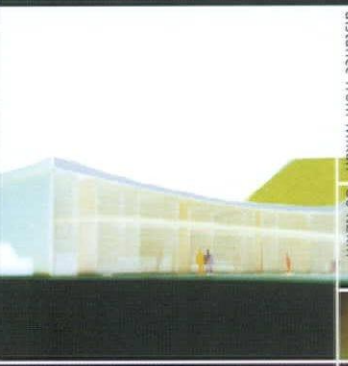


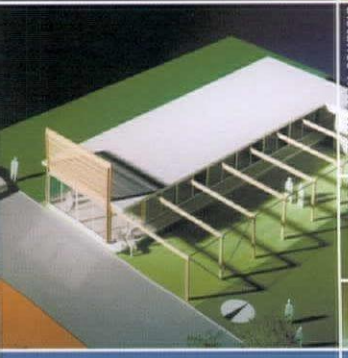
た	体重		60kg	85kg	74kg	76kg	53kg	誰が書くか！
	食べ物		うに	Goma dango	寿司	焼き魚	生春巻	新橋亭の弁当
	誕生日	年	1971	1959	1962	1962	1962	1962
		月	06	10	11	05	09	11
		日	08	09	20	12	21	18
	通勤時間			15分	40分	12分（チャリンコ）	へたすりゃ2時間	10分
	楽しい色							
	悲しい色						上田正樹やね	
	ディテール		神は細部に宿る。	Name of a japanese magazine	建物の緊張感	考えているときりがない。	ミース	大切
	デスクトップ							
	電子メール		kabosu@po.iijnet.or.jp.	kinkan@po.iijnet.or.jp.	amanatsu@po.iijnet.or.jp.	ponkan@po.iijnet.or.jp.	sudachi@po.iijnet.or.jp.	iyokan@po.iijnet.or.jp.
	胴		73cm	77cm	78cm	32inch	73cm	誰が書くか！
	東京		あきない	I like Tokyo because I live here.	いいところもわるいところもある。	遠くに行きやすいから好きです。	人がいっぱいいるからすき。	好き嫌いの対象になれない。
	動物		さる	Nearly all, but	カンガルー	ゴキブリはすごくいやだ。	猫	皇帝ペンギン
	何処へ行きたい？		宇宙の端	My bed (it's 1AM)	海	夏の海	南方	アメリカ
な	何がほしい？			A good book	庭	畑	新しいプリメインアンプ	照明器具
	名前		田中皇彦	マニュエル・タルディッツ	竹内昌義	曽我部昌史	熊倉洋介	加茂紀和子
	ニューヨーク		アヴァンギャルドなジャズ	America	アメリカの中心	行ったことない。	楽しかった	行きたい。
は	花		沖縄民謡	Ran	ばら	キキョウ	キンモクセイ	コクリコ
	パリ		おしゃれなジャズ	Texas	ヨーロッパの中心	いくらでも時間がつぶれる。	つらかった	冬は暗い
	ビートルズ		in my life	The fool on the hill	Let it be	Dig it	ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス	ミッシェル
	100メートル		100sec	9.83	16.5sくらい	忘れた（おそい）	クロールでやっと	もう走れません。
	ヒーロー		みかんぐみ内で嫌われているバット・メセニー	Tom Jones	ガンダム	アームストロング船長	デヴィド・バーン	あゆはらこずえ
	平田町タウンセンターコンペ案の好きなところ		内部化されたパブリックなスペース。	The network	構造	配置計画（敷地全体）	木造	スケール感
	平田町タウンセンターコンペ案のここをこうしたかった		思いつきません。	The result of the competition	大きい広場をとっておけば	広いイヴェント・スペースは必要だったのか？	少し固かった	つい寒い地方というのが頭にあって、内部空間への志向が強くなってしまった。内と外との関係があっていい。
	二子玉川園		素敵な花園	Useful	高島屋によって歪められた町	東急ハンズ	遠い	イメージ先行型、物価が高い。

ことでみかんぐみは維持されていると思われる。今回は彼らを分析するために120問程度のアンケートを行った。P.16-19はその一部である。あらゆる種類の質問を設定したのでそれぞれの価値観の相

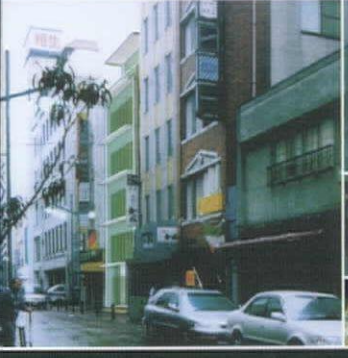
		平田町タウンセンターコンペ案	某居酒屋改装計画	香港計画	ハヤショッピングセンター		
	design period	19days	63days	61days	183days		
	construction period	0days	0days	0days	0days		
	cooperation	0people	6people	3people	1.1people		
	distance from Mikan	287.3km	11.4km	2709.1km	866.4km		
	amount						

某居酒屋改装計画の好きなところ	きれいにまとめている事。	The grotesque part	業務範囲の広がり	無分節に内部が広がっているところ。	サイケなところ	浮遊する魚や野菜が変なところ。
某居酒屋改装計画のここをこうしたかった	あったらデートに使えるので出来れば良かった。	———	もうちょっとtastyでもよかった気がする。	絵の密度をもっと上げてもいいか。	もっとイッてしまいたかった	みかんぐみは商スペースの経験が少ない。
香港計画の好きなところ	———	Order and freedom	ポップなところ	金魚	曲線	金魚計画、色彩計画、照明の考え方、プランニング、新しい分野の仕事だった。
香港計画のここをこうしたかった	———	The client	———	つくりたかった		数々の建築とは関係のない問題で、計画は中断されました。
マイブーム	ちょっと前までギター	K1	Play Station	ソバを打つこと	うどん	絵本
みかんぐみを仕切っているのは誰？	かもさえ氏	Of course him	みかん星人	ノーコメント	ソガベ	誰か仕切って下さい。
みかんぐみを離れて				信州大学、山口先生との協働 		
ミース	ファンズワース邸	Resor House	探究者	まとまった作品集がないのはなぜ？	ガラスのスカイスクレーパー案	バルセロナ・パヴィリオン
無印良品	追浜駅西友内に店がある。	むし	矛盾をはらんだ商品名	比較的良く買う。	谷川真理とはうまいね。	食器が丈夫。
モダニストですか？	ちがう。	No I am a contemporary.	たぶん、ちがう。	無駄な金をかけないことが近代化らしい。	イイエ	たぶん
八代ショッピングセンター計画の好きなところ	臨機応変な駐車スペースとハタ。	Its connecting power	全体のシステムに無理がないところ。	ズルズル全体に広がっている感じ。ハタ。	広さを使いきってる。	裏表のないマトリックス計画。
八代ショッピングセンター計画のここをこうしたかった	出来たら街が楽しく変化していくと思うので建てばよかった。	———	たてたかった。	つくりたかった。	ハタのリアルな工夫。	実計画になればいいのに。
八代の公民館計画の好きなところ	———	———	———	いろいろ使える広場。	おおらかさ。	合理的な構成。
八代の公民館計画のここをこうしたかった	———	———	———	芝生より砂利とか土が良かった。	もっとすすめたかった。	残念ながら、その時は休暇をとっていたので、できあがったものを見ました。
八代の集会所計画の好きなところ	内部外部化のflexさ	———	ファサード	シンプルな構成。	スカスカ感じ。	あっけらかんとしているところ。
八代の集会所計画のここをこうしたかった	思いつきません。	———	架構とプラン	特になし。	後ろのヴォリュームを軽	がんばって計画してもなかなか実らない。
ユーカリヶ丘の家の好きなところ	シンプルさ。1Fの大スペース。	Its soft industrial feeling	ユニバーサルなプラン	シンプルさ、ただの箱であること。	ミニマルぽい。	コンパクトで街並みにあっているところ。
ユーカリヶ丘の家のここをこうしたかった	また変更可能で〜す。	———	これからなので	これからだからなぁ。	全部ガラス	未施工なので何ともいえない。
横浜Iビル計画の好きなところ	階段のスペース。facade。最上階は気持ち良さそう。	Our effort to simply transgress the rules	シンプルなところ	無理のない感じ。	シンプルさ。	合理的なプラン。
横浜Iビル計画のここをこうしたかった	法規が色々とあったので、法規を変えたかった。	Redo the whole story	———	ファサードがイマヒトツ。	ファサード	連絡待ち。
ライバル	現在は居ませんね〜。	Him	それぞれの分野に一人ずつ	あきら	甲本ヒロト	彩
ル・コルビジェ	アーキテクチャル・プロムナード	A selfish genious	タイムリーな男	やたらと作品集が多いのはナゼ?	建築をめざして	ロンシャンの教会





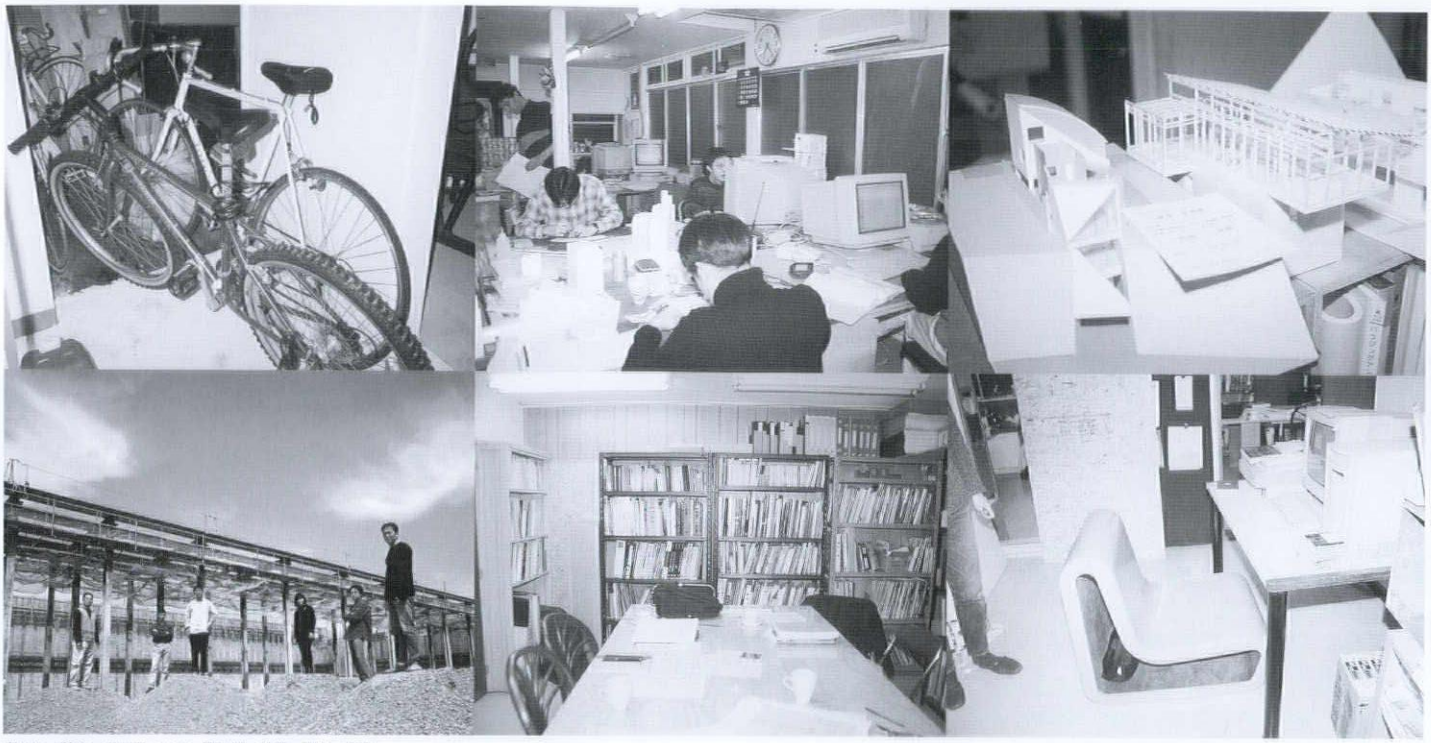




することは容易だが共通項も発見できる。この相違と共通のバランスがみかんぐみの原動力である。しかも、みかんぐみの全仕事、データつきです。みかんぐみへ愛を込めて、近藤潤也（履われエディター）

や

ら



左から、熊倉、タルディッツ、曾我部、加茂、田中、竹内

加茂紀和子（かも・きわこ）
1962年生まれ。東京工業大学～同大学院～久米設計。'92年M. タルディッツとセラヴィアソシエイツ設立。'95年みかんぐみを共同設立（以下同じ）。

熊倉洋介（くまくら・ようすけ）
1962年生まれ。東京都立大学～同大学修士課程～ペンシルベニア大学客員研究員～東京都立大学博士課程～'94年熊倉洋介建築設計事務所設立。

曾我部昌史（そがべ・まさし）
1962年生まれ。東京工業大学～同大学院～伊藤豊雄建築設計事務所～東京工業大学助手。'94年ソガベアトリエ設立。

マニュエル・タルディッツ
(Manuel Tardits)
1959年生まれ。ユニテ・ペダゴシックNo.1（仏）～東京大学大学院。'94年加茂紀和子とセラヴィアソシエイツを設立。

竹内昌義（たけうち・まさよし）
1962年生まれ。東京工業大学～パリ建築大学～東京工業大学大学院～ワークステーション・'91年竹内昌義アトリエ設立。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
日常生活（加茂、曾我部）／書店（熊倉）、As in many other artistic fields I think that there is mutual influences between scholar and popular approaches.In our own field, knowledge of scholar architecture (Architecture) and vernacular one (architecture) are both necessary.（タルディッツ）／普段よく目にする風景、工業製品（竹内）
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
篠原一男（加茂）／ルイス・カーン、塚本由晴（熊倉）／奈良美智、村上隆など日本の若手アーティスト（曾我部）／More than one architect or painter or sculptor or any other artist, I am interested by various works. It can go from a modern dance ballet by Forsyth, a box by Judd, a black paint by Soulages, a house by Barragan etc. It looks more like a private gallery with a collection of works than an interest for anyone in particular. It also evolves.（タルディッツ）／チャールズ・イームズ、メルセデスベンツAクラスの開発チーム（竹内）
●よく読む雑誌は何ですか
ちょっと前まではCREAだった。建築雑誌では、Jtと建築文化（加茂）／暮しの手帖（熊倉）／一連の建築雑誌、週間朝日、ビーパル、モーニング、BT、文芸春秋、WIRED（曾我部）／Weekly Times, Weekly Le Monde, Architecture d'Aujourd'hui, and nearly all Japanese architectural magazines which I do not read but take a look at.（タルディッツ）／建築雑誌、アエラ、サライ、料理雑誌、鮵（竹内）
●よく聴く音楽は何ですか
家では、童謡、バッハ、モーツアルト。みかんぐみでは、いろいろ（加茂）／フィッシュマンズ（熊倉）／J-POP、テクノ、60年代のジャズ（曾我部）／Last week I listened to Mozart, Tom Jones, Pulp, Bruce Sprinsteen. It is not a definite choice and reflects more the mood of the day. I could also have listened to Bach, Japanese Enka, African Beat or English pops of the 60ies. Meaning that basic choice and recent influences are mixed without hierarchy.（タルディッツ）／何でも。SMAPからクラシック、テクノまで。あまり濃いのは、今一歩（竹内）
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
成城のマルメゾンというケーキ屋、砧公園（加茂）／リキッドルーム（熊倉）／多摩川の河原（曾我部）／A small Spaghetti restaurant close to our office.（タルディッツ）／特に特定はしないが最近よくデパートにいくことが多い。あと、森戸海岸（竹内）
●オススメホームページを教えて下さい
よく知らないので（加茂）／特になし（熊倉、竹内）／「font」で検索して出てくるグラフィック関係のホームページはときどき面白い（曾我部）
●今ハマっているものは何ですか
こども達（加茂）／手打ちうどん（熊倉）／金魚ほか小動物、タイポグラフィー（曾我部）／My children like these sweet daddies I feared to become.（タルディッツ）／サッカー観戦、プレイステーション（竹内）
●好きな洋服のブランドは何ですか
よく知らないので。（加茂）／R・NEWBOLD（熊倉）／多くのスポーツブランド、ブランドの判らないもの（曾我部）／Probably Issey Miyake by ignorance of the others（タルディッツ）／特になし（竹内）
●今の職業を選んだ動機は何ですか
小学生の頃、成城界隈のお屋敷や近代住宅をのぞき込んであれこれと想像するのを遊びとしていた。大学受験の頃、すでに理系というレールの上にのっていたのだが、建築学科が自分と理系の接点だと思った。でも天職と思っているわけではない（加茂）／向いていると思ったので（熊倉）／小学校の時の友人の家が設計事務所で、その家にあった製図板や電子レンジは、たんぼに囲まれた田舎の町の中でとても新鮮だった気がする。たぶんそんな程度のささいなことがきっかけだったんじゃないかなあ（曾我部）／My knowledge of contemporary architecture was nul before I started a school of architecture, but my parents used to bring me to visit museums and churches very often. Cultural history in that sense was very present. Because of that my interest went also early to painting and old buildings. I used to go often with a friend to see painting exhibitions in museums from the age of 12 or 13. Later I use to walk in cities.（タルディッツ）／ものをつくっていく過程にクリアに関われるから（竹内）
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
いろいろな状態があっていいと思う（加茂）／考え方が広がると思ったので（熊倉）／複数での議論によって思考の対象が広がり、より多くの事柄のバランスをとる方向に向かっている感じがするのが楽しい。自分が考えようとする対象も自ずと広がっていくような気がする（曾我部）／I never believed that architecture was a one man show, but the result of confrontation of ideas. Eventhough the creation of Mikan was partly due to chance, than a carefully planned action, I felt rather comfortable with the idea of mixing various points of views.（タルディッツ）／個人の思い入れだけで建築を考えるのではなく、様々な取り組まなくてはいけない問題を選択し、それらをディスカッションをとおして相対化できるから（竹内）
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
主流がはっきりしていない。作家性が問われてない。（加茂）／無理がないものがふえてきたのでいいと思う（熊倉）／表現の目標を失った結果なのか、ただただ個人的な表現に向かい開き直っているような作品には違和感を覚える。建築を定義することがらがみつからないということが、やりすぎ建築を正当化することにはならないと思う（曾我部）／Is there really any clear current? Modern Architecture as a rational system of thinking is so clearly put under question by present architectural criticism, that I doubt that such a phenomenon was and is now possible.（タルディッツ）／うちわで閉じている（竹内）
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
建築をとりまく環境がますます複雑化するので、あえてミニマルな方向が強くなってくると思うが、依然としていろいろな様式があらわれる（加茂）／エコロジカルな方向（熊倉）／建築を成立させる判断要因の多面化。これまでの形式化した建築の方法からは十分に自由になり、その結果、建築が相手にする対象（条件）がより広がる。ルーティンワーク的な設計ができなくなる（曾我部）／Such a question seems to me pointless, meaning that it is mainly a media creation. Although obvious influences exists between architects.（タルディッツ）／建築のデザインするレンジが広がると思う。たとえば、エコロジーの技術の問題であったり、建物そのものの流通の問題であったり、電子社会の情報の取扱いの問題であったりするのではないだろうか（竹内）
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
多視野な社会分析と自己分析の間でリアリティーのある建築行為に関わって行きたい（加茂）／子育てと設計の両立（熊倉）／基本的にはこれまでの延長線上だと思うけど、仕事のレンジが広がっていくような気がする。設計の伴わない建築ってのもあるんじゃないかなあ（曾我部）／To figure out how to deal rationally with the present condition is difficult enough to avoid putting future under theory.（タルディッツ）／建築以外の様々な分野にも広い意味での人間の環境に携わっている人たちがいる。そういう人たちとコラボレートすることで、建築のデザインの可能性を広げたい（竹内）
●今の時代を一言で表して下さい
ややもすれば付和雷同的に物事が動く時代。（加茂）／整理整頓（熊倉）／自然（＝あたり前の状態）であること（曾我部）／Considering the past, this period is ever evolving in a repetitive way.（タルディッツ）／経済の成長率が低いことが、当たり前に感じられる時代（竹内）

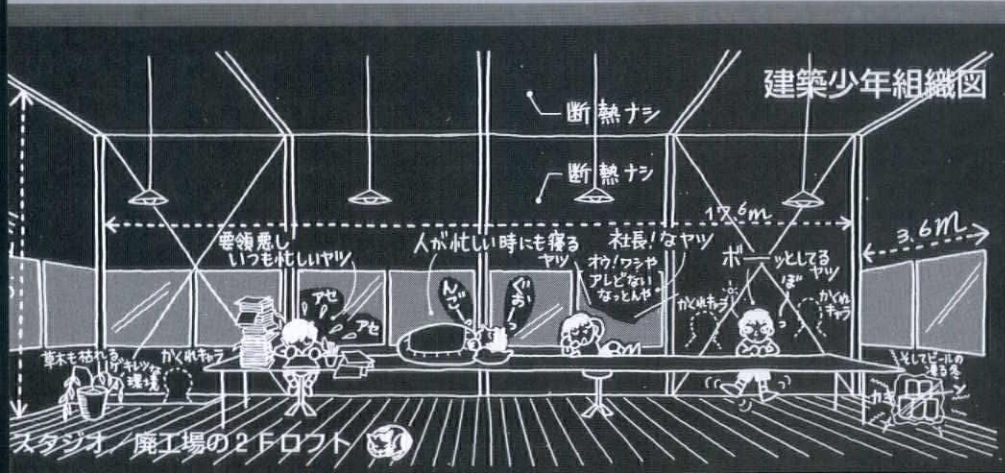
PP.15～19：写真＝平賀茂

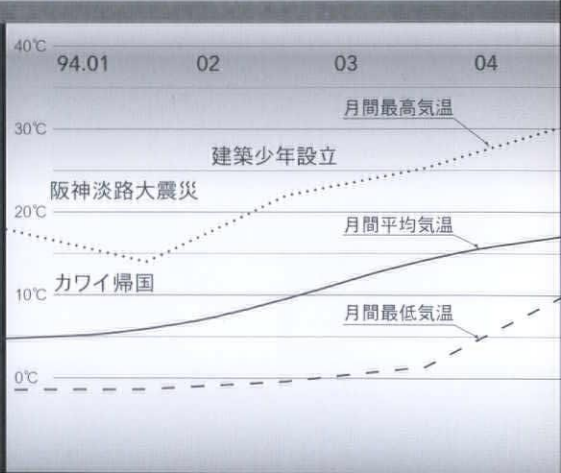
所在地：〒602-8482　京都市上京区浄福寺通上立売上ル大黒町689千切屋工場跡
Tel：075-415-0620　Fax：075-415-0621
E-Mail：shownen@geisya.or.jp
ホームページ：http://www.geisya.or.jp/shownen/
スタッフの数：7名
活動内容：建築設計、インスタレーション、アーティストとのコラボレーション、その他クリエイティブな行為に関わる活動

建築少年



1995年、4人のパートナーと3人のネットワークスの計7人にて設立。プロジェクトに応じてチームを組んで対応するというネットワーク型事務所を指向している。名称の由来は「パートナーシップそのものが30歳以上になったら解散する時限プロジェクトであることを表現した」、「やがて建築家という大人になるまでの魅惑的かつ刺激的な隙間の時間にあてた一般名詞として」など諸説。アトリエは京都西陣という伝統産業（西陣織）の町に所在し、使われなくなった織物工場のロフトが主な作業場である。また階下のフロア（約500m²）は、コンクリート躯体の原寸図を描くことも可能な広いスペースとなっている。活動内容としては、「設計の対象は犬小屋から超高層まで、行動範囲はとりあえず地球上」と彼らが言うように、クリエイティブな活動に関わることすべてが彼らのフィールドだ。実際に舞踏家とのインスタレーションによるコラボレーションや、地域ネットワークとの共同による町家再生プロジェクトのプロポーザルなど、様々な活動を実践している。建築にとどまらずあらゆる社会のスキマを狙って突き進む彼らが、今後解散までの限られた時間内にどのような活動を見せてくれるかが非常に楽しみである。





B K

音環境

少年K－最近自分について少しわかってきたことのひとつが、音環境に関してはかなりうるさ型だってこと。うるさ型と行っても趣味がうるさいとかいうんじゃなくて、単純にうるさいやつ、馬鹿みたいにうるさいヤツとかが好きってことだけど。

少年B－少しわかってきたの？自分がうるさいことは自覚してる？

少年K－それなりに（笑）。最近結構ハマッているのが高速道路をフルオープンで、音楽のヴォリューム最大のいわゆるボディーソニック状態でとばすってやつで、高速映像の視覚刺激（トンネル内は特に強烈）、叩きつける風の触覚刺激、ディーゼル排気の臭覚刺激（？）なんかも混ざって刺激満載、刺激嗜好の人間にとってはたまらん状態ですね。まあ知覚刺激兵器に襲われても生き残るための、今日的肉体強化プログラムであると自負してますけど。

少年B－「脳ミソにお注射」ってやつですね。それで気分が良くなったりするわけ？僕も同じ刺激嗜好のような気はするけれど、精神的な方かな。クライアントにいじめられるとか…

少年K－真性M男だけに。

少年B－嗜好しているというより、ニブい。既にパンチドランカーなんだろうか。最近耳も少し遠いし。

少年K－それは、人の話を聞いていないだけだって。

少年B－そう。あんまり、外部の刺激を受け取ってないと思う。モノづくりでもその辺はよく表れているというか・・・古今東西「もの」をつくる人間のふたつのタイプ、つまり外部からの大量の入力データを変換することによってモノをつくるタイプと、少ない入力データを内で燃焼させてモノをつくるタイプの、後者の…

少年K－つまりキミは自己中心的だと。

少年B－…

K N

68年生まれについて

少年N－68年生まれというのは実は意外な特異点だと思う。オイルショックは幼なすぎて実感がなく、大学生活の期間はまさにバブルの時代。大学を出た途端にバブルは崩壊。
つまり、モラトリアム期を通じて一度も挫折したことがなく、しかも仕事を始めたときには既に挫折していたが故に挫折を感じようがないというこの偶然。就職した同級生達は今やバブル就職組として、組織内で糾弾されているのに、糾弾される「上」の人間がいない。つまり唯一負けたことのないワタシ。

少年K－それって「自分が認めないからケンカに負けたことない」っていう横山やすし状態？

少年N－…

少年K－まあ1968年というのはもちろんある意味で非常に重要な年ではあるのだけれど、実際の所1968年生まれだからって、何があるって訳じゃない。（オレ67年生まれ！）赤ん坊がパリでデモに加わったなんて訳ないんだし。ただそうやって、改めて考えてみると、自分たちが生まれた頃カツドウしていた人達が自分の父親の世代なんだって実感を持って感じるよね。そこから発展して考えると、そのカツドウをしていた人達やそのシンパ達、つまり権力を唾棄してきたはずの人々が、我々に仕事を頼む側、つまりある種の権力を持つ側になってきているわけ。実際ボクそういう人の仕事やってるしね。そう思ってよく観察してみると、いろんな所で、それも意外に権力側で、そういう人達が生息しているのが見つかる。僕らがそんな人の仕事をするってことは、（今まで反権力指向できただけに）権力をふるうことになれてない人間が、ジェネレーションXみたいな価値観もなんだか崩れまくってる奴等に権力をふるうというなかなかハチャハチャなことってことになる。それは「権力ゲームとしての建築」においては新しフェーズなんだろうし、どうなるのか興味は湧くね（半分恐いもの見たさで）。

1×1

KENCHIKU SHOWNEN

ルール

建築少年4人を1対1の組み合わせ6パターンに分け、それぞれの組み合わせに対して残りのふたりがテーマ=「お題」を与える。「お題」を与えられたふたりは、対話形式でも、合同執筆でも、メールの往返信を繰り返したものでも、いかなる形でもよいのでとにかくふたりの共同作業で一文を制作すること。



B U

「フェミニズム／建築」　「速度」

少年B－住宅設計って、フェミニストのお勉強って感じしません？
少年U－んん？その、「フェミニスト」っちゅうのの、意味っちゅうか、本来の定義ちゅうのは、例えば、そやなあ1970年代のノーマ・レイの映画なんかにようでてくるみたいな女性運動家のこととか、うーん、ほかに・・・そやなあ、あんまりええ例が思いうかばへんけど、まあ、そうゆう意味かいな？
少年B－そう。今の話は「女に優しい」の意味で。
少年U－えーっと、ほれ、あの人、なんちゅう名前やったっけ？えーっと、ここまでででてんにゃけどなあ・・・。うーんと。
少年B－サリー・フィールド。
少年U－そうそう。サリー・フィールドや。うん、あの頃のあの人、むっちゃ、きれいやったなあ。ほんで、えっ？何の話やったっけ。
少年B－住宅の設計は、フェミニストになる努力をすることだと。
少年U－ああ、そうそう。そやけど、そうとかあ、あんたは個人的にはそうかもしれへんけどなあ・・・。
少年B－鍵を握ってるのはだいたい奥さんで、エセ・フェミニストを装い、彼女とギジ恋愛することが、設計のツボだとのたまう建築家もいたなあ。
少年U－ほう、なあるほど。それって、ほれ、あれやね、いわゆる建築家スケコマシ説っちゅうやつやな。
少年B－ミースやライトじゃないけど。
少年U－ふむふむ、なあるほど。でもなあ、ウチらの年代やったら、なんぼなんでもお施主さんの奥さんとは少し年離れてるし、なんか、こう、しっくりけえへんのとちがうか。
少年B－僕なんか結婚した相手が歳上のせいもあって、守備範囲は広いかな。施主の奥さんの思考パターンが結構読めたりし。ギジ・恋愛にはまりやすかったりするかも。
少年U－ははは、なあるほどなあ。ほんで、家に帰って、そんなこんなの話をしてて、また怒られたりするわけや。（笑）
少年B－・・・・・

N U

「ハード／ソフト」　「ユニット」

少年U－「ハード」って簡単に言っちゃえば「入れ物」でしょ。じゃあ「なかみ」が「ソフト」かと言うとそんなに単純じゃないけれど、でもそこには何らかの欲求とか欲望とかがつまっている。だから、よく言われる「ハードがソフトに追いつかない」状況って、当たり前なんだよな。人間の欲望を丸ごと抱え込めるキャパのある「いれもの」なんてそうそうあるもんじゃないもんな。

少年N－欲望を抱え込む形式があるとしたら、「いれもの」じゃだめで、欲望孕む主体としてのユニットを組み込めるマザーボードのようなものじゃないかな。ユニットは毎年、生産ライン（＝大学）からどんどん出てくるので、それを組み込んでいくマザーボードがあれば、とにかくハードは完成する。マザーボード自体には、はたらきはないがボード上では、多様なユニットの組み替えが可能である。
少年U－建築少年にはウィルス汚染されたユニットが入っているかも。

K U

インタラクション/話し言葉

> 最近メールでのコミュニケーションが増えてきて感じるんだけれど、メールって手紙よりは話し言葉に近いでしょ。そのせいか、ついつい返信の時に京都弁になってしまう。

嘘である。生粋の京都人、[それは京都の中京（ナカギョーとよむ）の住人を指すのであるが]であり、当然京都中華思想を抱く男にとって、コミュニケーション言語は京都弁でなければならず、e-mail以外の原稿でも京都弁満載のことは多々ある。文書化された京都弁！おぞましいばかりである。

> メールだと相手の文章を容易に引用できるから、相手の話に「つっこみ」がいれやすく、どうしても京都弁でないとしっくりこない。

しかし、この話は意外に面白い視点を提供している。e-mailによるコミュニケーションの特質の一つは引用可能性の高さ。それ故マニエリスム的傾向の強い関西文化圏｛吉本を見よ！｝との相性が良いとも読み解ける。恐るべし！

> そんなわけないやろ！

B N

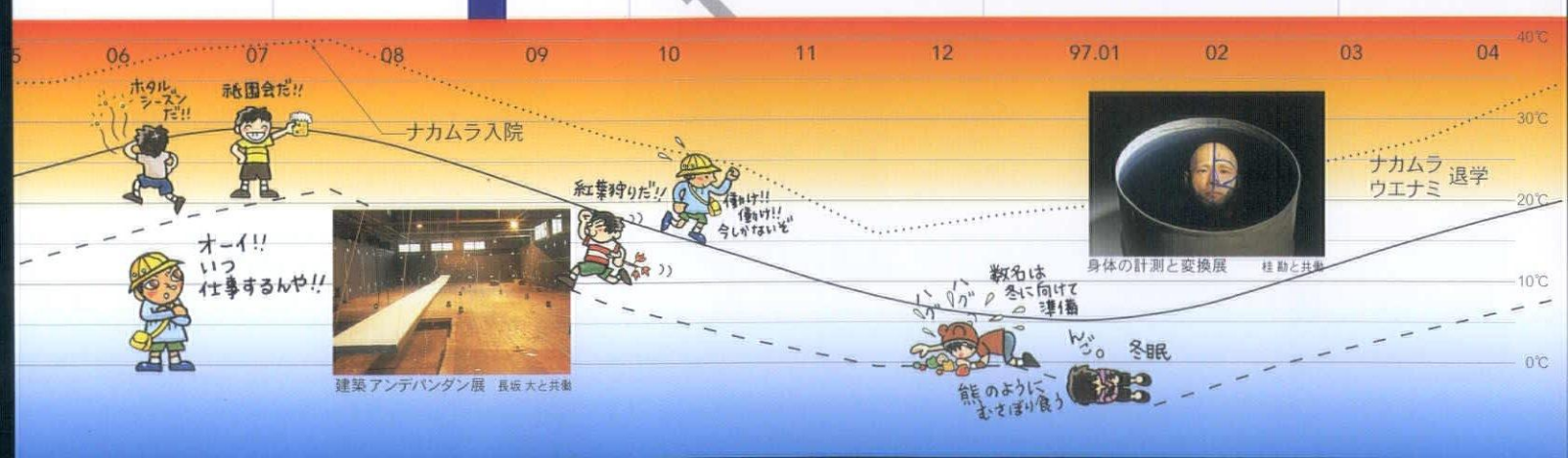
「最近読んだ本」　「京都／建築」

しょうねんB
そりゃ、「明和電機」でしょう。以前何かの記事で、社訓が「やったもんがち」というのを目にしたときは、思わず「やられた！」と叫びましたよ。おまけに活動方針が「やりにげ」だもの。
しょうねんN
建築でそんなことしたら、大枚はたいた施主が黙っちゃいない。と言いつつやってたりして。その時はそりゃもう本気で逃げるしかない。
しょうねんB
逃げたとしても、京都の外へ出たとたん、即貧血状態になる、血中京都人濃度の高い人が、若干2名ほどいるけど。少年BとKは、さっさとトンズラかまします。あとはよろしく。
しょうねんK
それは、2代目にまかすかな。

KENCHIKU-SHOWNEN UNDERGROUND

KAWAI
UENAMI
NAKAMURA
BABA

Peak hours only
Under construction
Interchange stations

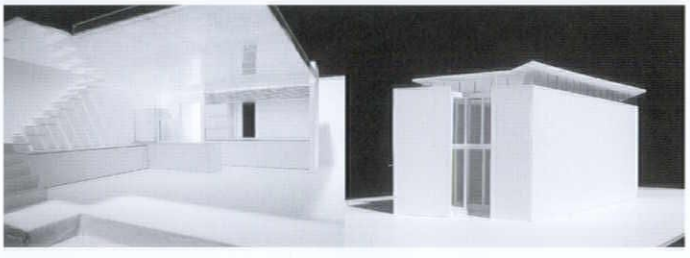


H邸

閑静な住宅街の小道に面した、若い夫婦と子供ふたりのための住居。
敷地全体を覆う連続する一枚の壁とその上に浮かぶ屋根面によって構成されている。壁は地平を切り取り、ひとつの領域を形成するが、それは内部と外部を分離し、閉じた全体をつくるのではなく、また外部に対し完全に開いて、周辺の環境に接続し、その一部となるのでもない。個々の領域は、接続／乖離を繰り返し統一されない全体を生み出している。隙間は内部の活動を外に伝え、外部の環境の変化を中に取り込むことが意識されている。

所在地：京都市北区紫野北舟岡町44-3
主要用途：専用住宅
竣工年：1998年2月

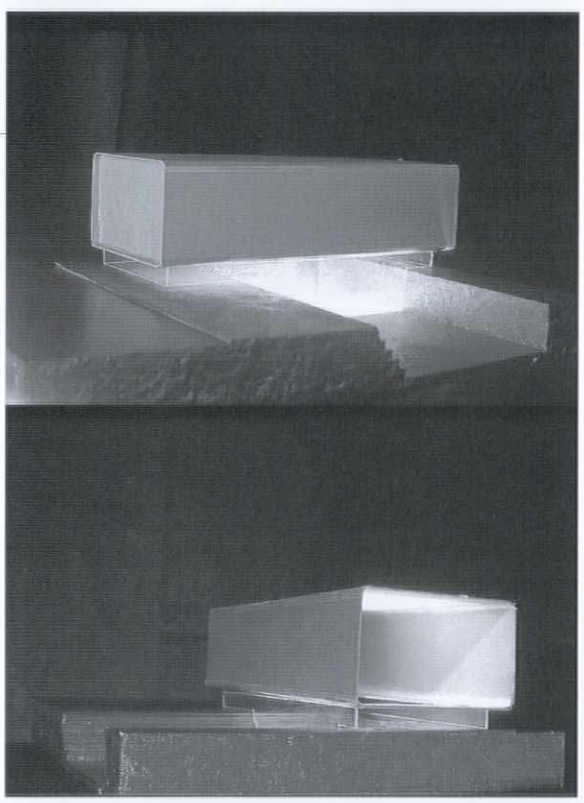


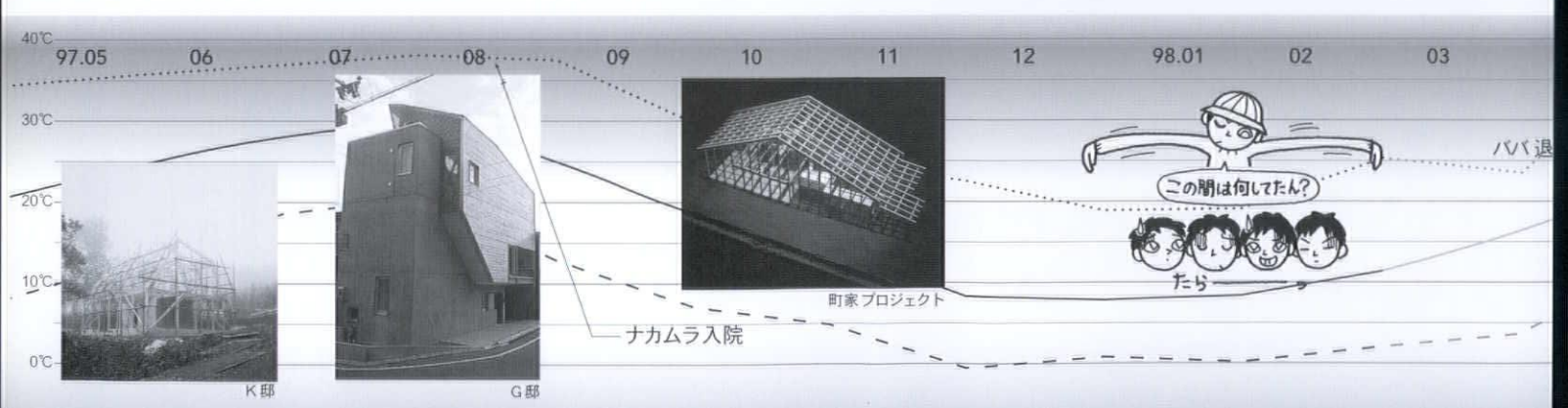


Hアトリエ

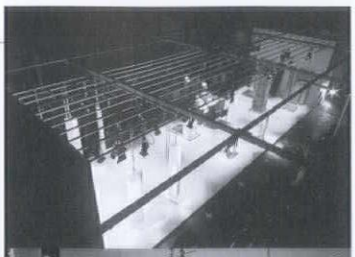
美術作家の松本泰章＋砥綿正之の友人である建築主夫婦は、共に美術教師。それに建築少年ふたりを含めた6人による共同プロジェクトである。というよりは、建築という素材をまな板の上に乗せ、「実験」をしていると言うべきかもしれない。「作り手」の持つ共通認識があるがゆえ、打合せはそれだけキビシイ。限界まで切り詰めること、既成概念を壊すこと、夢を描くこと、そしてあきらめること。そこにつくり出される刺激に満ちたプロセス。ガラスの構造壁に搭載される400kgのハニカムユニット。工業製品に要求されるスペック。格闘を余儀なくする極小空間。自動車部品を応用したエントランス。10mに及ぶ跳ね上げの大扉。それらの技術の集積が、足下から内部を鈍く照らす光や動作を視線で切り刻んだ内部空間に、どれだけ寄与することができるであろうか。70m²足らずの建築に対する6人の思い入れが、鍵を握っていることは言うまでもない。

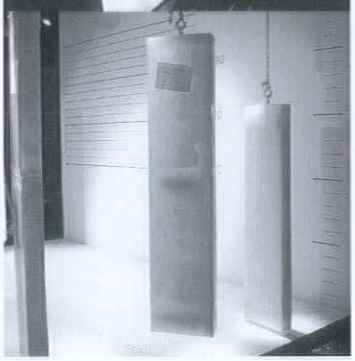
所在地：高松市
主用途：アトリエ+住居
共同設計者：平野年紀、和代（建築主）、松本泰章、砥綿正之
敷地面積：128.75m²
建築面積：45.67m²
延床面積：69.52m²
階数：2階
98年竣工予定





身体の計測と変換展





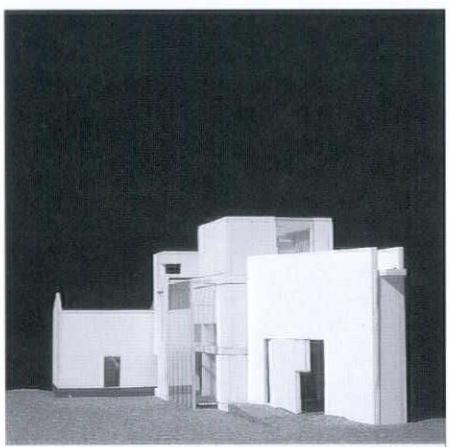


1997年3月末京都西陣の工場跡で、建築少年2人の企画により、奇妙な実験を行った。それは工場内に出現した水槽型の実験室の中では舞踏家の桂勘氏らが、自身の身体を4つの尺度（表面積／身長／体重／体積）で測定し、それと同じ値を持つ角柱のオブジェを製作、その自分自身のオブジェとの対話（?）を試みるというものである。

測定はその過程が明確にわかるよう実験室内に備え付けられた極めてローテックな測定機器によって行われ、即座に立体化のための計算が行われる。型枠製作、パラフィンワックスのキャスト、冷却、脱型を経てオブジェは完成。記号の原点が、身体を記号化する形で誕生する尺度類であるなら、最も基本的な4つの身体的指標を備えたこのオブジェは即ち各個人のメートル原器とも言うべきものとなる。

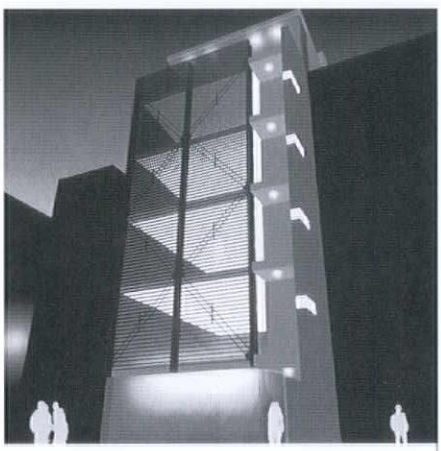
ここでは単に変換された物体だけではなく、「計測」と「変換」で発生する「作業」、自分の分身との対面までも作品として提示している。

COMMING SOON.....



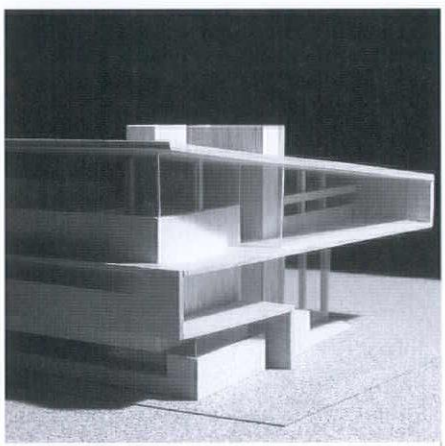
N医院デイケアセンター

所在地：京都市
主用途：医療施設（医院附属のデイケア施設）
敷地面積：592.26m²
建築面積：91.44m²（改築部分）
　　44.75m²（既存改修部分）
延床面積：199.26m²（改築部分）
　　44.75m²（既存改修部分）
階数：3階
主構造：RC造
99年竣工予定



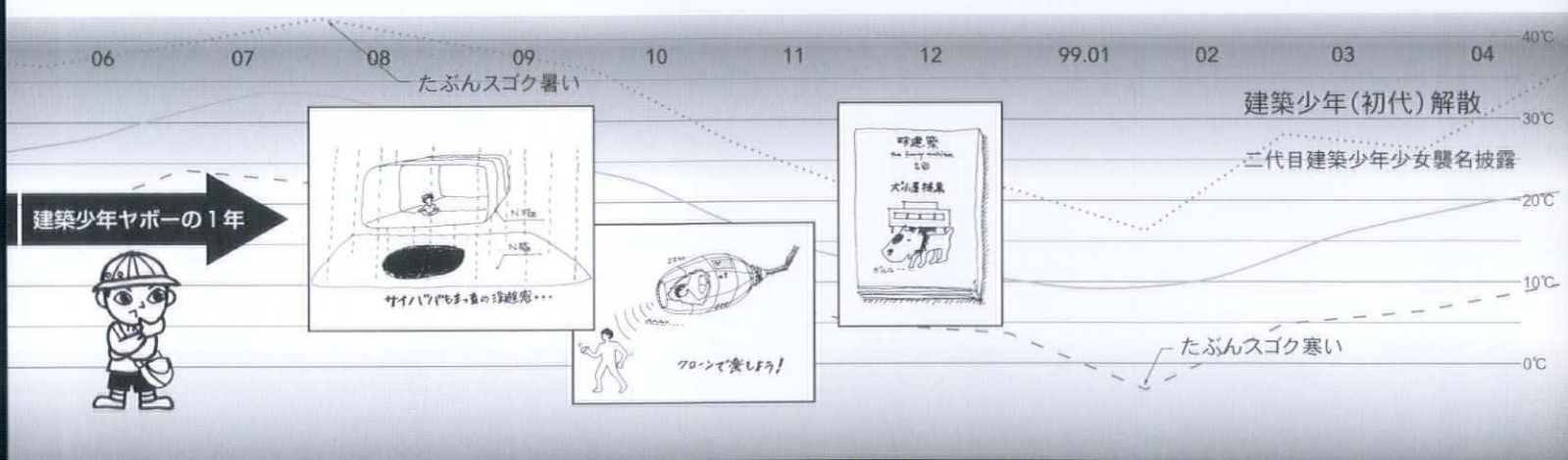
Kビルディング

所在地：大阪市
主用途：オフィスビル
敷地面積：122.45m²
建築面積：95.37m²
延床面積：481.77m²
階数：7階
主構造：RC造
98年竣工予定



K病院

所在地：北九州市
主用途：病院管理棟（増築）
敷地面積：2617.97㎡
建築面積：374.56㎡
延床面積：938.33㎡
階数：3階
主構造：RC造



今回の企画は、集団設計者としての自分たちの通時的／共時的なロケーションを探るよい機会となりました。そこで作品の紹介もさることながら、その過程で見えてきたふたつの特徴を軸に、誌面を構成しようと努めました。ただ、これは我々の現状であって、確定的な像ではありません。我々の活動はむしろ連続した実験の様なものですから、ここに盛り込まれたアイデアも、今後の活動の中で変質変容を続けると思います。

その1　　期間限定付きユニット

集団設計という形態は、ある種の開放的な形式として、魅力的に映ります。我々にとっても、この形態をとることは自然ともいえる選択でした。しかし同時に、どこか完全な信頼を持ちきれない意識もあったのです。開放的な形式だとしても、時間の経過によって、その開放性を逆に奪い去るベクトルとして働くのではなかろうか？また、それがぬるま湯的慣れ合いを生じさせる原因となるのではないか？etc。当初から何十年も継続するパートナーシップなどという幻想はありませんでしたし、頭から決め込んでも、それが、うまく機能していかないことは、容易に予測できました。特に我々が問題にしていた点のひとつが、いかに精神衛生が良い状態で活動するかということでした。窒息状態に陥ることになれば、後味の悪い解散をする結果にもなりかねません。それを回避するため、我々なりに危機管理の方法として出した結論が、解散を逆手にとることでした。つまり、限定すること＝解散日を予め設定することです。そうすれば、これを区切りとして、期間ごとに仕切直しをしながら、組織をダイナミックに変革できる－と考えたわけです。しかも、遠い将来への漠然とした思いをとりあえず先送りし、当面の解散期日に向かって、より近い将来に対する具体的なものへと自分たちを走らせる役割を果たすとも考えました。言い換えれば、人的組織の編成が時間的にダイナミックなものであることを、顕在化させたのです。こうして時間を限定することで、4人で何が出来るかという「実験」を数多く行う意識を持てるようになりました。4年でできることを常に意識していなければ、時間はいたづらに過ぎゆくばかりです。「とりあえず、走れるだけ走ろうよ」そうした気になれたわけです。

その2　　ダイアローグの集積場

今回、プロジェクトの整理等を行う中で、改めて気付いたことに、ふたりの担当者で行ったプロジェクトが非常に多いことです。しかもその組合せはバラバラです。プロジェクトの担当は、基本的にやりたい者が手を挙げる形をとっているので、担当者の人数はひとりから4人までバラバラに散らばっても良いはずです。しかしながら実際は、4人もしくは3人でやったプロジェクトは極めて少ないのです。これは、解散の設定とは違って、当初から意図していたわけではありません。振り返って考えてみると、当初の開放系のグループ設計形態の踏襲から始まり、個人事務所への分割解消の危機を通して、その問題点や限界を実感しながら、直感的な選択をしていった結果なのだと思います。グループを主体とした集団は、個人の消去＝客観性の追求ゆえに、実は集団の外部を想定し、開放性に対する野放図な信頼を前提とした境界線を引くことになります。その境界線は、外部と内部の2項対立を生み、集団の持つ力を誇示することになります。結果として、それは外部にネットワークが拡張するのではなく、内部にヒエラルキーを創り出してしまう危険性をはらんでいます。またその対局として、個人を主体とした、弱いつながりを持った集団も考えられます。共通のバックグラウンドや認識が、そのネットワークを支えるわけですが、全てが共有できるわけではありません。異なる見解を戦わせないがために、都合の良いときだけのコミュニケーションになりやすいのです。それでは、個人事務所と変わりません。集まることのメリットをうまく引き出す仕組みはないものか、そんな試行錯誤の中で、あくまでも時代の空気の中で、生理的かつ直感的な選択として定着しつつあるのが、ふたりの組合せによるダイアローグという一見閉鎖的な形式を用いながら、それを組み合わせることで、組織全体としては、ある種の開放性を確保する手法なのです。つまり、厳密な線引きや枠組みの設定が自由を生み出すという、ものづくりに於いては古典的な手法を、コミュニケーションスタイルにまで援用したわけです。この開放性を与えるための限定、すなわちダイアローグという閉鎖的な枠組みの中に、強制的なコミュニケーションの先にある相乗効果と、外部への能動的な指向性を保つ可能性を期待している気がします。固有性への収斂ではなく、より多くの断面の産出を意図した結果、ダイアローグの集積していく場所として、今は建築少年を考えています。

個人の消去でもなく、個人への指向でもなく

K

河井敏明
1967 兵庫生まれ
1986 私立甲陽学院高校卒業
1991 京都大学工学部建築学科卒業
1993 京都大学大学院修士課程修了
1994～95 Architectural Association (London)在籍
1995 阪神震災により帰国
著名な建築家が13年周期で多く生まれるという「建築家13年周期説」のあたり年である1967年生まれの河井敏明。だけど、職業は釣り人。-N



植南草一郎
1966 京都生まれ
1985 京都教育大学教育学部附属高校卒業
1992 京都大学工学部建築学科卒業
1994 京都大学大学院修士課程修了
1997 京都大学大学院博士課程単位取得退学
京都先斗町すきやき『いろは』若主人。
京の老舗にあって、植南は、伝統の味を受け継ぎながら、素材の色彩を駆使するその華麗な盛りつけから、「すきやき界のドラクロア」と称されている。-K



U

N

中村潔
1968 京都生まれ
1987 私立洛南高校卒業
1992 京都大学工学部建築学科卒業
1994 京都大学大学院修士課程修了
1997 京都大学大学院博士課程単位取得退学
京都山科若宮八幡宮　神官
「神社の跡継、お祓いはお手のもの。地鎮祭・設計・上棟式一貫で丸儲け。ムカつく奴には大麻（おおぬさ）片手に、一振り二振り……」-B



馬場徹
1968 横浜生まれ
1987 神奈川県立光陵高校卒業
1993 京都大学工学部建築学科卒業
1995 京都大学大学院修士課程修了
1998 京都大学大学院博士課程単位取得退学
「彼の明せきにして理性にあふれる頭脳は、その極度に快楽的な肉体との分離に日々悩む。ソウとウツ、ONとOFF、0と1との状態が極端に異なるデジタリアン。29歳。」-U



B

レイアウト／鏡敏彦　　イラスト／十代亜矢子



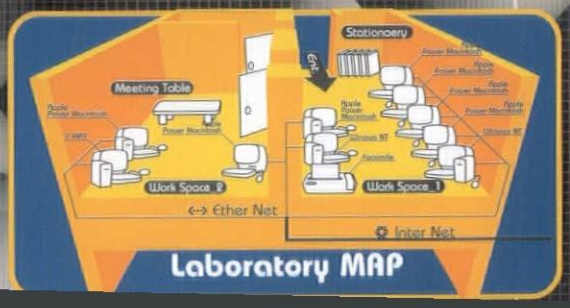




パラボリック・ラボラトリ

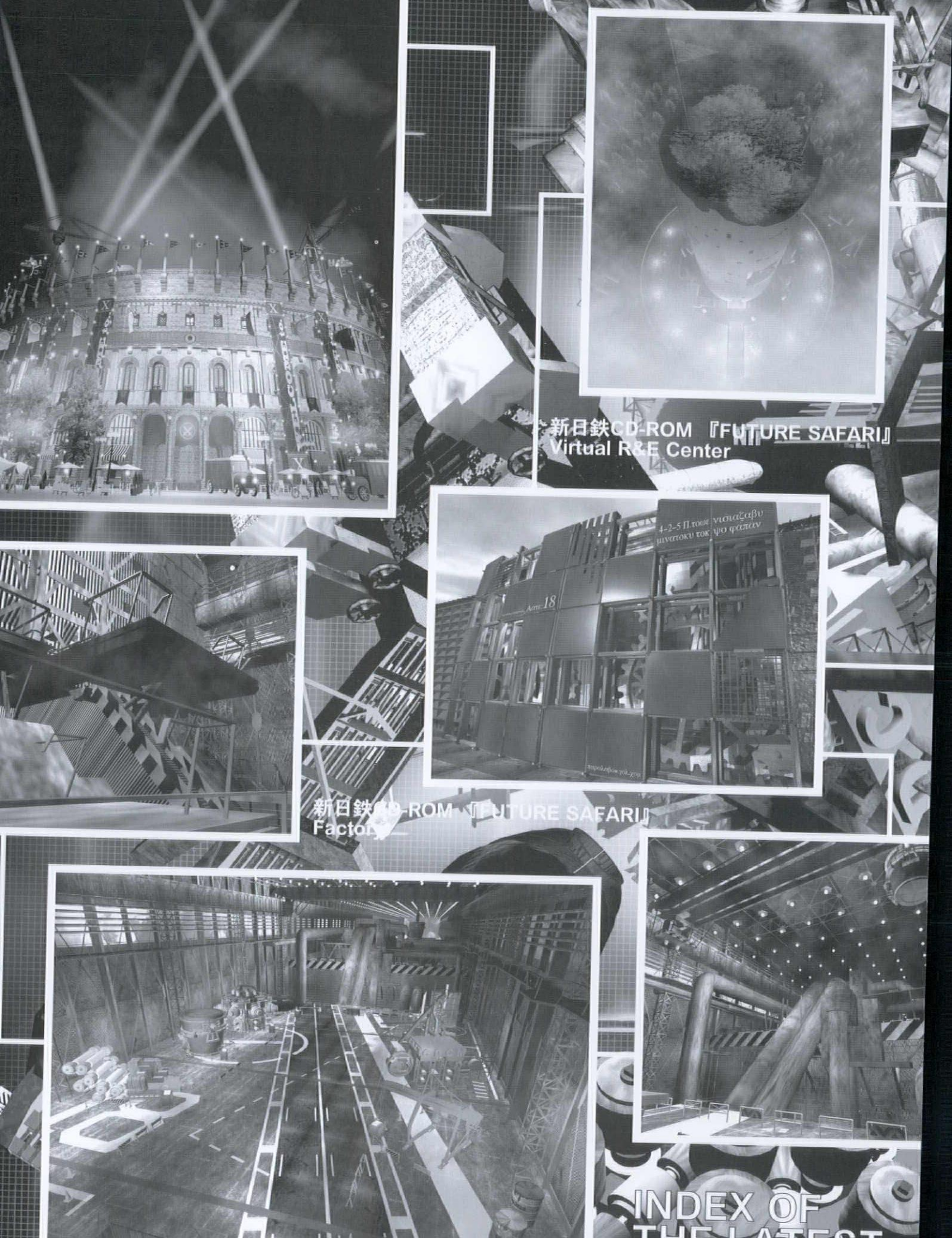
Parabolic Laboratory

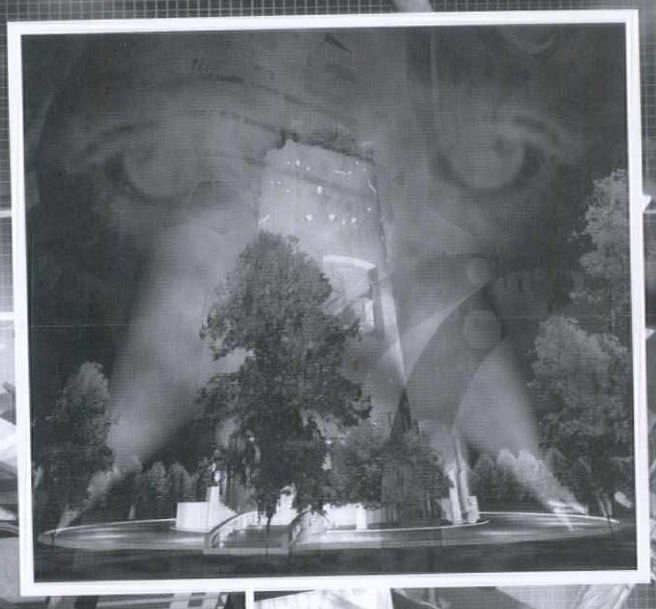
学生時代の興味の延長がそのまま現在のアトリエになったのが、パラボリック・ラボラトリである。主な仕事は、ホームページのデザイン、CD-ROMの製作、景観シミュレーション、CM製作、映像製作、エディトリアル・デザイン等の視覚映像全般に及ぶが、同時に一級建築士事務所としての顔も合わせ持つ。主宰者である末野宏行の、時代の流れを敏感に感じとる「野性的本能」とでも呼ぶべき才能によって、「今、何が一番新しく、かつビジネスとして成立するのか」を瞬時に感じとり、幅広い内容の仕事を効率よくこなしている。西麻布のマンションの一室にあるアトリエには静かにBGMが流れ、すべての業務をコンピュータ上で行っているせいか、ここで様々な仕事がフル回転で行われているのが信じられないほどとてもきれいで整然としている。「必要なのはコンピュータについての技術、知識ではなくその人の持つ感性と情熱」と末野は語る。実際、彼らの作品はすべてコンピュータによるCG画にもかかわらず、シュールレアリズムの絵画のように心の奥底に訴えかけてくる「何か」があり、ある種の郷愁を感じずにはいられない。「コンピュータ＝バーチャル」といった古典的な図式は少なくとも彼らの作品には存在しない。ものごとの存在価値が希薄で空虚な現実の世界よりも、彼らの創り出す世界のほうがはるかに官能的であり、そしてどこか懐かしいのである。





所在地：〒106-0031
東京都港区西麻布4-10-3ヴィラ麻布302
Tel：03-5485-8085　Fax：03-5485-8086
E-mail：paralab@gol.com
ホームページ：http://www.tradepia.or.jp/paralab
スタッフの数：7名
活動内容：都市計画、建築、インテリア、オブジェ、グラフィック等マクロからミクロのレベルの可視化をおこなう視角映像制作集団。CM制作、CD-ROM制作、バビリオン映像制作、ゲームソフト制作、建築景観シミュレーション、都市景観シミュレーション、土木景観シミュレーション、雑誌編集、広告制作、脚本等が主な活動範囲。


新日鉄CD-ROM 『FUTURE SAFARI』
Virtual R&E Center
新日鉄CD-ROM 『FUTURE SAFARI』
Factory
INDEX OF
THE LATEST





DREAM PICTURES STUDIO 広告







CD-ROM MAGAZINE 『CURIO CITY』



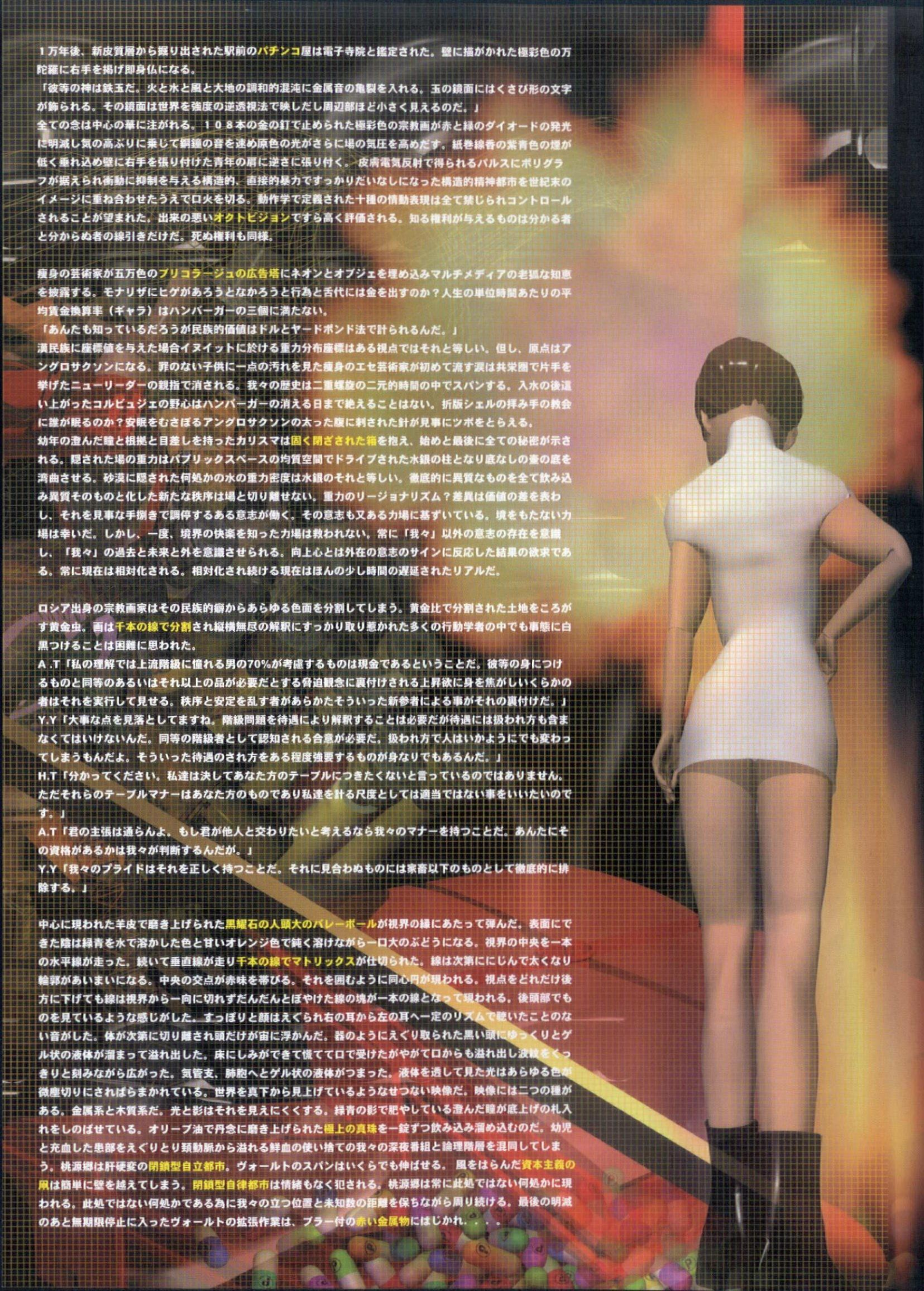
Parabolic Laboratory

パラノイド=クリティカル・メソッド
偏執症的批判方法による空間構築

文節的に分解された物体の再統辞化を、混乱を封印させたうえで再上映させる手段は、個々の物神の持つ磁場を検討しながら行わなければ失敗に終わる。空間をおこす効率的かつ、最終的手段のいくつかは、再現、追記の不可能な混乱の組織化を手段とするもののなかに見い出せる。ここに挙げる空間生成方法は、混乱を剥き出しのままに凍結させたテクストとその挿絵という関係のなかに空間を発生させる古典的手法を使ったものだ。通常、空間が発生すると同時にテクストは剥ぎ取られ封印されることになるが、ここでは放置させたままの着衣状態での埋葬を行った。また、テクストのバイアスによって、発生する空間の歪極度が変化することは当然ありえる。また、幾つかの処方を服用することで混乱を加速化させることも可能だが経験的にはあまりお勧めしない。非組織化した混乱による生成作業は大皿にぶちまけたサイコロの目を数える作業に等しい。遊びではなくプレイを希望の方に限って問題はない。また、封印されたテクストに墓碑以上の意味を見い出す必要はない。墓石は屈葬された者の胸の上に置かれた重石の名残だ。十分な重さがなければまた這い上がってくる。封印のための呪文とイコンが刻まれて死を確認する。ホフマン方式で弾き出された人命価値はその換算表で重量変換し墓石重量から控除することである程度の(ほとんどあり得ないことだが)再生の可能性が与えられる。クラスター分析で正相関が認められた二つの性に関しては地勢と方位を慎重に考慮した後適当な配置が与えられる。重金属を含んだ皮膚をもつ遺体が五万分の一の割合で発見されたが、ほとんどの場合すでに丁寧にはがされていて、それはその後さらに薄く各層へと分けられ角膜の表面へ張り込むための移植素材として使われた。そうやって移植された目を持つとある種の能力が得られるのだ。

視界が薄く緑青色に染まり真鍮ベッドの手摺りの照り返りが表面から浮き出す。乳白色のねっとりとした涙が微かに緑に染まりドーム型のそれを厚さ三米のコンクリート壁で造られた箱の中で寝かせること一年、やがて見事な結晶となり上空で削裂。スタッド（種馬）式の円筒型の弾頭が次々と落下過程でクローン化され、そのうち一頭がさらに種馬となる。燃え尽きかけた鉄片を筒型銅器で叩き耳をふさぐ。すると辺り一面に結界を張り巡らせた金属音が風景に青色のフィルターを掛けた。あらゆる物に張り付いた単語がポンチ画の三つの座標に固定され正常な頻度相関図を打ち出した。背景では隈雑な都市の影を秩序の光で照らしだしてはにかんだ表情が大きくなる。唐草亀の甲羅をバーナーで割り引きずりだした頭につながれたコイルの電極をコンデンサーで一気に弾け飛んで首を振る。壁の見切り線に合わせてデ・ニーロの笑顔でカットアップ。セント クリステバル デ ラス カサスのソカロ裏、大理の畔道のほこりっぽい人民兵をゆっくりと傾ける。

視界のバレーボールをゆっくりと傾けて、中央に戻した。リズムが僅かに崩れだしたが余り気にならない。失語症の苛立ちで窮屈になる。ベッドの水が背をゆっくりと舐め踵を撥ね上げる。正弦波のリズムがオーバーラップする。オフビートでハイハットが刻まれてオンで音が揺れる。バレーボールの後ろからアナログフィードバックされた干渉波の映像がリズムにスナップする。画素と音素の区別が不確定になりマゼンタ系の色味を帯びて全てがデジタル化されスクラップされた言語がそれぞれのビットに貼り付き期待された終末感も世紀末の喧騒でスクラップ。意識に干渉されながら自律的に形を整えだした夢の語り口を確かめながら左で回り続ける黒曜石にスナップ。情報は一箇所に溜め込まれ封印され、封印されることだけが情報の全てになる。塗込められた接着剤。思考している状態を思考しながらぼんやりと思考していることを感じた。脳がある波に乗って思考しているのが解かった。とてつもなく長い波長で、微分化すると正しく正弦波を刻む波に乗って彼方まで運ばれる。一瞬のうちに現在が過去になり過去が現在と混ざって溶け始める。混ざり合った時間は飴状に延びだしてカウンターの上のゲル状の波紋はさらに床まで延び然せられた絨毯に染み込む。タイムキーパーの時計の針は薄く水平に延び始め文字版を覆い尽くす。高圧線の張り巡らされた塀を潜り抜けて銀のスプーンを手にした少女が肝硬変の崩壊型自律都市に逃げ込む。全ての時が結界された空間の中を周り続け一滴も外に漏れることはない。崩る事を止めた自律型都市は混沌へと消え去る。膨大な数の難民を抱え込み四方へ混ざり始める。結界の残骸が薄く表面に貼り付き百科辞書的文字情報もマッピングされたポリゴンの数の比例値で加速的に上昇し始める。明滅するダイオードが幾何学的なパターンを瞼に描き出してやがて一定のリズムを刻みだす。干渉波が二重螺線に貼り付き中心に向けて交互に明滅。僅かに水平方向に膨らみながらさらに中心へと落ち込む。棒状の強度にパースを付けられた赤い金属物がモーションブラーを残しながら急回転。左の黒曜石が鈍く緑に輝きハイライトが焦点を結ばず乱反射する。バレーボールは赤い金属棒に弾かれピンボールマシーン。解体される銭湯のタイルが白く浮きだし鏡に反射。足場で覆われた煙突をノミで崩していく人夫が中をのぞき込むと色のない黒で眩暈がする。流暢な弁護士に守られて笑顔を絶やさない市民が安全靴の爪先で鼻の穴を穿り上げる。

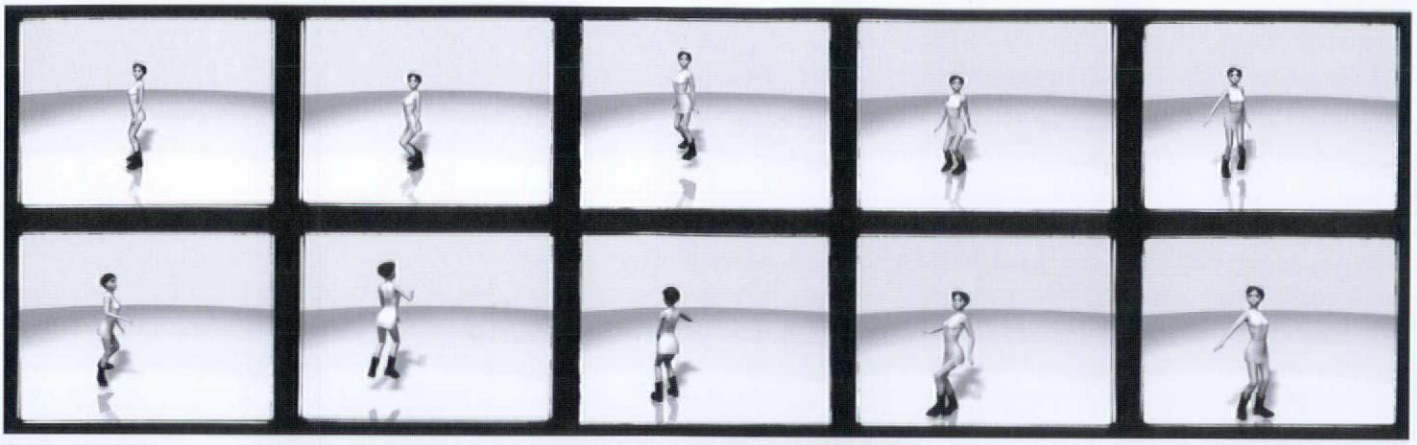


１万年後、新皮質層から掘り出された駅前のパチンコ屋は電子寺院と鑑定された。壁に描かれた極彩色の万陀羅に右手を掲げ即身仏になる。
「彼等の神は鉄玉だ。火と水と風と大地の調和的混沌に金属音の亀裂を入れる。玉の鏡面にはくさび形の文字が飾られる。その鏡面は世界を強度の逆透視法で映しだし周辺部ほど小さく見えるのだ。」
全ての念は中心の華に注がれる。１０８本の金の釘で止められた極彩色の宗教画が赤と緑のダイオードの発光に明滅し気の高ぶりに乗じて銅鐘の音を速め原色の光がさらに場の気圧を高めだす。紙巻線香の紫青色の煙が低く垂れ込め壁に右手を張り付けた青年の肩に逆さに張り付く。皮膚電気反射で得られるパルスにポリグラフが据えられ衝動に抑制を与える構造的、直接的暴力ですっかりだいなしになった構造的精神都市を世紀末のイメージに重ね合わせたうえで口火を切る。動作学で定義された十種の情動表現は全て禁じられコントロールされることが望まれた。出来の悪いオクトビジョンですら高く評価される。知る権利が与えるものは分かる者と分からぬ者の線引きだけだ。死ぬ権利も同様。

痩身の芸術家が五万色のブリコラージュの広告塔にネオンとオブジェを埋め込みマルチメディアの老獪な知恵を披露する。モナリザにヒゲがあろうとなかろうと行為と舌代には金を出すのか？人生の単位時間あたりの平均賃金換算率（ギャラ）はハンバーガーの三個に満たない。
「あんたも知っているだろうが民族的価値はドルとヤードポンド法で計られるんだ。」
漢民族に座標値を与えた場合イヌイットに於ける重力分布座標はある視点ではそれと等しい。但し、原点はアングロサクソンになる。罪のない子供に一点の汚れを見た痩身のエセ芸術家が初めて流す涙は共栄圏で片手を挙げたニューリーダーの親指で消される。我々の歴史は二重螺旋の二元的時間の中でスパンする。入水の後這い上がったコルビュジェの野心はハンバーガーの消える日まで絶えることはない。折版シェルの拝み手の教会に誰が眠るのか？安眠をむさぼるアングロサクソンの太った腹に刺された針が見事にツボをとらえる。
幼年の澄んだ瞳と根拠と目差しを持ったカリスマは固く閉ざされた箱を抱え、始めと最後に全ての秘密が示される。隠された場の重力はパブリックスペースの均質空間でドライブされた水銀の柱となり底なしの壷の底を湾曲させる。砂漠に隠された何処かの水の重力密度は水銀のそれと等しい。徹底的に異質なものを全て飲み込み異質そのものと化した新たな秩序は場と切り離せない。重力のリージョナリズム？差異は価値の差を表わし、それを見事な手捌きで調停するある意志が働く。その意志も又ある力場に基ずいている。境をもたない力場は幸いだ。しかし、一度、境界の快楽を知った力場は救われない。常に「我々」以外の意志の存在を意識し、「我々」の過去と未来と外を意識させられる。向上心とは外在の意志のサインに反応した結果の欲求である。常に現在は相対化される。相対化され続ける現在はほんの少し時間の遅延されたリアルだ。

ロシア出身の宗教画家はその民族的癖からあらゆる色面を分割してしまう。黄金比で分割された土地をころがす黄金虫。画は千本の線で分割され縦横無尽の解釈にすっかり取り惹かれた多くの行動学者の中でも事態に白黒つけることは困難に思われた。
A.T「私の理解では上流階級に憧れる男の70%が考慮するものは現金であるということだ。彼等の身につけるものと同等のあるいはそれ以上の品が必要だとする貧迫観念に裏付けされる上昇欲に身を焦がしいくらかの者はそれを実行して見せる。秩序と安定を乱す者があらかたそういった新参者による事がそれの裏付けだ。」
Y.Y「大事な点を見落としてますね。階級問題を待遇により解釈することは必要だが待遇には扱われ方も含まなくてはいけないんだ。同等の階級者として認知される合意が必要だ。扱われ方で人はいかようにでも変わってしまうもんだよ。そういった待遇のされ方をある程度強要するものが身なりでもあるんだ。」
H.T「分かってください。私達は決してあなた方のテーブルにつきたくないと言っているのではありません。ただそれらのテーブルマナーはあなた方のものであり私達を計る尺度としては適当ではない事をいいたいのです。」
A.T「君の主張は通らんよ。もし君が他人と交わりたいと考えるなら我々のマナーを持つことだ。あんたにその資格があるかは我々が判断するんだが。」
Y.Y「我々のプライドはそれを正しく持つことだ。それに見合わぬものには家畜以下のものとして徹底的に排除する。」

中心に現われた羊皮で磨き上げられた黒曜石の人頭大のバレーボールが視界の縁にあたって弾んだ。表面にできた陰は緑青を水で溶かした色と甘いオレンジ色で鈍く溶けながら一口大のぶどうになる。視界の中央を一本の水平線が走った。続いて垂直線が走り千本の線でマトリックスが仕切られた。線は次第ににじんで太くなり輪郭があいまいになる。中央の交点が赤味を帯びる。それを囲むように同心円が現われる。視点をどれだけ後方に下げても線は視界から一向に切れずだんだんとぼやけた線の塊が一本の線となって現われる。後頭部でものを見ているような感じがした。すっぽりと顔はえぐられ右の耳から左の耳へ一定のリズムで聴いたことのない音がした。体が次第に切り離され頭だけが宙に浮かんだ。器のようにえぐり取られた黒い頭にゆっくりとゲル状の液体が溜まって溢れ出した。床にしみができて慌てて口で受けたがやがて口からも溢れ出し波紋をくっきりと刻みながら広がった。気管支、肺胞へとゲル状の液体がつまった。液体を透して見た光はあらゆる色が微塵切りにさればらまかれている。世界を真下から見上げているようなせつない映像だ。映像には二つの種がある。金属系と木質系だ。光と影はそれを見えにくくする。緑青の影で肥やしている澄んだ瞳が底上げの札入れをしのばせている。オリーブ油で丹念に磨き上げられた極上の真珠を一錠ずつ飲み込み溜め込むのだ。幼児と充血した患部をえぐりとり頚動脈から溢れる鮮血の使い捨ての我々の深夜番組と論理階層を混同してしまう。桃源郷は肝硬変の閉鎖型自立都市。ヴォールトのスパンはいくらでも伸ばせる。風をはらんだ資本主義の風は簡単に壁を越えてしまう。閉鎖型自律都市は情緒もなく犯される。桃源郷は常に此処ではない何処かに現われる。此処ではない何処かである為に我々の立つ位置と未知数の距離を保ちながら周り続ける。最後の明滅のあと無期限停止に入ったヴォールトの拡張作業は、ブラー付の赤い金属物にはじかれ．．．





末野宏行（すえの・ひろゆき）
年武蔵野美術大学造形学部建築学科大学院卒。武蔵野美術大学造形学部映像学科研究室を経て、年PARABOLIC LABORATORY設立。PARABOLIC LABORATORY Inc. 代表取締役。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
ネットと雑誌と記憶と偶然（偶然とは、コンピュータのバグが発生させるハプニングや操作ミスによる意外な発見及び制作過程で副産物的にあらわれるアイディア）
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
特にありません
●よく読む雑誌は何ですか
TokyoWalker、THE FACE」、UK CLUB GUIDE
●よく聴く音楽は何ですか
特にありませんが、LOUNGE LIZARDSは好んで聞きます。
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
「BOMBAY cafe」「328」「CT」「MONSOON CAFE」
すべて西麻布
●オススメホームページを教えて下さい
内容はよく分からないのですが... 徹底的にCOOL！
http://www.jodi.org/
●今ハマっているものは何ですか
RIVEN（MYSTの続編）但し'97年12月28日現在
●好きな洋服のブランドは何ですか
特にありません
●今の職業を選んだ動機は何ですか
実は動機らしきものはなくて、興味があることを手あたりしだいやっていたら、こうなっていました。今後も同じスタイルです。
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
いろいろありますが、一番の理由はひとりよりも楽しいからです。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
最近、建築関連の雑誌を見ていないのでいまひとつわからないのですが、街中を見ているかぎりではあまり潮流は感じられません。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
新たなモードやイズムが発見されるとはあまり思えませんが、消費者レベルではザッハリッヒな考え方に基づいたテイストではないかと思います。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
私の活動は、時代がどのような方向に進むかに密接に関わっています。グラフィックと音とTEXTによる表現というスタイル自体が変わることはまずないでしょうが、表現内容は常に意識的に変化させていきます。どう変わるにしても、時代の刺激的な現場に立ち合いたいものだと思っています。
●今の時代を一言で表して下さい
ごめんなさい。質問が難しすぎます。

主な活動
◇大成建設　西海橋コラソンホテル景観シミュレーション
（PIXEL:日本CGグランプリ静止画部門、産業部門優秀賞受賞）
◇和歌山リゾート博覧会和歌山市パビリオン立体視映像
◇三井物産　ピースオンデマンド共同出版CD-ROMマガジン「キュリオシティ」
創刊　都市制作　（日経流通新聞95年度最優秀賞受賞）
◇SONY インターネット サイバーシティ Hara Museum ARC VRML 制作
◇SONY/原美術館共同プロジェクト　インターネットバーチャルミュージアム
アートデータベース及びVRMLホームページ制作
◇「キュリオシティ」新都市制作（コロッセウムバージョン）
◇横須賀塩入マンション景観シミュレーション制作
◇韓国釜山　壜安大橋景観シミュレーション制作
◇霧島山荘基本設計
◇NTT　PC雑誌PASO添付CD-ROM　ISDN CAFE制作
◇IBM　エンプロイメント　ホームページ制作
◇NIFTY-Serve NIFTY Hyper Shopping　ホームページ制作
◇NIFTY-Serve メインホームページ制作
◇朝霞市商工会ホームページ制作
◇MALAYSIA multimedhia corridor　ホームページ及びスクリーンセーバー制作
◇P' PARCO TV-CM ロゴ制作
◇NTT TV-CM CG制作
◇新日鉄CD-ROM「FUTURE SAFARI」制作
◇Recruit ホームページ　ムービー制作
◇DREAM PICTURES STUDIO 広告制作
◇自衛隊装備年鑑CD-ROM制作
◇ENGLISH edutainment CD-ROM「Pictory」制作
◇新日鉄エンプロイメント　ホームページ制作
◇ICS　カレッジ　オブ　アーツ　ホームページ制作
◇奥菜　恵　ニューアルバムCD-EXTRA制作







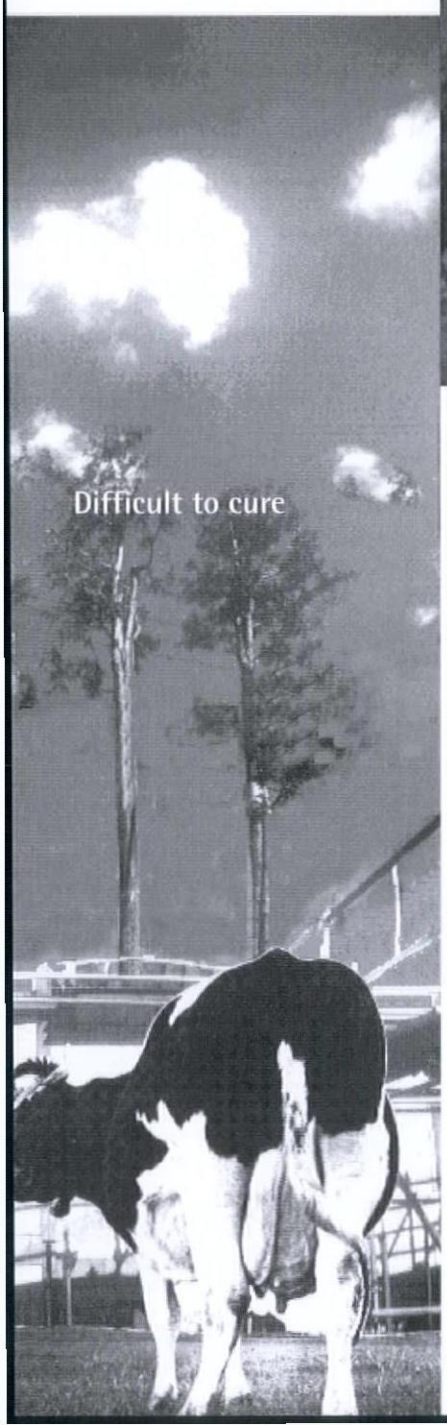


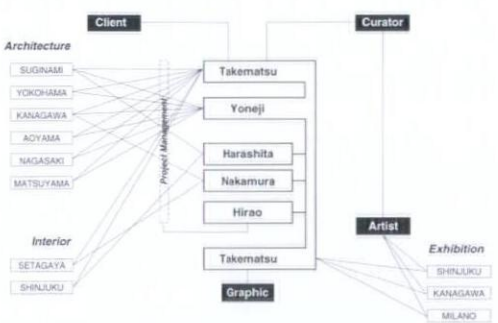
EPA 環境変換装置建築研究所

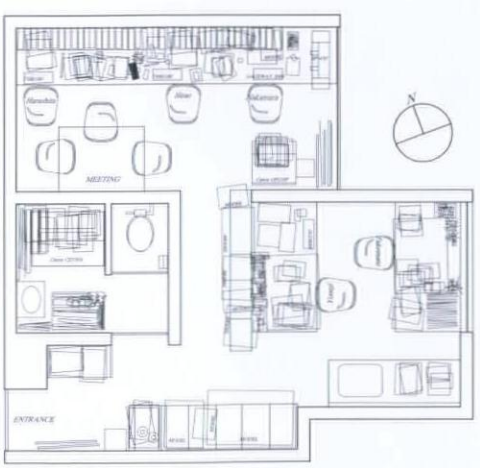
Environment Protection Architectural Institute



「建築そして住宅は、肉体と精神の宿る地球環境の再生機能を持つ生物学的装置、つまり自然界の生態系に属する生物と同じ効果を持つ存在として再認識される必要があり、人間のためでなく、人間の住む地球環境のための新たな機能を持たせるべきであると思う」EPAの主催者である武松氏の言葉だ。それは昨今のムーブメントとしての環境問題や、テクノロジーによって半ば強引に環境をコントロールする偽りのエコロジーではない。カオス化した環境の中から数少ない秩序を見つけ出し、建築をつくることによってもう一度環境を再生しようとする真摯な態度が、彼の言動や作品には絶えず表れている。アトリエのシンボルマークである牛は、農耕生活による自給自足のユートピア的社会や、反芻機能としてのリサイクル行為などを暗示している。EPAの作品は最終的にすべて環境に還元される。住宅設計は周辺環境の再生のために、そしてそれを包み込む都市環境のために。ギャラリーのインスタレーションは、美術館のあり方を問い直すきっかけとして、また真に文化的価値のある社会環境を実現するための小さな一歩として。武松氏は言う。「我々が残していかなければならないものは環境であり、歴史を創り、考え出すための場である。消費してはならない。持続し、受け継がせることである。恐怖を抱き続けることである。二度と、欲望としての恐怖の光を見ないためにも」と。







事務所平面図

所在地：〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町10-5 ビラニューセンチュリー602号
Tel：03-3770-2761 Fax：03-3770-2762
アトリエ結成年：1991年
スタッフの数：5名
活動内容：建築設計、内装設計、地域開発、美術展会場構成、アーチストとのコラボレーションによるプロジェクト、家具開発



[BIG LIGHT]

The light broke at 11:02 a.m. on August 9, 1945. Dropped from 9,600 meters, it turned to light at 503 meters above ground. The atomic bomb fell on Nagasaki.

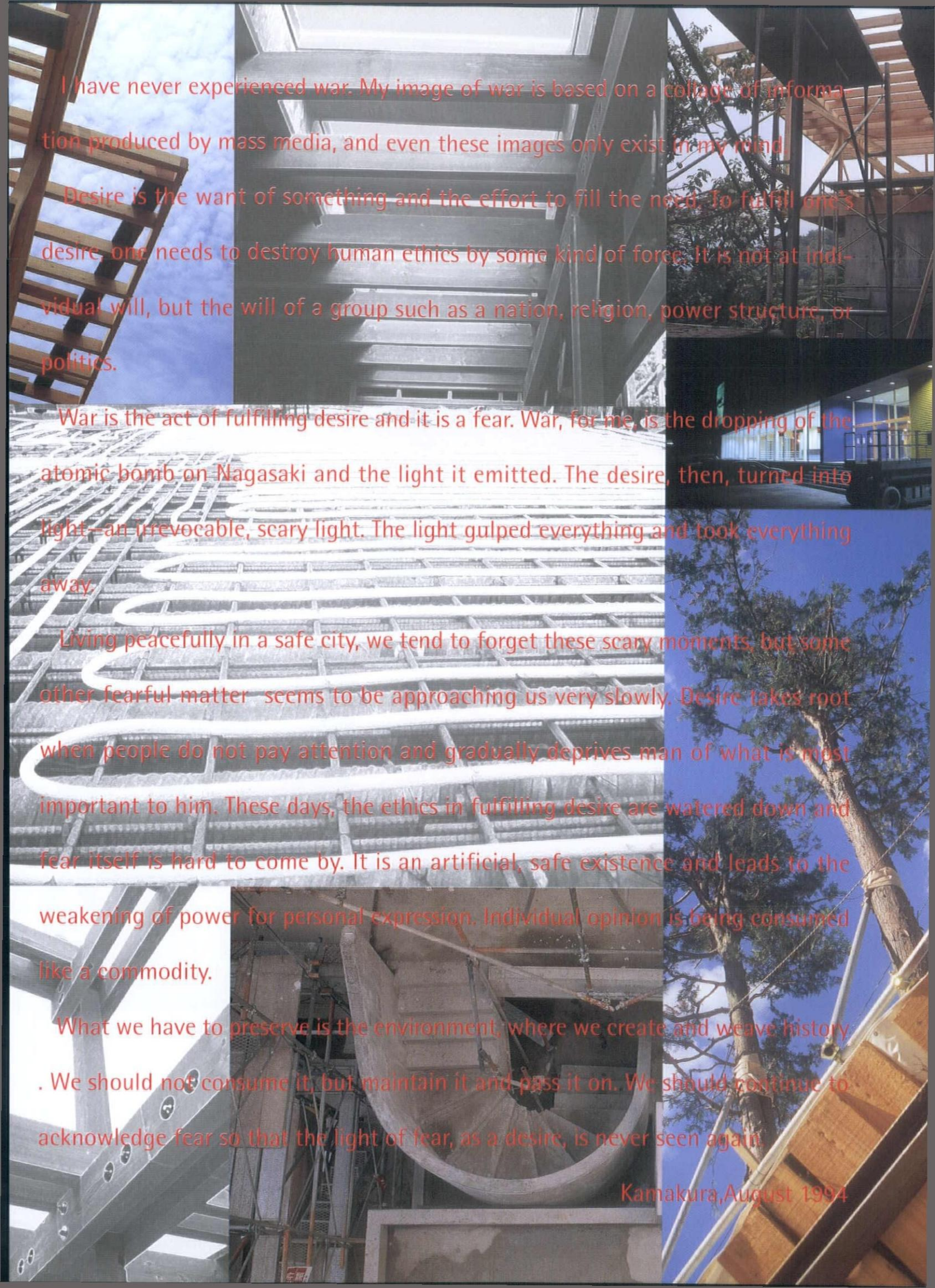
My mother saw the southwest sky burn bright.

Eighteen years later, in 1963, I was born and brought up in Nagasaki. When I heard wartime stories in my childhood, the atomic bomb was never skipped. Light, bursting wind, heat wave, rain... It was beyond my imagination, but remember simulating scenes clearly in my mind whenever I heard the stories.

Desert of desires. The words remind me of my childhood memories of what Nagasaki must have been like the instant the atomic bomb exploded.

My memory is only a simulation of the unclear rays which my mother saw—eye-piercing bright light enveloping everything, and slowly melting the outlines of every form. Each form turns into black spots. Only the white light remains in the end. Then with the same gradual speed, the light resumes time and diminishes its intensity to a slight mist. In the next moment, the earth—now a desert obliterated of all forms by the heat of the aftermath—appears.

It is an image without morality. This image may be similar to that of a CNN newscaster who described the Gulf War Scud missiles' flash of light in the night sky as "beautiful." Once ethics come into play, however, the initial response is no longer forgivable. It turns into fear toward the irreparable damage.



I have never experienced war. My image of war is based on a collage of information produced by mass media, and even these images only exist in my mind.

Desire is the want of something and the effort to fill the need. To fulfill one's desire, one needs to destroy human ethics by some kind of force. It is not at individual will, but the will of a group such as a nation, religion, power structure, or politics.

War is the act of fulfilling desire and it is a fear. War, for me, is the dropping of the atomic bomb on Nagasaki and the light it emitted. The desire, then, turned into light—an irrevocable, scary light. The light gulped everything and took everything away.

Living peacefully in a safe city, we tend to forget these scary moments, but some other fearful matter seems to be approaching us very slowly. Desire takes root when people do not pay attention and gradually deprives man of what is most important to him. These days, the ethics in fulfilling desire are watered down and fear itself is hard to come by. It is an artificial, safe existence and leads to the weakening of power for personal expression. Individual opinion is being consumed like a commodity.

What we have to preserve is the environment, where we create and weave history. We should not consume it, but maintain it and pass it on. We should continue to acknowledge fear so that the light of fear, as a desire, is never seen again.

Kamakura, August 1994



宇佐美の家

今回の計画地は、北側斜面に面し、前方に海を見渡すことの出来るロケーションであり、北側隣地は高低差が6mの擁壁で分断され、南側に切り立った山がせまる東西に長い三角形の形状をもつ敷地であった。

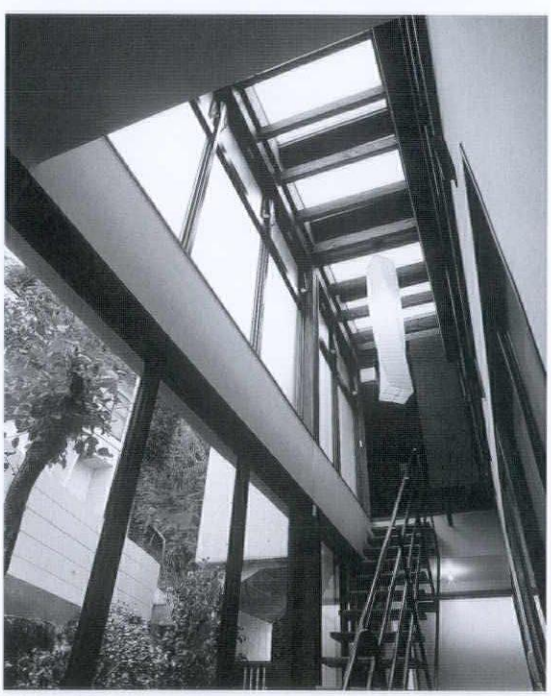
計画のポイントは、各部屋を海に面するように配置し、南側の採光をどのように取り入れるかがテーマとなった。

敷地が東西に長いため、上記の件を考慮した場合、長方形のボリュームがレイアウトされた。また、構造的には北側擁壁が昭和初期に施工され、検査済がないため、擁壁に頼ることが出来ず、30°面に対して荷重の支持が必要となった。構造は基礎とつながる1階をRC、2階を木造の混構造とした。また、コスト的な面より支持層までのくいの長さを最小限に押さえるため、西側にボリュームを置き長方形を南側に寄せた。東側のボリュームに関しては、3本の壁柱を鉛直方向の主体構造とし、2階床をボイドを用いた中空スラブのフラットスラブとし、躯体の軽量化を計った。西側のボリュームは、1階に必要な最小限のスペースを確保し、壁のみをRC造とし、2階のスペースをキャンティレバーで支持した。

それにより、1階がピロティーとして解放され、東西に長いボリュームの形状が現れた。 採光計画に関して、南側も道路をはさんで、切り立った山に囲まれているために、採光を充分に取ることが出来ないのと、東西に部屋が連なるために動線が確保出来ないため、主要部に関しては、大きなひとつの部屋と考え、南西の角に縦動線を設けたLight Voidをレイアウトした。

今回の計画で、敷地に対する問題を解決していくことを主体に置いたこのプランは、我々が望む非デザイン的発想に基づく建物の形態のひとつのケーススタディが出来たと考えている。

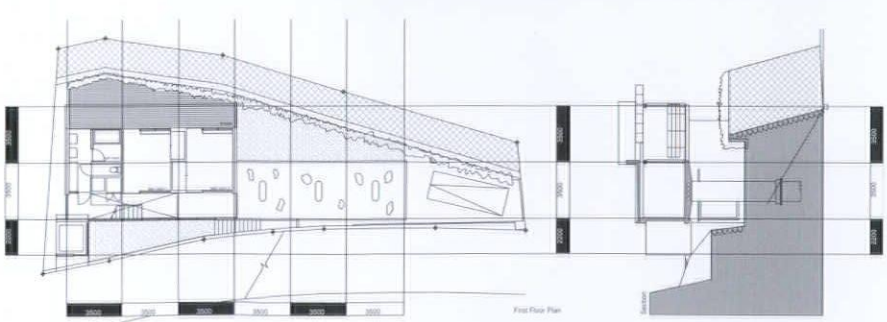
過剰なデザインがまだまだ氾濫している現代において、消費されないための建築のひとつの答えが見つけだせた計画だと思う。

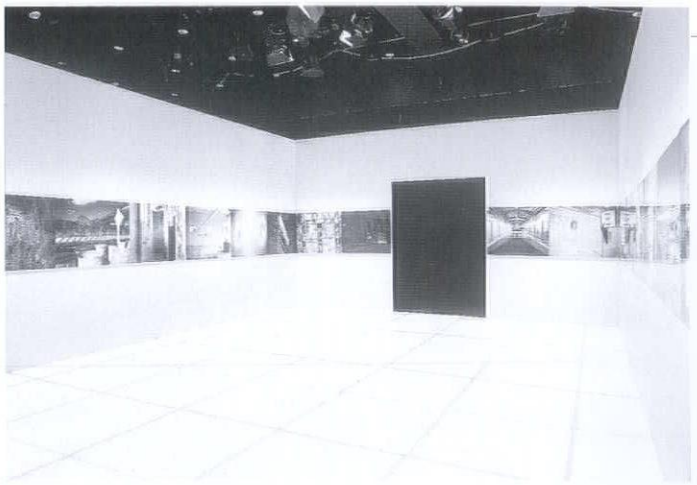


Void of Light.....

写真＝林雅之

所在地：静岡県伊東市宇佐美字割石
主要用途：専用住宅
共同設計者：K3建築研究所構造設計室　金子寛文（構造）
敷地面積：336.87m²（道路含む）
建築面積：202.06m²
延床面積：1,154.68m²
階数：2階建
主構造：RC造＋木造
竣工年：1996年





デイヴィッド・バーン展 STRANGE RITUAL

会　期：1997年4月24日～5月11日
会　場：ラフォーレミュージアム原宿
主　催：ラフォーレ原宿、WIRED
キュレーター：福のり子

STRANGE RITUAL



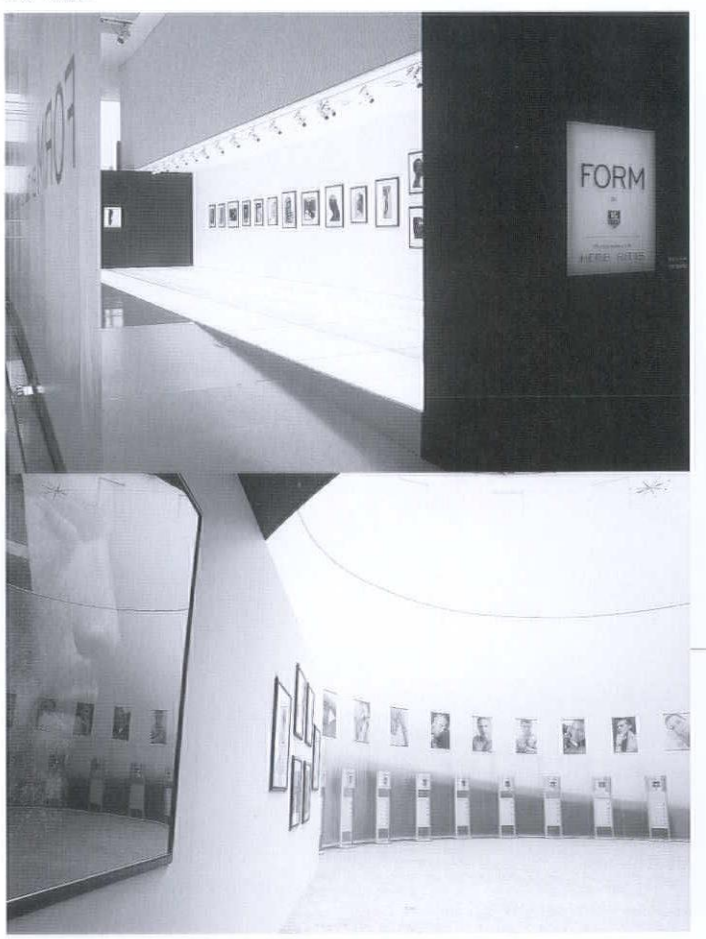
写真＝畠山直哉

renoma STORY展　Psychedelic Noir

会　期：1997年6月25日～７月3日
会　場：スパイラルガーデン
主　催：レノマジャパン株式会社　renoma STORY展実行委員会
アートディレクション：奥村靫正／The Studio Tokyo Japan,Inc
ヴィンテージ・コレクション撮影：桐島ローランド、畠山直哉、ホンマタカシ
ファッション・ディレクション：祐真朋樹、三浦明美
会場音楽：池田謙
映像演出：吉原悠博、掛川康典
企画監修：株式会社アートダイナミクス

Psychedelic Noir

写真＝林雅之



FORM BY TAG HEUER PHOTOGRAPHED BY HERB RITTS

会　期：1997年9月4日～9月13日
会　場：スパイラルガーデン
主　催：タグホイヤー ジャパン株式会社

FORM



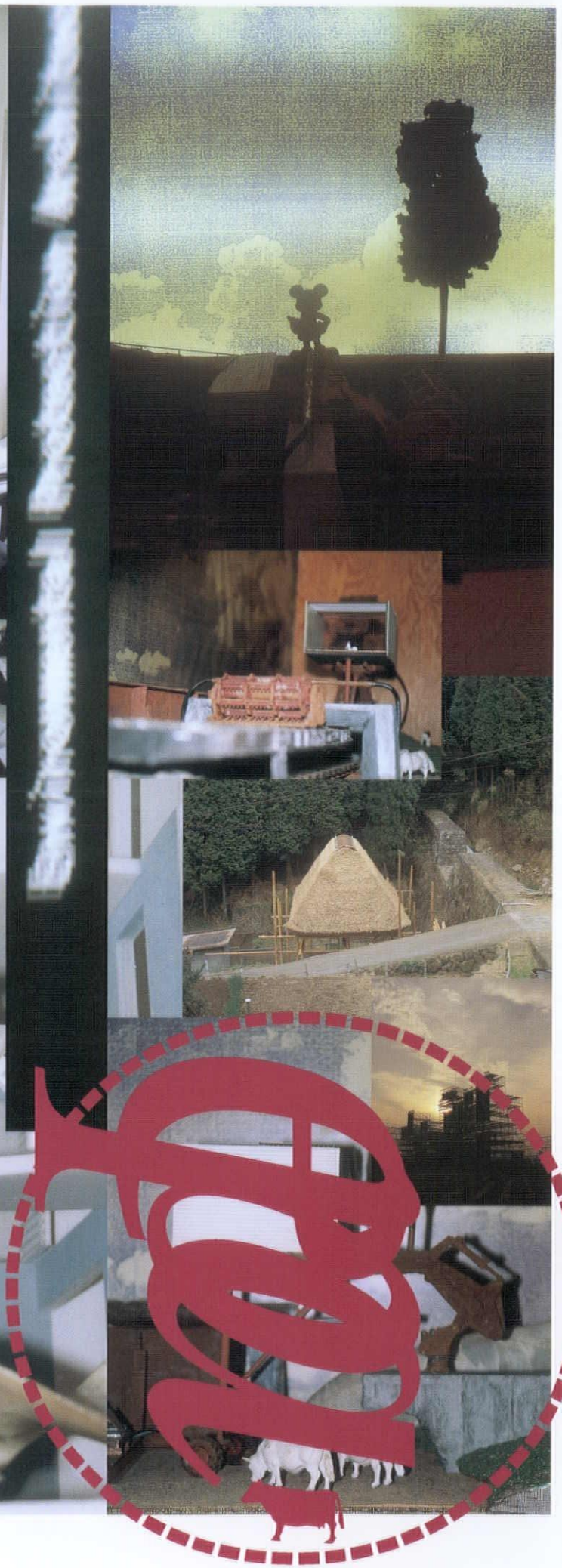
武松幸治（たけまつ・ゆきはる）
1963年長崎県生まれ。1986年多摩美術大学美術学部建築科卒業。1986年株式会社ユニテ設計・計画入社。1987年都市建築ワークショップロンドンAAスクールサマーセミナー参加。1988年株式会社クリエイティブ・インテリジェンス・アソシエイツ入社。1989年ブロンソン・コーツ・アーキテクチャー勤務（LONDON）。1991年環境変換装置建築研究所一級建築士事務所／EPA設立。1996年東京都建築士会平成7年度住宅建築賞受賞。

米司 康（よねじ・やすし）
1962年東京都生まれ。1986年多摩美術大学 美術学部建築科卒。1986年株式会社AMO設計事務所入社。1991年株式会社栖園建築設計工房入社。1993年環境変換装置建築研究所一級建築士事務所／EPA参加。1996年東京都建築士会平成7年度住宅建築賞受賞。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
デザインしているという意識がないため、デザイン・ソースを得ているという感覚はないが、ものを作りたいというテンションが上がるのは、日常目に入って来る都市の風景の中から、意識的に作られたものではなく、無意識のうちに作られたものを見つけた時。
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
Tony Cragg、Richard Deacon、Michael Heizer
●よく読む雑誌は何ですか
BMX PLUS
●よく聴く音楽は何ですか
特になし
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
円通寺（京都）
●オススメホームページを教えて下さい
特になし
●今ハマっているものは何ですか
BMX
●好きな洋服のブランドは何ですか
特になし
●今の職業を選んだ動機は何ですか
全ての造形に対し、携われる仕事と感じたから。
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
我々の活動は、ユニット活動ではなく、建築に対する姿勢を一言で人々に伝えるための事務所の名前であり、個人の考え方をベースに活動しています。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
国内に関して、今まで築き上げてきた物が消費構造の上にのせられ、建築家自身も消費されている。ただその時々のスタイルに変える事により、それをのがれているため建築デザイン？自身が早い速度で変わっている。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
建築のもつ本来の意味が問い正され、デザインというより、環境の一部としての建築の位置付けが明確になるのでは。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
まだ、ある目的に対するベースを作っている段階。ここ数年は今までと同じ活動内容。
●今の時代を一言で表して下さい
意識改革の時代



左から、平尾、米司、原下、中村、武松



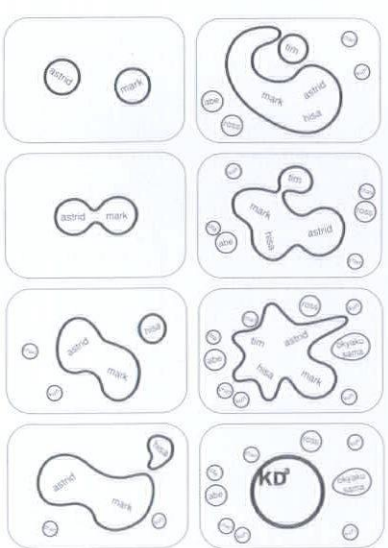
クライン ダイサム アーキテクツ

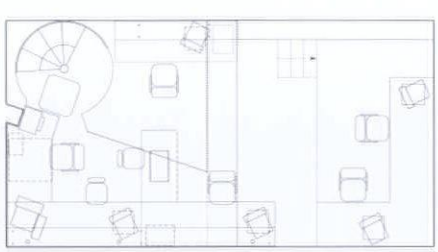
UK98 pavilion

外苑西通りを少し入った所にあるアトリエは、高い天井と大きな吹き抜けを持った気持ちのいい空間になっており、他のグラフィックデザイン事務所と空間を共有していることも相俟って、SOHO（Small Office Home Office)として理想的な環境になっている。また見ているだけで楽しくなる彼らの作品は、ふたりのライフスタイルや審美眼をそのまま表しているようだ。日常生活の中に何気なく存在するものや風景が、彼らのフィルターにかかった途端、とても「チャーミングでかっこいい」ものに変化するのである。ふたりの手によって生み出される空間や家具は、「ものづくりってこんなに楽しいことなんだよ」ということに気づかせてくれながらも、日本人以上に鋭い「日本に対する観察眼」がしっかりと存在する。ジャンルを超越した彼らふたりの活動を垣間みるには、ホームページを覗いてみることをお薦めする*。彼らの近作紹介のみならず、日本のCMに登場するハリウッド・スターを世界に公表する"sold out"ページや、彼らふたりから見た東京のシュールな風景の紹介など、その内容は多岐に渡る奥深いものになっている。なおこのホームページは、1997年に年間を通して最もアクセスの多かったホームページのひとつとして"Yahoos Pick of the Year"にも選ばれた人気ページである。

＊URL：http://www.klein-dytham.com



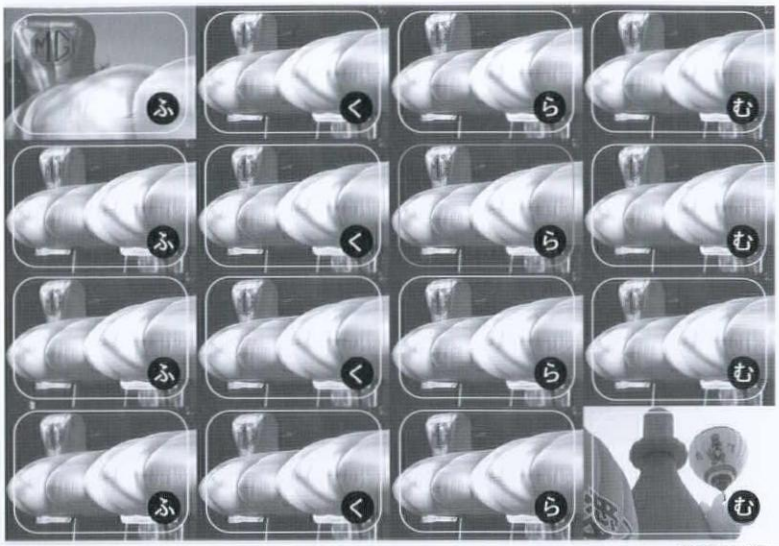




事務所平面図

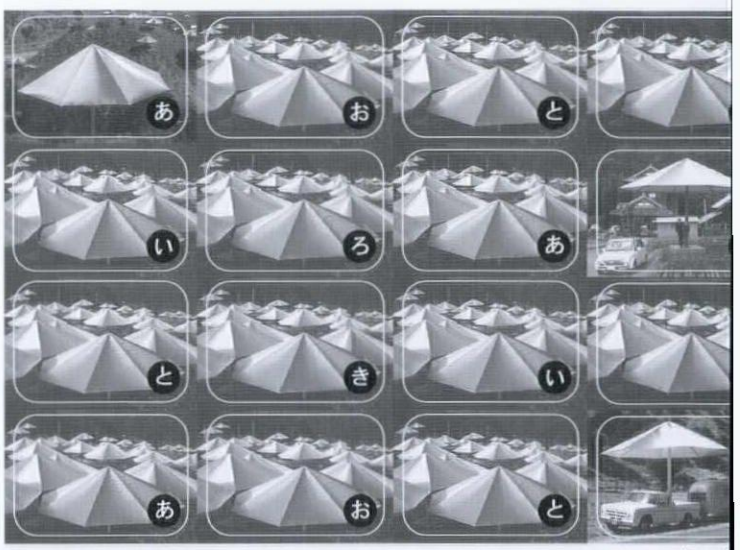
所在地：東京都渋谷区神宮前 3-7-4-1F
Tel：03-3796-1709　Fax：03-3796-1746
E-mail：e-mail:kda@klein-dytham.com
ホームページ：http://www.klein-dytham.com
アトリエ結成年：1990年
スタッフの数：4名
活動内容：建築設計、インテリア、家具、グラフィックデザイン、ウェブデザイン、ページデザイン、展示会場デザイン、インスタレーション、カードデザイン、衣装デザインなど。

uki uki genji hotaru



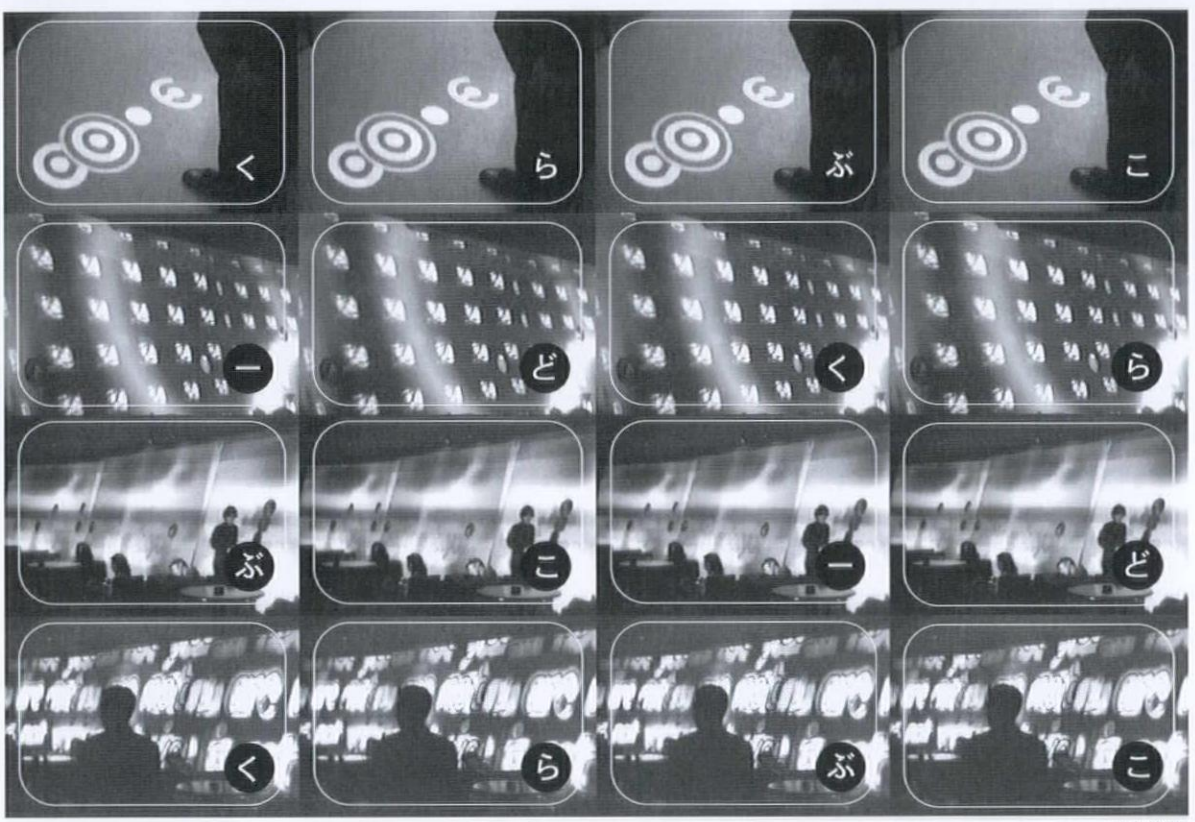
UK98 pavilion

ふくらむ



east meet

あおときいろ



club CODE

くらぶこーど



ろびいかぐ

ぷろ
くら

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

www.
klein-
dytham
.com

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

ぷろじぇくと
あんど
いんすぴ
れいしょんず

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

クライン
ダイサム
ぷろじぇくと
くらぶ

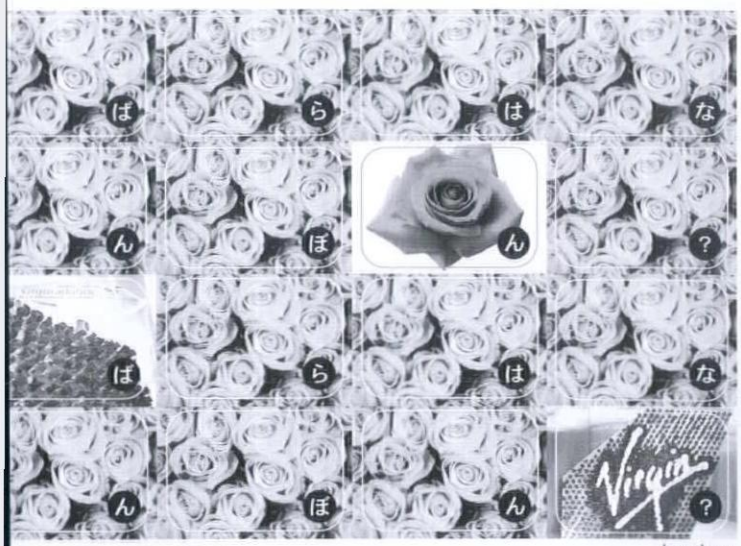
KD

東京都
渋谷区
神宮前
3-7-4



show window war

しょーういんどう



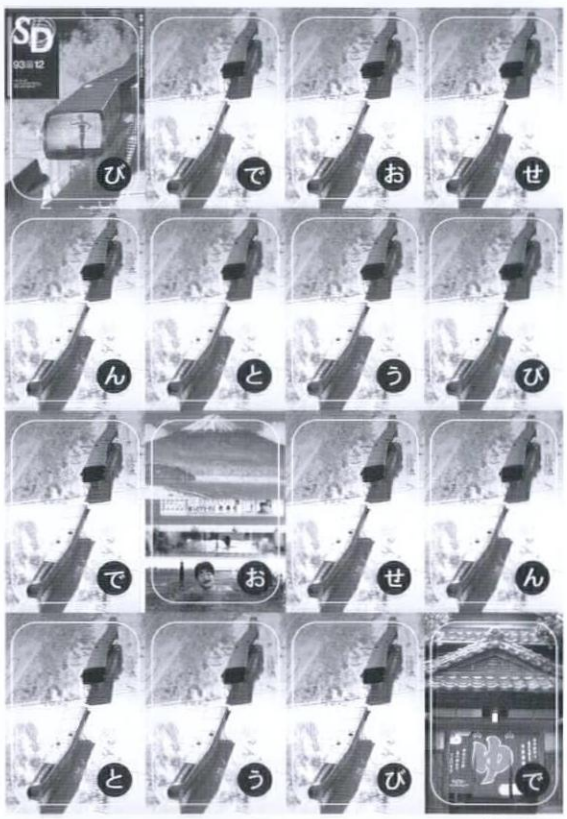
bara-bara



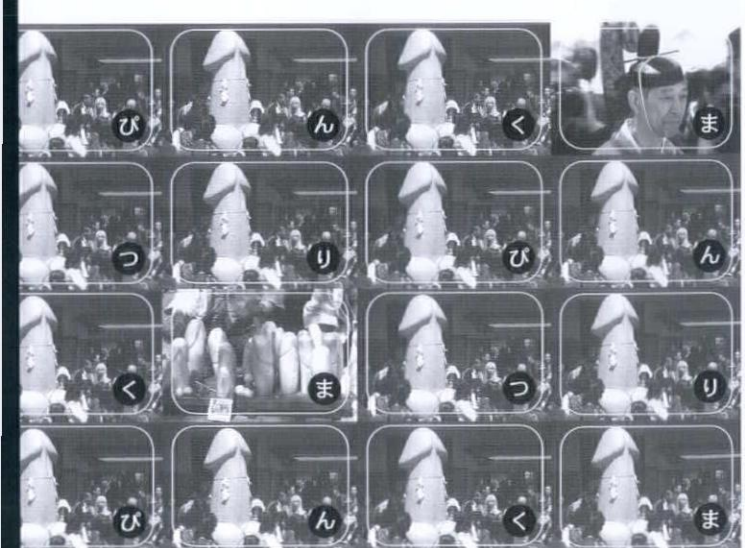
perfume launch



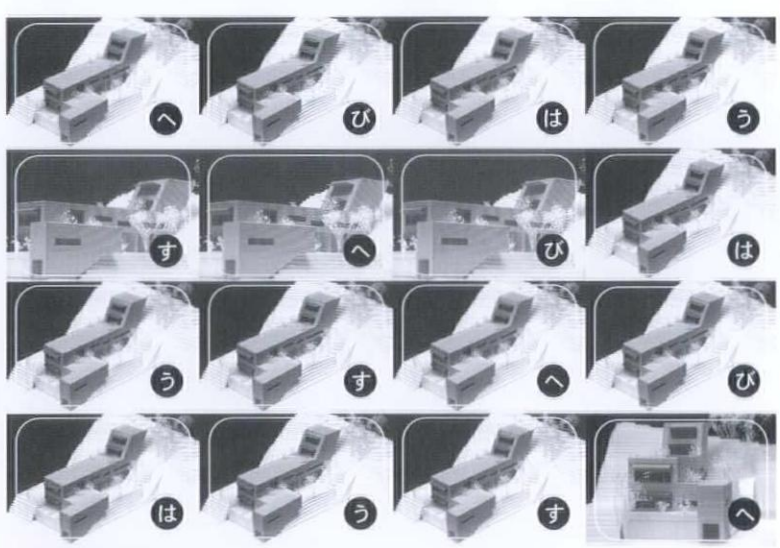
NHK Nagano lobby furniture



video sento

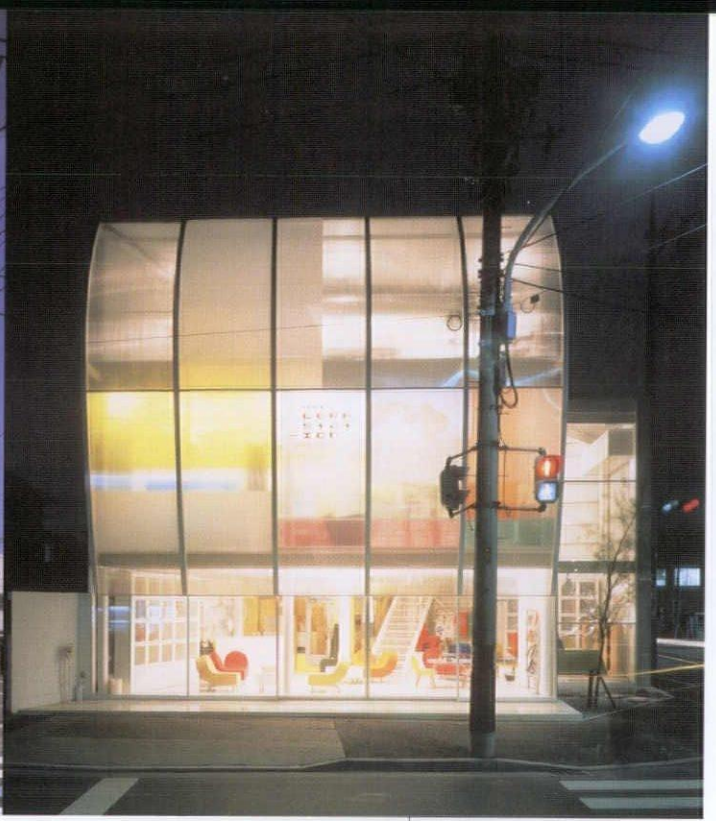


Kawasaki fertility festival



hebi house





cho-chin kanban

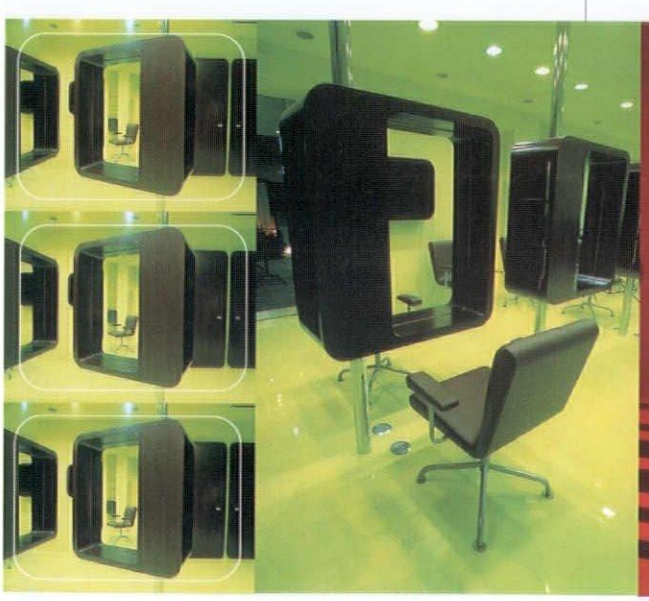
IDEE WORKSTATION（イデー ワークステーション）

所在地：東京都世田谷区下馬
用途：ショールーム
共同設計者：寺設計
敷地面積：116m²
建築面積：79m²
延べ面積：193m²
構造：S造
階数：地上3階
竣工年：1996年6月

la ciocca（ラ チョッカ）

所在地：千葉県市川市南八幡
用途：美容室
床面積：73m²
仕上：床：モルタル下地エポキシ樹脂系塗床材
　　壁・天井：軽鉄組みPB下地AEP
　　回転ミラー：スチールパイプクロム仕上、ナラ材染色クリア
　　スクリーン：スチールパイプクロム仕上、ナラ材染色クリア

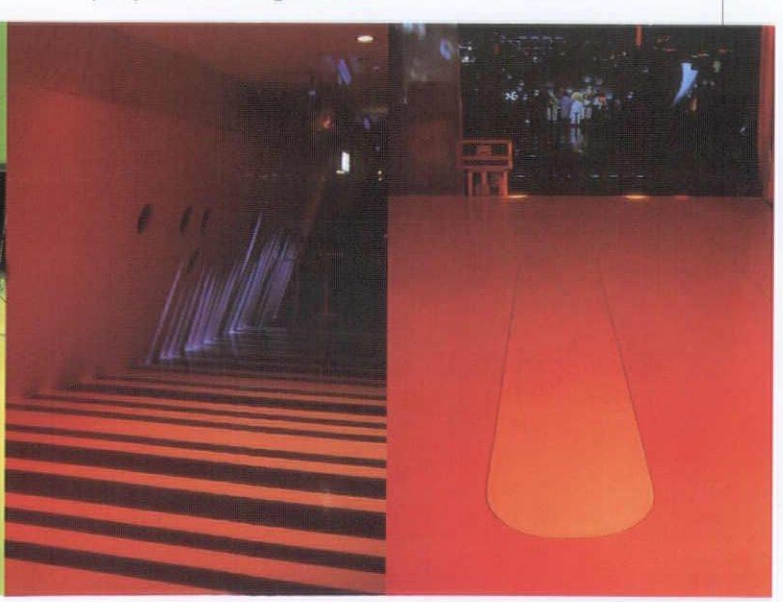
kurukuru mirror



CODE

所在地：東京都新宿区歌舞伎町
用途：クラブ
工事床面積：1343m²
竣工年：1997年11月

projected imagination



NHK長野エントランスロビー家具

所在地：長野県長野市
仕上：
チェア、ソファ
脚：スチールパイプクロム仕上
張地：ビニールレザー（外側）　ベルベット（内側）
ローテーブル
脚：スチールパイプクロム仕上
ナラ材染色つや消しクリアラッカー、ウレタンUV塗装仕上（白）

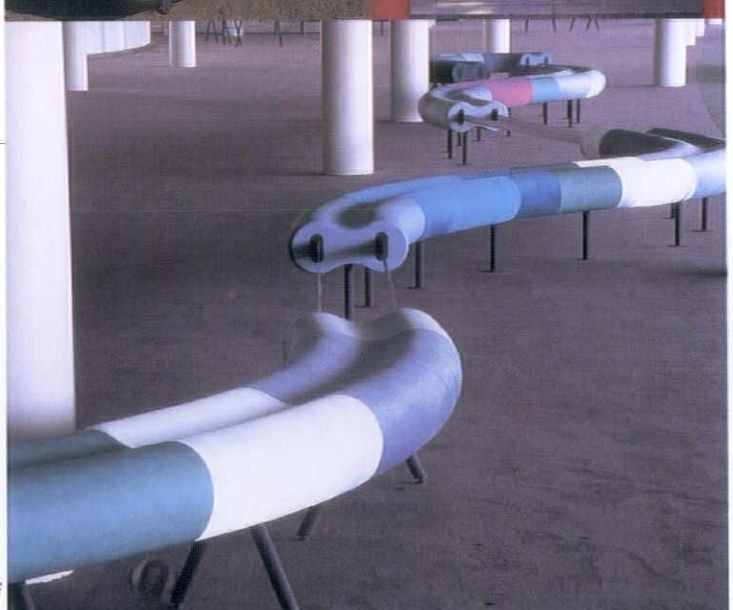


vinyl macaroni



長岡リリックホールホワイエ家具

所在地：新潟県長岡市
仕上：支柱：スウェード風焼付塗装
　　座：積層合板、ウレタンフォーム下地、ベルトパーティション
　　張地：ビニールレザー、ベルベット、スウェード、サテン



kunekune hebi





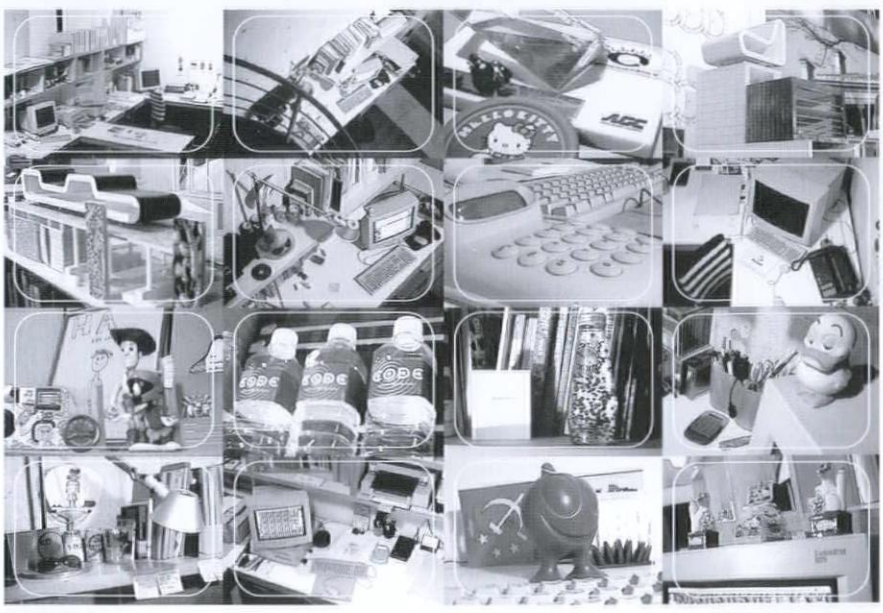
dasadasa

majimaji



barabara

appropriate



People with 'a' style are dead !

アストリッド・クライン（Astrid Klein）
1962年イタリア生まれ。'83年エコール・ド・ボザール卒業（フランス）。'86年エコール・ド・アール・デコラティーフ卒業（フランス）。'88年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了（ロンドン）。'89年伊東豊雄建築設計事務所。'90年クライン ダイサム アーキテクツ設立。'97年日本大学理工学部建築学科講師。

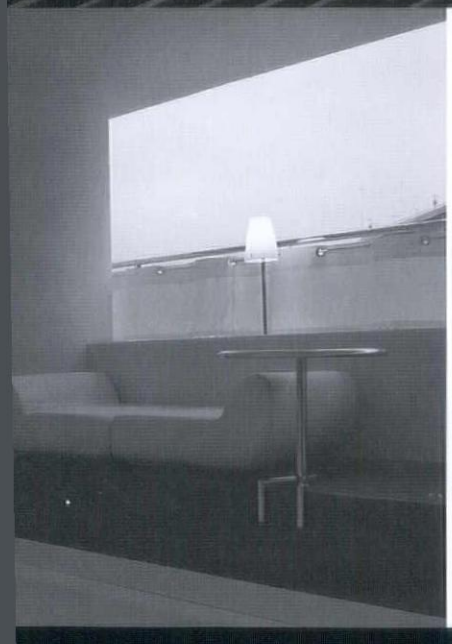
マーク・ダイサム（Mark Dytham）
1964年イギリス、ノーサンプトンシャー生まれ。'85年ニューキャッスル大学卒業。'88年ロイヤル・カレッジ・オブ・アートを首席で修了（ロンドン）。'85年ミルトン・ケインズ開発会社（イギリス）、'86年SOM（シカゴ）、'88年SOM（ロンドン）、'89年伊東豊雄建築設計事務所。'90年クライン ダイサム アーキテクツ設立。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
It's in the air, everywhere! you just have to look.
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
James Dyson, Sebastian Bergne
●よく読む雑誌は何ですか
Wired, Detail, Wallpaper, Colors
●よく聴く音楽は何ですか
Luscious Jackson, Imani Coppola, Sneaker Pimps, Buffalo Daughter
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
Anaba, inaka
●オススメホームページを教えて下さい
HTTP://www.sfx.co.nz/tamahori/home/index.html
●今ハマっているものは何ですか
"hello Kitty" snowboard, "hello Kitty" cabin case, can of the month, sold out!
●好きな洋服のブランドは何ですか
"no name but good sense", Camper, Pollini
●今の職業を選んだ動機は何ですか
Astrid: To live as an installation artist is tough; an interior designer just makes big installations, but then: why not build the whole building?!
Mark: Grew up near Britain's largest New Town, Milton Keynes. The city is a cross between Wright's Broadacre City and Brazilia with buildings by Mies. After that I had no choice: I just had to become an architect!
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
Two pairs of eyes see more than just one. We can play catch-ball. We act as good cop, bad cop.
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
OUT: fuzzy conceptual lectures, pretentious ego, irrelevant plagiarism
IN: modesty, honesty, down-to-earth, reality strikes!
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
OUT: flexible, sterile, minimal
IN: appropriateness, "low cost"+alpha
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
Funky big projects. Big does not have to mean XXL.
●今の時代を一言で表して下さい
People with 'a' style are dead !

H DESIGN ASSOCIATES

黒川勉と片山正通のふたりが主宰するH DESIGN ASSOCIATESは、若手の多いインテリアデザイン界にあって今最も旬で注目すべきデザイン事務所のひとつである。実際の業務では物件ごとにどちらかひとりが担当者になり、もうひとりが客観的にそれを俯瞰するという形態をとるが、物件ごとに作風を合わせたり、もしくは変えたりということは意識的にしないという。ただ大枠として「H DESIGNらしさ」という共通のニュアンスがふたりの間には存在し、それを踏まえつつ作品ごとに担当者が最適解をつくり出す。「デザインすることは現代に表現としてかかわることであり、理論でなく感性を大切にしたい」という言葉に裏打ちされるように、彼らの作品はやはり説明抜きにシャープでかっこいい。「製造業者とデザイナーが分業化された現代の生産システムの中ではクラフトマンに徹するのではなく、いかに今日的なニュアンスを導き出してそれを記号化するかということに興味がある」と彼らが語る言葉の中に、H DDESIGNの普遍的かつ匿名的なデザイン・スタンスを垣間見ることができる。自由が丘にある運送会社の倉庫を改造したインテリア・ショップの一角にある〈FAVORITE. H〉*は、彼らのショールームになっている。異常に高い天井高が醸し出すシュールな空間と、そこに点在するH DESIGNの家具との絶妙なバランスは必見である。

*：FAVORITE. H
所在地：東京都目黒区八雲3-23-20 TIME&STYLE内
Tel：03-5731-7023



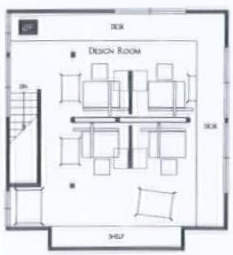
上：DAILY CATCH＋HABANA ROOM、左：INDIVI CAFE

H DESIGN ASSOCIATES

黒川勉 TSUTOMU KUROKAWA
片山正通 MASAMICHI KATAYAMA
琴寄和恵 KAZUE KOTOYORI
佐藤桐子 KIRIKO SATO



事務所平面図　1階



2階

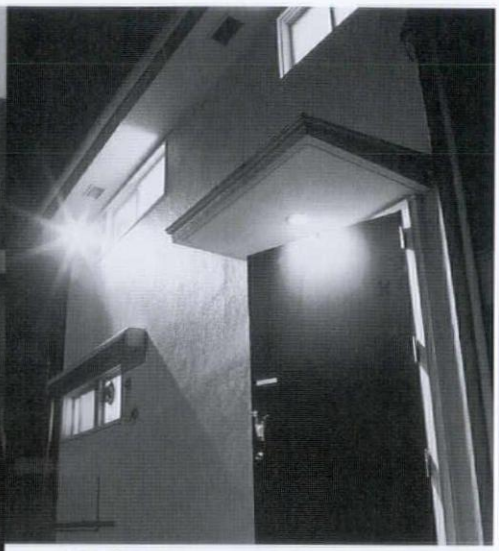
所在地：〒151-0053　東京都渋谷区代々木4-17-12
Tel：03-5354-5435　Fax：03-5354-5436
アトリエ結成年：1992年
スタッフの数：4名
活動内容：インテリア環境、建築、内装の企画・デザイン業務、家具およびプロダクト製品の企画・デザイン業務



ART DIRECTION : H.DESIGN ASSOCIATES
PHOTOGRAPHY : OSAMU YOKONAMI
HAIR & MAKE-UP : KEIICHI (BRAVO BRAVA)
STYLING : YUKIKO YOSHIMURA
MODEL : AIKA
FURNITURE : FAVORITE.H
TIME&STYLE 03-5731-7023
3-23-20 YAKUMO MEGUROKU TOKYO 152
COSTUME : VANESSA LEVY
PROTON INC. 03-3578-1002
#313 TORANOMON GARDEN 3-10-4
TORANOMON MINATOKU TOKYO 105

カレラノキモチ、カレラノコトバ。





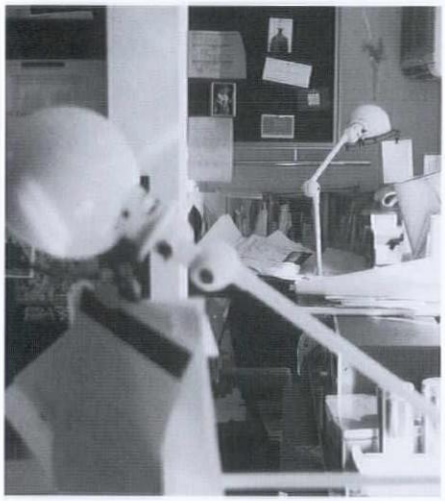
空間-雰囲気、空気感、人の触覚.....



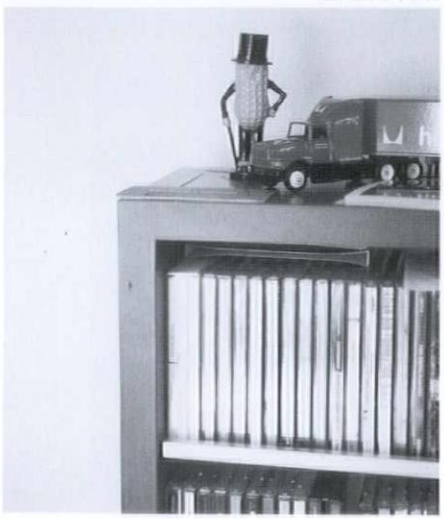




デザインすることは現代に表現としてかかわること。



BALANCE





黒川 勉（くろかわ・つとむ）
1962年愛知県生まれ。'86年～有限会社イクス、'87年～'92年株式会社スーパーポテトを経て、'92年 株式会社エイチ.デザイン アソシエイツを設立。

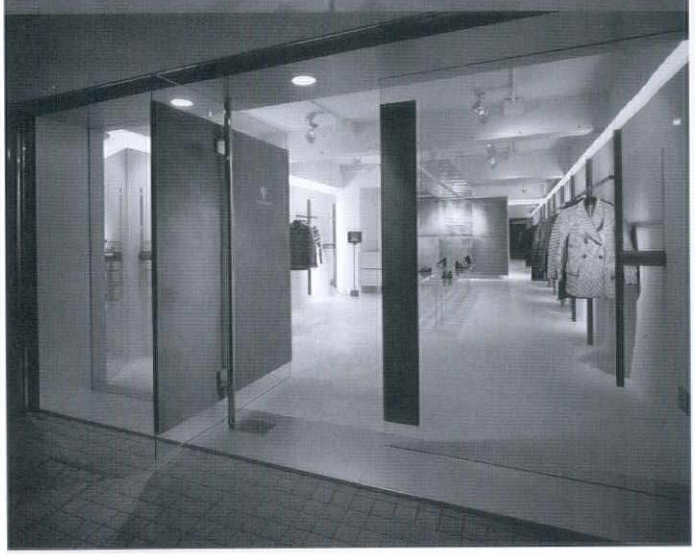
●デザイン・ソースをどこから得ていますか
日常生活
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
ジヤンヌーベル、フィリップスタルク
●よく読む雑誌は何ですか
色々
●よく聴く音楽は何ですか
レゲエ
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
ハワイ
●オススメホームページを教えて下さい
興味ない
●今ハマっているものは何ですか
昼寝
●好きな洋服のブランドは何ですか
A.P.C、ドリスバンノッテン、ヘルムートラング
●今の職業を選んだ動機は何ですか
カッコよさそうだと思ったから
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
なりゆき
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
センスのない建物ばかりで興味がない
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
理論だとかスタイルだどかそんな事どうでもいいんじゃない、人が使う箱でしょって感じ。
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
幅広いデザインをしていこうと思っています。
●今の時代を一言で表して下さい
創り手より使い手の方がソフトがわかっている時代



片山正通（かたやま・まさみち）
1966年岡山県生まれ。'88年～有限会社岡本好司設計室、'90年 ～有限会社デザインリュー、1991年～フリーランスを経て、'92年 株式会社エイチ.デザイン アソシエイツを設立。

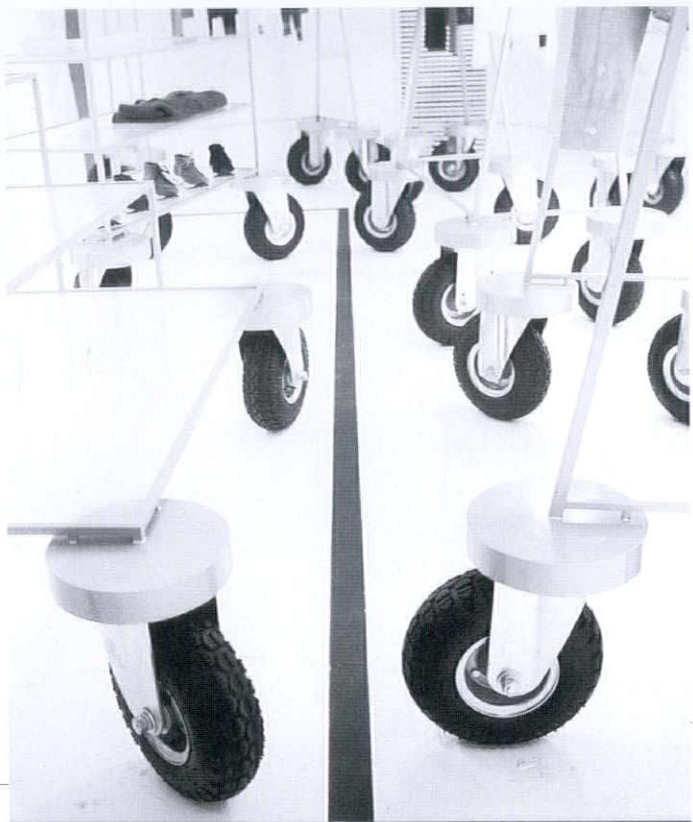
●デザイン・ソースをどこから得ていますか
記憶とくだらない想像
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
ほとんど興味なし
●よく読む雑誌は何ですか
ロッキンオン、ミュージックマガジンなど
●よく聴く音楽は何ですか
ニールヤング、ジミヘンドリックス、ルーリード、ジョンレノン、ボールウエラー、オアシス、トムウエイツ、エルビスコステロ、ベック、ムーンライダース、小沢健二、など、なにを考えているのかわからない人達の音楽
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
タワーレコード、オンサンデーズ、原美術館、など
●オススメホームページを教えて下さい
知りません
●今ハマっているものは何ですか
小沢健二「ある光」を聴くこと。
●好きな洋服のブランドは何ですか
マーガレットハウエル、ポールスミス、ジェネラルリサーチ
●今の職業を選んだ動機は何ですか
選んだという感覚はなく、気がついたらやっていました
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
これも同じく、選んだという感覚もなく、特別ユニット活動を意識したこともべつにない。
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
楽しさという基準で、建築以外のことも見るようにしているのですが建築は最も楽しくない。
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
興味がないのでわかりません
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
先のことはわかりません
●今の時代を一言で表して下さい
リアリズム

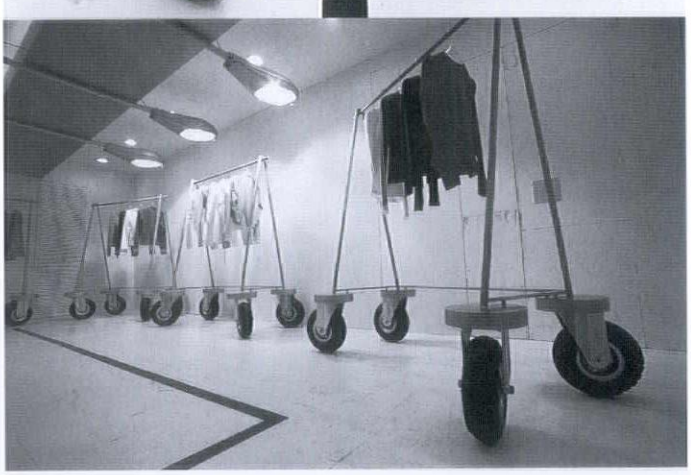




YOICHI NAGASAWA

所在地：東京都渋谷区
主用途：ブティック
竣工年：1996年





NO CONCEPT BUT GOOD SENSE

所在地：東京都渋谷区
建築用途：ブティック
竣工年：1997年



INDIVI CAFE

所在地：東京都新宿区
主用途：カフェ
竣工年：1997年



FAVORITE. H

PRESTIGE JAPANがプロデュースを、H. DESIGN ASSOCIATESがデザインを行うインテリアシリーズ。黒川、片山両氏の「自分たちが使いたい物をつくる」という個人的な判断がFAVORITE. Hの基本コンセプトである。それは商業的な発想やデザイナーの自己主張ではなく、周囲に起こっていることに対する自然な答えである。それは家具だけにとどまらず照明、家電などインテリアを構成するすべての物に広がってゆく。

所在地：東京都目黒区
主用途：インテリア・ショップ
竣工年：1997年



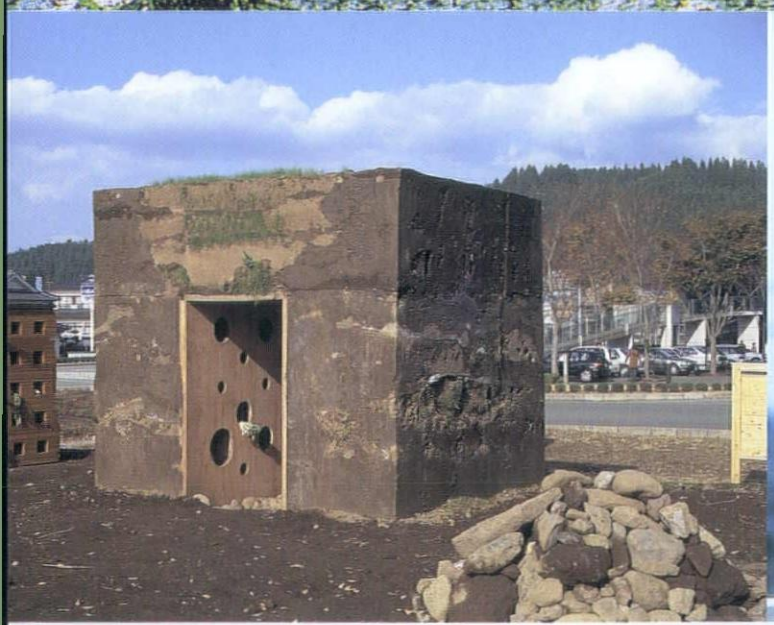
DAILY CATCH + HABANA ROOM

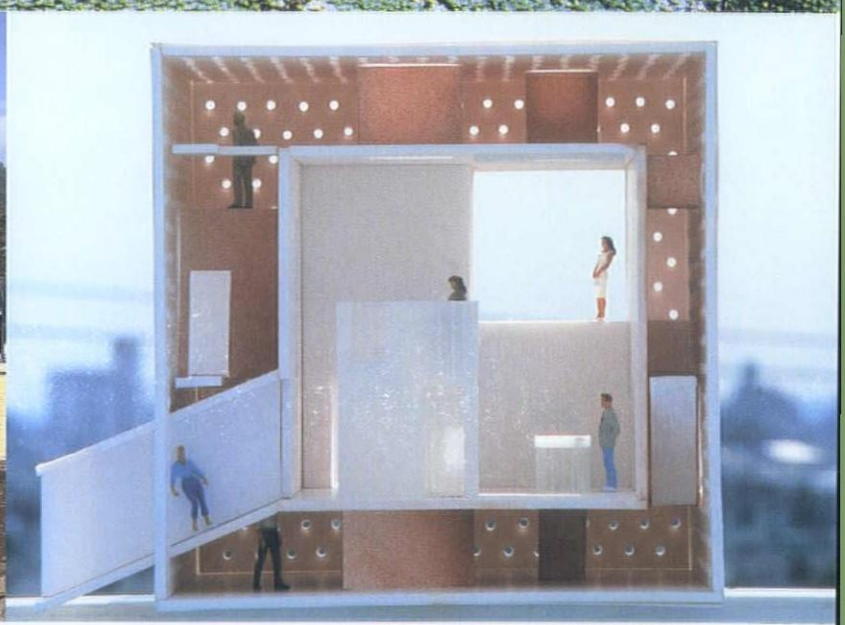
所在地：東京都港区
建築用途：アンティーク+シガーショップ
竣工年：1998年



アトリエ・ワン





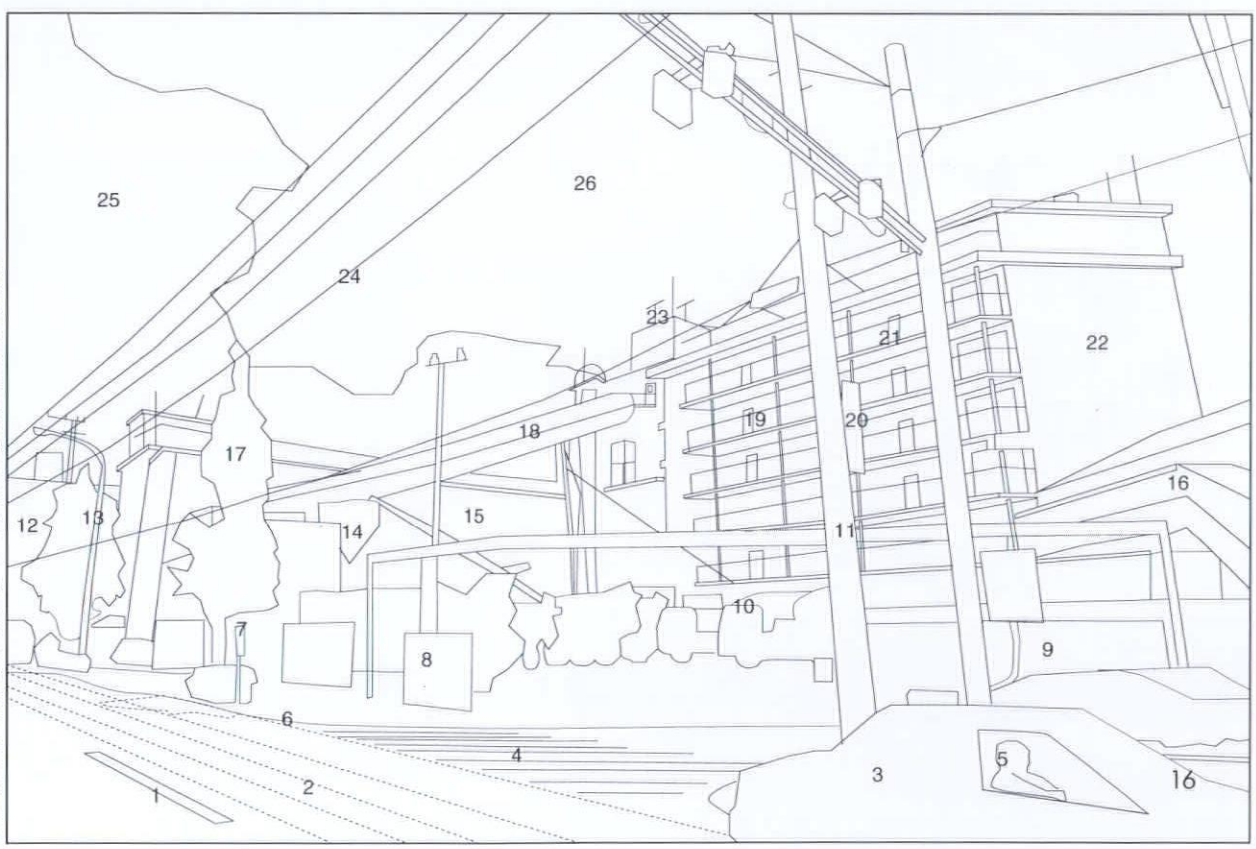


上：生態系アパートメント、左：田園に佇むキオスク、右：奥のない家

アトリエ・ワンは塚本由晴と貝島桃代の建築ユニットである。この基本ユニットが、プロジェクトごとに外部の建築家やデザイナーとジョイントし、建築設計、展覧会のキュレーション、誌の編集、各種メディアでの執筆など、建築を軸にした多様な活動を繰り広げている。実作〈ハスネ・ワールド・アパートメント〉は本誌でも紹介しているみかんぐみの竹内昌義、東京の都市空間のスタディーである〈メイド・イン・トーキョー〉はアーティスト／建築家の黒田潤三らとの共作だ。彼らの仕事は、POPで今日的、かつユーモアに溢れていると言える。が、同時にそうしたあり方の中に現代の「都市」の中での建築のポジションを見極めようとする批評性が含まれている。そのことが独特の感覚を彼らの仕事に与えているようだ。実はふたりは東京工業大学に籍を置き、塚本は建築学科講師として、貝島は同大学坂本研究室の博士課程の学生として、学術的な研究を活動のメインにしている。ここでは紹介できないが、こうした大学での研究が、彼らの仕事の基盤になっていることは確かなことのようだ。

アトリエ・ワンは塚本由晴と貝島桃代による建築ユニットであり、両者の活動の集積がその仕事の全体である。
連絡は電話03-5734-3159まで。
活動内容については56ページ参照。

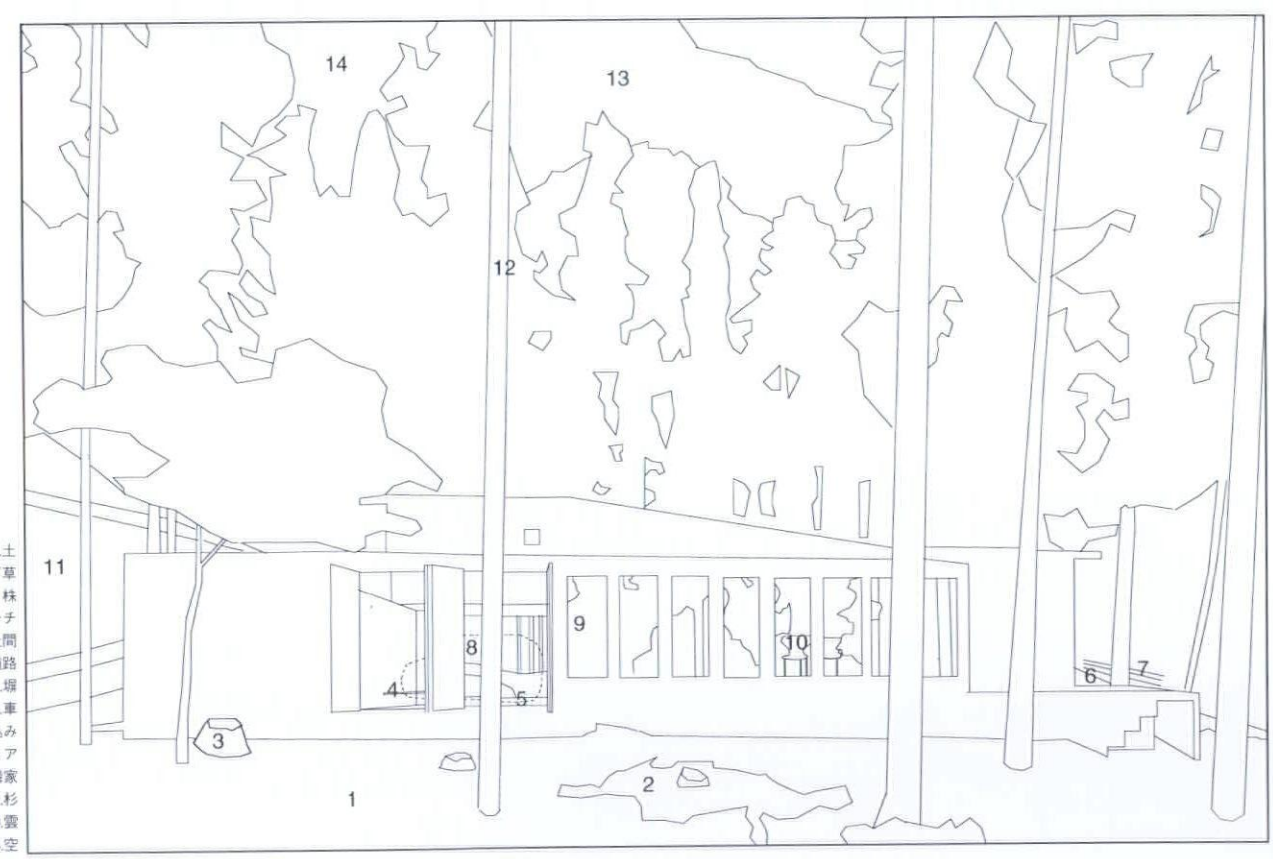




メイド・イン・トーキョー　No.15　生コンアパート

所在地：東京都目黒区
主用途：生コン工場＋社宅＋オフィス
インスタレーション：貝島桃代&T.M.I.T
調査年：1996年



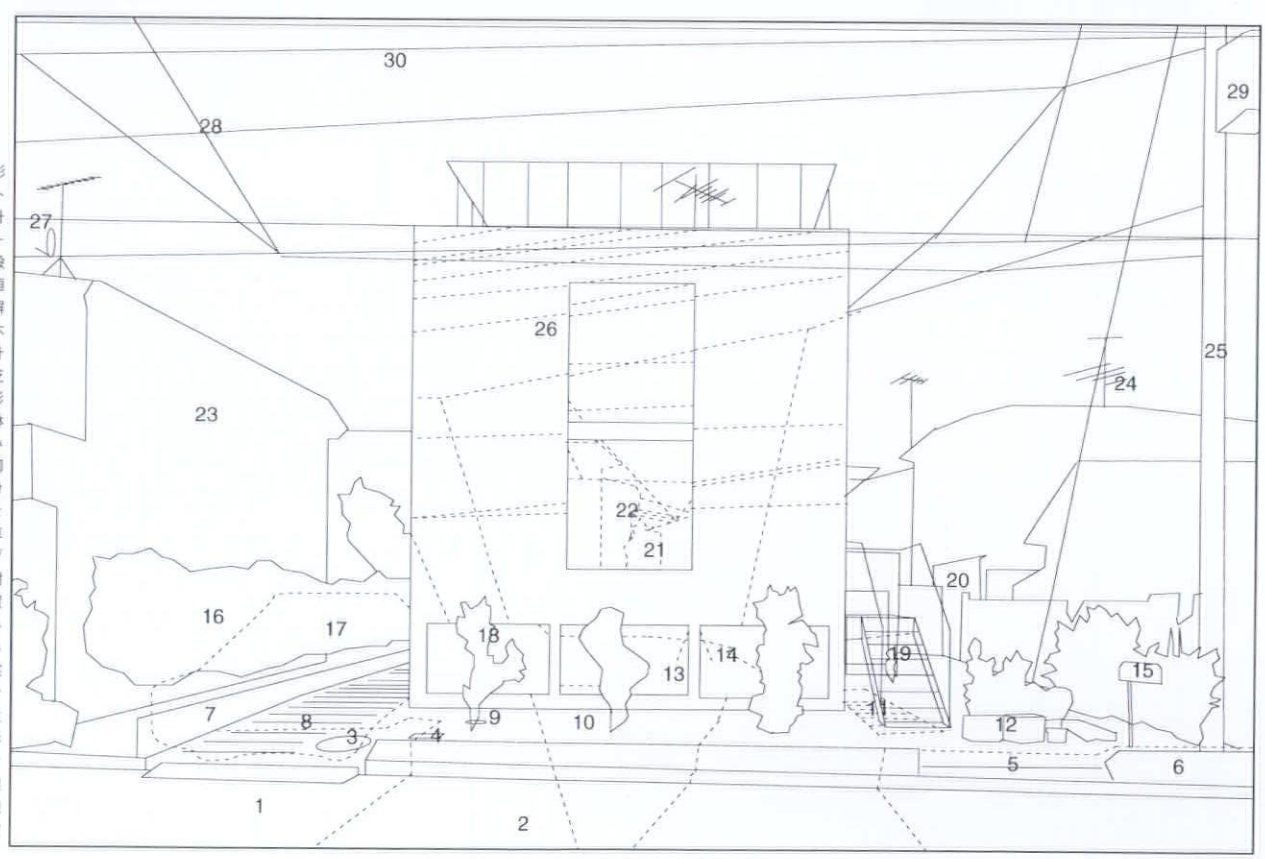


1.土
2.下草
3.切り株
4.ベンチ
5.土間
6.道路
7.塀
8.車
9.木の写り込み
10.セブンチェア
11.隣家
12.杉
13.雲
14.空

パレット

所在地：宮城県刈田郡
主用途：別荘
設計者：塚本由晴
敷地面積：1052.00m²
建築面積：86.94m²
延床面積：104.76m²
主構造：木造一部鉄骨造
階数：地上2階
竣工年：1990年

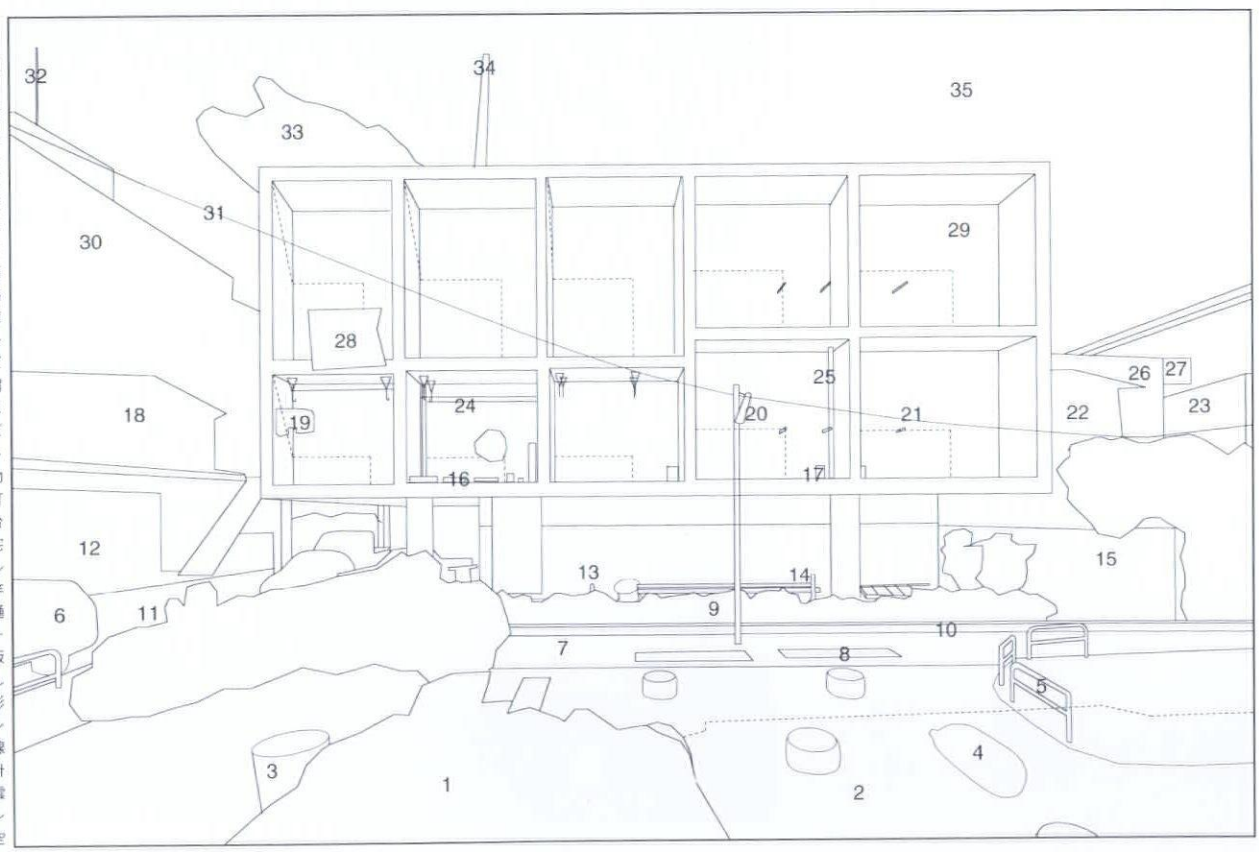




アニハウス

所在地：神奈川県茅ヶ崎
主用途：個人住宅
設計者：塚本由晴＋貝島桃代
敷地面積：122.32m²
建築面積：46.74m²
延床面積：121.85m²
構造：鉄骨造
階数：地下1階地上2階
竣工年：1997年





ハスネ・ワールド・アパートメント

所在地：東京都板橋区
主用途：賃貸アパートメント
設計者：塚本由晴＋竹内昌義＋貝島桃代
敷地面積：189.31m²
建築面積：123.29m²
延床面積：293.92m²
構造：RC造＋鉄骨ブレース構造
階数：地上3階
竣工年：1995年

カレラノキモチ、カレラノコトバ。

アトリエ・ワン　Q&A



塚本由晴（つかもと・よしはる）
1965年　神奈川県生まれ
1987年　東京工業大学工学部建築学科卒
1992年　アトリエ・ワン始動
1994年　東京工業大学大学院博士課程修了
現在　同大学建築学科講師.博士（工学）

貝島桃代（かいじま・ももよ）
1969年　東京都生まれ
1991年　日本女子大学住居学科卒
1992年　アトリエ・ワン始動
1994年　東京工業大学大学院修士課程修了
1996年　スイス連邦工科大学奨学生
現在東京工業大学大学院博士課程

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
身のまわり
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
ホンマタカシ
●よく読む雑誌は何ですか
ふうけい
●よく聴く音楽は何ですか
ロック、ポップ、オルタナティブミュージック
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
なんた浜、芝松
●オススメホームページを教えて下さい
パス
●今ハマっているものは何ですか
ブルース・リー、小説
●好きな洋服のブランドは何ですか
古着
●今の職業を選んだ動機は何ですか
何となく。父と兄の影響があるかもしれない（塚本）
母に勧められて（貝島）
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
真剣な議論ができるから
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
パス
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
パス
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
建築とランドスケープと都市が一緒になったような領域＝「環境ユニット」のデザイン。
●今の時代を一言で表して下さい
再定義

活動紹介――アトリエ・ワンの足跡

●建築作品
1990年　PALETTE（塚本）
1992年　田園にたたずむキオスク
1995年　ハスネ・ワールド・アパートメント（竹内昌義と協同）　1997年度東京建築士会住宅建築賞
1996年　81/2　eight Half　hair&make studio
1998年　アニ・ハウス

●プロジェクト、展覧会（m：貝島、y：塚本）
1990年　m：佃島再生計画　'88全国学生「住宅」設計教室1等（建築文化9101）
1992年　ym：分節者の家（エス・パイ・エル住宅設計競技1等）
1992年　ym：第2回スパイラル・アートスカラシップ入選
1992年　ym：立方体の畑／野菜的（熊本アートポリス'92デザインコンペティション最優秀賞）
1993年　ym：水玉1993／別荘増築案（GJリーグ展／GAギャラリー東京）
1994年　ym：PKO/パブリック キッチン オペレーション（21世紀のキッチン展／東京ガス新宿ショールーム）
1994年　ym：「奥」のない家（新建築住宅設計競技「都市住居」入選）
1995年　ym：生態系アパートメント（新建築住宅設計競技「複合性／単一性」入選）
1996年　ym：ANI HOUSE（住宅模型展～建築家のアトリエから／銀座松屋デザインギャラリー）
1996年　m：磯崎新プロデュース'96アーキテクチュア・オブ・ザ・イヤー「メイド・イン・トーキョー」
1997年　ym：バーチャル・アーキテキクチャー展
1997年　m：メイド・イン・トーキョー、スイス展（チューリッヒ・アーキテクト・フォーラム）
1997年　y：30×100Architects展

●鼎談・座談会・インタビュー・企画（m：貝島、y：塚本）
1991年　y：'90年代の住宅の可能性を巡って／伊東豊雄、大江匡との鼎談（建築文化No.535、9105）
1991年　y：メタファーとしての建築を超えて／多木浩二、伊東豊雄、M・タルディッヴ、曽我部昌史との座談会（建築文化No.542、9112）
1992年　ym：昭和オルタナティブ（建築思潮01、9212）
1992年　m：FORM FINDING TOUR／原広司、槙文彦、安藤忠雄、篠原一男、妹島和世へのインタビュー（GA01～05）
1993年　ym：Materal X／中谷芙二子、牛歩へのインタビュー（建築文化9309、9403）
1993年　y：プログラムの余白に向けて／高松伸との対話（建築文化No.565、9311）
1996年　y：新しい「抽象」の獲得／多木浩二、妹島和世、西沢立衛、曽我部昌史との座談会（建築文化No.591、9601）
1996年　y：建築という仮説／山本理顕、土居義岳、塚本（新建築第71巻8号、9606）
1996年　m：ダメ建築礼賛／磯崎新、貝島桃代（磯崎新の革命遊戯、TOTO出版）
1997年　ym：環境ユニットの原則（スタジオ・ヴォイス、9712）
1997年　y：30×100Architects　30代建築家100人会議の世話人
1998年　ym：SD9802都市へ向かう透明性　スイス・ドイツ語圏の建築（貝島桃代監修）

●論説・評論等（m：貝島、y：塚本）
1990年　ym：SD海外建築情報(～1996年)
1992年　m：シナリオ・シティズ（建築文化9201）
1992年　y：分節線上の建築(建築雑誌Vol.108、No.1353、9203)
1993年　ym：熊本アートポリス　都市デザインサミットレポート（建築文化No.555、9301）
1993年　y：コールハースの都市（インターコミュニケーションNo.5、9307）
1993年　y：建築の言語性／希薄化と圧縮化（GAJapan5、9308）
1993年　y：不透明な「透明性」（JA Library2　伊東豊雄、9308）
1994年　y：更地と集合住宅
多摩丘陵におけるニュータウンと集合住宅の分節（10+1　No.1特集＝ノンカテゴリカル・シティ　9405）
1995年　y：アパートメントの文脈から（新建築住宅特集No.111、9507）
1995年　m：おじんカルチャーvsユースカルチャー／コールハースについてのライナーノーツ（レム・コールハースのジェネリック・シティ、TN Prove Vol.2 1995）
1995年　m：ベーリング海峡横断ダム／環境拡張計画（SD9504）
1995年　ym：新建築住宅特集月評(～1996年)
1996年　y：情報のストラクチュアは語りうるか(新建築第71巻8号、9606)
1996年　y：「敷地」を作る(新建築住宅特集No.124、9608)
1996年　y：空白恐怖症の東京（磯崎新の革命遊戯、TOTO出版）
1997年　m：メイド・イン・トーキョー／カメラ・オブスキュラあるいは革命の建築博物館（10+1　No.8、9703）
1997年　m：チーム・メイド・イン・トーキョー（インターコミュニケーションNo.20、9704）
1997年　y：何も足さない建築、何も引かない建築／アルヴァロ・シザ（建築文化No.607、9705）
1997年　m：言葉としての建築-スイス・ドイツ語圏の建築と都市（建築文化No.607、9705）
1997年　ym：建築の構成による3つの修辞的住宅
（バーチャル・アーキテクチュア、建築における「可能と不可能の差」、東京大学総合研究博物館）
1997年　y：アニ・ハウス（TOTO通信No.41、9702）
1997年　m：メイド・イン・ホンコン／加速度都市香港（SD9707）
1997年　y：建築物件から見た現代の東京（メイド・イン・トーキョー）－貝島桃代+T.M.I.T.
（http://muse.dnp-sp.co.jp/Japan/DNP/forum/column/Feb11-a_j.html#top）
（http://muse.dnp-sp.co.jp/Japan/DNP/forum/column/Feb18-a_e.html#top）
1997年　y：「1990年代の建築家－1」平面のない家－西澤大良「立川のハウス」
（http://muse.dnp-sp.co.jp/Japan/DNP/forum/nmp_j/review/0724/archi0724.html）
1997年　y：「1990年代の建築家－2」茫漠とした風景の中の建築－妹島和世+西澤立衛「マルチメディア工房」
（http://muse.dnp-sp.co.jp/Japan/DNP/forum/nmp_j/review/0904/archi0904.html）
（http://muse.dnp-sp.co.jp/Japan/DNP/forum/nmp_e/nmpj/tsukamoto.html）
1998年　y：反重力の建築（インターコミュニケーションNo.23、9801）
1998年　m：東京の川で泳ごう（インターコミュニケーションNo.23、9801）
1998年　y：住宅の「建ち方」について（新建築住宅特集No.142、9802）
1998年　m：ポスト「風景」／ホンマ・タカシ「ハイパー・バラッド」書評（アサヒカメラ、9803）
1998年　y：新建築月評


8 1/2


ミニ・ハウス


PKO


草千里公衆トイレ


田園に佇むキオスク

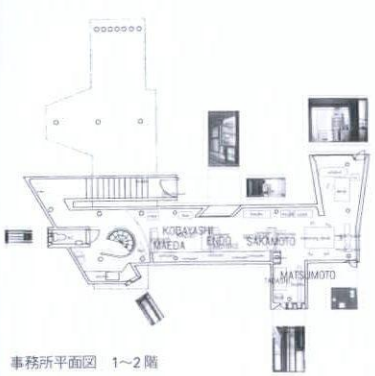
分節、修辞、定義、ビルディングタイプ、ズームバック、環境ユニット、メイド・イン・トーキョー……

F.O.B アソシエイション

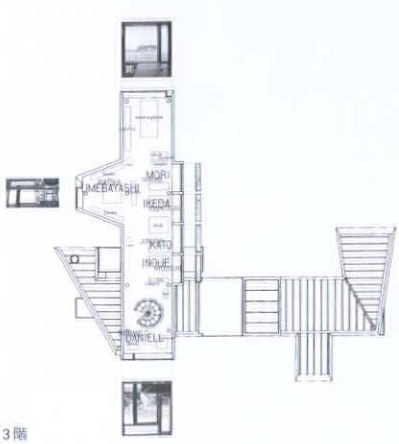
F O B
association
@limite
architects

高松伸建築事務所から独立した梅林克と遠藤昭彦、京都造形芸術大学で教鞭をとる松本正の3名がアトリエの主宰者で、それぞれが設計のフェーズごとに役割を分担しながら業務を行っている。<ORGAN>や<CATALYST-KINOSAKI BEERFACTORY>といった実作を見ても明らかなように、形態操作や素材の選択に卓越したセンスを感じるF.O.Bだが、そこには「建築家の作品性」について、彼らがクールであろうとする意識が反映されている。「自慰的な作家性の追求は、もはや何物も生み出さない。それよりも重要なことは、高度資本主義という消費社会の中で、いかに汎用性を持つシステムをつくれるか、ということだ」と、主宰者のひとりである梅林氏は語る。そして、その意味において、建築は計量可能な「商品」なのだ、と彼らは言い切る。例えば実作<ORGAN>の外壁を覆う金属パネルは彼ら自身が企画したもので、自動車の部品メーカーに加工を依頼することで、同種の一般的な金属パネルの半分以下の平米単価を可能にした。そしてそのノウハウを「商品」として、他の現場に斡旋する。そんな彼らが今一番興味があることは、橋梁や港湾開発、ハイウェイといった土木工事だそうだ。「都市や風景の最も巨大なストラクチャーであって、デザイン的にはほとんど手つかずの領域でしょう。それに、それこそ日本経済を支える最大の「商品」ですから」



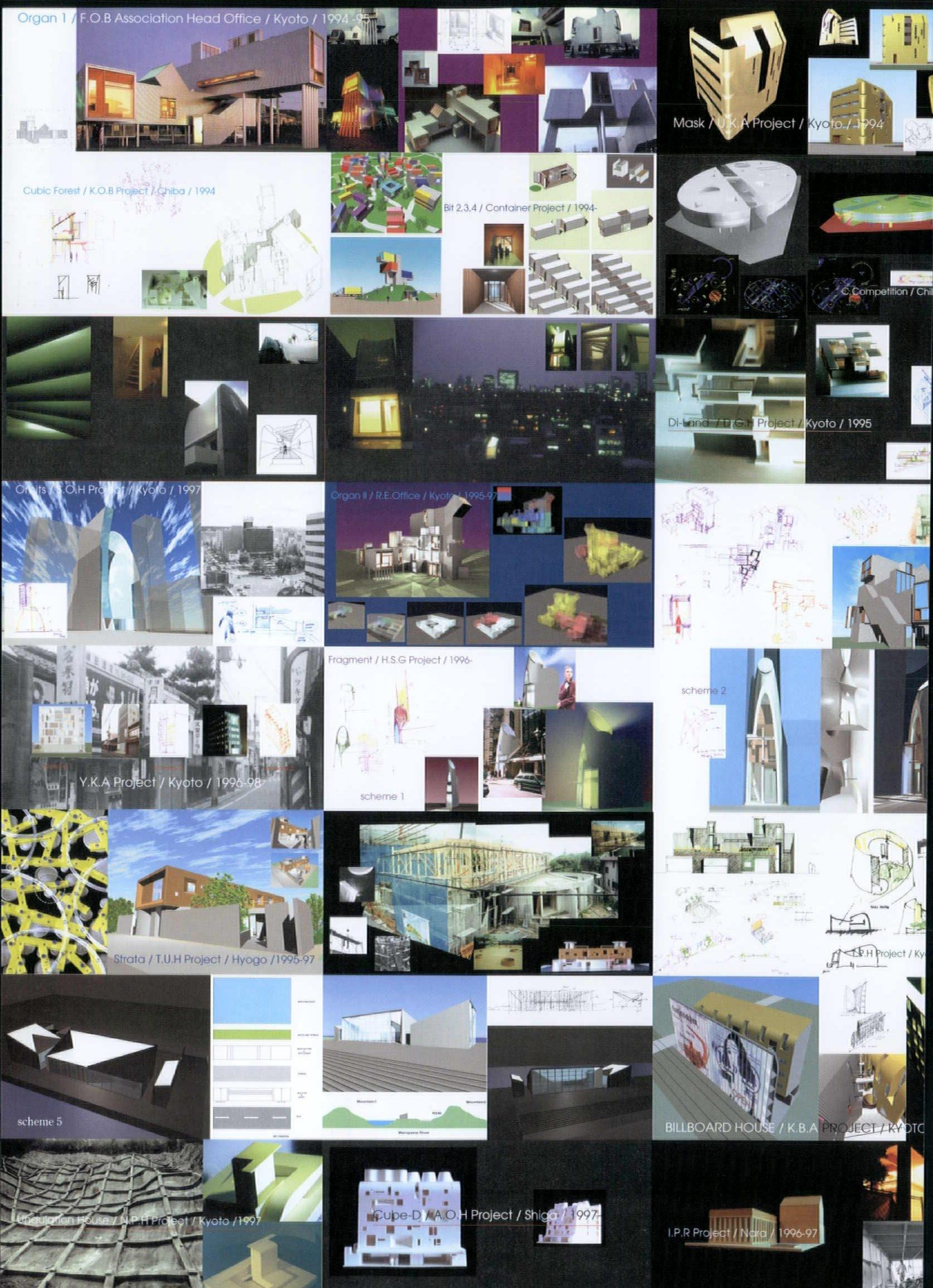


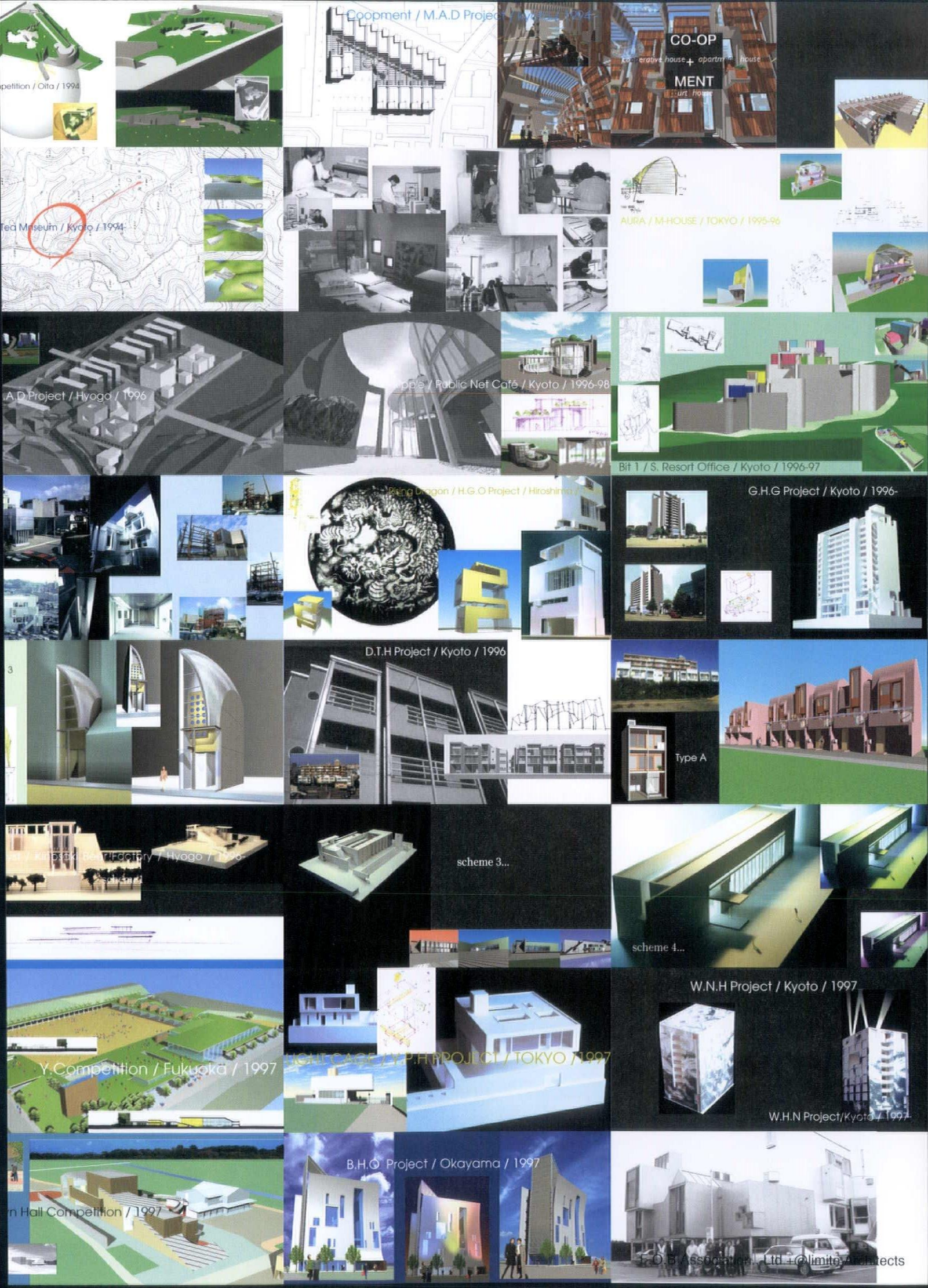
事務所平面図　1〜2階



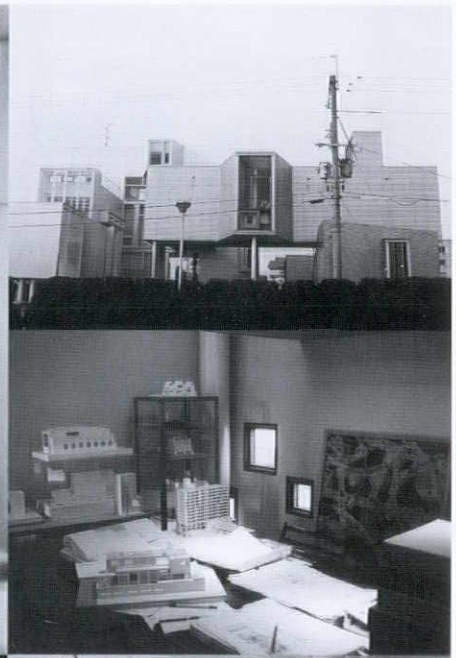
3階

所在地：〒611-0013京都府宇治市菟道田中34-3
Tel：0744-20-0787　Fax：0744-20-9888
アトリエ結成年：1994年
E-mail：fobalimt@wao.or.jp
スタッフの数：10名
活動内容：建築設計、ＣＧデザイン、ホームページ製作等。
基本的に「建築」の射程距離内にあることすべてが業務可能領域であり、その射程距離を拡大していくことがF.O.Bのテーマである。


Organ 1 / F.O.B Association Head Office / Kyoto / 1994 -95
Mask / U.K.A Project / Kyoto / 1994
Cubic Forest / K.O.B Project / Chiba / 1994
Bit 2,3,4 / Container Project / 1994-
C Competition / Chil
Di-Land / D.G.H Project / Kyoto / 1995
Organ II / R.E.Office / Kyoto / 1995-97
Y.K.A Project / Kyoto / 1996-98
Fragment / H.S.G Project / 1996-
scheme 1
scheme 2
Strata / T.U.H Project / Hyogo /1995-97
scheme 5
BILLBOARD HOUSE / K.B.A PROJECT / KYOTO
Undulation House / N.P.H Project / Kyoto /1997
Cube-D / A.O.H Project / Shiga / 1997-
I.P.R Project / Nara / 1996-97


petition / Oita / 1994
Coopment / M.A.D Project / Kyoto / 1994
CO-OP
MENT
Tea Museum / Kyoto / 1994
AURA / M-HOUSE / TOKYO / 1995-96
A.D Project / Hyogo / 1996
pple / Public Net Café / Kyoto / 1996-98
Bit 1 / S. Resort Office / Kyoto / 1996-97
Rising Dragon / H.G.O Project / Hiroshima /
G.H.G Project / Kyoto / 1996-
D.T.H Project / Kyoto / 1996
Type A
scheme 3...
scheme 4...
W.N.H Project / Kyoto / 1997
Y.Competition / Fukuoka / 1997
W.H.N Project/Kyoto / 1997
B.H.O Project / Okayama / 1997
n Hall Competition / 1997
T.O.B Association Ltd.+@limitedarchitects

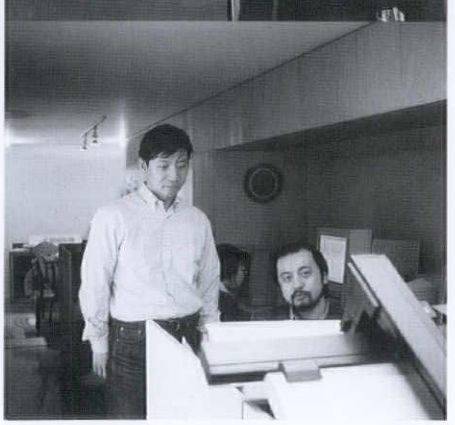












基本的に「建築」の射程距離内にあることすべてが業務可能領域である、と考えています。その射程距離を拡大していくことも我々の仕事のテーマです。

梅林 克（うめばやし・かつ）
1963年京都府生まれ。'87年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業後、高松伸建築設計事務所勤務。'93年カツウメバヤシアーキテクツ設立。'94年F.O.Bアソシエーション設立。'96年遠藤昭彦氏、松本正氏とF.O.Bアリミテ共同設立、京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン研究室非常勤講師。

松本 正（まつもと・ただし）
1963年奈良県生まれ。'87年京都大学工学部建築学科卒業。'89年ミラノ工科大学建築学部留学。'93年一級建築士事務所アトリエトレス設立。'94年京都大学大学院博士課程修了後、京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン研究室専任講師。'96年梅林克氏、遠藤昭彦氏とF.O.Bアリミテ共同設立。

遠藤昭彦（えんどう・あきひこ）
1959年山形県生まれ。'78年山形県立米沢工業高等学校建築学科卒業後、有限会社佐藤一級建築士事務所勤務。'86年工学院大学建築学科卒業後、高松伸建築設計事務所勤務。'94年F.O.Bアソシエーション設立'95年大阪美術専門学校非常勤講師'96年梅林克氏、松本正氏とF.O.Bアリミテ共同設立。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
施主との会話の中から。思考が短絡的なので具体的なプロジェクトがないと“DESIGN”など思いつきません（梅林）／ELECTA EDITRICEのイタリア建築家全集でパラディオやジュリオ・ロマーノなんかを眺めていると、梅林が横へ来て、「もう少し最近のものもみろ」と言う（松本）
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
ブルースナウマン、コンスタンチン・ブランクーシー、ジェームス・タレル、アーニッシュ・カーパ、荒川修作、etc...（梅林）／ミマシ・シナン、フェルメール、ポール・デルヴォー（松本）
●よく読む雑誌は何ですか
アエラ、ニューズウイーク、週刊現代etc.…。雑誌は電車の中でしか読まないので基本的にキオスクで売っているものか、ゴミバコに捨ててあるものです（梅林）／本の雑誌、サライ（松本）
●よく聴く音楽は何ですか
思考の邪魔になるのでまったく聞きません。（いずれいろいろトライしたいとは思っていますが）（梅林）／大のモーツアルティアーナだが、ハードロックも聴く。フォークも聴く（松本）
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
京男ですので当然祇園です。飲みにでるとたいがい先斗町あたりで食事して、祇園の「ITOH」か「花扇」で飲んで、その後伏見に流れ、「スパイシーハート」か「NONNON」で朝までくだをまく、というのがパターンです（梅林）／恥ずかしくて言えません（松本）
●オススメホームページを教えて下さい
我々の創ったHOMEPAGE宇治田原町公式ページを見て下さい。
http://www.wao.or.jp/ujitawara/（梅林）
●今ハマっているものは何ですか
建築（梅林）／川島雄三の映画、ギリシャの歌謡曲、志ん生の落語集（松本）
●好きな洋服のブランドは何ですか
ナシ。楽に着れれば何でもいいです（梅林）／エルメネジルド・ゼニヤ（が、高くて滅多に買えない）（松本）
●今の職業を選んだ動機は何ですか
高校生の時、彼女に「男がナルなら建築家が一番かっこいい」と言われたのと、GAの廉価版のコルビジェ全集を買ったのがきっかけだったと記憶しています。建築の、哲学や芸術やその他いろんな事にリンクしていける特性に惹かれました（梅林）／高校までバンドをやっていたが、才能のなさに気づいて音楽の道は断念。「大学どうするかなー」と考えていたとき、ネスカフェのCMに清家清氏が出ていた事を思い出したのが、この道に入った動機と言えば動機（松本）
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
作家性から出来るだけはなれ、今までとは異なる建築の意味や可能性を見出したいからです。「建築家」と呼ばれる職業の方法やスタンスの取り方を変えていくことからも「建築」を変えていく事が出来る、と思います（梅林）／例えばもし、ジョン・レノンとポール・マッカトニーがそれぞれソロで活動していて、ビートルズというユニットが存在しなかったとすれば、あれだけの楽曲は生まれなかった。我々の個人とユニットとの関係も（例えば凄すぎるけど）それと同じ事だ、と思っている（松本）
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
一元的でなくなっていることは良いことだと思います。モダニズムに対する多元的な世界観を響する大きな思想が不在で、スタイルの羅列になってしまう危険性があるとは思いますが（梅林）／個人的にはそれほど興味はない。ただ、1960年代初期にフラッシュバックしているような印象を受ける。最近、フォークソングがリバイバル的に流行していたりするのと、それは似ていて、60年代と今は、明らかに状況が変わっているのにほとんどそれを問題にしないのも、不思議と言えば不思議だ（音楽ネタが多いな、しかし）（松本）
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
ノスタルジック・モダンという方向が飽和点に達した後、緩やかな表現主義が登場すると思う。そしてさらに、近代としての「言葉」と「もの」についての最終検証が行われた後…（松本）
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
とにかく、これまでの「建築家」のフレームに拘泥している限り、先に進むことは出来ないから、そこからの逸脱を目指して、活動領域を拡張する。逆に言えば、それを可能にするためにパートナーシップを組んでいるのだ（松本）
●今の時代を一言で表して下さい
午前零時のゴドー待ち。（???の人はベケットの戯曲をお読み下さい）（松本）



ORGAN II（洛南エンジニアリング本社屋）

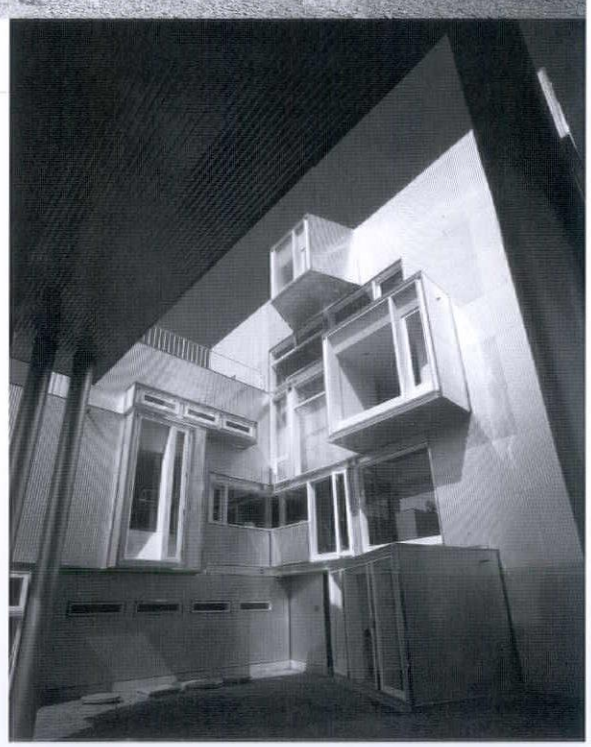
ORGAN I/II
Rule1.「TUBE」は、微弱な具象性を持ったヴォイドである。
Rule2.よってその内部には分節を持たない。（=ITS INSIDE HAS NO DOOR）
Rule3.様相や機能の変位によって、それは「分裂」を起こし、別の「TUBE」が発生する。
Rule4.ひとつの「TUBE」の終点は、「切断」がこれを明示する。
Rule5.「ORGAN」は、プログラムによって発生した「TUBE」の「総合」である。

（ORGAN=$\sum_{p=1}^{n}$PROGRAMn）

Rule6.「総合」化には、「TUBE」の具象性が作用する

RESULT1.SINGULAR PROGRAM（1 OFFICE,2FUNCTIONS）=ORGAN I
RESULT2.PLURAL PROGRAMS（2 OFFICES, VARIOUS FUNCTIONS）=ORGAN II

所在地：京都府宇治市蔵道田中
主用途：事務所
共同設計者：梅林克、松本正、森泰輔
敷地面積：276.89m²
建築面積：110.67m²
延床面積：334.49m²
階数：4階
主構造：鉄骨造
竣工年：1997年9月



ORGANIZATION BY TUBULAR SYSTEMS





CATALYST-KINOSAKI BEER FACTORY 'GUBI-GABU'

コストもさることながら、敷地を取り巻く圧倒的景観を目にした我々は、煩瑣な記号（＝デザイン）ゲームが、ここでは無意味であることを感じ取った。

そこでまずは、ビアホール、地ビール工房、機械室という3つの機能を、相似性を持ったシンプル・オブジェクトにまとめてそこに投げ出したのだ。と同時に、視線や人の動き、ホール利用の多様さ等の検討から大きい空間の流れ（ベクトル）を決定し、オブジェクトとベクトルを重ね合わせる。当然、オブジェクトとしての外部と、ベクトルとしての内部との間にはズレが発生する。このズレを操作して空間に歪みを与え、それによって生まれた様相の異なる領域に機能を放り込んでいく。オブジェクトの孔（＝開口）も、そこから決定される。この孔のパターンを、我々は、建築が（店舗として）外部に発信する唯一の記号として採用した。

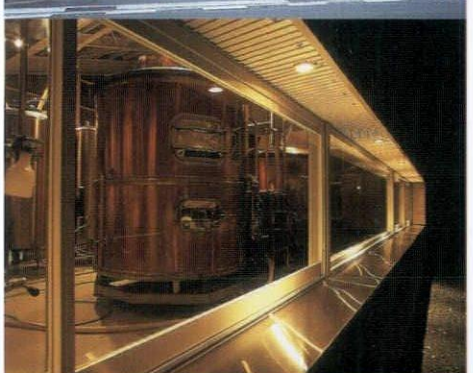
単純なオブジェクトとベクトルの重ね合わせが、重層的な領域を生み出し、内側から外皮へ向かって記号を決定する。それが我々の狙いであった。

昼、自然光と風景に満たされた内部は、夜、3つの発光するオブジェクトとして、円山河畔に浮かび上がる。

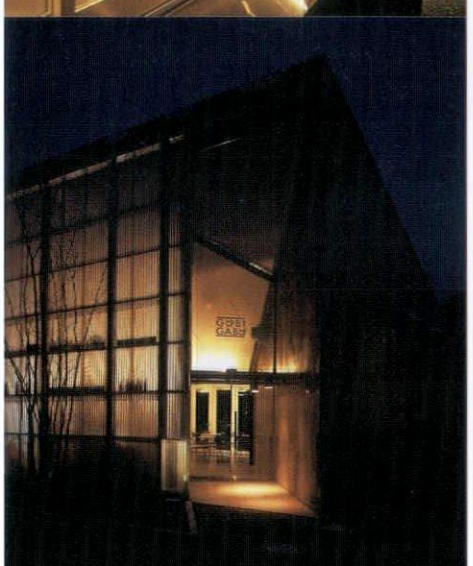
つまり、それがこの建築の「記号」なのだ。

所在地：兵庫県城崎郡城崎町来日128
主用途：飲食店および地ビール製造販売
共同設計者：梅林克、松本正、井上良祐
敷地面積：1401.66m²
建築面積：279.00m²
延床面積：278.50m²
階数：1階
主構造：RC造+S造
竣工年：1997年12月





THREE OF A LUMINOUS PAIR





I.C.U.



「Intensive Care Unit（集中治療室）」という事務所名は、「集中治療室が内科や外科といった区別なく患者に対して最良で適切な治療を施すように、建築の設計でも様々な垣根を取り払い、自分達のデザインやクライアントに対してクオリティの高いケアを目指す」というアトリエ発足当初の目標を表している。I.C.U.は現在活動の拠点が大阪と東京にあり、I.C.U.-Osakaを長田氏が、I.C.U.-Tokyoを清水氏が受け持つ。基本的に業務上のやりとりはE-mailで頻繁に行うため、大阪と東京という距離によるハンディキャップはほとんどないという。逆にE-mailを使うことにより、話し言葉による曖昧な表現が払拭され、またそこに生まれる微妙なタイム・ラグが冷静で客観的な思考を可能にしているのだ。I.C.U.の作品はある種の普遍性や匿名性を伴いながらも、多様な解釈が可能である豊かな空間を、極めてさりげなくやってのけている。一貫した作家性や手法論があるのではなく、その時に問題にすべきことを抽出し、それをテーマに設定することで設計に取りんでいるという。もうひとつの側面として、I.C.U.はコンペを非常に重要視する。様々なコンペに積極的に参加することで、自分達の考え方を検証するのだという。実際SDレビューに'95年と'96年にそれぞれ〈ヒヨコハウス〉と〈邯鄲ハウス〉で連続入賞している彼らは、「SDレビューの常連」である。

ffice



.C.U.-Tokyo



3階



I.C.U.-Osaka　2階

hiroshi yamamoto kenji hamagami takashi yamaguchi andreas kerl shuize akio igarashi naomi iwaki saiko fukuoka kimiyo ishikawa yasuo shimamoto haruya nishino miyuki tosa **mica matuo** hideyuki higeyama kuniko wada shingo hata ryu ryu do tateyo nagasawa megumi nishihara yoshiyuki watanabe sindo matuoka **yuji shimizu** masao tukui kenji katoh shigeru uemasu masanori terasawa kenzo terasawa yuko yamashita naoya kaneda tetuo seki kouji ikegawa hiroshi ohbayashi tetuo ohshima hisako hara toshiaki sonoda tadaaki takashima mituo naitoh seiji takahara tomio kumon masakaru taguchi fumio takamori kenzo tanimoto ad teruo takahasi kazusi saitoh gallery ma karuo kawasaki shinji ikada **naoyuki nagata**

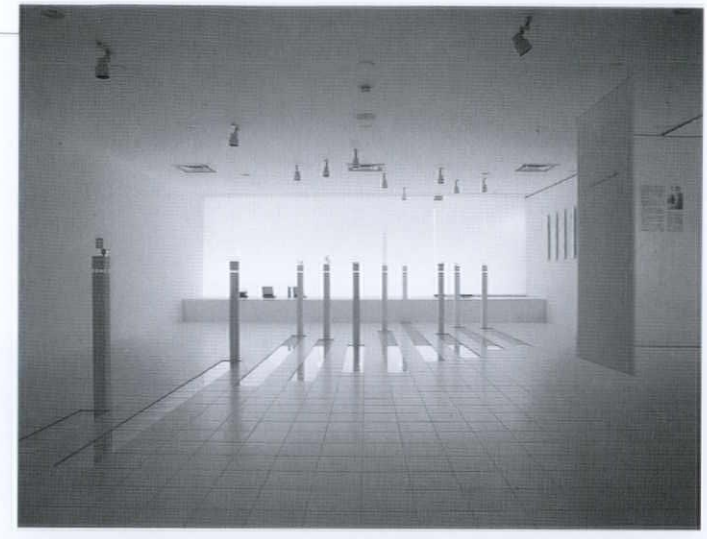
●I.C.U.-Osaka
所在地：大阪府大阪市北区豊崎3-3-14豊崎ビルディング
E-mail：rs9n-ngt@asahi-net.or.jp
Tel　Fax：06-376-3019
●I.C.U.-Tokyo
所在地：東京都葛飾区新小岩4-27-3-202
E-mail：shimizu@archi.ta.chiba-u.ac.jp
Tel　Fax：03-3653-8703
結成年：1994年
スタッフの数：5名
活動内容：建築設計、インテリア

ギャラリー間川崎和男展「PLATON'S ORGEL」

1994年6月に催された工業デザイナー川崎和男氏のギャラリー間での展覧会の会場構成。川崎和男が選んだ12人の哲学者やアーティストへのオマージュとして制作された12個のオルゴールを、それぞれの人の生から死に至る時間にそって配置した。床には、それぞれの人の生きた時間が川崎の代表作である時計〈HOLA〉によって写され、会場全体が年表と重なっている。展覧会の内容と空間構成が一体となり、その全体が高い精度で作られた会場には静溢な空気とオルゴールの音色が流れていた。

所在地：東京都港区
主用途：展覧会会場構成
竣工年：1994年6月

installation

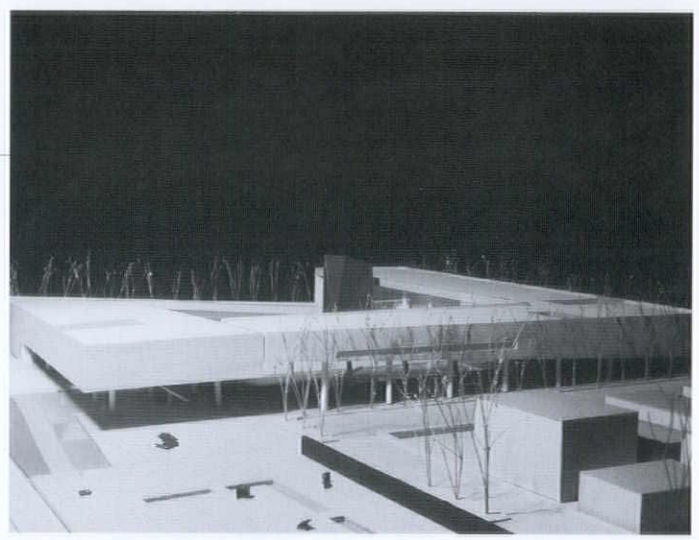


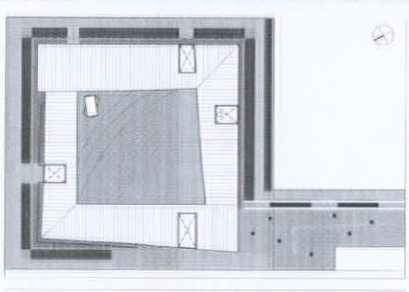
平田町タウンセンター

地方の町に建つタウンセンターのコンペティション案。大きく診療所・福祉センターと情報文化センターに分かれているが、どちらも諸室を線形に並べ、L字型に折り曲げた建築とし、それらを巴型に組み合わせることで中庭を囲んだ一体感のある配置となっている。これによって異なる建設期間に対応すると共に、空間と動線に螺旋状のダイナミックな動きを与えた。建築の中庭側と外側に二重の回廊を巡らせ、回廊のどこからでも目的とする施設へ直接アプローチできるランダムアクセスがひとつの特徴で、人々はまず中庭に導かれてから各施設へと向かう。また、駐車場を施設の周囲に巡らせ、自動車で来訪する高齢者や身障者などを含めた利用者が駐車場から施設にアプローチする際の距離を可能な限り小さくしている。

所在地：山形県平田町
主用途：タウンセンター
敷地面積：21200m²
建築面積：3856.3m²
延床面積：4116.6m²
主構造：鉄筋コンクリート造
階数：2階
計画年：1996年11月

competition





レストラン　ARATA

大阪西天満にある、新鮮な素材が持つ食材の旨味を生かした料理を中心としたレストランのインテリア。10坪弱と限られた広さを、さまざまな効果によって広がりの感じられる空間に変化させようと考えた。厨房と客席を分ける緩やかな弧を描くスタッコの壁、7度傾いて客席を包み込む木製パネルの壁・天井、鮮やかなピンクの布が張られた奥の壁は視覚的な安堵感を与える。客層の中心を30歳前後の女性とターゲットを絞り、色彩計画はカラーコーディネーター桑野優子と共同で決定している。

所在地：大阪市北区西天満
主用途：レストラン
延床面積：29.0m²
竣工年：1996年12月

interior

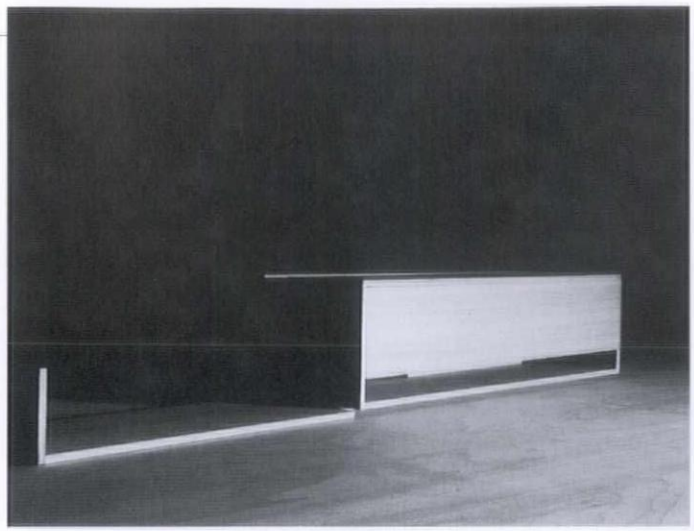


ヒヨコハウス

八ヶ岳を望む別荘地に計画された週末住宅。ここで生活する人が、場所と機能の関係を固定してしまうような契機をできるだけ少なくし、多様な行為が重層するような空間を意図した。建築はある場所にある時間ある状態で存在するが、それはさまざまな可能性のひとつにすぎない。空間の使用についてもそれが言えるであろう。そこが寝室であるのか廊下であるのかは、その行為の後でそう呼ぶことが初めてできるのである。通常の設計は行為と空間に一定の対応関係を想定しながら計画するが、このプロジェクトでは、演算的な方法によってこのような部分を可能な限り抑えようとしている。

所在地：長野県南佐久郡小海町
主用途：週末住宅
敷地面積：1095.1m²
建築面積：55.8m²
延床面積：55.8m²
主構造・階数：木造平屋建て
計画年：1995年7月

unbuild



邯鄲ハウス

郊外の住宅地の中に建つ住宅。恵まれた自然環境と隣接する敷地は計画公園内にあり、公園拡張のため、この住宅は15年後には解体・撤去されることが条件として課せられている。我々は、まず隣接する自然環境と連続するような空間を作りたいと考えた。それは、分節が明確でなく周辺の環境と内部空間が相互に浸透するような空間である。また、15年後に解体されるという条件は必ずしも制約ではなく、固定的で硬直した強度をもったものとしての建築を、可変的で柔らかな「弱さの視点」から捉えなおすことの可能性を我々に指し示している。家族の成長や環境の変化、やがてくる消失の時に対して、思い切った建築的な取捨選択を行う必要があった。それは、慣習的な空間の認知の仕方とその行為との関係性を交換可能な状態に保つことだ。この住宅は竣工した現在も完成していないのである。

所在地：大阪府箕面市桜ヶ丘
主用途：専用住宅
敷地面積：150.19m²
建築面積：90.03m²
延床面積：134.08m²
主構造：鉄骨造
階数：2階
竣工年：1997年7月

build

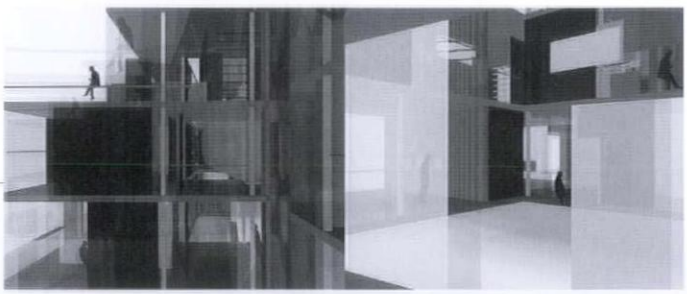


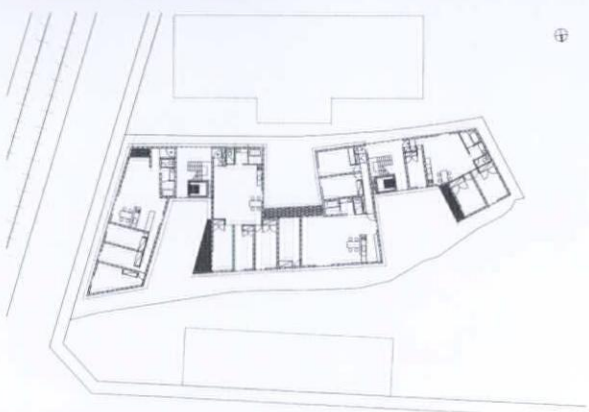
箕面ハウジング

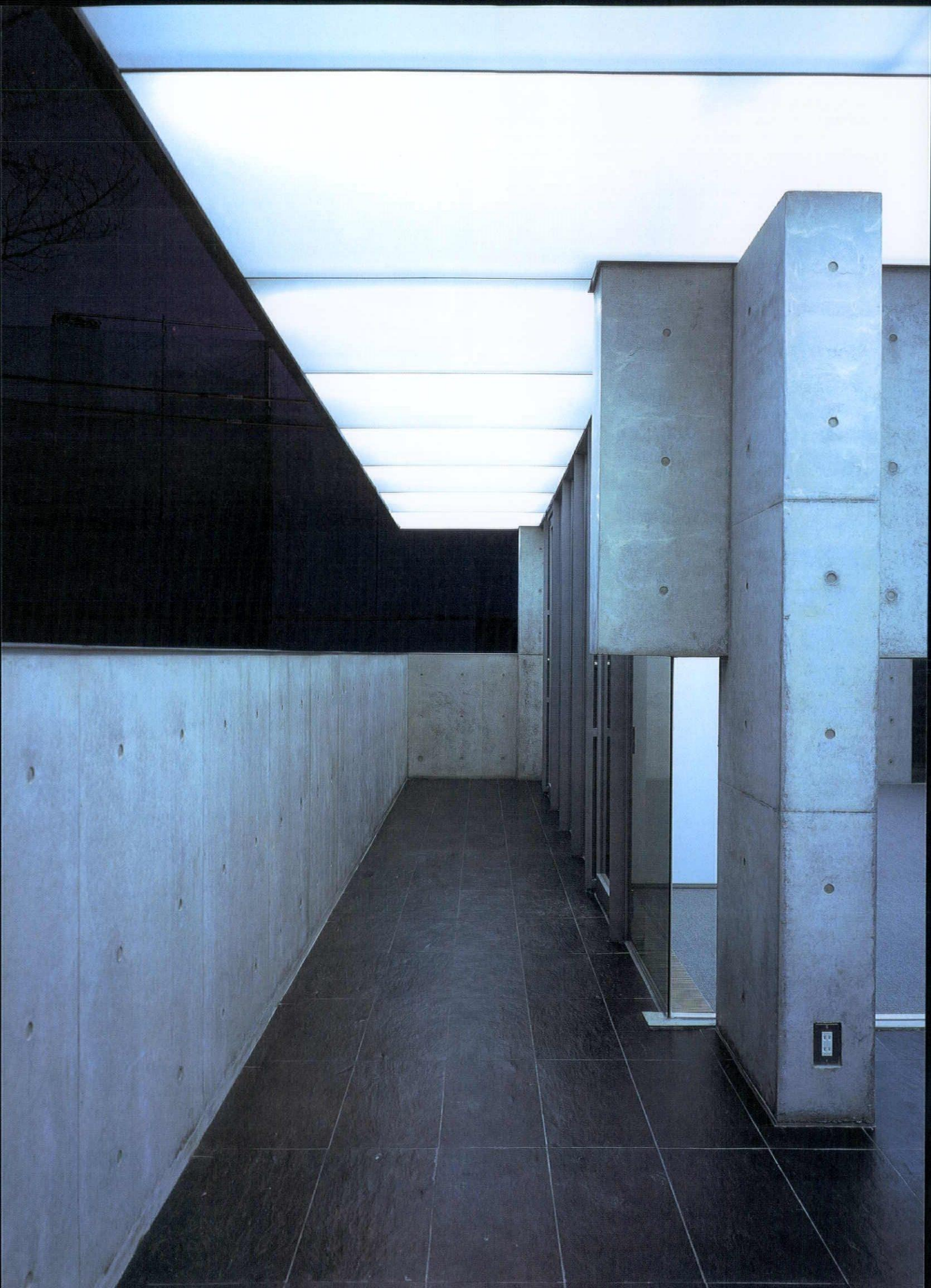
郊外の住宅地に建つ集合住宅。集合住宅は、南面採光、片側廊下という、強固な形式をもつビルディングタイプであり、それは不可避的に、建築に表と裏を作り出す。ここでは、階段室型の採用により表裏のない集住形式を試みた。また、集住環境においては住民同志や近隣の視線が空間を規定する重要なファクターとなっている。パブリック／プライベートという分節も、ほぼ視線の関係性へと還元される。狭小な空間に人が集まって快適に住まうことは、視線のコントロールによって可能になるであろう。そのために我々は二重の皮膜（ダブルスキン）を用意し、住人自身が皮膜の透過度を操作することで、多様な空間を作り出せるようにした。視線のグラデーションで場をつくってゆくこと。その「視線の場」は、中庭を挟んで向かい合う部屋との関係や内部の使い方によってインタラクティブに変化してゆく。

所在地：大阪府箕面市箕面
主用途：集合住宅
敷地面積：892.6m²
建築面積：90.03m²
延床面積：134.08m²
主構造：鉄筋コンクリート造
階数：4階
計画年：1997年6月

project









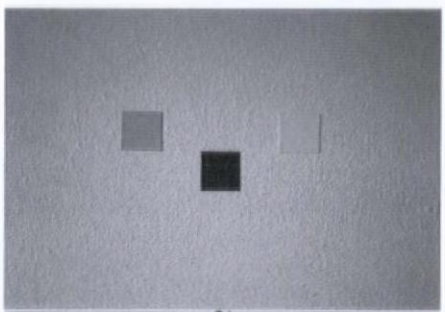




左より、長田直之、松尾美香、清水裕二



否定形によって開かれる地平（不定形、不安定、不安、非形式、非同期、無規範、反重力、欠損、弱さ……）





相談建築
温度差
フラットネス
来る者拒まず去る者追わず……

前ページの誌面について
今回この誌面を構成するにあたり、我々は進行中の西埜邸アネックスを素材として提供し、フォトグラファーの福永一夫氏に誌面の制作を全面的に依頼しました。福永氏は、現代美術やパフォーマンスなどの領域を中心に活動されています。ここでは、建築のリプレゼンテーションとしての（いわゆる）建築写真ではなく、写真を通して顕在化する写真家の視点（認識）が主題となっています。作り手の意図を超え出た視点。その発見こそ我々にとってスリリングであり、より広い視野を獲得する契機となるのではないでしょうか。（I.C.U.）

長田直之（ながた・なおゆき）
1968年名古屋市生まれ。'90年福井大学工学部建築学科卒業。'90年安藤忠雄建築研究所入所。'94年安藤忠雄建築研究所退所 '94年I.C.U.設立（浅真司と共同）。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
生活形式の全般としか答えられません
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
Farkas Molnar、Andreas Karl Schulze、Donald Judd、岡崎乾二朗
●よく読む雑誌は何ですか
Mac Power
●よく聴く音楽は何ですか
Fila Brazillia、Ryouji Ikeda、The sea and cake
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
大阪十三／請来軒（焼肉）、ステラマリア、梅田／邯鄲
●今ハマっているものは何ですか
newton
●好きな洋服のブランドは何ですか
COMME des GARÇON
●今の職業を選んだ動機は何ですか
小学校６年の修学旅行で国立京都国際会議場（大谷幸夫）を見学したのが建築を志すきっかけです。今後も建築に限らず、「感じる」ことと「考える」ことのできる仕事をしたいと思います。

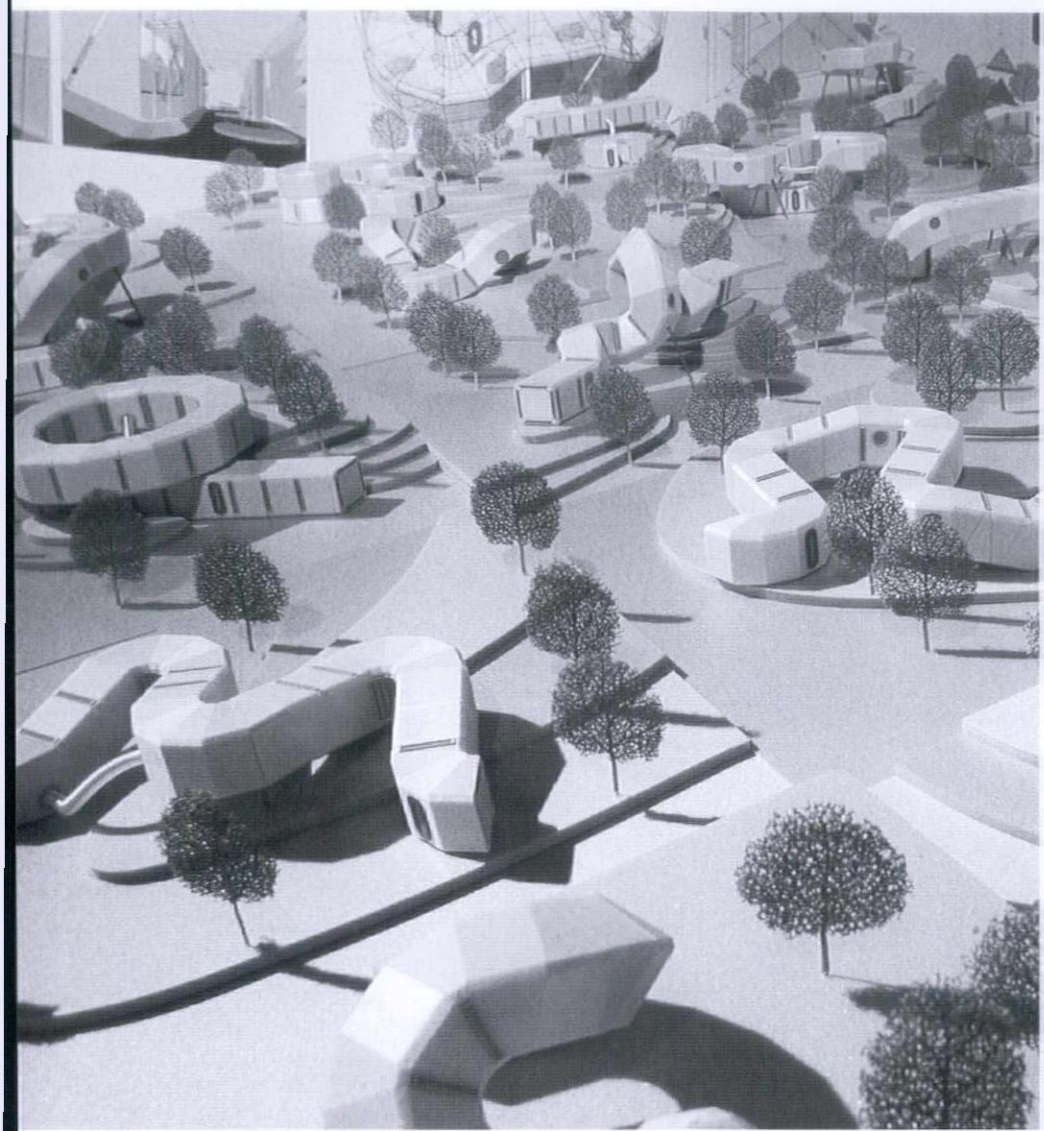
清水裕二（しみず・ゆうじ）
1966年新潟市生まれ。'90年東京大学工学部建築学科卒業。'95年東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。'95年千葉大学工学部建築学科助手、現在に至る。'96年よりI.C.U.にパートナーとして参加。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
特定不能
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
ジェームズ・タレル
●よく読む雑誌は何ですか
Number、メトロニュース（最近メトロアイドルの質の低下が懸念されている）
●よく聴く音楽は何ですか
南北アメリカ及びカリブ海におけるアフリカ系民族の音楽の展開（ゴスペル、ブルース、ジャズ、ソウル、ファンク、ロック、サルサ、アフロ・キューバン等）が基本だが、何でも聞く。ライブならLou Reed。最近はラテン寄り。テクノは弱い
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
西麻布／三河屋
●今ハマっているものは何ですか
「意識による身体のコントロールがどこまで可能か」という問題（端的にはダイエット）
●好きな洋服のブランドは何ですか
特になし
●今の職業を選んだ動機は何ですか
幼少よりモノづくりが好きだったが、小学校の頃ピカソ展を見てアーティストは断念。物理学者、航空エンジニア、カーデザイナー等色々考えた末、モノづくりの全体に関われる建築家がよさそうに見えた。

●今後どのような活動をしていこうと思っていますか（長田、清水）
建築は、極めて多様な活動の結節点として捉えることができる。工務店やデベロッパーなどはもちろんのこと、歴史家、批評家、社会学者、アーティスト、写真家といった様々な分野の人との共働を通して建築を作ってゆきたい。

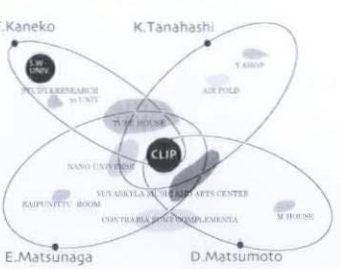
建築におけるカスパロフ問題（質問の答にかえて）
1997年5月、12年間その座を守り史上最強と謳われたチェス世界チャンピオン、ゲイリー・カスパロフがIBMのスーパー・コンピューター「ディープ・ブルー」に敗れた。呆然と宙に眼を泳がすカスパロフ。その残酷な映像は全世界に配信され、さながら公開処刑といった趣すら呈していた。限られた条件下では、人工知能はすでに人類の最高レベルの知性の情報処理能力を凌駕しているのである。ことは「ゲーム上での話」でかたづけられる問題ではあるまい。ここに至って、我々は懐然としつつこう問わねばならないだろう。「それでもなおカスパロフは必要か？」と。そこで浮上してくるのは、「記述可能性と不可能性」のエッジである。過去に打たれた手は、解析され、入力可能な言語で記述されることによって、ディープ・ブルーの戦略へと回収されてしまう。次にはもうその手は打てないのだ。カスパロフは、自らが打った手によって次第に追いつめられていくことになる。その恐ろしさを想像できるだろうか？もはや我々のとるべき戦略は、「常に記述可能性から逃れること」しかないのだ。そのためには、不断にそれまでの自己を否定し続けなければならないのである。ゲームを終わらせないために……。さて、建築デザインという極めて複雑な行為系が完全に記述されきるとは到底思えないが、チェスの世界チャンピオンが今世紀中にコンピューターに敗れることを予想した人もまた少ないのである。近い将来、デザインは「記述可能性と不可能性」の波打ち際で切り結ぶことになる。そんな想像もあながち笑い話ではすませられないのではないだろうか。建築デザインの過程に「自己否定システム」を内蔵すること。そこに、我々がI.C.U.というユニットを組んだ理由の一端があるのかもしれない。（カスパロフvsディープ・ブルーのページ　http://www.chess.ibm.com/）

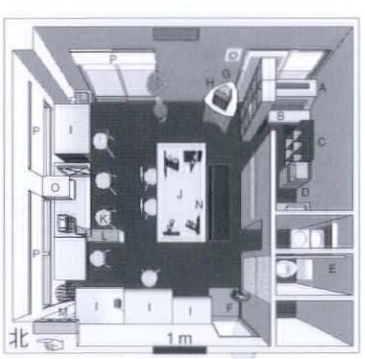
（有）一級建築士事務所 CLIP
ARCHITECTS OFFICE CLIP CO,LTD



リビングデザインセンターOZONE主催のコンペ「リビングデザイン賞」のグランプリ受賞がきっかけで'97年4月に現在のアトリエを結成した。彼らのデザインにおけるスタンスは、非常に複雑な現代社会の本質を、極めて単純な形態操作と最先端の科学理論の援用により表現するといったものだ。CLIPの名が広く知られることになった「第5回ジャパン・アート・スカラーシップ」のグランプリ作品にそのエッセンスが凝縮されている。スパイラル・ホールに設置されたこの「体験型」作品は、4重の半円という単純な形態に往復運動と円運動を組み合わせただけなのに、半径わずか7m足らずの空間から15〜20分以上も抜け出すことができないようになっているのだ。そこには体験者が軽いパニックに陥ることが巧妙に仕掛けられている。単純がゆえに生じる当初の心のゆとりとは裏腹になかなかそこから脱出することができず、徐々に不安感が増幅されてゆくのだ。先が見えそうで見えない白い半透明の壁に囲まれた空間が、真っ暗な闇にいるとき以上に恐怖感を掻き立てる。彼らはこれを「白い闇」もしくは「ホワイトノイズ」と表現する。一見透明そうだが得体の知れない現代の情報社会を痛烈に示唆しているのである。実施コンペティションにも積極的に参加するCLIPが、今後建築の実作でどのような展開を見せてくれるかが非常に楽しみである。

TUBE-HOUSE（第2回リビングデザイン賞グランプリ作品）





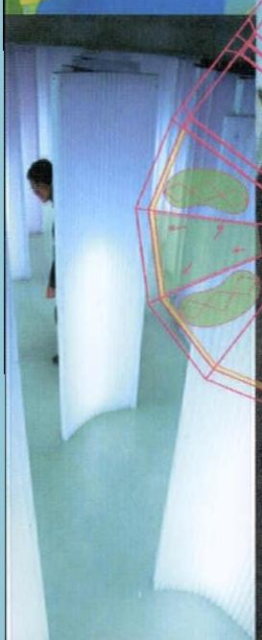
事務所平面図

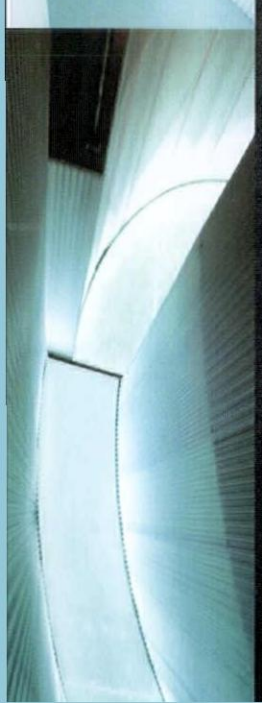
A：青焼き機：知り合いの事務所から頂いたもの
B：土台の机：知人から頂いたもの。模型材料置場
C：カラーBOX：前の事務所で使っていたもの
D：2ドア冷蔵庫：棚橋家の中古品
E：トイレットペーパー置場：粗大ゴミからリサイクルのカーテンレール用ツッパリ棒
F：籐製傘立て：粗大ゴミからリサイクル
G：TV台：展覧会用に製作したもの
H：14型TV：棚橋家の中古品
I：製図台：各自持ち寄り
J：四六板作業台の足：梱包用ベニヤの再利用
K：椅子：各自持ち寄り
L：サイドテーブル：粗大ゴミの下駄箱リサイクル
M：図面立て：電気屋の乾電池の看板をリサイクル
N：ソファー：MADE BY CLIP
O：キャンチ棚：MADE BY CLIP
P：ロールスクリーン：格安養生シートに張り替え

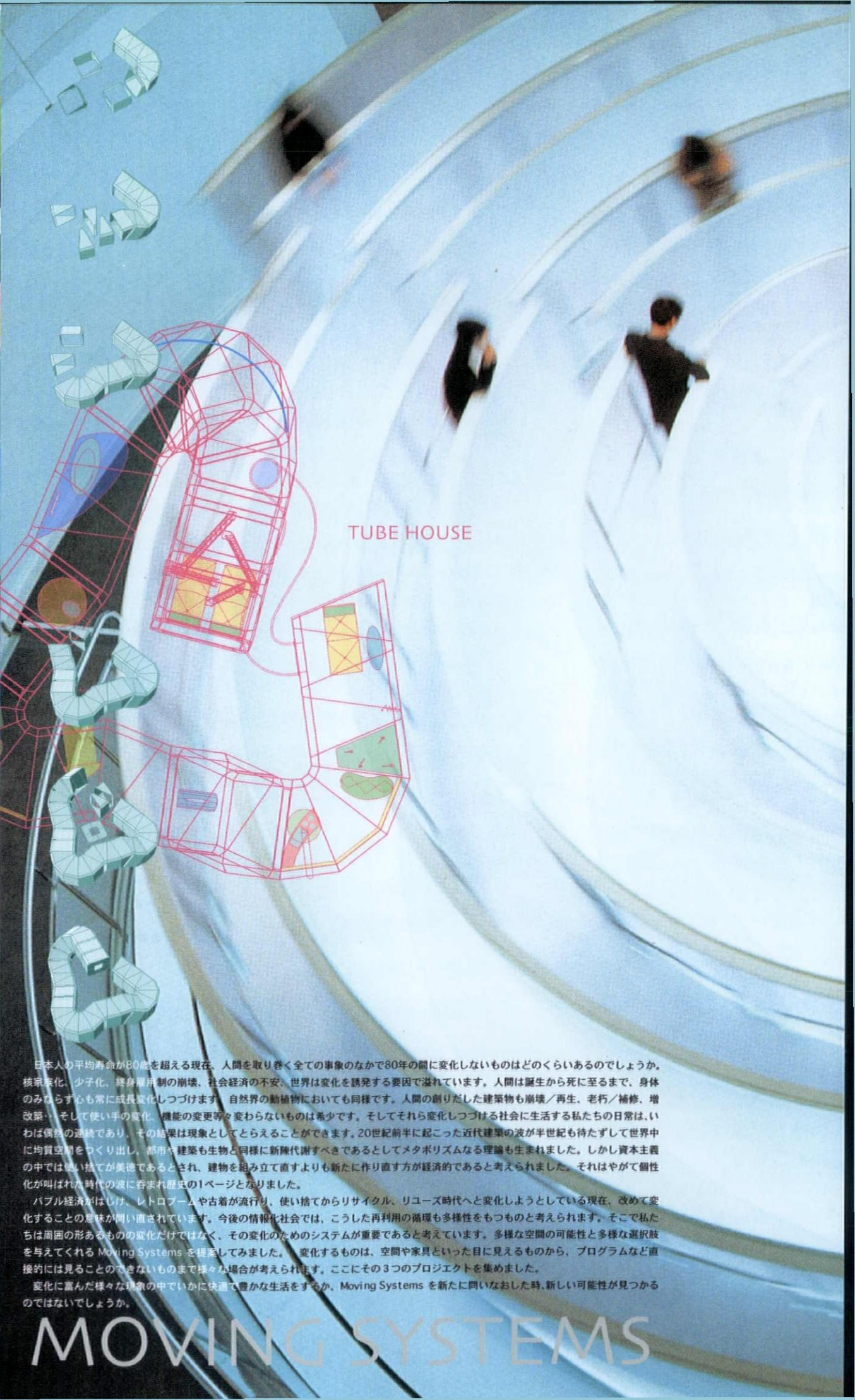
所在地：〒154-0001　東京都世田谷区池尻4-29-22-203
Tel：03-5430-0068　Fax：03-5430-0096
アトリエ結成年：1997年4月
スタッフの数：4名
活動内容
1.建築の設計、工事監理
2.環境デザイン、都市計画、地域計画
3.各種店舗内装設計、什器設計
4.各種模型製作
5.遊具設計、プロダクトデザイン
6.イベント企画
7.前記に関する研究、コンサルタント











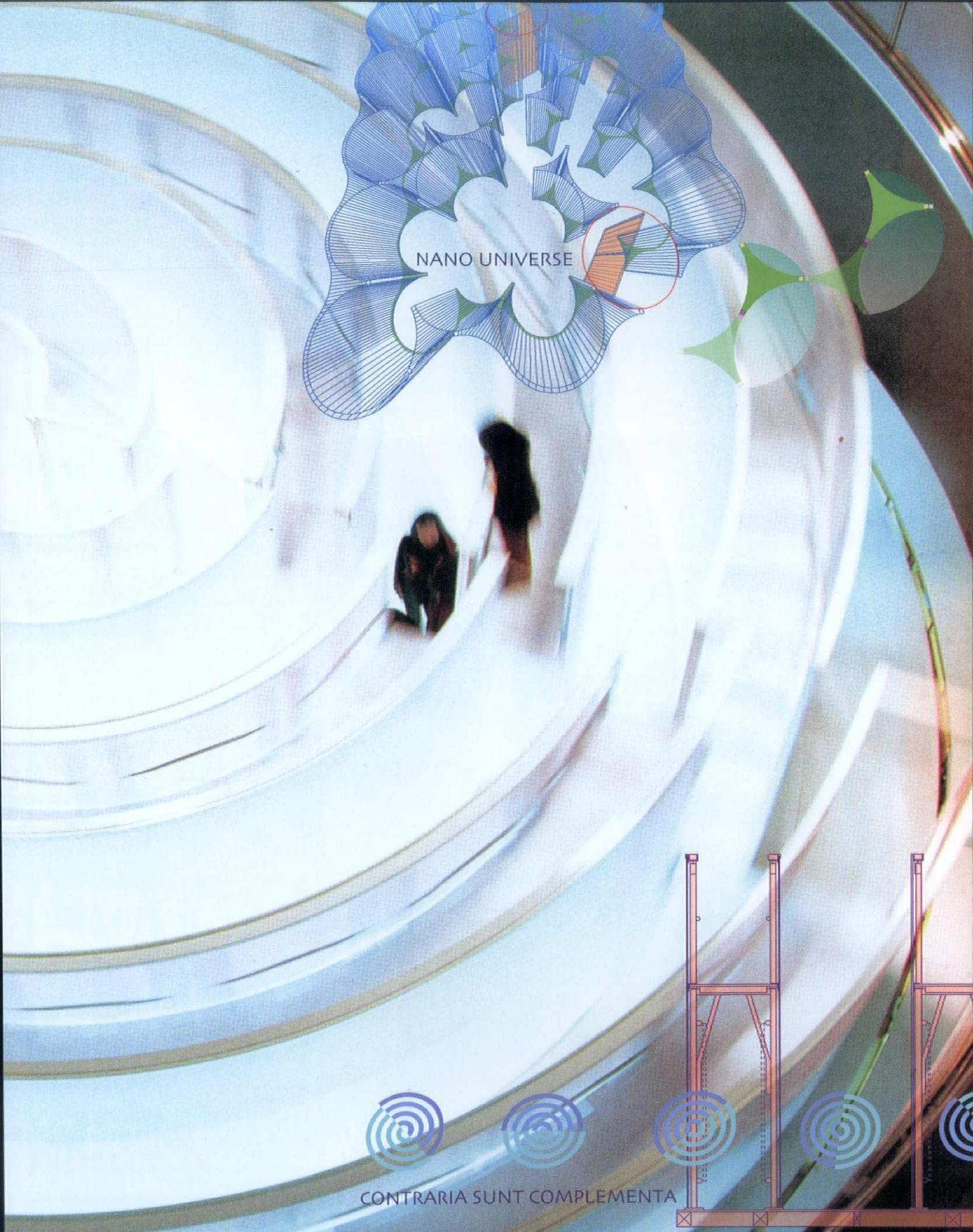
TUBE HOUSE

日本人の平均寿命が80歳を超える現在、人間を取り巻く全ての事象のなかで80年の間に変化しないものはどのくらいあるのでしょうか。核家族化、少子化、終身雇用制の崩壊、社会経済の不安、世界は変化を誘発する要因で溢れています。人間は誕生から死に至るまで、身体のみならず心も常に成長変化しつづけます。自然界の動植物においても同様です。人間の創りだした建築物も崩壊／再生、老朽／補修、増改築・・・そして使い手の変化、機能の変更等々変わらないものは希少です。そしてそれら変化しつづける社会に生活する私たちの日常は、いわば偶然の連続であり、その結果は現象としてとらえることができます。20世紀前半に起こった近代建築の波が半世紀も待たずして世界中に均質空間をつくり出し、都市や建築も生物と同様に新陳代謝すべきであるとしてメタボリズムなる理論も生まれました。しかし資本主義の中では使い捨てが美徳であるとされ、建物を組み立て直すよりも新たに作り直す方が経済的であると考えられました。それはやがて個性化が叫ばれた時代の波に呑まれ歴史の1ページとなりました。

バブル経済がはじけ、レトロブームや古着が流行り、使い捨てからリサイクル、リユーズ時代へと変化しようとしている現在、改めて変化することの意味が問い直されています。今後の情報化社会では、こうした再利用の循環も多様性をもつものと考えられます。そこで私たちは周囲の形あるものの変化だけではなく、その変化のためのシステムが重要であると考えています。多様な空間の可能性と多様な選択肢を与えてくれる Moving Systems を提案してみました。変化するものは、空間や家具といった目に見えるものから、プログラムなど直接的には見ることのできないものまで様々な場合が考えられます。ここにその3つのプロジェクトを集めました。

変化に富んだ様々な現象の中でいかに快適で豊かな生活をするか、Moving Systems を新たに問いなおした時、新しい可能性が見つかるのではないでしょうか。

MOVING SYSTEMS


NANO UNIVERSE
CONTRARIA SUNT COMPLEMENTA



左から棚橋、金子、松本、松永

個人活動を制約しないルーズなグループ活動形態です。
——個人をクリップで繋ぎ止めています。



松永英伸（まつなが・えいしん）
1964年静岡県生まれ。'87年東京電機大学工学部建築学科卒業、DIPLOMA最優秀作品賞受賞。第10回レモン画翠卒業設計展覧会出展。'89年東京電機大学大学院修士課程修了。'89～'96年　原広司+アトリエ・ファイ建築研究所'97年第2回リビングデザイン賞グランプリ受賞。5th.JAPAN　ART　SCHOLARSHIP　グランプリ受賞一級建築士事務所CLIPを共同で設立。'98年Moving Systemsリビングデザインギャラリー。

棚橋 国年彦（たなはし・くにとしひこ）
1965年岐阜県生まれ。'89年愛知県立芸術大学美術学部デザイン科卒業。'89～'95年　原広司+アトリエ・ファイ建築研究所。'95年　棚橋SD研究所設立。'97年第2回リビングデザイン賞グランプリ受賞。一級建築士事務所 CLIP を共同で設立。スーパーフック展出展。'98年Moving Systemsリビングデザインギャラリー。

松本 大（まつもと・だい）
1962年石川県生まれ。'86年東京芸術大学美術学部建築学科卒業。1988年東京芸術大学大学院修士課程修了。'88～'89年菊竹清訓建築設計事務所。'90～'96年原広司+アトリエ・ファイ建築研究所。'97年　5th.JAPAN　ART SCHOLARSHIPグランプリ受賞。一級建築士事務所CLIPを共同で設立。

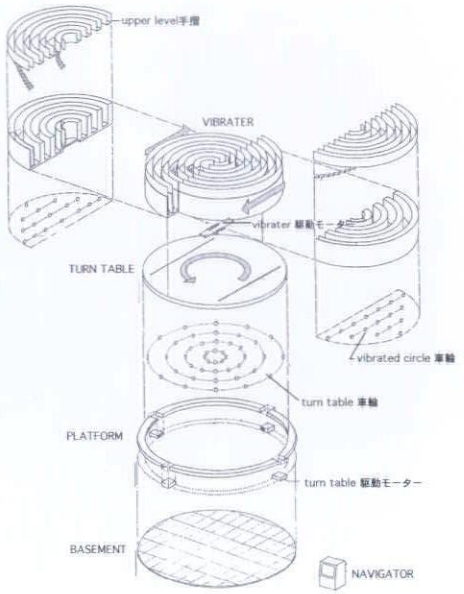
金子友美（かねこ・ともみ）
1965年栃木県生まれ。'88年昭和女子大学家政学部生活美学科卒業。'93年昭和女子大学大学院修士課程修了。'97年第2回リビングデザイン賞グランプリ受賞。一級建築士事務所CLIPを共同で設立。'98年Moving Systemsリビングデザインギャラリー。現在、昭和女子大学生活科学部生活環境学科講師。

●デザイン・ソースをどこから得ていますか
雑多な文献及び日常生活（松永）／海外調査、TV、電車の車内広告（棚橋）／日常見聞きする都市の断片（松本）／女子大生のパワー（金子）
●興味のある建築家、デザイナー、アーティストは誰ですか
フレデリック・ボレル、岩井俊雄、八矢和彦、妹島和代…（松永）／倉俣史郎（棚橋）／無回答（松本）／CLIP（金子）
●よく読む雑誌は何ですか
日経サイエンス、朝日サイアス、矢沢サイエンスオフィス編集による雑誌（松永）／wind（棚橋）／AERA（松本）／ELLE DECO（金子）
●よく聴く音楽は何ですか
日常的にラジオから流れている音楽、UA（松永）／MIKE OLDFIELD（棚橋）／無回答（松本）／J-WAVEはよく聴いています。好きなのはSMAP（金子）
●よく行くお気に入りの店や場所はどこですか
真砂図書館、水道端図書館、大橋図書館、アクアライブラリー、漫画喫茶（松永）／ハンズ（棚橋）／CLIP（松本）／藤が丘駅前公園、渋谷西武（金子）
●オススメホームページを教えて下さい
無回答（松永、棚橋、金子）／INTERNET未経験（松本）
●今ハマっているものは何ですか
料理（松永）／体感アート、ランドスケープアート（棚橋）／無回答（松本）／イタリア語（金子）
●好きな洋服のブランドは何ですか
イッセイミヤケ、ハナエモリ（松永）／イッセイミヤケ（棚橋）／余裕なし（松本）／gigli、Plantation（金子）
●今の職業を選んだ動機は何ですか
建築が好きだから（松永）／学生時代に見た建築雑誌（棚橋）／建築空間を楽しめるから（松本）／……（金子）
●個人活動ではなくユニット活動を選んだのはなぜですか
資金が無い、ひとりだと寂しい、情報を入手できる（松永）／ひとりはよくない（棚橋）／文殊の知恵（松本）／寂しいから、非力なので人に助けて貰いたい（金子）
●昨今の建築デザインの潮流をどう思いますか
潮流を意識した潮流になっていないだろうか（松永）／魚の群れ（棚橋）／モダニズムの再発見（松本）／ボーダレス、建築とアート等の枠が無くなっていくのではないでしょうか（金子）
●今後建築のデザインはどのような方向に向かうと思いますか
Moving System（松永）／玉感空間（棚橋）／新たな空間の発見（松本）／上に同じく（金子）
●今後どのような活動をしていこうと思っていますか
創作活動全般（松永）／なんでもあり（棚橋）／ジャンルを問わない（松本）／「建築」という枠に捕らわれない活動をしていきたいと考えています（金子）
●今の時代を一言で表して下さい
なんと!（松永）／長いトンネル（棚橋）／不況（松本）／しまうま（一頭だけなら個性的な図柄になるが群の中では個が同化もしくは埋没してしまう）（金子）

CONTRARIA SUNT COMPLEMENTA
回転する振動体
第5回ジャパン・アート・スカラシップグランプリ作品

中心を同じくする4重の半円が互いに向き合い、それぞれが反対の往復（振動）を行う。この半円を組み合わせた渦巻きの図像は、振動によって周期的に反転し、円内に立ち入った被験者は全体が回転することで方向感覚を喪失しながら、求心運動と遠心運動を交互に体験する。これが、経路の進行において「相補性を持った対立する運動の同時存在」を表出する。中心にたどり着いた被験者は、壁上部への階段を見つけ上のレベルに移り、通りすぎた通路を見渡して下のレベルの被験者の観察者となる。そして「観察者と被験者という相補性を持った対立する立場の人間の同時存在」を体験する。このような関係はモデル内の被験者とスパイラルスロープの観測者との間にも成り立ち、現象と観察の3重の相補性が形成される。この単純な装置で、複雑な現象の関係性を表出することにより、現代情報社会の「白い闇」あるいは「ホワイトノイズ」とでも名付けられる情報の闇を体験することが可能にできたのではと考えている。

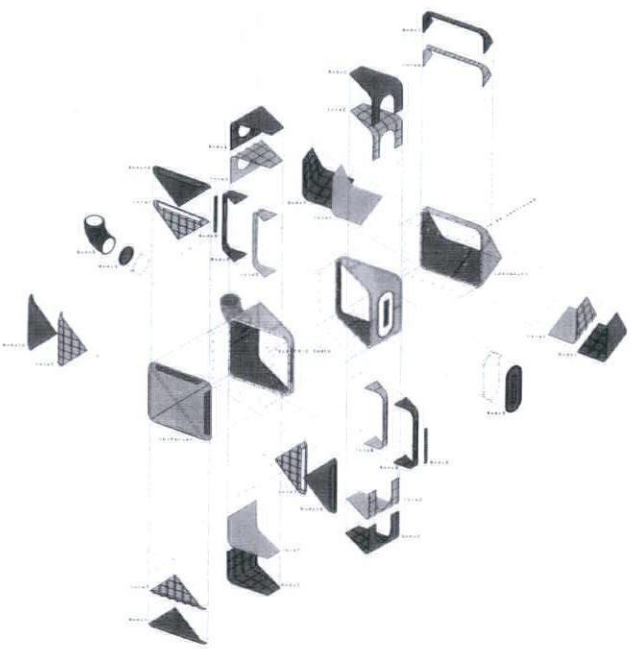
展覧会開催地：東京青山スパイラルビル1Fスパイラルガーデン
展示期間：1997年11月1日～11月9日
外径寸法：13.6m円形
高さ：3.35m
構造：下部／舞台用回り舞台、振動部／木構造（105×105）、上部壁体／現場用型枠足場
仕上げ：外壁／乳白色塩ビ波板、床面、階段／ベニア板t=15 op、手摺／ST op



TUBE-HOUSE　第2回リビングデザイン賞グランプリ作品

幼い頃ススキノのトンネルや土管の中に、自分達の秘密のアジトを作った記憶はないだろうか。そんな感覚で作れる家を提案しようと私達は考えた。この製品の最大の特徴は、プランニングから施工まで全て、購入者自ら行えることにある。それは単純な形の1ユニットの組み合わせで様々な三次元的形態を生み出すため、購入者の要望にあったそしてどんな地形も破壊することのないプランニングが可能だからである。さらに全てのパーツが人力で運搬でき、接合・取付も乾式工法による施工を想定している。購入者は初めに1／100スケールのモデリングキットで、ブロックパズル感覚を楽しみながら自分だけの家を試作するであろう。本体ボディーの他、ワープトンネルパーツやインテリアパーツ、設備パーツも各種カラーバリエーションを含め取り揃えている。子供のための増室、2世帯住居への改築もユニットの交換や追加により気軽に行える柔軟さは単純なシステム故の利点であろう。

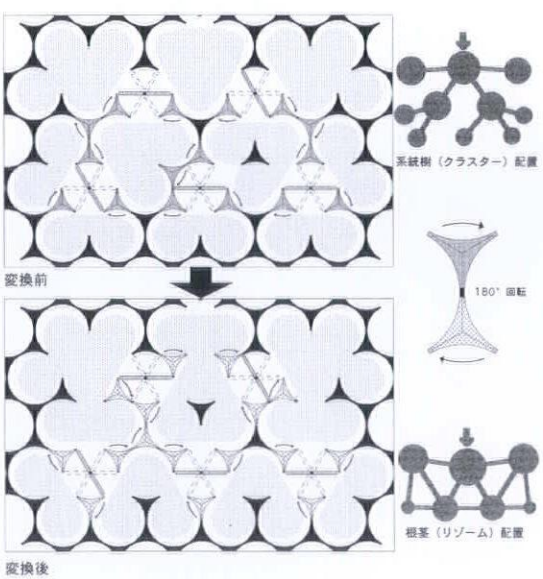
展覧会開催地：東京新宿パークタワー3F
リビングデザインセンターOZONE OZONEプラザ
展示期間：1997年1月30日～3月4日
展示規模：1.8m×1.8m×1.8m
提案内容：外郭構造、FRP製品

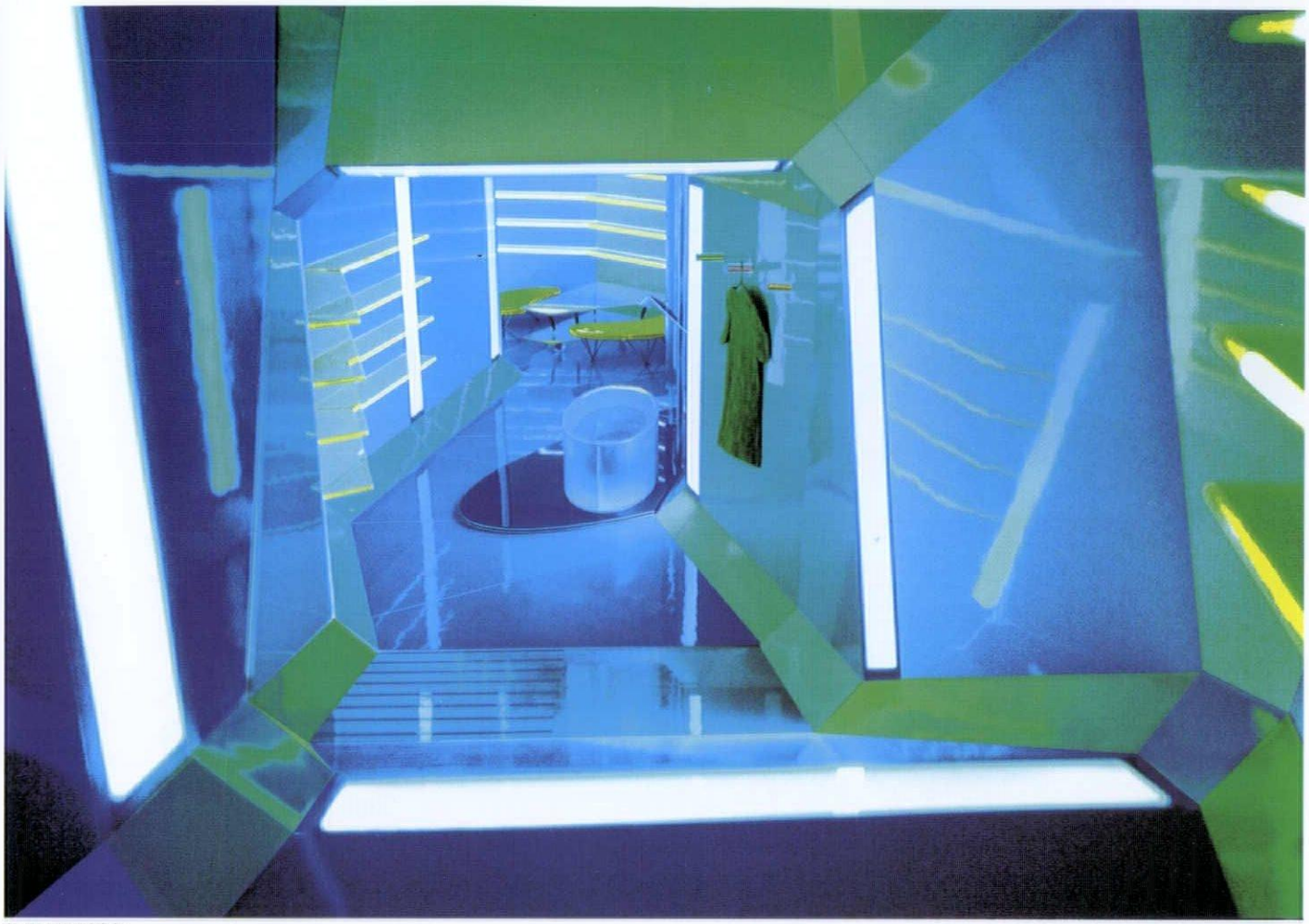


NANO UNIVERSE ARCHITECTURE
自己組織化する空間　リビングデザインギャラリー展示作品

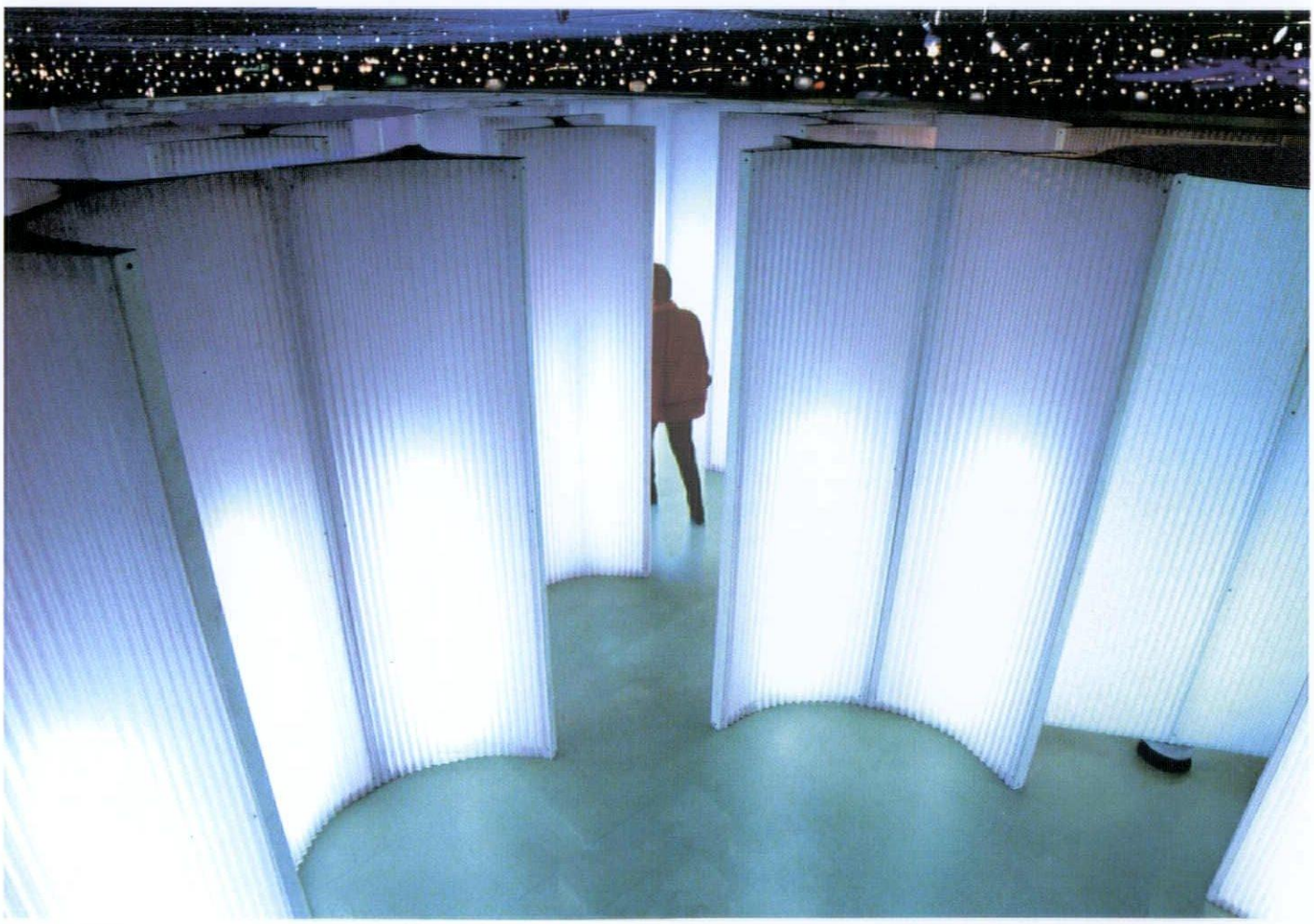
生活様式は、環境変化に合わせて変化していくものである。ここでは変化に対応するインテリア又は建築システムのプロトタイプとして、展示、実験を行った。このシステムは1ピースが一辺約60cm、高さ約219cmの三角柱状の物体を6個組み合わせることにより、最小で直径126cmの円形の部屋が成立する。このピースの組み合わせで多様なプランニングが可能となるが、さらに個々のピースが回転することにより、瞬時にプランニングが変化し、それによって部屋の大きさや部屋同士の関係性も変化する。それはまるで舞台セットのように場面の転換をもたらすが、使用しているパーツの個数及び回転軸の配置は変化、移動しないため、より簡易に生活様式の転換を行える。同時にリサイクルやリユーズ時代のひとつの回答と捉えられるこのシステムは、ピースの回転というミクロ的な変化と全体のプランニングというマクロ的な変化の密接な関係が、宇宙の構造、性質が本来的に持っている原理である、自己組織化現象としても捉えられるであろう。

展覧会開催地：東京新宿パークタワー 6F
リビングデザインセンターOZONEリビングデザインギャラリー
展示期間：1998年1月15日～1月20日
外径寸法：12m×6m
高さ2.2m
構造：木構造（45×40）MDF9mm蛍光灯40W内蔵
仕上げ：乳白色塩ビ波板、木部op塗





TUBE-HOUSE内部



NANO UNIVERSE

公開座談会

制度と建築、そしてユニット活動の展望

パネラー

曽我部 昌史／みかんぐみ、長田直之／I.C.U.、中村 潔／建築少年、
大西若人／朝日新聞東京本社学芸部、田路貴浩／明治大学講師、中谷礼仁／建築史家
司会：杉山弘樹／KAJIMA DESIGN（社内誌ARC編集長）



司会　建築と社会性についてまずお話を伺おうと思います。私自身は郊外に近いような所で育ちましたが、今、社会現象として良くも悪くも日本全国が総郊外化しているような状況にあります。そうした状況を建築は変えていく、あるいは受け入れていく力を持っているのかどうか、またそのような社会性の中で、ご自身の経験や原風景が今の活動にどのような影響を与えているとお考えでしょうか。

田路　私は京都に長く住んでいましたが、東京に来て2年が経とうとしているところです。2年前に初めて明治大学の生田キャンパスを訪ねた時のことですが、待ち合わせまでに多少時間があったので、喫茶店でお茶を飲むことにしました。京都と同じつもりで、大学のある街だから途中に喫茶店ぐらい探さなくても見つかるだろうと思っていたら、ついに見あたらずに大学に着いてしまったのです。とにかくすごくショックでした。生田の研究室の窓から外を見ると、堀口捨己先生の真っ白な校舎の向こうに、また真っ白なアパートがザーッと並んでいて、頭も真っ白になってしまい、それこそリアリティを喪失してしまいそうな感じです。つまり、我々はそういうリアリティが希薄な郊外で毎日を過ごしているのです。

中谷　郊外を無性格な空間とか、歴史性のない空間みたいなものとして捉えるのは、私は基本的にはあまりいい考えではないなあと思っています。例えば、「東京が均質空間で覆われ尽そうとしている」、そういう文章をよく見かけます。例えば、新宿超高層を均質空間の象徴とします。だけどそのまわりには昔ながらの木賃アパートがまだ残っていて、それぞれの時代を刻みつけているわけです。だから均質空間といっても、実は東京にはそんなものはなくて、ある種の時代的な様式としてのみ存在している。「均質」といったドグマみたいなものを相対化するだけの雑多な空間が存在しています。それを考えることが僕は大事だと思います。

曽我部　そうですね。我々の原風景のベースにあるのは、非常に多岐にわたったリアリティというか、経験に支えられた、自分たちにとって普通だと思える状態だと思っているので、それが社会と設計行為の接点になっていると思います。建築を定義しているのは建築ではないので、それ以外の関係してくる要因がものすごくいっぱいあると考えていまして、なるべく視点を広げていき、かかわってくる条件をどんどん引っ張り上げていき、ごく普通だと思える組み合わせの状態を完成させようというふうに考えているわけです。普通だと思えるような感覚が原風景だと言っていいのであれば、そういった経験の集積で毎回建築を考えているというようなことになるのではないかと思います。

長田　私は、建築家の作るものが変わることで社会的状況に大きな変化が起こるとは、なかなか考えられません。郊外の環境を変えれば、サカキバラはいなくなるというのは、かなり建築や建築家の影響力を過信していると思います。建築はどのようにそのような問題に関われるのでしょう。確かに、同時代に発生する様々な問題がありますが、その大半が建築という枠組みのなかで解決可能な問題ではないように思います。建築を取り巻いている与条件や、社会的な制度など、問題はもう少し、別のところと絡んでいたり、あるいは隠れていたりするのではないでしょうか。その辺りを整理しない限り、社会的状況も建築も変わりようがないというような気がします。

大西　今、長田さんが建築で社会は変わらない、そんな力はない、とおっしゃったことは私もそのとおりだと思いますが、宮台さんが昨年1年間「ウォッチ論調」という連載を月1回朝日新聞の文化面でやっていただいた時に、建築は非常に面白いと言われたんです。最近はそれこそ透明な小学校が増えている。透明というとすごくいいけれど、逆にいうと、いつも監視されているのではないか、そういうことを考える糸口をくれる建築というのは非常に面白いという話をされてました。つまり建築というのは制度そのものとして解釈されるんだと思うんですね。だから、建築家がどう考えているかは別にして、建築ってすごくいろんな制約の中で、経済的にも法的にも、構造的にもいろんな意味で制約そのものの中でつくっていくわけですから、現在の制度の最終的なあらわれ方として見られるんだと思うんですね。ですから、建築で簡単に世の中を変えるわけにはいかないんでしょうけれども、建築はそれを否が応でもあらわしていると捉える存在ではあると思うので、そういう意味では、建築って実はなかなかのものではないだろうかと思います。さっき司会者の方から原風景という言い方がありましたが、体験というか、記憶とか経験みたいなものの中にそういうものが入っていることが、もしかしたら何か違ったものとか、新しい可能性につながるんじゃないかなと、これはあくまでも新聞記者として思っています。

曽我部　大西さんのおっしゃっていた制度の反映として建築が現れるというのは、まさにそのとおりだと思っていまして、制度が建築にある形をもって反映して影響を与えているという状態なんだと思います。だから、制度を完全にフォローする、あるいは実体化するといったように、制度を表現することには基本的に興味はあまりないし、逆に制度に対してアンチテーゼを唱えようとも思わない。ひとつの建築をつくろうという時に、そこに影響を及ぼしているいろんな制度があって、それは一言でいえるようなものではきっとない。要は、当たり前だと思える状態にすればいいんじゃないかというのが言いたいことで、その当たり前だと思える状態というのは、ひとつひとつの建築に影響している制度も含まれていると思うんですね。

中村　建築家は社会や制度に対して何ができるかと考える時には、常に建築というものが都市の中の部分をつくっていくということを認識しなければならないということなんでしょうね。都市という全体は常に変化し、捕まえようとしたとたんにまた変わっている、そのような中でどのようにして部分が全体と関係を持つか、バランスをとるかということは、すぐに答えを出せることではないと思うんですが、何か建築と他とを関係づけるような仕掛け、装置というようなものを考えていく必要があるんじゃないかと思います。

司会　ところで、巨匠のように非常に知名度があり、社会に対して影響力を持った建築家という存在、あるいは大文字の建築というも

の自体が、まさしく今再定義されようとしているし、また今回座談会に参加されている方々がゆるやかなユニットで建築の領域を拡大しようとしているように少なくとも我々には見える。そうした今の社会性の中での若い世代の匿名性、ゆるやかな組織体の中で活動をされていることの実態として、具体的にどういうメリット、デメリットを感じてらっしゃるか、そして今後自分たちの中で、あるいは後に続く人たちの中で、ユニット活動がどの様になっていくとお考えになるかというあたりを伺いたいと思います。

曽我部　我々はユニットをつくることが最大の目的ではもともとないんですが、ユニット化するとものの考え方が立体化していきますから、そういう意味では頭が複数あるということがメリットなんじゃないかなというふうには思っていました。ただ、3年こういうやり方を続けてきて、デメリットもずいぶんはっきりとしてきています。それはものの決め方がどんどん硬直化していくということなんですね。新しい状態を考えようという感じになかなかならなくなるというところを最近自覚していまして、これをなんとかシステムを変えて改善してみようかなということをいま我々は考えています。ですから、ものの決定のプロセスが硬直化するというようなマイナス面を組織というのは抱えてしまうのかなという気が自分の組織を通して感じました。今後、建築の職能はどうかということについては、長田さんの「建築なんて大したもんじゃないよ」という話に僕も共感しているんですが、何も新しくものをつくるというようなことに限らないという気がするんですね。コンサルティング的なことだとか、別に建築として表現しないということも出てくるかなという気がします。

長田　先程、建築は大したものではない、という内容のことを言いました。すべてのお膳立てが整って、与えられた条件や制度の範囲でデザインをしてくれと言われても、できることは限られているし、その影響力も小さいということが言いたかったわけです。いま曽我部さんがいわれたように、ものとしての表現が伴わないようなことや、建築以外のことをどれだけ考えられるか、あるいはその条件をどれだれ変換することができるか、ということが重要ではないかと思っています。その際、ある優秀な建築家が個人の能力をかけて問題を解決したことにするのが非常に有効な場合もあります。私自身もそのようなシステムのなかで働いていましたから、そのことも自覚しています。しかし現代のように問題が複雑になるにつれて、ひとりの人がすべての問題に対してに妥当な答えを出していくということに限界があることにも気付きました。また、私自身は自分の弱点を隠蔽するのではなく、広い関係性のなかに投げ出すことの方に魅力を感じました。その結果パートナーと事務所を始めることになりましたが、すべてが上手くいったわけではありません。リスクや自分に何が不足しているのか、またメリットや提供できることがらについて、冷静な判断が必要だと思います。パートナーシップというのは非常に脆弱な枠組みですから、メリットもデメリットもあくまでも関係性のなかに発生したことという認識が必要です。また、パートナーと協同することで、選択できる可能性が少しだけ広がるような気がします。仮に一人が10個の選択肢を用意するとして、ふたりで20個ですが、重複するものもあります。ここで注意しなければならないのは、重複する選択肢に注目するよりも両者の「違い」を検証することだと思います。組織の話として、情報の流れ方が一定ではなく、ワープしたりすることがあってもいいと思うし、つねに組織が硬直化しないようなプログラムをあらかじめ用意しておくとか、つねにプログラムが変更されているということがあってもいいのではないかと思います。

中村　長田さんがおっしゃるように、本人は柔軟と思っていても、結局は上意下達の一方通行のヒエラルキーが形成されて、私たちから見たらちょっと教祖様的な存在になってしまうと思うんですけど、そういったものに対して何か違和感を覚えるんです。今はいろいろなグループが出てきたなと思いますけど、同様のものは私たちのひとつ上の世代ですでにあったと思うんですね。僕らの身近にはアモルフという存在があったわけですが、上の世代と僕らとの違いは、時限付き、つまり解散を前提としていることです。結局のところグループでやったとしても時間を限定しなかったら、同じような組織ピラミッドをつくる可能性がある。また枠をいくらでも拡げられるということがカリスマ的な存在をなくすということではなくて、限定された時間の枠の中からなくしていく、そういうことができないかと考えたんです。実際やってみると、みかんぐみもそうだとおっしゃってましたけども、いろいろと問題がある。4人で一緒にやろうと思ってもなかなかうまくいかないんです。この3年間やってみて、結局のところふたりで組んでやる仕事がほとんどで、入れ替わり立ち替わりしながらふたりでやっていってるんです。それは、1対1の対話の中でより密度の濃い情報が引き出されるからで、相手に自分の意見を納得させるためには、自分自身も外に出て行ってほかのペアを見つけながら、外に対する対話を見つけていけるんです。外に対する対話と内に対する対話の集積としてグループというものがあるんじゃないか、うちの事務所の場合実際にそんな感じで、3人以上でやるとうまくいかなくて、ふたりが対話を繰り返しながらつくっていったものがうまくいっていると思います。僕たちの後も、さらに次の「建築少年」を生み出せるような土壌をつくれないか、ある種、建築学校的なもの、建築家を生み出すような場所をつくれないかということで、事務所に集まってくる学生たちとの対話を始めています。僕たちの活動自体は期間限定ですがここから始まる対話が制度的な枠にとらわれずに拡大していってくれることを期待しています。

中谷　私は建築で社会を変えられるかというテーマと組織論を関連づけて話してみたいと思います。まず、建築で社会を変えられるかということの反論というか、昔、僕が頭をガツンとやられた言葉があって、それを紹介します。それは、鹿島出版会から出ている鈴木博之さんの本で、「建築は兵士ではない」という題そのものなんですね。それは僕の基本



制度を表現することには基本的に興味はあまりないし、
逆に制度に対してアンチテーゼを唱えようとも思わない。

上の世代と僕らとの違いは、時限付き、つまり解散を前提としていることです。

的モチーフになっています。そのふたつの言葉の対比で考えてみると、例えば「建築は社会を変えられるか」ということの前提にあるのは、建築の有目的性、なんらかのことをやれば、なんらかの効果が必ず期待できる、といった考え方が前提にあるわけです。逆に「建築は兵士ではない」と言った時、これは何かというと、無駄とか、遊びとか、がむしゃらな労働とか、建築等学会*がまさにそれで、がむしゃらに学会をやるんだけど、なんだかよくわからない。でも、面白いことは面白い。あまり二項対立的にいうのは良くないですが、この言葉それぞれが有効な組織は何かということを考えてみたい。個人的には職能としてのゼネコンと建築家という分け方はほとんど意味がなくなっていると思う。しかし大組織と小組織の違いというのはあるのではないか、という気がします。「建築で社会を変えられるか」という問いは大組織の中において有効なものじゃないかと思うんですね。というのは、そこでは仕事が定量化され、目的化され、予想される成果を出さなければいけない。小組織ももちろんそうなんですが、大組織の関係性はより多数の運命共同体を左右するわけだから、非常にリジッドなんですね。ただ私は大組織の方法論を考えてゆくことは歴史的にも重要なことだと思っています。一方で「建築は兵士ではない」、これはどちらかというと、在来の小規模商店街みたいなところで有効な方法論だと思うんです。小さい組織は他者との共同戦線でしか存在し得ないという弱さがある。すると周囲との出会いによって常に新しい価値をつくっていかなければいけない、つまり決まった目的は決められなくなるわけです。逆にそれが実は面白いところなんだと思います。

大西　曽我部さんのお話の中で、当たり前と思える状態にしたいというお話があったと思うんですが、たくさんの人間の当たり前があったほうがより普遍的な当たり前になると考えてユニットにしているのか、別の理由でユニットにしたらそういうものを目指すことになったのか、どちらが先だったんですか。

曽我部　結論から言うと、普遍性を求めようなどという気はありませんでしたし、たぶん今もないです。我々5人はそれぞれ相当考え方が違っていますが、違っていると言いながらもある範囲の中でだというふうに思っていまして、だから誰にでも通用する普遍的なものを目指すというよりは、自分が少し拡がったぐらいのことしか意図してないんですね。でも建築少年の時限付きというのは非常にうまいやり方だなと思うんです。というのは、NHKのコンペをやる時は5人がいいと思ってましたが、どうしても今の5人の組織が崩せないというのが実はあって、それをちょっと反省しているんですね。

会場からの質問　皆さんが20～30年後も設計活動を続けていたとして、数十万m²というような建物を扱うという場合には、建築の概念や社会に対する責任が出てくると思うんですね。つまり今のように小規模な作品をつくっているのと比べ、ある意味での「巨匠」性、社会に対する責任が生じるわけです。その辺りはどうお考えでしょうか。

曽我部　例えば、建築の面積は1000m²だったとしても、考えている面積は数十万m²ぐらいの大きさの範囲でものを考えるようなことになるんじゃないかなという気がします。規模の大小に関わらず、考えなければいけない範囲は基本的にはあまり変わらないんじゃないかというのが個人的な意見ですが、ただ数十万m²を一度に動かせといわれると、かかわってくる状況が整理できるかどうか、正直いうと自信はなくて、そういうのはあまりやりたくないというのが率直な感想ですね。

田路　つまり今の時代というのはたぶん前衛やアヴァンギャルドという言葉が死語になっていて、何か新しいものをつくり出していく巨匠という建築家像が成り立ちにくい時代なんだろうと思います。昨年の暮れ、坂本一成先生にかなり深くお話しをうかがう機会があったのですが、その時「自分のことを前衛だと思うか」と尋ねてみたところ、彼はそうだとおっしゃったんです。それは自分自身が前衛であるということよりも、自分の建築作品が前衛をめざしているということを意味していたようです。ところがいまはそれさえもが難しいのです。しかしながら、前衛が困難であるとはいえ、私は何か新しい建築が生まれてくる現場に立ち会いたい。その時に、果たしてそれはユニットから出てくるかは疑問です。むしろ、ミケランジェロとかル・コルビュジエみたいに非常に個性的な突出した人物が新しい建築の概念を提出するんじゃないだろうかという気はします。そういう一種独断的な決断とか選択みたいなものがやっぱり時代を切り開くのではないでしょうか。

司会　今日のお話は我々全員に投げかけられたテーゼだと思います。どうもありがとうございました。

今の時代というのはたぶん前衛やアヴァンギャルドという言葉が死語になっていて、何か新しいものをつくり出していく巨匠という建築家像が成り立ちにくい時代なんだろうと思います。

KEYWORD



*：建築等学会　1997年11月、建築を専攻する大学助手、院生、若手OB有志により設立された学会。「なぜ、建築等なのか。建築は建築などだからである。」という理念のもと、建築と他領域との関係を照らしだし、かつ加速させていくことが本学会の基本方針である。詳しくはホームページを参照。
URL：http://nadoo.arch.waseda.ac.jp/

備考：本座談会は、KAJIMA DESIGNの皆川典久氏、田中大介氏の協力を得て、KAJIMA DESIGN主催社内講演会（水曜会）「現代建築の可能性――若手建築家による模索」とのタイアップで実現したものである。

「空間認識」についての覚書

現代に生きるクリエイターたちは、いかなる方法で空間を知覚するのか

岸野雄一

かつてリビングルームは、広角的な視点を共有できる壁面の一部に設置されたテレビジョン受像器＝モニターを中心に、家族団らんの場として設計された（らしい）。今やモニターは放送受信ばかりでなく、室内のどこにでも移動可能な「窓」としてさえ機能している。またリビングに於けるオーディオ・システムについても、スピーカーの2辺を結ぶ三角形の頂点が最良のリスニング・ポイントとして設定され、かつてそこにはソファーとテーブルが置かれた（らしい）。しかし今やオーディオ・システムは聴かれるばかりでなく、リミックスされ演奏されるものとして、民生用のDJミキサーを中心としてリスニング・ポイントが決定される。その結果、リビングはゲームセンターでもあり、オフィスでもあり、クラブでもあり、音楽スタジオでもあるという混沌を生み出しつつある。こうした変遷は、テレビ放送が開始され、丸テーブルの一辺にあたるモニターに背を向けるポジションが空席となった時にも当然起こったし、それが論議の対象にもなったようだ。こうしたハードの進化に準じるだけでなく、当然のことだが、都市総体の進化は建築と人間による共生的な意識によって成される。空間によって生活様式が要請される場合もあるし、様式によって空間が定義される場合もある。強いていうならば、それは能動的な進化の意識ではなく「歩み寄り」といった曖昧な次元に拠るものだろう。私はひとつの嗜好として、思惑を超えた次元で事情や都合によってなし崩し的に成立してしまった「歩み寄り」に魅せられる。責任の所在の明らかでないものや、在るべき価値を問われないもの、それでいてことさら無根拠であることを顕揚しない慎ましさを持ったものなどだ。もちろん私はそのちぐはぐさを楽しみたいわけではない。しかし、もともと在るべき空間という制限を使って造られる建築が、いつのまにか大仰な空間の定義や厳密なコンセプトのみに意義を集約され過ぎてきたように見受けられるのだ。表象行為でありながら生活圏でもあるという稀なるフォーマットを持った建築の世界で、制約や規則から完全なる自由が保障されているという錯覚や、妥協点を隠蔽する手つきを見出してしまうのは、筆者の意地悪な資質だけが原因だろうか。いつの時代でも「歩み寄り」は強かで狡賢く諧謔的であるが、どこかしら憎めない愛らしさも持っている。今回の特集で紹介されている若い世代のクリエイターたちに共通するのは、「歩み寄り」を「妥協の産物」としてでなく天真爛漫に享受しているという点で共通しているのかもしれない。さて、こうした新しい世代の台頭を紹介していく場合、その新しさのスタイルばかりが偏重されがちであるが、彼らは「新製品」や新たなライフスタイルを無自覚に受け入れ、それに合わせて新しい空間を提示しているだけではなく、新たな問題意識をも共有している世代である。そこでこの項では建築家や空間クリエイターに限らず、軽くて的確なフットワークとスタンスを持ちながらも、新たな問題意識を持っていると筆者が感じる方々を選び、取材に協力していただいた。四人四様でハードやライフ・スタイルの変遷に敏感でありながら、彼らは手放しでそれらを享受してはいない。その変遷がどのように空間の意識にフィードバックされるかを中心に、語っていただいた。

デザイナーとしてのキャリアだけでなく、最近はゲームクリエイターとしての活躍も目立つ松本弦人氏は、前述のハードの進化に由来する居住空間の問題について切り出したとき、膝を乗り出してまずこう語った。「鎌倉にあった某設計事務所の社員食堂にさ、凄く良い丸テーブルがあったんだよ。で、オフィスの改造でその丸テーブルが取り払われてから、妙に仕事の進行が悪くなったんだって。多分どこかで、仕事の話だけではない昼食時の意思の疎通っていうのが、プロジェクトの進行に大きく影響していて、それで円滑に進んでいたんだろうね。結局、あの丸テーブルだって事にみんなが気付いて、社員食堂に復活したらしいけどね」。松本氏のオフィスも、例えば2階には冷蔵庫を置かない、等の方法で分業が分化し過ぎない工夫をされているという。特にパーソナルなツール化が進行し過ぎているコンピューターの位置付けには当然だが意識的であった。「もちろんネットワーク接続されて、どのように仕事が進行しているか把握は出来る。でも、一番の問題点は『作業の履歴が見えにくい』ということなんだ。この結果は一時間かけて出来たものなのか、一晩かけたものなのか、結果からだけでは見えてこないよね。そこで『現場感』が失われてしまうというのが、一番気になっている。なぜ、ここを直したかったのか、なぜ、こう直したのか、何を問題として感じたのか、という事が一緒に作業を進めている人間に伝わっていかないんだよ。ブツブツ独り言を言いながらマウスを動かすわけにもいかないしね。これではスタッフの長であるオレが何をしたいのかが、みんなに分からなくなってしまう。チームのスタイルを維持するという点でも、後継者を育てるという意味でも問題ありだね」実は今回の取材は、松本氏がどこかの雑誌で答えていた発言が直接的な契機となっている。「出前でとったドンブリや器が散らかっていたら、普通片づけるでしょ」。これは氏が手掛けた「ジャングル・パーク」に於ける操作環境や楽しみ方についての発言である。我々がゲ



松本玄人

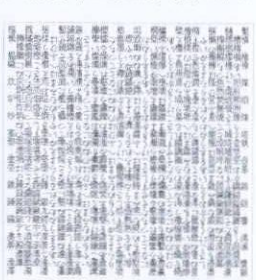


オリンピックTシャツデザイン

●「現場感」が失われてしまうというのが、一番気になっている…／松本玄人



中ザワヒデキ



（二九字二九行の文字座標型絵画第一番）

●僕にとっての空間とは、デスクトップと同意義です／中ザワヒデキ

ームに向かうときには「欲望を満たしたい」だけでも「スリリングに感じたい」だけでもない。「戯れたい」やら「整理しておきたい」気持ちも兼ね備えているはずである。松本氏のこの発言は、一般性を統治し規定したがるクリエイターとは呼びがたい娯楽提供者とは正反対の、人間に於ける「人間性」を信じた優しい眼差しを感じさせてくれる。

モニターの前に置かれた椅子、その椅子の背面の空間はほとんど意味のないものになりつつある。しかし、他人数のスタッフを抱えて進行するプロジェクトの場合、この背面の空間が大きな意義を持ってくる。「モデムにつないで未知の人間と対戦出来る家庭用ゲームの企画を進めていたんだけど、電話のジャックをリビングのゲーム機までつなげるのに長いケーブルが必要になるじゃん。そのケーブルがたえず床に転がっている景色を想像した時点で、このプロジェクトは断念した」これも松本氏らしい発想である。

こうしたデスクトップ環境に於ける空間の定義付けに特に意識的であったのが、美術評論家としても名高い中ザワヒデキ氏だった。パレットなどのツール類をもう一台のモニターに待避させるデュアル・モニターを応用した作品を発表するなど、美術作家としての活動を続けながら、「デジタルネンド」という戯れ系のパソコン・ソフトを発表しているゲーム(?) クリエイターでもある氏は「僕にとっての空間とは、デスクトップと同意義です」と言い切った。氏のスタンスは「まず空間の宣言ありき、というか、フレームを定義するか、しないかが重要なんです。それによって作品のロジックが違ってくる。僕は空間をビットマップ化して、モニターのなかで完結させる。空間とはまず透明なマス目で埋め尽くされているという事を前提としている」というものだった。「このモニターの赤が紙に載せたときにちゃんとこの色で出るか、という問題がよく起きますよね。でも、僕はモニターに再現されることを前提として造っているから、数値としてデータが完璧であればいいと思っている」。さらにはフォトショップといったペイント・ソフトの、操作環境の方ではなく、成立する要因についても意識的であった。「アンチ・エイリアスという概念はダ・ヴィンチに由来しているんです。僕の立場は反アンチ・エイリアスで、ドットの問題として「赤」という色は「赤」という文字が在れば、そちらの方が記号としては完璧なんです」という立場をとられていた。

本業のデザイナーをはじめ、DJから写真、はたまたブランド・ショップの経営まで多岐に渡って活動している常盤響氏は、作業環境については「ほとんど無自覚で無意識に頼っているのが現状」という立場をとられていた。「(環境の方が) すべて後から着いてきているという感じですね」。そういう意味では四人の中で最も享受派と思われるかもしれない。しかし、ひとたび作品造りに話が及ぶと「とにかく最近の若い人は、自分の造ったものと世間に流通しているものの差が見え難くなっているのではないか」と手厳しい。「これはコンピュータの弊害だと思うけど、簡単にそれらしい完成形まで到達できた気がしてしまう。僕も身近な素材を使って作品をフィニッシュまで持っていってしまうことがあるけれど、センスの問題なのに、それをインスタントさと取り違えてしまっている。その差を感じとる判断能力がどんどん失われていってる気がする」ということだった。

空間自体の扱われ方の変容に意識的なのは、今までに登場願った三人のような視覚的な仕事を扱う方だけでなく、音楽系のクリエイターたちも同様であった。80年代以前に「音楽をやる」という事は、ほとんど「バンドを組む」ということとイコールであった。それが簡単なツールで演奏が出来るハードの進化と、バンド形態をとらなくても構わない、というジャンル自体の崩壊によって、特別に防音が施された部屋を持たなくても音楽家であり続けられるようになった。

最後に登場していただくまみちゃんはパリを拠点として、やはり音楽専業というよりもマルチなジャンルで活動しているアーティストである。「パリに引っ越したのは、東京がイヤだったという理由ではなくて、喋ることによって自分が満足してしまう資質を持っていることに気付いたから」ということだった。「そこで終わってしまうというのが耐えられなくて、いっそ話し相手になるようなコミュニケーションを断ってみようと思ったの。持っていったのはピアニカと凄くちっちゃな打ち込み用のマシーンだけで、説明書がなかったから使い方も知らなかった。でも、他にすることがないからとにかくその機械と格闘して、段々と使い方が分かってきた。最初にその機械でメロディが弾けるということが分かったとき、窓から見える月が、窓のはじっこの方にあって、夢中で機械に取り組んでやっと使い方が分かったとき、さっきの月が窓のもう一方のはじっこに移動していた」とその時の印象を語ってくれた。先ほどの松本氏の発言と対極のように思われるかもしれないが、パーソナルな情報の共有というのは、今後のハードウェア、ソフトウェア双方が持っている問題点であり、対応する空間の在りようについても現在は過渡期なのではないかと感じた。住宅に於ける騒音の問題についてはパリも日本も同じだが、どちらにしても大音量の音楽ではないから気にならないという。しかし「東京は四方八方から人が押し寄せてくる感じで、整然としていない気がする。ぶつかったときにも、別に謝らなくてもいいけど、声を掛け合わないし」「ヒエラルキーにおいてはパリも東京も同じ。ただ、東京ではアンダーグラウンドなものが見えにくいというか、自分の目で見て探してこないから、目に付くことがほとんど同じものばかりになってしまう」ということだった。

若い世代の台頭は旧世代への脅威でもあるだろうが、彼らが手放しで新しいスタイルと折り合っているわけではなく、旧世代に対しても、そして同時代の、また次世代のはらんでいる問題点に対しても意識的であることが伝わっただろうか。最後になるが、社会的なリレーションという意味において、海外に比べてこうした世代間のギャップを埋めるシステムが欠落しているのが、実は日本の建築界の一番の問題点かもしれない。

●きしの・ゆういち／スタディスト、オフィス・カートゥーン代表



常盤 響



電気グルーヴビデオ・グラフィックデザイン (Sony Music Entertainment)

●(環境の方が) すべて後から着いてきているという感じですね／常盤 響



まみちゃん



Music CD(Otonamopée)(ポリスター)

●東京ではアンダーグラウンドなものが見えにくい…／まみちゃん



H DESIGN ASSOCIATES アトリエ風景

●フォト・クレジット
木田勝久　表紙、p.42〈IDEE WORKSTATION〉
坂田峰夫　p.14〈CTPP+CTPR+COMMUNE OFFICE〉
平賀茂　p.15〈NHK長野放送会館〉〈コンスタンティーン美術館コンペ案〉、
pp.16-19〈NHK長野放送会館〉〈霧島彫刻ふれあいの森アートホールコンペ案〉〈コンスタンティーン美術館コンペ案〉〈平田町タウンセンターコンペ案〉〈八代ショッピングセンター〉〈八代の集会所〉、p.20集合写真、p.55〈ハスネ・ワールド・アパートメント〉
林雅之　pp.34-36〈宇佐美の家〉、p.37〈FORM BY TAG HEUER FHOTOGRAPHED BY HERB RITTS展〉
畠山直哉　p.37〈renoma STORY展〉
藤塚光政　p.43〈NHK長野エントランスロビー家具〉、p.49〈YOICHI NAGASAWA〉
ナカサ＆パートナーズ　p.44ポートレート、
p.45およびp.50〈DAILY CATCH+HABANA ROOM〉
David Duval-Smith／ナマイキ　p.44ポートレート
佐藤振一　p.45およびp.49〈INDIVI CAFE〉、p.50〈FAVORITE. H〉
Osamu Yokonami　pp.46-47
新建築写真部　p.53〈パレット〉、p.54〈アニハウス〉、p.57およびp.58〈ORGAN I〉
津田修成　p.61〈ORGAN II〉、p.62〈CATALYST-KINOSAKI BEER FACTORY〉
福永一夫　pp.66-67
青木博／ZOOM　p.69〈TUBE-HOUSE〉

●ページデザイン
信藤三雄／CTTP　pp.10-11
近藤漢也　pp.16-19
鏡敏彦　pp.22-23　p.26

●イラスト
十代亜矢子　pp.21-25

●写真提供
ラフォーレ原宿　p.37〈デイヴィッド・バーン展〉
ジャパン・アート・スカラシップ実行委員会 ヤマモトマサオ　pp.70-71〈回転する振動体〉
サルブルネイ　p.78 オリンピックTシャツ

●取材協力
皆川典久、田中大介／KAJIMA DESIGN（両名共）　pp.75-77 座談会

表紙写真：クライン ダイサム アーキテクツ〈IDEE WORKSTATION〉
P.5 背景写真：インテンショナリーズ〈11th Sapporo Collection space installation〉

今回の特集に採り上げた11グループは、建築デザイン界に同時多発的に起こりつつある現象の、ほんの「氷山の一角」である。これらの現象はもしかすると数年後には「'90年代末に起こったささやかな傾向」として片づけられているのかもしれない。しかし彼らの活動内容の是非にかかわらず、今現在ゆっくりと、そして確実に次世代の胎動が始まりつつあることだけは確かである。最後に「カレラノコトバ」として特に印象深かったものを挙げて、本特集を締めくくりたいと思う。（編集部）

「創り手よりも使い手の方がソフトをわかっている時代」H DESIGN ASSOCIATES
「自然（=あたり前の状態）であること」みかんぐみ
「意識改革の時代」EPA
「再定義」アトリエ・ワン
「people with 'a' style are dead!」クライン ダイサム アーキテクツ



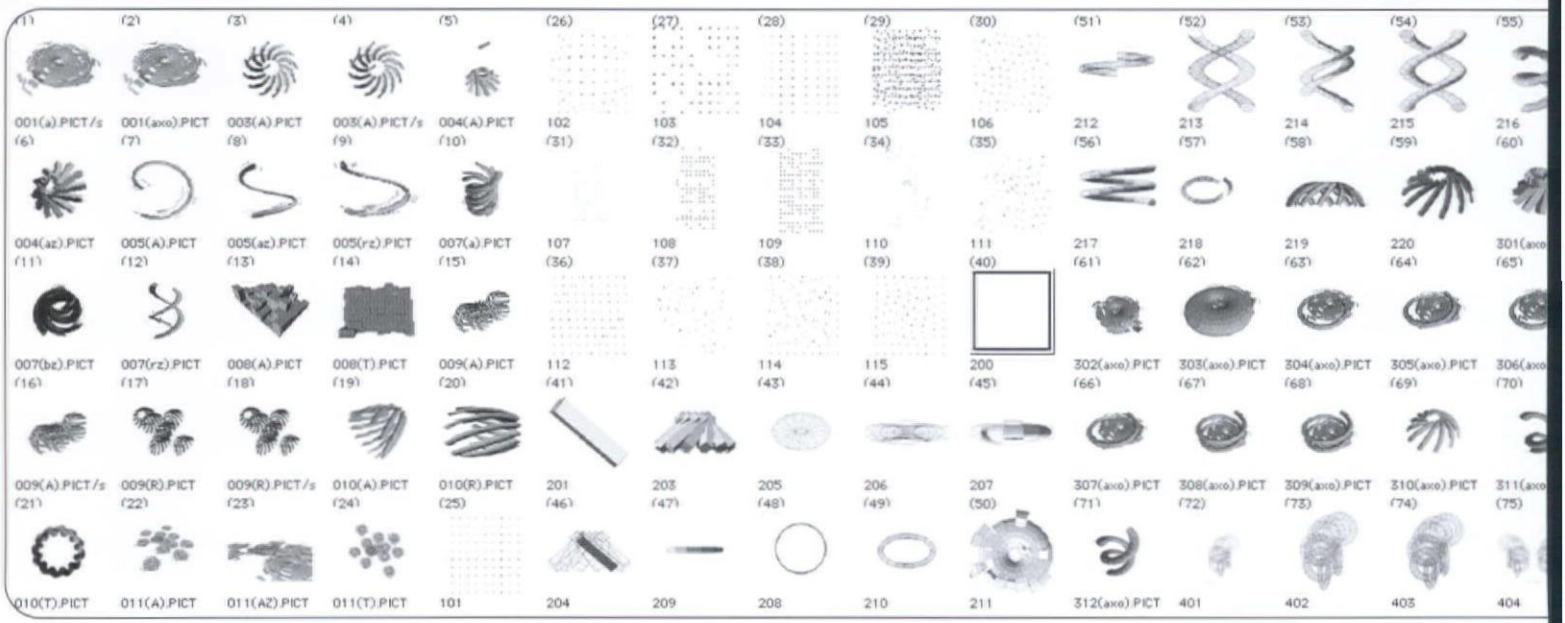
Desktop Community

notation of the future space perception

デスクトップ・コミュニティ

空間概念の変化とその記述

吉松秀樹　山家京子
遠藤幹子　藤村憲之



①

デスクトップ・コミュニティ

空間概念の変化とその記述

現在、私達は都市居住を考える上で重大な転換期を迎えている。生活環境に対する概念が、コンピュータ・ネットワークや携帯電話に代表されるさまざまな新しいコミュニケーション・ツールの普及により、着実に変化し始めているからである。新しい情報メディアの到来は、ただ単に情報の選択肢が増えただけにとどまらない。それはグーテンベルグの印刷革命によって世界中に言語文化が定着したことと同様に、環境や生活に対する概念の歴史的な転換期であると考えられるだろう。

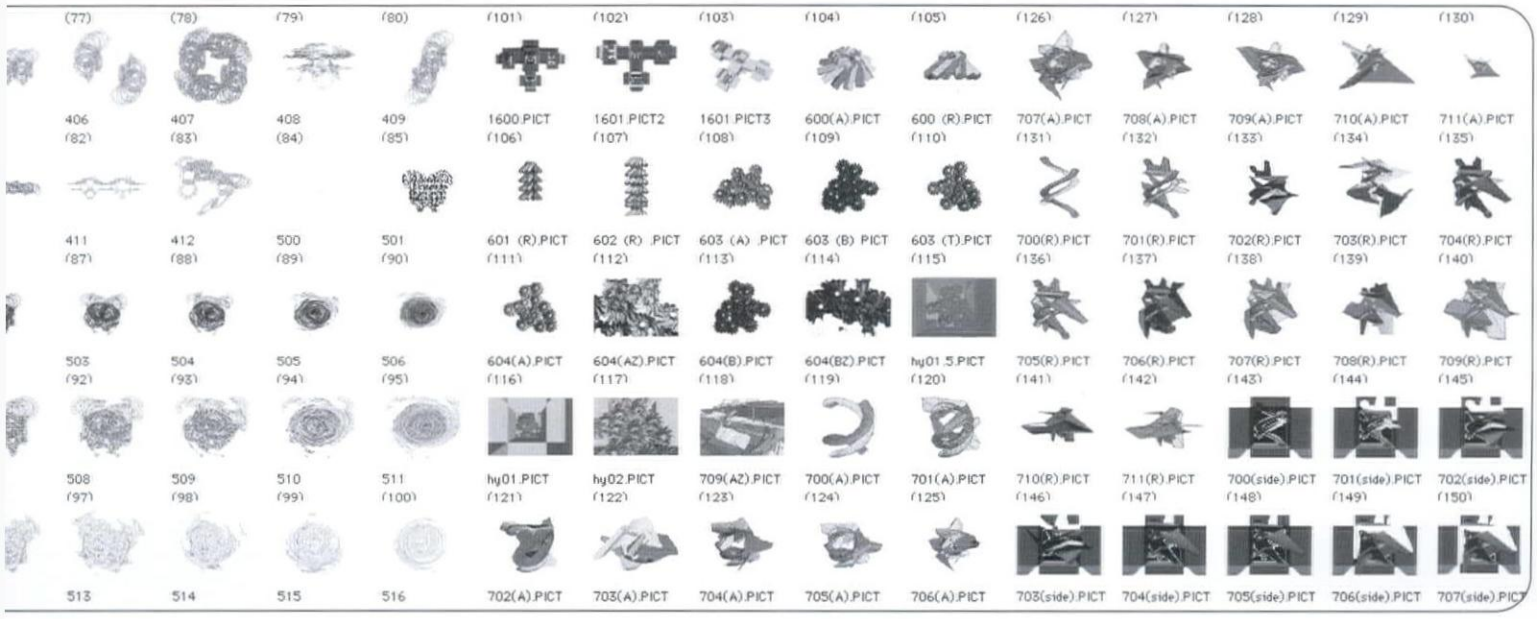
本特集は、新しくそしてインタラクティブなコミュニケーション・ツールの出現によって、私達の環境や空間に関する概念や感覚がどのように変化しているのか、また今後どのように進化していくのかを探り、同時にその変化が都市や居住に対する意識をどのように変えていくのかを考えるものである。

急速な情報通信ネットワークの普及によって、双方向通信は私達にとって日常的なものとなりつつある。電子メールで連絡し情報を取得するといった作業が否応なく1日の作業に組み込まれているビジネスマンは少なくない。身体的なコミュニケーションと電子的なコミュニケーションは、対峙するものではなく、これからの生活の中で共存していくだろう。非接触的なコミュニケーション・ツールが普及することによって、接触型のコミュニケーションやヒューマニスティックな空間や環境に対する志向はむしろ増大すると考えられるからである。しかし、人間工学的な側面で規定される快適性のみならず仮想的な快適性も認知された近未来社会における理想的な空間は、今までと同様の構造をもっているように見えながらも、生活意識では異なる空間イメージを形成しているに違いない。この目に見えにくい違いを可視化（記述）することによって、物理的な空間構造がこれからどのように変容していくのかを考察していかねばならない。

それらを推し量る基準として「デスクトップ・コミュニティ」[*1]という概念を導入している。この概念は非接触型のコミュニケーションによってつくられる人間関係をあえてコミュニティと名付けることによって、従来のコミュニティとの違いを浮かび上がらせようとするものである。デスクトップという単語は、ヴァーチャル（仮想的な）コミュニティという理解と区別するために用いられている。日本において好んで用いられているヴァーチャルという単語はあくまで現実の社会をトレースすることを前提とした概念であり、空間概念そのものの変容を示してはいない。したがって、ここで用いられるデスクトップは、あくまで情報端末と接することが可能な環境自体を指しているといってよい。

双方向通信とポケット・ベル、PHS、携帯電話などの移動体通信は別々の要素を私達の生活に持ち込んでいる。移動体通信によって私達の身体は都市の外部へと拡張し、個室に閉じこもったイメージのあったネットワーク通信や社会を外部へと引きずり出した。身体的な接触型社会と通信ネットワーク上に展開する距離や場所性といったものが希薄な非接触型社会が並置される時代を私達は迎えているのである。通信ネットワーク上に構築されてきた社会は多分に現実の社会の裏返しである匿名性を帯びたものとして構築されてきたといえるが、もはや現実とデスクトップ上の社会のボーダーは相当に曖昧なものとなってきている。何百万人何千万人と参加するネットワークは、それ自体が統制不可能なカオスであり、いわば大都市であるとも考えられるが、そのネットワークは現実の社会とさまざまにつながり、区別することの出来ないシームレスな関係が作り出されてきている。

通信ネットワークによって電子的に拡張された新しい身体性は、ネットワーク自体で組み立てられる閉じたサークルを越え、いまや



浸透膜のようなもので括られているに過ぎないと言えるだろう。電子的な身体と肉体的な身体はゆるやかに融合し、その総体として私達の都市像は成立しようとしている。

いまやデスクトップ・コミュニティは、それ自体がコミュニティであるかどうかという検証以前に、現在の都市や社会の一部として成立し始めているのである。コミュニケーションの集合としてのネットワーク社会は、その閉鎖性と匿名性ゆえに、現実の社会へコミットできる単位であるかどうかは微妙であった。しかし、同人誌的な時代を超えメジャーアップを果たした通信ネットワークは、コミュニケーションの質が希薄となり、コミュニティとして成立することが難しくなってきているといってよい。この構図は都市部でコミュニティが成立しにくくなっている構図と重なってくる。通信ネットワークは急速に現実の都市社会と同化したといって良いだろう。

近未来において、この構図は逆転し、通信ネットワークの社会に現実が従属し都市の生成を場所や時間に制約されない社会がリードしていくと想定される。それは新しい社会構造の出現であり、新しい概念としてのデスクトップ・コミュニティであると呼べるかもしれない。

この研究は、ある特定の個人性の表出としての記述、ないしは表現による迷宮化を避けるため、A.ラボ*2と名付けたデザイン研究機構を軸として進められた。この機構自体も既成の枠組みにとらわれない新しいコミュニケーションの実験であり、ネットワークと呼べるもののひとつである。ここでは、意識や感覚の変化といった目に見えないものを可視化する作業をベースとして、それらを現実のモデルに落としこむプロセスまでを考察している。検証対象は、あくまでこの研究に携わった研究生であり、私達の意識を加速するためにパソコン通信やグループ・ワーク、フィールド・ワークなどさまざまな活動を同時並行に行った。

研究成果はある結論を提示するといった旧来の情報伝達体系をあえて選択せず、様々な読解が可能となるような構成をとっている。これはこの研究の目的である近未来の建築や都市概念の変容に対するプロセスの提案として、研究成果から導き出されたものでもある。*3

都市や建築を考える際、その形態や空間構成を分析しそれらを再構成するシステムを提起することが一般的な手法となっている。しかし、その前提となる感覚が揺らぎ始めている現在、それ以前の問題を整理し考察することは都市の未来を構想する上で避けることができない作業である。そしてそれは、「建築」のみならず「都市」という言葉そのものを考え直す作業でもある。私達は「建築」や「都市」を考える際に、あまりにそれらの定義を疑わなさすぎた。あるいは疑う必要性を帯びていなかった。人間の生活から建築や都市が生まれるという原点に立ち戻って、そのヴィジョンを指し示すことから、新しい建築や都市像は見えてくるのではないだろうか。

●吉松秀樹／建築家、アーキプロ

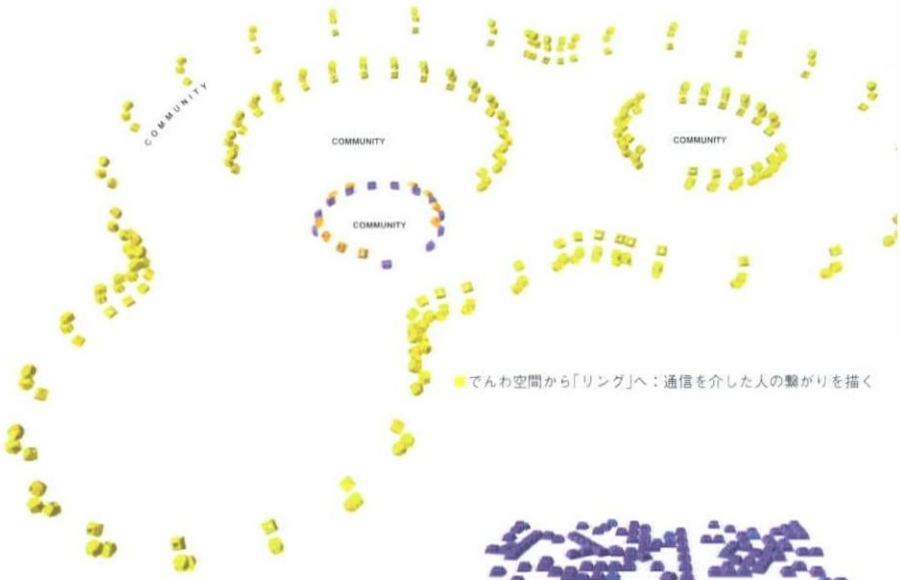
*1：藤村憲之による造語（1995年）。非接触型のコミュニケーションの総称として定義された造語である。現実の都市を前提にしたヴァーチャル・コミュニティとは異質な関係性を想定している。

*2：A.ラボは、大学の研究室では扱いにくいデザイン研究を行う場として、1995年4月から、吉松秀樹と山家京子が共同で主催しているものである。期間は1年単位で、研究生は公募により5〜8人程度選ばれる。

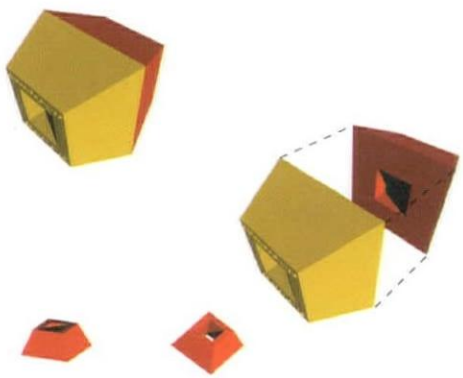
*3：本特集では、主要メンバー4人による記述を並列する構成を取っている。「デスクトップコミュニティ」、「ノーテーションの手法、感覚の変容」、「都市的身体、やわらかい建築、都市」「都市でない都市」の4つの章に研究生の作品を事例として紹介しているが、テーマを設定して研究をまとめたというよりも、さまざまな記述が最後に括られているといった方が相応しい。

①データのつくる風景（藤村憲之）
コンピュータという道具を使いながら作り出される色とかたちは、今まで絵の具や粘土で作り出してきたものとどのように違うのだろうか。表現のための道具としてCGを捉え、そのクセを探る。ノーテーションの前段階の作業。



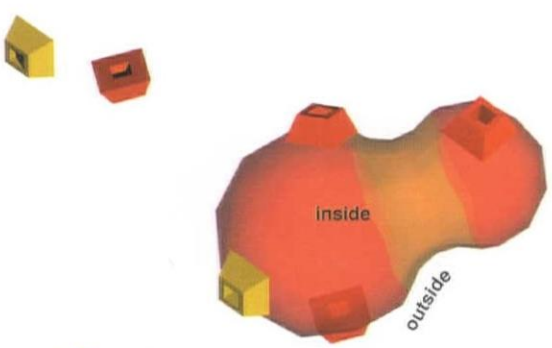


■でんわ空間から「リング」へ：通信を介した人の繋がりを描く

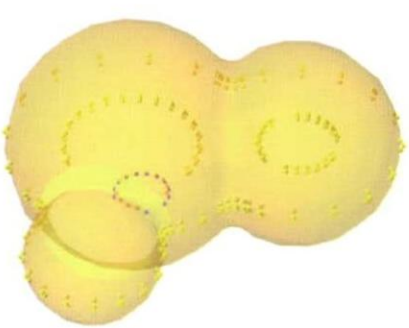


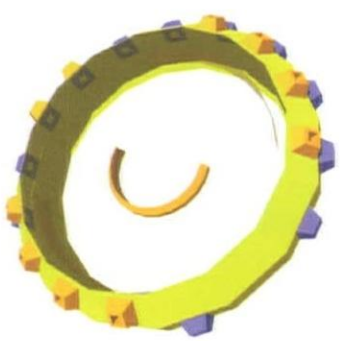


■でんわ空間2：通信機器の繋がり方を描く



■■■でんわ空間1：電話の向こうに感じる空間





■■リング：電子会議室に感じる「でんわ空間」

デスクトップ・コミュニティ：1995

私達は生まれてこのかた、見えるものをより信頼し、またこの目で見たものを言葉にし、伝えることを訓練されてきた。ここで私が行ったのは、見えないものを信頼し、言葉だけでできた世界を目に見えるものにする作業であった。

デスクトップ・コミュニティとは、95年当時、私の生活に深く入りこんでいたコンピュータ・ネットワークと、そこから始まる人間関係の不思議さを、自分なりの方法で絵と文章に描き起こしたものである。

私が具体的に記述の対象にしたのは、受話器や端末の向こうに感じる距離感覚（でんわ空間）、電子会議室と呼ばれる、多くの人数が同時に参加する対話型ネットワークの仕組み、ここでも感じる距離感覚（リング）、文字を介して多くの他人と向き合う中で、変化してゆくプライバシーの感覚（ネットワークでのからだ）、ネットワークの中で考えられる公共のサービスの提案（ニードル）である。

でんわ空間

友人との会話の中で出てきた「でんわ空間」という発想を絵に起こした。「でんわ空間」とは、自分の受話器と相手の受話器との間に感じる、漠然とした距離感覚を空間として見立ててしまうという発想で、感覚だけを根拠に描き起こしている。

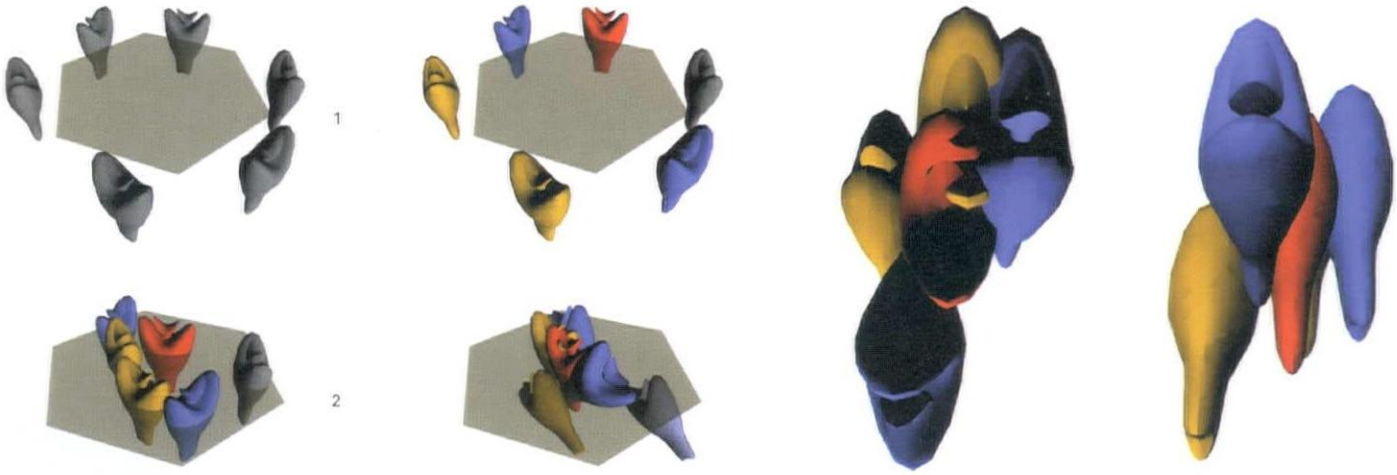
だが、口から発した声が、一瞬で耳まで届いてしまうという現実があるのに、ふたつの受話器の間に人間は距離を感じてしまう、ということを誰もが日常的に感じている。この絵はこうした人間の知覚と物理的な距離の違いについて描いたものである。

リング

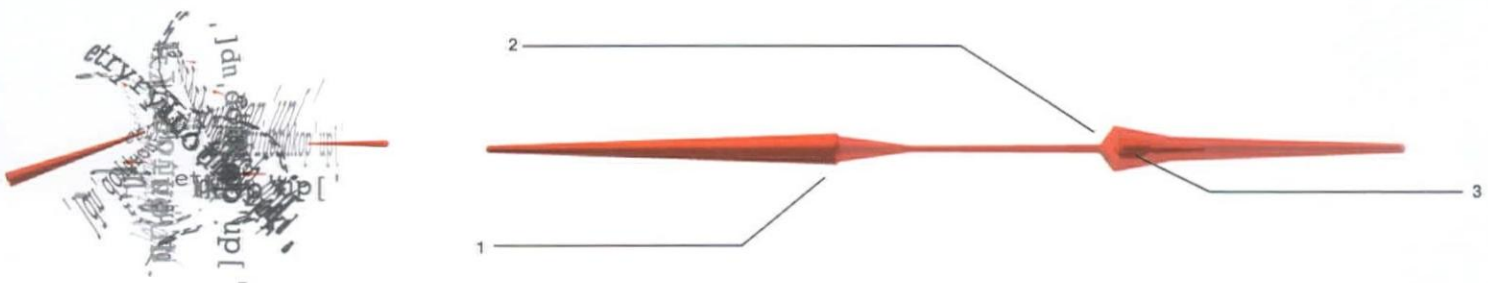
でんわ空間の絵を描くうちに、たまたま私はネットワークの中にある、「電子会議室」に参加するようになった。今では多くの人が知るように、会議室といってもただ多人数の文章が羅列されている、寄せ書き帳のようなものである。ネットワークの管理者達は、文字の並んだ画面のなかに、いくつもの階層を区切り、入れ子状に会議室を作り、個別の名前を付けることで、さまざまな場所性を演出しようとしていた。言ってみればこれが、文字だけでできたネットワークに彼等が感じとっている空間性なのである。人はここでも、本来距離のないはずのものに場所性を見出している。そこで私は、でんわ空間のモデルをひとつひとつの会議室の空間にあてはめ、電子会議室の仕組みを絵に起こした。

ニードル

最後のモデル（針のような形なので、仮に「ニードル」と名付けた）は、記述というより、提案になっている。どう見えるのか？　を考えているうちに、こう見えるものがあったらどうか？　ということを考えたのだ。ここで発想していたのは、思いがけない相手にメールを送ったり、自分の関心に近い会議



■■■■ネットワークでのからだ：画面上の文字を通じて話し合う時、私達はお互いの体の距離をどう感じているのだろうか
1. 会話の始まり、テーブルを囲んでいるような距離を感じる、2. 会話の進行につれ、お互いの距離が遠ざかったり、近づいてくるように感じる



■■ニードル：情報を配達する仕組みのスケッチ
1. 頭部：情報を読み取る部分、2. 尾部：情報を処理する部分、3. 電子メール等のパッケージ



■プリントアウトし、多くの人に見せる



■動き続ける地図：私達が知覚している、常に流動的な世界を地図にする試み

室を探し出してくれるようなネットワークの仕組みだった。現在では実際に、多種多様なかたちで実現されている。

想像力のある／なしが引き起こす、都市空間の認識の差について

目に見えないある状況を感じ取り、自分なりの絵や言葉にし、それらを間に置いて第3者と向かいあったときに初めて、「いや、私にはそうは見えない」であるとか、「私の感覚にフィットするね」といった反応が返って来る。これらの絵や文章を描き、プリントアウトする。それらを多くの人に見せると、会話もはずまず、全くの空振りに終わる場合もあれば、意外な部分で共感を得ることもあり、驚かされたこともあった。なぜこうした共通のものを都市生活の中に感じていたり、あるいは違うものを見ていたりするのだろうか。

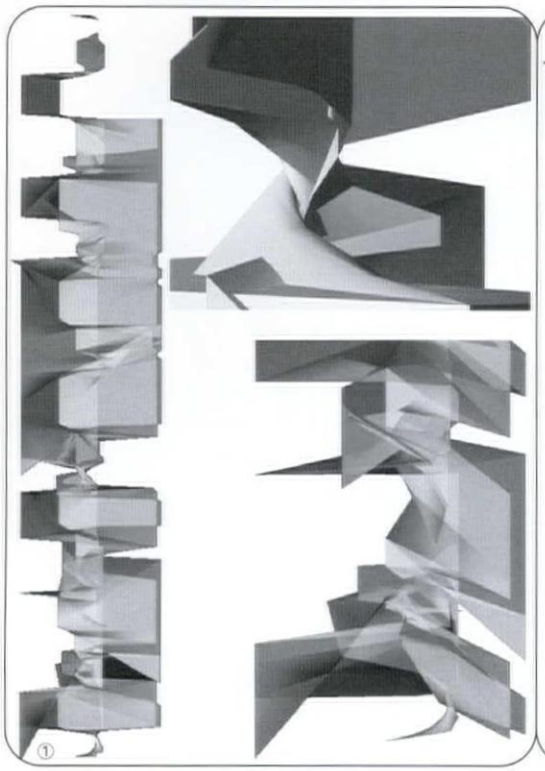
通信環境から人が受け取る空間認識は、各自がもつ想像力に大きく左右されていると言える。受話器の向こうの誰かのいる場所、いまそこにどんな風景があるのか思いめぐらすことができるか、距離を感じ空間を感じ取る想像力があるか。これらが私達ひとり一人の空間認識に大きく反映し、私の感じ取る空間認識と、他人の感じるそれとの間に、大きな違いを生じさせるのである。

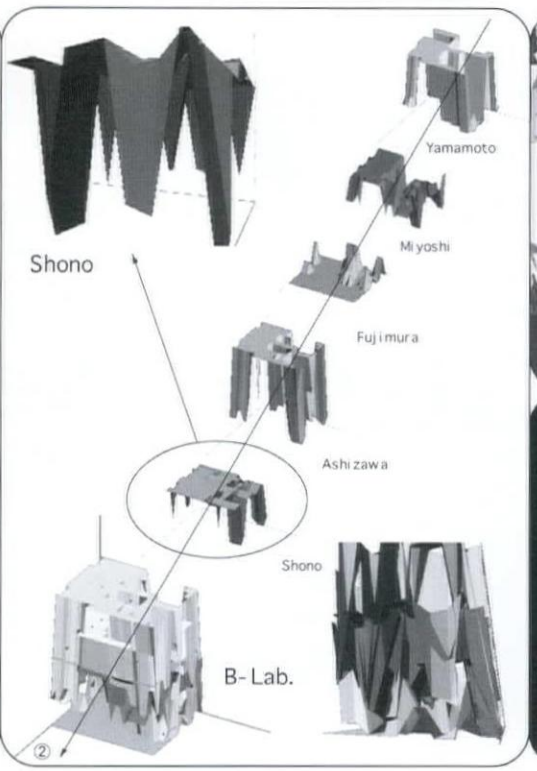
数年前の電子ネットワークでのコミュニケーションは、ほとんど文字を媒介として成り立っていた。現在とは大分違う状況の中で、電子会議室をまるである場所であるように見立てることが、会話の助けになったことを考えると、こういった場所で想像力の果たす大きな役割を否定できない。

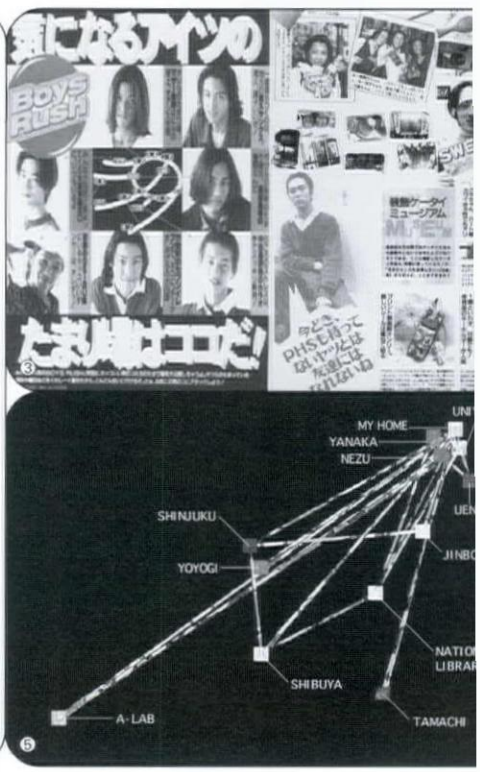
「でんわ空間」という言葉の持つ説得力が暗に示すように、私達は電子ネットワークの登場以前から、一見物理的な距離に反するような感覚に頼ることで、都市生活を成立させてきた。たとえば明け方、コンピュータ、ネットワークといった先端技術が生みだしたもの達から一旦離れ、実際の街へと歩き出す。電灯も消え地下鉄も動いていない夜明けの街は、都市計画の模型に近い。だが、昼間、デフォルメされた地図や巨大なサインに頼って行動し、時に列車の遅延に悩まされる私達の心のなかにある地図は、都市計画家がもつそれとは違い、流動的に変化し続けている。そして夜の街では、私達の距離感覚は、ほとんど照明によってコントロールされていると言っても良いくらい、光によってゆがんで知覚させられている。

空間に対する想像力と、実際の空間から私達が受け取る感覚というのは実は紙一重のところにあって、都市のなかに空間として知覚できてもスケールをもたず、したがって図面に書き起こせないような空間を次々と産み出し続けているのではないだろうか。

●藤村憲之／建築家







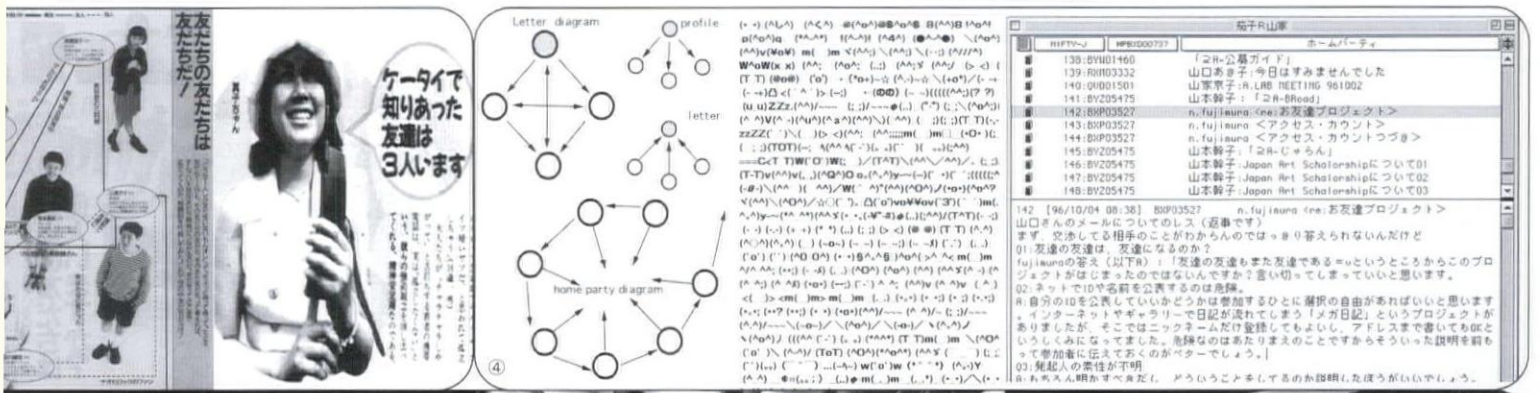
ノーテーション

私達は空間を記述するにあたり、ノーテーションを手法として選択した。ノーテーションとは表記法の意味で、広義には必ずしも空間との対応を意図しない抽象度の高いダイアグラムなども含まれる。また、狭義には記譜を意味し、演奏するための楽譜、ダンスのためのコレオグラフィ同様、空間を演出するためのスコアを指す。ここではある約束事に基づいた視覚的な表現、特に空間的な喚起力をもった表現をノーテーションと考えている。都市空間をノーテーション化する試みは古くから行われている。その代表的な例は地図である。都市計画図のような地図は、基本的に実在するものの投影を目的としており、人が広域にわたるスケールを把握することの助けとなっている。都市空間のノーテーションにはこの地図と何らかの関わりをもったものが多い。特に近年、ユークリッド距離に基づく客観性の高い地図と、私達の空間認識や知覚とのずれをテーマとしたものが多く見られる。例えば杉浦康平は時間距離に基づく地図の歪みを明快にかつ美的に示した「旅行時間マップ」[*1]を作成し、イメージマップは私達の知覚が必ずしも地図とは整合しないことを示唆した。また、シチュアシオニストたちは「パリ16区の女子学生の1年間の行動記録」[*2]のように都市を漂流する様を地図上にプロットし、時間地理学においては都市施設と人の生活との関わりを表現するために2次元的な地図に時間軸を導入し、パスとプリズムの概念に基づく特徴的なノーテーションを開発した。また、ノーテーションにはふたつの種類、すなわち分析的なノーテーションと構築的なノーテーションが想定される。多木浩二はノーテーションを「知を要素に形式化し、同時にそのシステムを見出し、それらの精妙な関係を使って現象を記述化するだけでなく、再現したり、まだ知らない新しい構成を見出していくための方法」[*3]と説明している。「現象を記述化するだけでなく、再現したり」という部分が「分析的なノーテーション」にあたる。記述を目的としており、視覚的に表現することにより複雑であいまいな都市現象をわかりやすく示すことができる。後半の「まだ知らない新しい構成を見出していくための方法」の部分が「構築的なノーテーション」に相当する。コンペの要項に示されるような、具体的な空間構成を示唆しないダイアグラムと、固定的なデザインの下敷きとなるスケッチの中間的な存在といってよい。新しい都市像あるいは建築の在り方を考えるとき、またその内容が複雑であいまいであるとき、時にあまりに固定的な計画案の提示がその表出の妨げとなることがある。そのようなときに、ノーテーションは有効な手法になり得る。ここに示すノーテーションのうち半分くらいは分析的であり、半分は構築的である。例えば「Nesting-Stamping Ground」や「行動記録日記」を共有するプロジェクトのうちの多くは分析的ノーテーションと言える。そして「コミュニケーションのかたち」や「デスクトップ・コミュニティ：1995」は構築的なノーテーションと呼んで良い。これらは「デスクトップ・コミュニティ」の現在におけるあり様と、建築・都市に着地させる方向性を私達に示してくれるものである。

●山家京子／建築・都市計画学、神奈川大学講師

＊1：杉浦康平他、著「週刊朝日」（1969年5月9日号）
＊2：シチュアシオニスト・インターナショナル、木下誠監訳「状況の構築へ」（インパクト出版会、1994年）
＊3：中村桂子＋多木浩二「対談：生命誌への想像力」（「10＋1」No.3、INAX出版、1995年）

①スペース・オブ・リレイション（三好隆之）
5人のグループがメンバーの2週間近い所在をデータとして共有し（「コミュニケーションのかたち」に示す「行動記録日記」）、各自何らかの解釈を加えて視覚化したプロジェクト。ここでは、人と人との距離を視覚化するために、地図に位置をプロットしたものに時間軸を加えて立体化している。
②アクション・フォーム（庄野健太郎）
「スペース・オブ・リレイション」同様のプロジェクト。ここでは人間の行動の周期性に着目し、1日、1週間、距離を3軸にとって立体グラフ化している。



感覚の変容

情報化により建築や都市はどのように変わるのだろうか？　建築と情報というふたつの言葉が重なり合うところから、およそ4つの方向性が想定される。

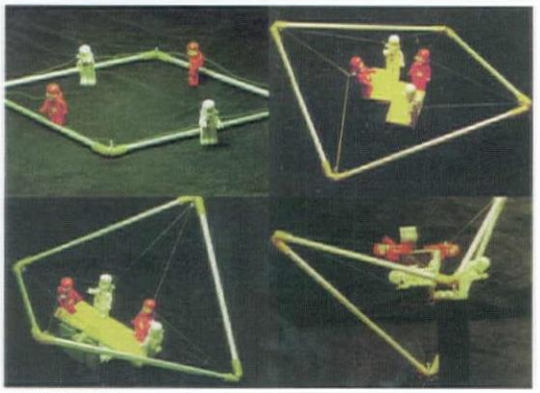
1番目がCAD（なぜか建築関係ではこの方向にばかり話が行く）。2番目は設備還元型（一時代前の電脳住宅、インテリジェント・ビルに続く流れ。今では情報をこうしたハードに還元させるのはとても違和感を覚える）。3番目はビルディング・タイプの変容。社会が変わればそれを反映する建築のプログラムも自ずと変化する（たとえば「思考空間の可視化」は図書館の変容をノーテーションしたものである）。そして、4番目が感覚の変容。電子化された身体という言葉に象徴されるような身体の拡張がこの論議の行き着く先にある。そこまで言わなくても、家族に対するちょっとした意識やコミュニケーションの変容が空間に対する感覚を変え、建築・都市空間に反映されていく。

「デスクトップ・コミュニティ」はA.ラボのメンバーにより進められた研究である。ここで私達が行ったことは、本から得られる知見のようなものではなく、自分たちが日常的に実感していることや気になって仕方がないことだけに着目し、それについて思考し、ノーテーションという写像の形で表現することである。その結果として、4番目の感覚の変容に関するプロジェクトをいくつか立ててみた。では、これらのプロジェクトからどのような切断面が見えてくるのだろうか。

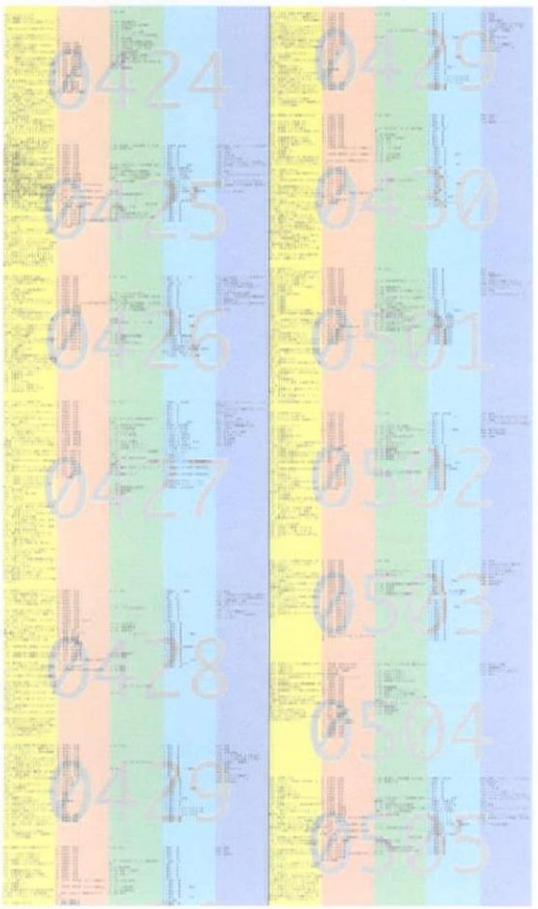
まず、プライバシーの感覚の変容。「スペース・オブ・リレイション」や「アクション・フォーム」は数日間にわたる自分の行動記録を交換し、それをもとに各自のテーマに従って展開したものである。また、別のプロジェクトでは手紙の交換が試みられた。それぞれが相手について解釈したことを手紙にしたためて送るというものである。最近の新聞での論評にも見られるように、従来プライバシーと呼ばれ守られてきたものに対する感覚が変わりつつあるようだ。こうしたことはプライバシーとパブリックの領域の境界を変えていくだろう。

次に、友達の作り方などさまざまなコミュニティの成り立ちについてと、移動体通信によるコミュニケーションの変容。私達はビジネスの場で通信機器の選択肢が増えることについて便利だと感じる。例えば、電子メールによって原稿の送受が格段に便利になったように思う。ポケベル、PHS、携帯電話を身に付けた女子高生達にとってもそれらが便利な通信手段であることには変わりない。しかし、その存在意義は利便性だけではない。つまり、ヒマだからベルを打つ。広場に集う、カフェに集まる、喫茶店にたむろする。文通友達などというのもあるにせよ、従来はある場所があってそこに実際に出向くことによってコミュニティは成立していた（「コミュニケーションのかたち：輪、拠点となる空間」）。でも、彼女たちはその場にいなくても、ベルを打つことによっていとも簡単にコミュニケーションを成立させている。こうした現象は、コミュニケーション、コミュニティを形成する場のあり方を変えていく。そして、コミュニケーション・ツールの拡大は都市居住に対する感覚を少しずつ、しかし決定的に変えていくだろうことを感じる。例えば19世紀末の海外への人の移動が、デザイン運動やモダン・アートに大きく影響したように。（山家）

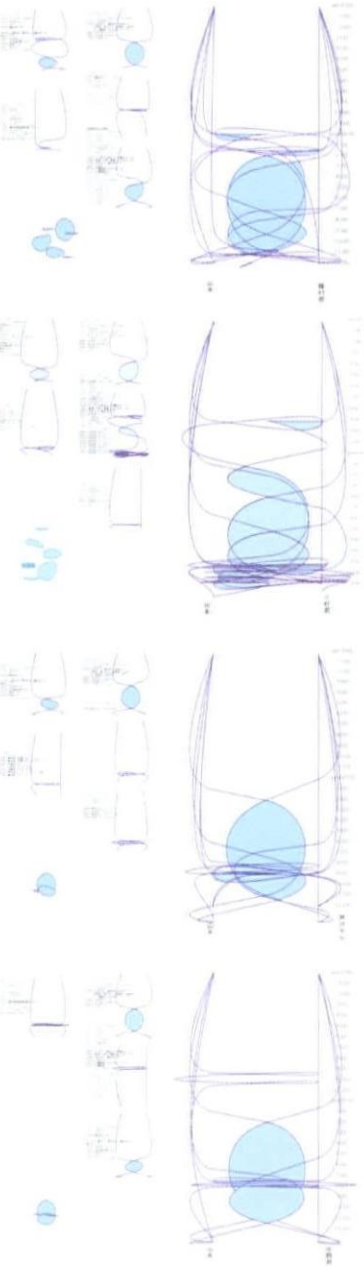
③雑誌を対象とした友達の作り方に関する調査
④お友達プロジェクト（山口あき子）
パソコン通信によるコミュニティ形成の実験。プライバシーやマナーなど、パソコン通信を介したコミュニティにおける新しい社会習慣の問題が見えてくる。
⑤Nesting-Stamping Ground（高橋美佳）
1ヶ月におよぶ自分の行動記録を地図に落とし、時間軸を加えて三次元化したもの。大学や図書館など情報を得られる施設が三次元的に直線で表され、それに対してアクセスする様が入れ子状に巣を掛けていく（Nesting）ように表現されている。



動く部屋のかたち



行動記録日記



ふたりの距離感曲線



5人のコミュニケーションのかたち

コミュニケーションのかたち

動く部屋のかたち

私達は実際に自分達がいる場所と、電話やパソコン越しの目に見えない場所とを往復しながら他人との関わりを深めていて、時にネット上の仮想空間での方が人とのつながりを強く感じることさえある。私達にとっての空間は、非空間と実空間の両方を行き来しながら絶えず変形を繰り返す、やわらかく掴みどころのないものなのだ。それは一体どのようなものなのだろう？　目に見える模型で表現してみた。1本の糸で結ばれた人とスティックからできるこの模型は、人の向きや距離を変化させるとそれを包むスティックのかたちも変化する仕掛けになっている。

行動記録日記

普段、私達はどのように人と関わっていて、その様子はどのようなかたちをしているのだろうか？　日常的なコミュニケーションの模様をかたちに置き換えるために、まだ知り合って間もない5人のそれぞれの所在とお互いで交わしたやりとりとを、2週間にわたって記録してみた。

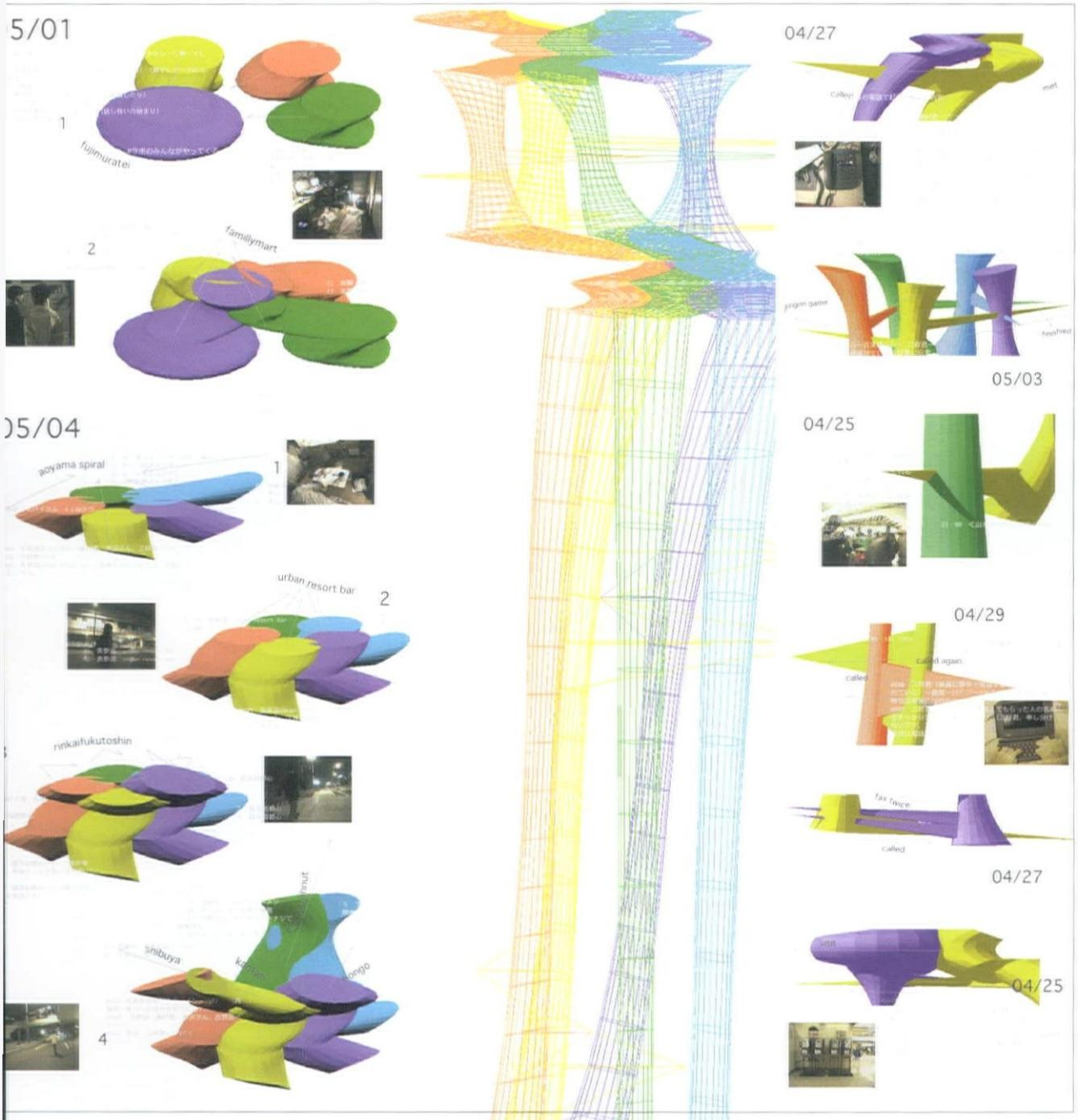
ふたりの距離感曲線

日記に記された5人のコミュニケーションの模様をかたちに置き換える上で、まずはお互いの距離が鍵になるのではないかと考えた。誰かの部屋で打ち合わせをしたり、電話で何度も起こされたりすると、相手との距離がだんだん縮まる感覚を受ける。そういった一概にメジャーで測れないようなお互いの「距離」を、時間―距離感のグラフに落としてみた。ふたりの距離は、コミュニケーションが発生するときに、だんだん近付き、重なる。この重なった状態、つまり実際に会うにしろ電話で話すにしろ、お互いが「つながっている」と感じるとき、ふたりの距離はゼロであり、そのときふたりは同じ「空間を共有している」と言えるだろう。

5人のコミュニケーションのかたち

さらに話を5人に発展させる。この場合、その関係の深さは5人で囲んだ輪の中心に対する距離、つまりその集まりに対する参加意識や所属感に関係するのではないかと考えた。部屋を提供したり連絡係になった者は、そのコミュニティの中心となって積極的に動いて5人の関係を活性化させる。また、遅刻をしたり音沙汰のなかった者は、しばらくそのコミュニティと少し距離を置く結果になる。

このようなコミュニティに対する5人の関係を立体で表現してみると、参加意識の度合によって体積を増したり、輪の中心に向かって湾曲しながら時間軸に沿って成長する5本の柱の集合体になる。コミュニケーションが発生する度に5本の柱は重なり、またそれぞれの方向へ散る。その成長と重なりの様子は、





友達の輪



拠点空間の移り変わり



ホームパーティー上での連画遊び



ポケベルの暗号



フェイスマーク

メンバーの参加意識が強いほど動きのあるものになり、その手段が増えるほど動きの種類は増える。

こうして5人の間でのやりとりをかたちに表現してみると、そこには5人が部屋や電話などを手掛かりに関係の糸を紡ぎながら、それをひとつの空間に編み上げていく姿が見えてくる。複雑な関係性の中で、私達はこのようなコミュニケーション空間を構築しているのである。

輪、拠点となる空間

5人以外の関係性ではどうなのだろうか？　まずは自分の交友関係を把握しようとアドレス帳を広げてみると、そこに並んだ名前は知り合った場所や交流の拠点となる場所によって幾つかの輪に括られる。その中に、学校や仕事場など目に見える空間以外に、目に見えないものを拠点として成り立つ輪が幾つかあったので調べてみた。

ポケベルやチャット、個人情報誌などに埋没している人達は、お互い共有できるものがテキストや数字だけであっても、暗号やマークなどで最大限の工夫を凝らすことにより積極的に自分をアピールしている。自らの力で伝達の可能性を広げ、その場を盛り上げようという参加意識の高さを彼らから感じる。そこにでき上がった高密度なコミュニケーションの模様は、時に閉じられた輪として奇異な印象を与えることもあるが、逆にパワフルに人を惹き付けることもある。彼らの積極的な参加により見えない空間は盛り上がり、求心力を持ち、まるで実際の街や通りのような魅力と賑わいを見せるのだ。

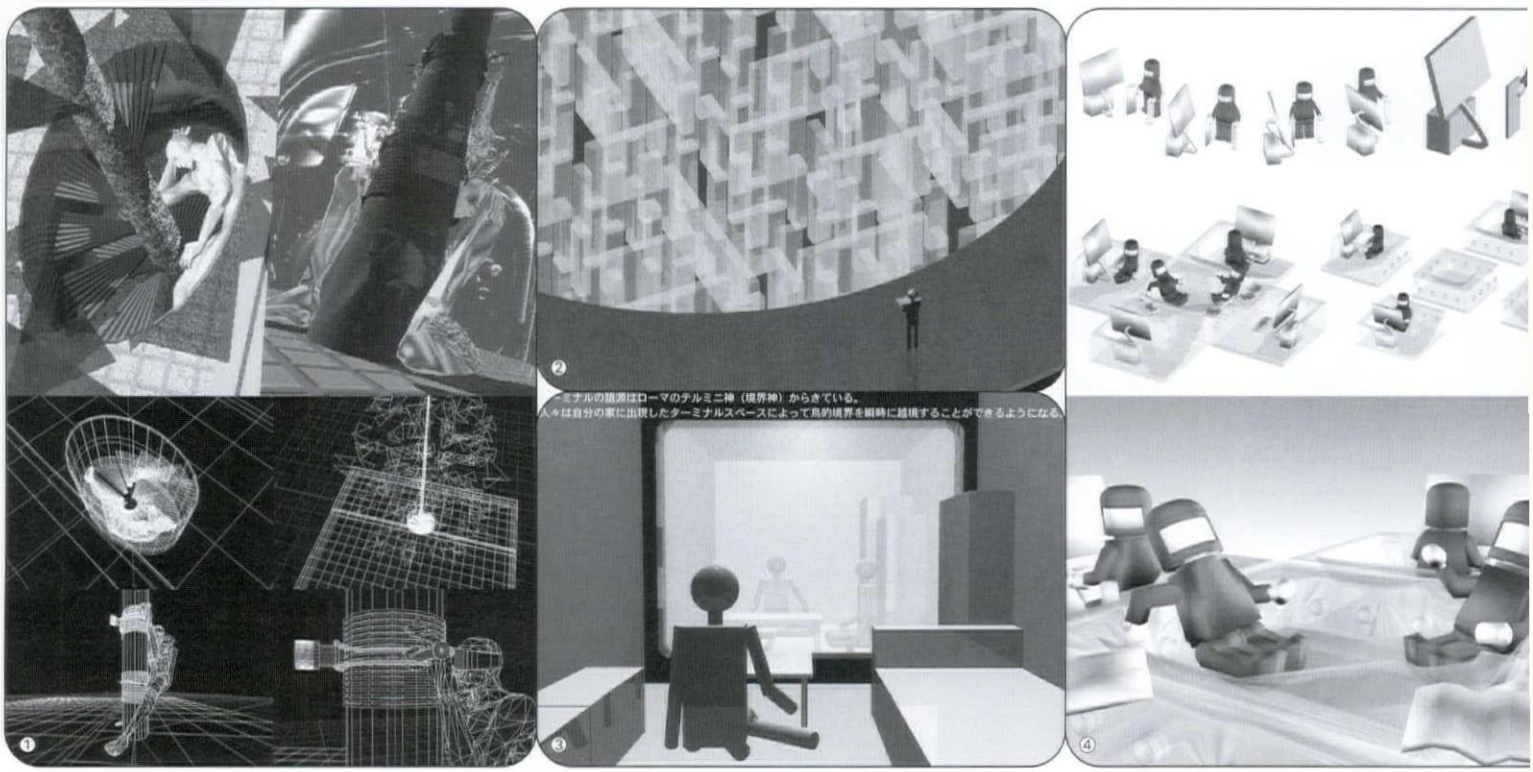
結ばれる像

このようにして、自分の周辺から始まりひとつずつの関係を紡ぎながらかたちに編み上げる作業を重ねる中で、コミュニケーションにまつわる漠然とした空間のイメージがひとつの像に結ばれていく様を私は経験してきた。それは、演奏者が日々の練習を積み重ねることによって体に記憶される、彼自身しか確信できず、理解できない言葉に似ている。

建築は、敷地、施主、予算、材料、構造、第3者、など様々な条件を解きつつ、それを明快なひとつの像へ結ぶ行為だと思う。複雑に絡み合った糸を丹念に手繰ればやがてまっすぐな糸になるように、体に記憶された言葉を使ってひとつ一つの条件の関係性を紐解き、かたちに落としていけば、それは自然にある建築家による明快な像に結び付いてゆくはずだ。

コミュニケーションにまつわる空間感覚が急速に変化してきている現在の状況から建築や都市の在り方を予測し提案するのは今の私には難しいが、これまでやってきたように、建築という表現行為においても関係をかたちにつむぐ修練を重ねてゆけば、やがてそれは明快なひとつの像として提案に成り得るだろう。

●遠藤幹子／建築家、guest house



都市的身体

パソコン通信、インターネットといった新しいコミュニケーション像を視覚的に確認できるものだけでなく、ポケットベルや携帯電話、PHSに代表される様々なモバイル・コミュニケーション・ツール（移動体通信機器）の普及が、私達の身体的な感覚を変化させてきている。

生活のリズムを組み立てていた重要な要素である「場所の概念」が揺らぎ始めてきた現在、個人の生活はデスクや家といった私達をつなぎ止めていた場所から直接的に都市へと拡張されてきている。この変革はウォークマンの普及などによる個人領域の拡大以上に、私達の建築や都市概念に及ぼす影響力が大きいと言えるだろう。私達は生物的な身体のみならず、より拡張された都市的身体を有するようになったと言い換えられるのかもしれない。

こうした背景から、より積極的なコミュニケーションへの渇望が社会的に産み出され始めている。若年層による新しいムーブメントは、そのどれもがこれまでの社会的なフレームを飛び越えて新しいコミュニケーションの獲得に向けられているように感じられる。*1

パーソナルな通信機器の普及により、私達は時間と距離の関係性が1対1ではなくなったことを認識させられた。と同時に情報が受け取るものだけではなく、発信できるものであり、すべての行為が情報の交換によって成立しているという理解があり得ることをも実感させられている。

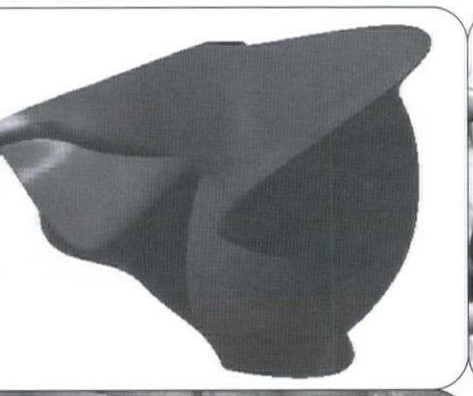
拡大するさまざまなメディアによってもたらされる利便性は、そのどれもが各種の情報をより早く確実に手に入れられる技術革新の結果である。しかし、それによって手に入れられたのは作業のスピードアップだけではない。個人の領域や仕事場に対する認識の変化であり、人と接触することに対する意識の変化である。

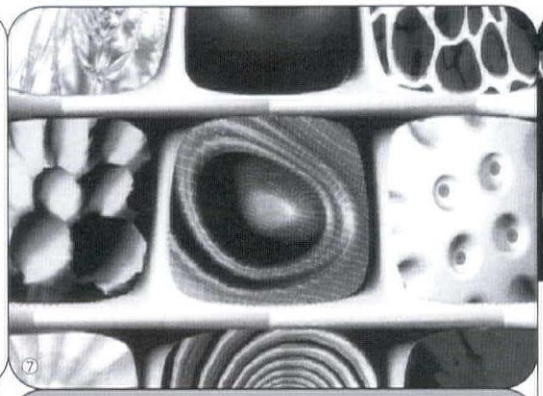
パソコン通信に代表される双方向通信は、今まで社会にコミットできなかった社会的弱者に対して窓を開く契機となり、また接触型のコミュニティではあり得ない、距離やルートを越えたコミュニケーションを可能としつつある。これは現代社会を支えてきた基本的なルールを書き換える可能性を秘めているといってよいだろう。それらは現在のツリー状の政治体系を変えるものであり、新しい労働体系を可能とするものであり、また新しいビジネスを産み出すインフラとなり得るものである。そして、それは現在の貨幣体系すら変える可能性を秘めている。

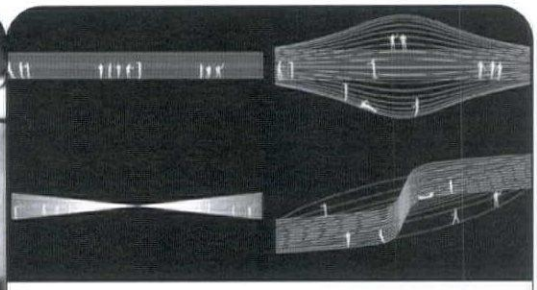
また移動体通信には、都市の成立構造を変える可能性が秘められている。ある特定の場所にいなくとも連絡が取れることは、移動に対する概念の変化を呼び起こし、都市への一極集中を抑止する可能性がある。また個人を物理的に縛るものがなくなるが故に、より身体的なコミュニケーションへの渇望が起こる可能性もみられている。都市の要素としての建築は、いまや形態と機能のみによって語られるものではない。都市そのものの定義も揺らぎ始めているといってよいだろう。建築はその空間と機能が対応して組み立てられていくことを疑わざるを得なくなっているし、都市はその成立基盤をハードからソフトへと動かさざるを得なくなってきているのである。（吉松）

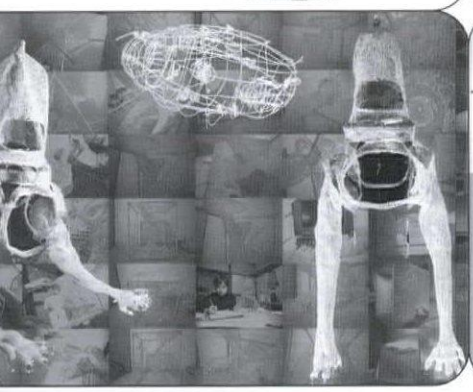
*1：個人情報誌、クラブ、パソコン通信、ベルフレンドなど個人と社会の双方向の情報交換が急速に可能になってきている。それらにひきずられて、新しい情報＝コミュニケーションといった図式が若年層の最大の関心事となっている。プリクラ（プリントクラブ）、たまごっちといったヒット商品もこういった時代背景に支えられている。

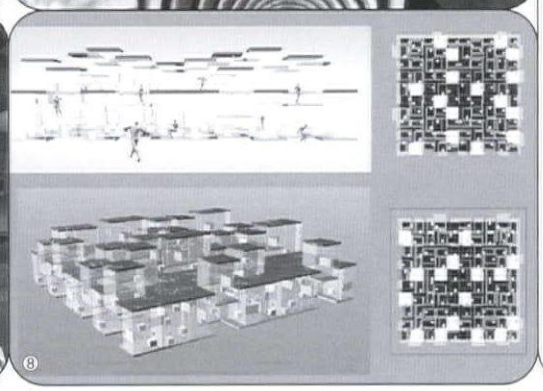
①Miti-Kagu
②思考空間の可視化（高橋美佳）
グーテンベルグ以降未来にかけて思考空間のあり方を可視化したもの。図書館というビルディングタイプの変容をノーテーションしている。
③Screen Life／Terminal Space（高橋美佳）
モニターの向こうに広がる空間を感じさせてくれるコンピュータも室内では家電であり部屋の雰囲気を変えるほどの存在感はない。そこで、壁一面のデスクトップを考案し、それを介して心理的に空間が接続していると思えるのではないかと考えた。
④Soft Desk：一体感オフィス（遠藤幹子）
モニターの向こうに友達とのたまり場をもつ人たちにとって心地良い空間を考えたもの。机を囲んでの討論の代わりに背もたれを共有してデスクトップ・ワークに集中するオフィス。

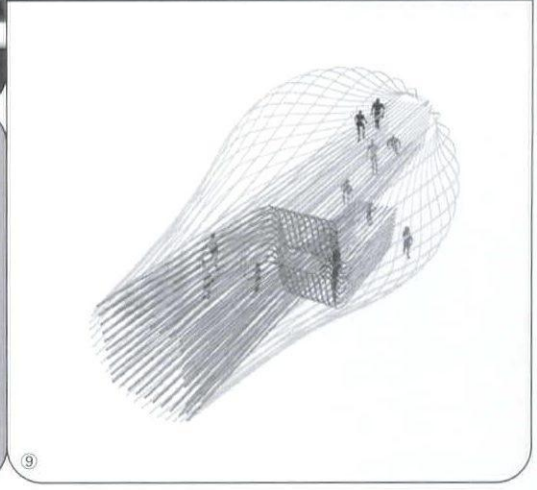












柔らかい建築、柔らかい都市

双方向通信ネットワークや移動体通信によって揺らぎ始めた私達の都市的身体は、旧来の固定された建築や都市像に定着され得ない。新しい都市的身体は、時間や場所、そして情報によって縛られないが故に、ハードとソフトが密接に結びついた建築や都市とは相入れないものである。よりソフト的な変容を要求される時代の建築や都市はどう変わっていくのだろうか？

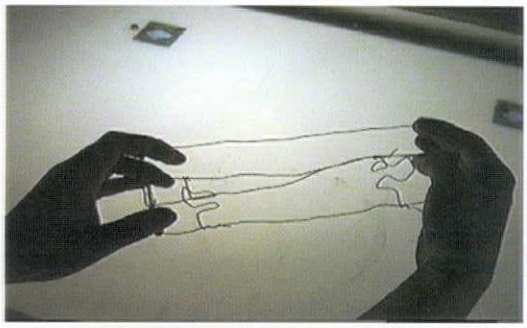
そのひとつの概念モデルが「柔らかい建築、柔らかい都市」である。ここで使われる柔らかさはもちろんスポンジのような柔らかさを指しているわけではない。さまざまなソフト的変容に対して受容できる柔軟性のことである。いわゆるユニバーサルな空間（均質空間）もそのひとつに挙げられるだろう。均質であるがゆえに、さまざまなソフト的変容に対応していくことが可能である。しかし、それはあくまで最大公約数でしかない。ここでは、より理想的な柔らかさを考察している。

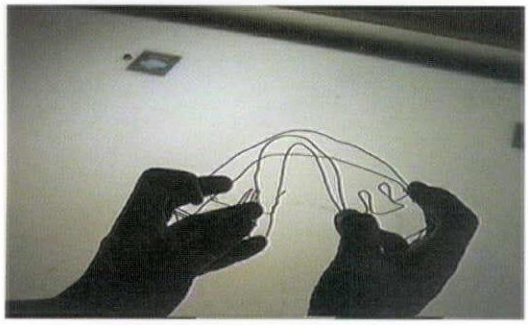
高度情報社会において建築の単位は、より個人的なものが主体となっていくだろう。これは場所や時間の認識が変化することによってますます個人としての空間の確保が都市生活者にとって必要となってくると思われるからである。個人単位で自由に情報をコントロールすることが可能となった高度情報社会において、都市生活の基盤は家族や会社といった社会的な集団単位で括られる必然性を帯びなくなってくる。なぜなら、それらは単一方向の情報伝達によって作り上げられた情報（社会）体系による必然として産み出されてきたものであるからである。さまざまな情報の伝達が双方向に可能な時代において、1対多の体系をもつ社会が新しく組み立てられる可能性は高い。その結果個人の存在基盤を各々が確認する必要性はますます増大してくるだろう。情報は取得するものではなく、判別し選択するものとなるからである。情報の海におぼれないために情報の確からしさを判別する手段や基準を各人が確保し、必要な情報のみを使って構築することが生産の中心となっていく。そして、個人の存在基盤は、膨大な情報の海から個人を守る領域の有無となると想定される。情報のスイッチをオフにしたときの生物的防御が可能になる空間が都市における最小構成要素となる。

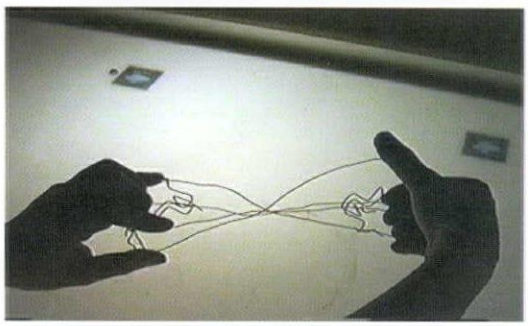
この都市の最小単位は都市的身体の核となるものであり、と同時に都市ソフトの変容に追従できる最小単位となるものでもある。建築はこれらの個人最小単位のサブセットとして成立し、そのセットはさまざまな時代や背景によって変容していくこととなる。組み替え可能なリレーショナル・データベースと読み換えることも可能であるだろう。パラメーターの取り方によってさまざまなセットに組み替えることが可能であり、また都市単位として個人に分解することも可能である。

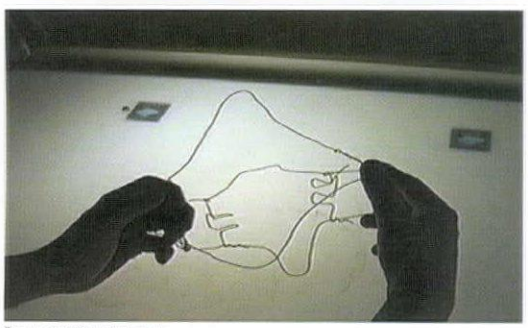
こういった柔らかさをもった建築が、デスクトップ・コミュニティ時代の建築として成立する可能性を私達は検証しなくてはならない。建築が物理的な空間をともなったハードな存在ではなく、ソフトな存在として都市を形成したとき、現在の都市は異なる様相をもって私達の前へ現れてくる。それは、個人によって異なる様相をもった柔らかい都市であり、これまでの都市概念とは一線を画した概念となるに違いない。そこには現在の都市の基準である密度概念を飛び越えた新しい都市のサブセットが存在している。（吉松）

⑤Soft Sculpture（藤村憲之）
位相を変化させずに空間のバリエーションを増やす試み。
⑥Knitting Architecture（遠藤幹子）
⑦やわらかいモノ（河内一泰）
⑧ギャラリー・インフィニティ（飯塚正規）
対戦型ゲームにおいて、主体はコントロールできない対戦相手により予期しないアクシデントが発生する。その面白さを建築に取り入れたもの。主体の意図に他者によるアクシデントも加わってこのギャラリーは複雑に変化する。
⑨プログラムとシンクロするシステム（馬渕富夫）
人の行動や出来事（ここでは講事の進行）によって形態が変化する建築。

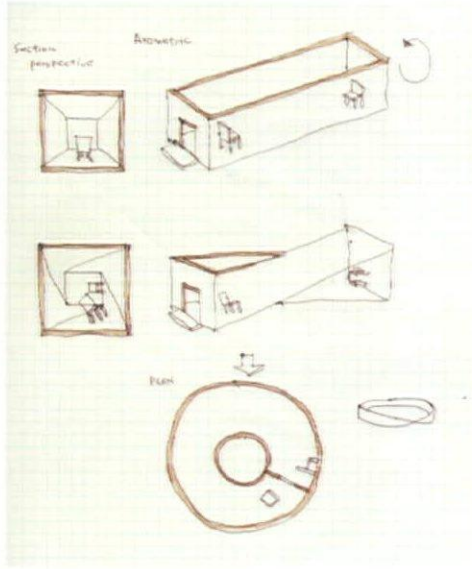


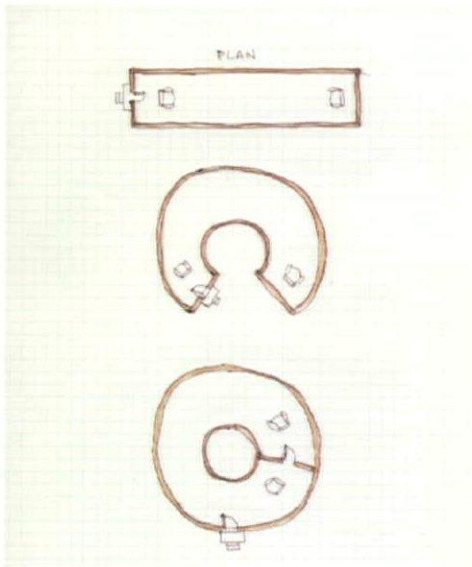




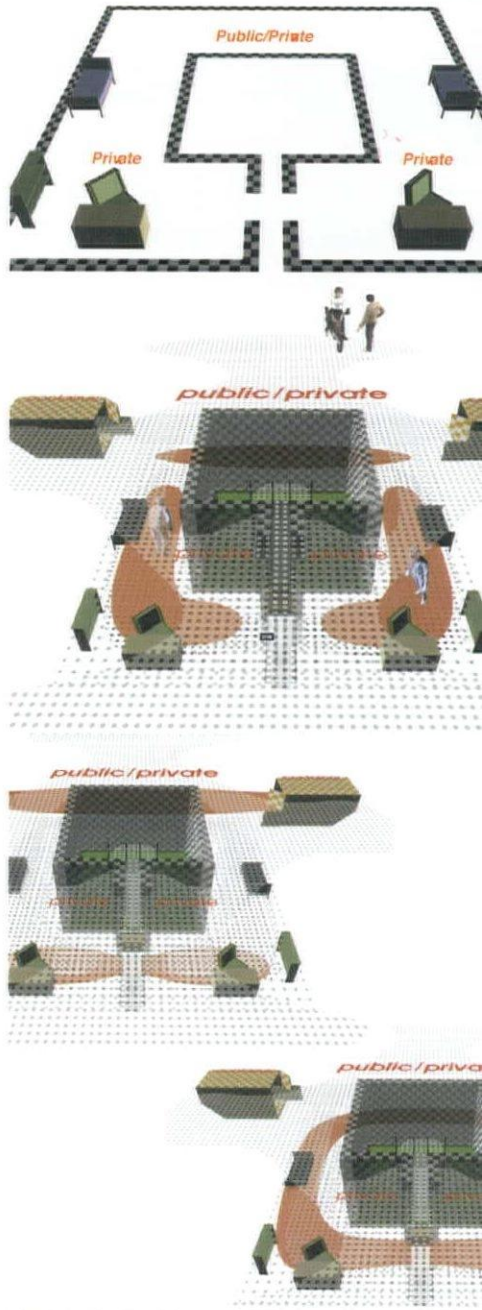


「でんわ空間」のモデル





スケッチ：バディ・ハウスの原形



プライバシーの状態を示すダイアグラム

バディ・ハウス

私達は普段、すでにあるものの組み合わせでさまざまな状況を乗り切ろうとする。リミックスという言葉のもとに、現代では新しいものを生み出すひとつの手法にさえなっている。だが私がここで行ったのは、今まで当たり前だと思われていたものに、あえて疑いをかけてみることだった。

現状の都市問題に対応した新しい都市計画といった解答ではなく、都市を成り立たせている考え方の基本を改めて考えさせるようなものを考えたい。私のこうした欲求が、「バディ・ハウス」の発想の基になっている。

バディ・ハウスは、ふたり暮らしを基本とした住宅計画である。家族、組織といった枠組みとは違う共同生活の可能性を、まず個人対個人、1+1というミニマムな単位から追求した。

ここでは、「デスクトップ・コミュニティ：1995」から「バディ・ハウス」に至るプロセスと具体案を説明している。

「でんわ空間」のモデル

針金で作られた最初のモデルは、「でんわ空間（p.84「デスクトップ・コミュニティ1995」参照）」をヒントにしたものである。一繋がりの空間にふたりの人がいる。ただそれだけのシンプルな状況が、部屋の形と共にどう変化してゆくのか考えてみるための模型である。

スケッチ：バディ・ハウスの原形

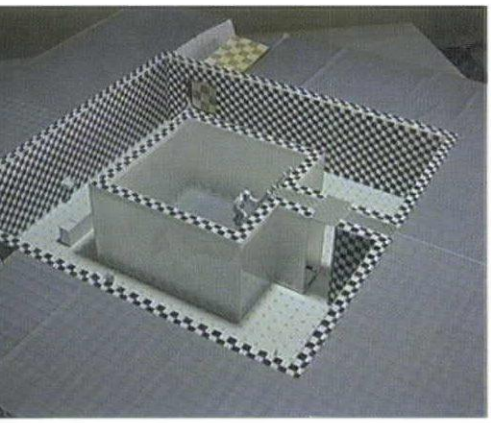
針金で作られた模型は、どうしても物理的にとり得る形に限界がある。手を使って考えることの限界だろうか。私が求めているような空間を、ある日スケッチをしていて考えついた。細長い部屋の両端にドアがあるモデルを、ドーナツ状にまるめ、両端のドアとドアを繋げる。ここで生じる空間構成は感覚的には少し複雑になる。ここではドアを開けても、通常の空間のように他の部屋や、外部へ行くことはできない。逆にドアが閉じていても、回廊の中を歩くことでドアの向こうにたどり着くことができる。

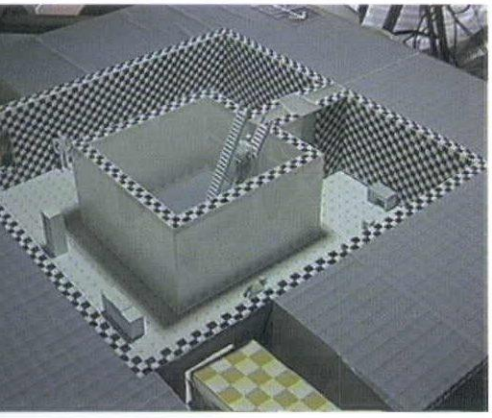
ダイヤグラム、模型写真、パース

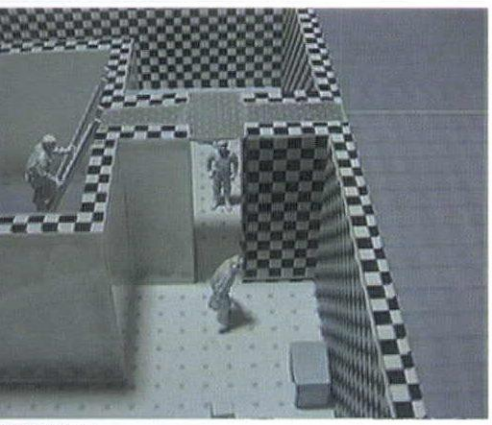
一連の作業のなかで最終的に設計したもの。ふたり暮らしを基本とした、共同生活とプライバシーの確保を同時に解決できるような、トポロジー的な空間計画をもつ住宅である。スケッチで表れていたドアは、共用の浴室／トイレのドアとなっている。中国の民家のように半地下に掘り下げられており、外部とは中庭から屋上にのびる階段で行き来する。

コンセプト・スケッチ――バディ・ハウスが指し示す都市生活の在り方

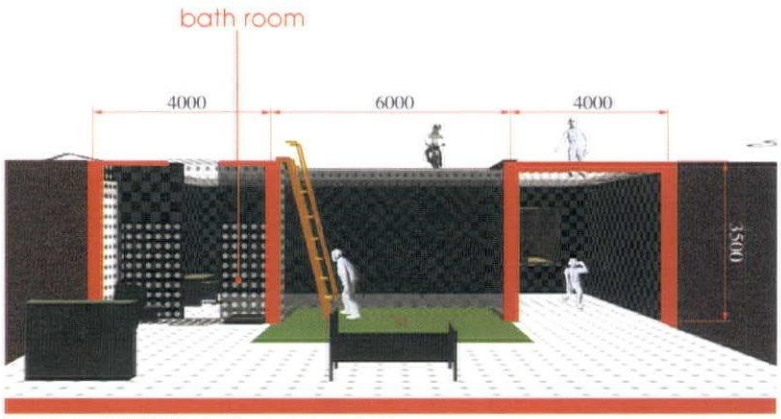
バディ・ハウスでは、都市のなかで最小の単位とされている個室という存在、それそのものに疑いをかけている。



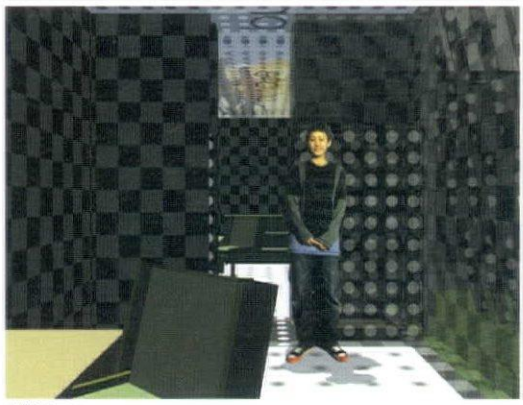




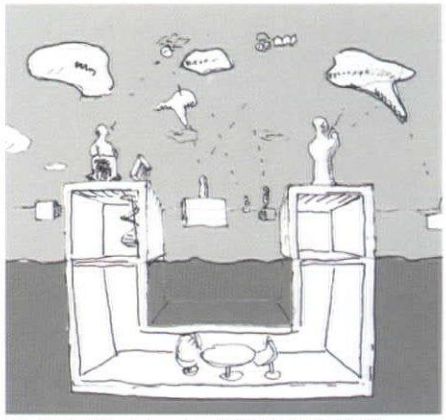
取った模型写真



断面パース：外部階段を使った地上からのアクセスを示す



内観パース



コンセプトスケッチ：バディ・ハウスと都市の関わり方

なぜ個人＝個室という考え方が生じたのだろうか？　それに対する答えに、私はまだたどり着いていない。だが現実の街の中で、人のプライバシーは個室という、壁に囲まれた単位のなかで保証されている。そしてドアや廊下、その先の共用スペース、道路、商店街……といったものが数え切れないほど多くの個室を繋ぎ、それらが総体で都市を形づくっている。

「デスクトップ・コミュニティ」の作業のなかで私が出会った多くの人々は、こういった都市に住みながらも、家族、組織といった枠組みを超えた、趣味や生活思想をもとにしたつながりを求め、その結果としてネットワークにたどりついていた。だが「個室、家、組織からできあがった都市＋ネットワークを介した自由なつながり」という、私が目の当たりにした現実は、決して健康な社会のありかたとは思えなかった。ではどのような社会があり得るのか？という問いには誰もが気付き、多くの人が個人の人生を賭けて考えている。デザイナーとして私にできるのは、現状の社会の基本になっている個室を、コミュニケーションの仕組みとして捉え直し、現実にあり得る生活像と、そのための空間を考えることだった。

ここで想定した生活像は、社会の中で個人として自立しながらも、かつお互いを知るため、共同生活を試みる人々の生活である。現状ではこういった生き方が可能なのは人生のなかでほんの一時期に限られている。だが、これからもそうであると言い切れるだろうか？

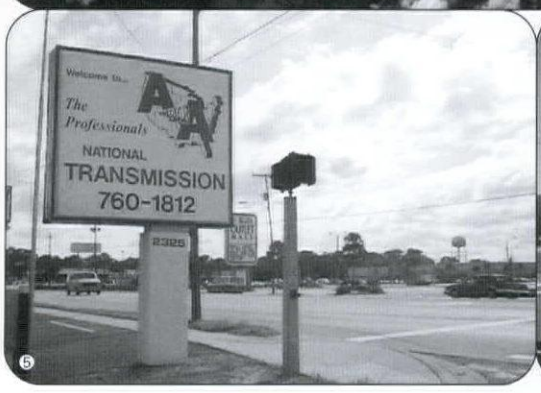
中年の女性達が集まって住む例、アーティスト達が入れ替わり立ち替わり住む家等、さまざまな共同生活が可能であることを実例が示している。こういった都市の中で少数の立場をとる人々の視点に立ったとき、私達にとって東京は昨日までの姿とは違っている。公共のためとされていた多くの施設が彼等にはそぐわないものになってしまっている。できるだけ自由度の高い、さまざまな生活を受け入れるデザインが、あらゆるスケールで必要になってくるだろう。

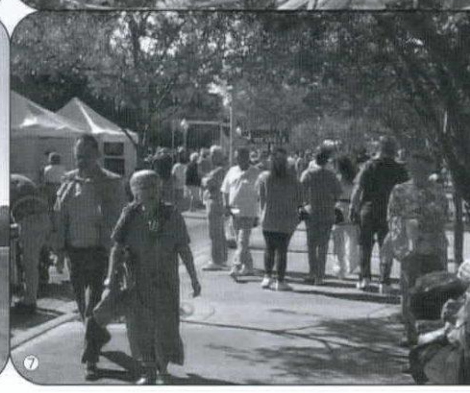
バディ・ハウスとは、こうして私が都市を見る視点をつくりあげるプロセスでもあった。コミュニケーションの仕組みとして都市を捉え直すことが、現在の私の出発点である。

バディ・ハウスは、A.ラボでの研究を離れ、大学での卒業制作の前段階として試行した住宅計画である。図版は一部、東京芸術大学の1996年度の卒業制作「ランドスケーパーズ」*1を使用している。ここでは改めてデスクトップ・コミュニティの視点からこの計画を振り返り解説した。（藤村）

＊1：CG作成協力／長坂常、岡村あずさ、藤森裕子、高橋耕平



都市でない都市

さまざまな通信インフラによって拡張された身体は、都市の概念をストレートに変革していくと考えてよい。距離や時間の概念が希薄となっていくことによって現在のような一極集中の必然性は薄れ、地理的にも都市領域は拡大していくと思われる。しかし、ここで述べようとしている「都市でない都市（低密度都市）」は、そうした都市の膨張や新郊外の概念の提示ではない。

都市と低密度はいわば矛盾する概念である。人口や機能密度の高い領域が都市と呼ばれてきた。それは高密度であるが故にさまざまな利便性が生み出されてきたからである。だが高度情報社会において、これら都市の成立基盤となっていた基準は根底からゆるがされる可能性が高い。

もちろん情報が双方向になり、すべての情報が時間や距離と直接的な比例関係になく手に入る時代となっても、私達が生物として人間である限り、肉体的な接触を求めなくなることは想像しがたい。むしろ逆に非生産的な交流のための時間が積極的に生み出され、それらが新しい都市への欲望となっていくと考えられる。ここではそういった現在の都市とは正反対の成立要因を持つ都市像を「低密度都市」という概念モデルとして提出したい。このモデルは、1996年秋にフロリダに滞在した経験から導き出されている。[*1]

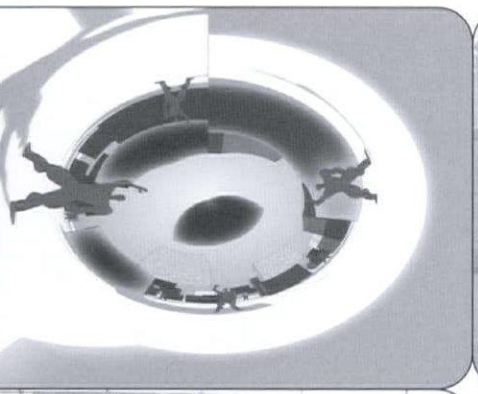
フロリダ半島東海岸にあるスミルナ・ビーチという人口1万人ほどの小さな町は、もちろん一般的には都市ではなく小さな田舎町でしかない。しかしフロリダというアメリカでも特殊な地域は、この町を近未来的な都市モデルとして成立させているように感じられた。リタイアした老人がほとんどの人口を占め、町には中心もない。ただ広大なジャングル（ブッシュ）のなかに通された近代的な道路に沿ってのみ、都市的アクティビティが存在している。そこには都市のヒエラルキーが存在せず、どこまでいってもリズムのない風景が連続していく。そして個人領域として必要なスペースのみがいくつかの交通網の背後にまばらに配されており、町を歩いている人も自転車で移動する人もなく、点から点の移動のみによって人々の生活は構成されている。住居からスーパーマーケットへ、モールへ、本屋へ、空港へと目的（情報）に応じて車で移動する。それらの情報と情報の間には何もない。茫漠としたノイズと時間だけが存在している。その感覚は大都市以上にデスクトップでネットサーフィンをしている状態と酷似しているように思えた。

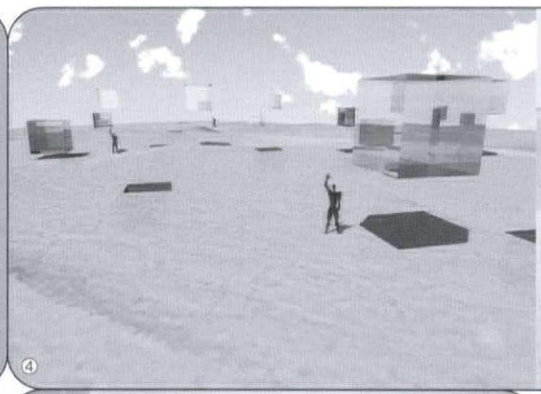
またこのようにその生活において、本来的なコミュニティの成立基盤をもたない住民たちのためにいくつかの文化施設が整備され、さまざまなプログラムに参加することによって住民はコミュニティとしての存続を確保されている。それらは主に非生産的なプログラムとして整備され、生産性を帯びない住民を唯一結びつける核となっていた。

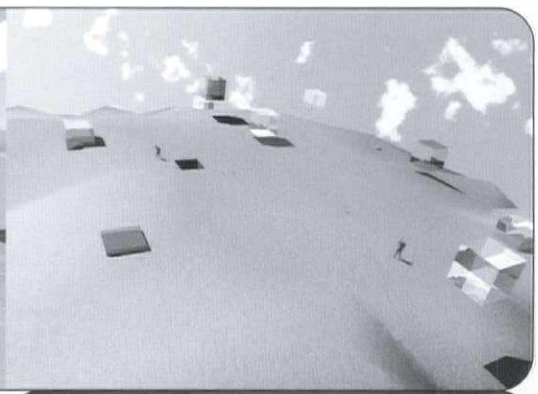
こういった町においても情報通信インフラは整備され、インターネットやBBSによって世界中の情報が確保されると同時に、世界を対象とした情報発信やプログラムが実行できる基盤が確保されていた。情報環境さえ整えば東京やニューヨークと何ら変わらない生産状況を生み出すことが可能であるのだが、こういった住環境においては、むしろ新たなる都市的欲望が生み出されていくように感じられた。その欲望は形態的な集積や情報への渇望ではなく、コミュニティ・プログラムへの欲望である。それはいわば生物的欲求に根ざしたものであると言えるだろう。

こうした安全性や居住環境を確保した上で、情報の利便性とコミュニケーション・プログラムの選択が高度に可能な領域を「低密度都市モデル」と呼んでいる。（吉松）

*1：吉松は1996年11月、Atlantic Center for the Arts（Artist in Residence Program 96）の日米国際文化交流プログラムに参加し、磯崎新とワークショップを行った。滞在期間中、フロリダと東京を通信ネットワークで結び、設計作業を行う実験と新しい都市概念の考察を行う。













低密度都市モデル

①フロリダの空
空からみるフロリダには、均質な湿地（ジャングル）が延々と拡がり、所々に人工的な町がポツリポツリと挿入おり、日本とはまったく異なる環境である。湿地帯だからか空には実に見事に同じ大きさの雲が等間隔に浮かんでおり、スケール感をそがれるような景色と教科書に出てきそうな道路計画の組み合わせが続く。

②ブッシュ
都市環境は、生物的な安全を確保するものへと移行する。ジャングル（ブッシュ）のなかに散在する住居は、安全な個人領域の確保として存在している。容易に踏み込めない領域に浮かぶ点としての住居。環境的な快適さと安全性、そして情報という最大の防御と攻撃性を備えた都市像が低密度都市である。

③デスクトップコミュニティCG
極があるかのようにつなげられる非接触型の空間を記述している。距離や時間の指標がない都市はゆがめられたり、ぼやかされたりする。

④低密度都市CG
低密度に散在する情報空間が立体的にオン・オフしている状態を示している。残されたノイズ空間をピンポイントで移動する人々。

⑤情報としての道路
移動手段としての道路に沿ってのみ、アクティビティが連続していく。道路にはメニューが連続的に並んでおり、ランドマークもなく風景も変わらない。数字だけが地理的な情報を確認する手段である。情報から情報への移動は車で行われるため、個人領域と都市のアクティビティはダイレクトにつながっては消えていく。

⑥ノイズ
スーパーやモールといった生活に必要な情報を得るために移動する。その移動は個人領域が拡張された空間であり、外部には刺激的な指標がないため、新たな情報はまったく得られない。ネット上で情報検索をしている感覚と同じである。本当に必要な情報が得られるまでは、個人的な領域がたち消えることはなく、環境はホワイト・ノイズでしかない。

⑦ポイント・フェスティバル
交流プログラムによってコミュニティは支えられている。フェスティバルは、所々に設けられた旧来の都市街路で開かれる。島のように成立している歩行空間である。この歩行空間も情報として捉えられ、ある一定時間のみコミュニケーションを求めて集まり、離散する。都市的な発展とは切り放された商業空間はネットワーク上のショップと構造的には変わらず、むしろ情報的には低密度であるが、身体的な交流の場として変化していくと思われる。コンピュータ・ソフトの流通は現在でもほぼ同様の構造を有している。

⑧コミュニティ・ポイント
リタイアした人々の社交場として存在しているフロリダのドッグレース場。のどかにそして静かにレースが行われる風景は、都市的な機能のひとつである賭博場が今までとは異なった都市施設として成立していく可能性を暗示しているように見える。経済的な交換は場所性を剥奪され、情報ネットワーク上に移管される。その結果、建築は身体的な交流の場として再編成され、いわばパイロット・ショップ的な比重が高くなると思われる。

⑨ネットワーク実験
フロリダにあるアーティスト・イン・レジデンス施設のライブラリーから東京へとつなぐ。日常的に使われるインターネット環境が実現しており、アクセスポイントもかなり小さな町まで整備されている。通信費用も一定のため、情報をほぼ連続して取得し続けることが可能であり、ノートパソコンを持ち運べば個人の労働環境がそのまま再現可能となる。連続した個人領域と労働空間の実現は、従来の密度概念にこれからの都市概念が従属しないことを示している。

⑩ミーティング・プレイス
今後、高度情報社会における労働体系は大きく変化すると考えられる。交換の利便性のみによって情報が集中する必然性が希薄になる代わりに、オフィス空間はより身体的なコミュニケーションの場として再編成されるだろう。オフィスはリゾート・オフィスや在宅勤務といった分散型の労働形式ではなく、個人単位の作業空間はオフィスに固定されるものではなくなり、ミーティングを中心とした知的生産の場としてのみ成立していくと思われる。その結果、労働空間は場所に従属する必要性を帯びなくなってくる。

「デスクトップ・コミュニティ」は近未来予測の形式をとっているが、厳密に言うと予測ではない。むしろ、少しは未来についても考えようという問いかけである。建築関係者は何となくこの話題に対して無関心なように思う。きっとすぐに頭の中がそれで建築はどう変わるのか？という直接的かつ具体的な話に飛んでしまうからなのかもしれない。鉄やコンクリートのような新しい材料が生まれて建築がどのように変わるのか、という話ならわかりやすい。毎日現場という非常にモノ的な場所で格闘していると、情報という実体のない話は何となくうさん臭く感じてしまうのかもしれない。建築と情報をキーワードにするとCADにばかり話題が集中するのも、いずれは建築にフィードバックされてくる生活の変化といったあいまいな主題より、仕事の進め方によりリアリティがあるからだろう。また、電脳住宅など設備還元型の流れは明るい未来を見せてくれるが、最近の動向を見ていると、近未来はあっという間にそれが現実になっている。未来の話として置いておくわけにはいかない。私達がかれこれ30年も前にマンガで見ていた未来社会がだんだん現実化されている。たとえば、現在開発中の腕時計型PHSはかつてのアニメ「スーパージェッター」で主人公が流星号を呼び出したモノと同じである。

私達は近未来に対して無関心であってはならないと思う。でないと、建築家は「パッケージ・デザイナー」化してしまう。建築の表層的なデザインや形態構成について考える人達がいてもよいし、建築のもつ普遍的で始源的な性質、つまりシェルターであることについて論考を続ける人達がいてもよい。しかし、建築が社会の反映としてのプログラムをもつ以上、社会との関わりにおいて建築を捉えるのは建築家の職能である。私達はノーテーションという手法を選択したが、建築家は新しくてハッキリとした形をもたない事象をビジュアルに表現することによって、なんらかの枠組みを与えることができる特別な能力を有している。建築家は与えられたプログラムをパッケージングするだけではなく、人間の思考に関わる本質的な部分に枠組みを与える役割も要請されていると信じたい。（山家）

本特集は、（財）ハウジングアンドコミュニティ財団の第4回デザイナー助成を受けた「デスクトップ・コミュニティ：空間概念の変化とその記述」（吉松秀樹・山家京子＋A.ラボ）に基づくものである。また掲載したプロジェクトは、A.ラボの主に1、2期のメンバーである藤村憲之、遠藤幹子、芦澤麻美子、飯塚正規、河内一泰、庄野健太郎、馬渕富夫、三好隆之、山口あき子、高橋美佳により作成されたものである。

デザイン＝遠藤幹子

MITSUBISHI
SOCIO-TECHの三菱電機

三菱乗用エレベーター

新しい［グランディ］のキーワード集。

［**バリアフリー**］普通の人と、子供やお年寄り、障害者との間にある、ふだんの生活での不便さなどの壁＝バリアをなくそうとする考え方。今回の「グランディ」新の基本思想です。

［**光の質**］無機質で変化のない蛍光灯だけでなく、印象の違うライティングを。かご内照明に、間接光やダウンライトをはじめ、天井のデザインまで含めた多彩な表情のバリエーションが揃いました。

［**ユニバーサルデザイン**］「ユニバーサル」とは、すべてに共通する、一般的な、の意味。バリアフリーの考え方を実際の設計に当てはめ、すべての人が不便なく利用できるようデザインしました。

［**クリック**］パソコンのマウスのボタンを押す動作として知られますが、本来はカチッと音をさせること。「グランディ」では操作ボタンを、押した際カチッという感触が伝わるクリックボタンを採用しました。

［**抗菌**］今ではあたり前のように使われる言葉ですが、辞書に載るようになったのは最近のこと。「グランディ」のボタンも、最近の清潔指向に合わせ抗菌仕様もご用意しています。［**発音式**］かご内の行先ボタンを押すと、電子音が鳴ります。操作が耳でも確認できる、ユニバーサルデザインの一例です。［**点字名板**］点字には、左から読むというルールがあります。「グランディ」では点字表示位置をボタンの左側（横配列のボタンでは上側）に統一し、読み取りやすくしました。［**横形副操作盤**］かご内の副操作盤には、ボタンを横配列したタイプもラインナップ。通常の操作盤と合わせて設置すれば、操作がより便利になります。［**ステンレス袖壁**］戸と横の壁にはさまれた、操作盤の取付位置の部分を袖壁と呼びます。「グランディ」ではこの袖壁を、天井から床まで一体となったステンレス仕上にし、グレード感をさらに向上させました。［**化粧鋼板**］金属の板に塗装や装飾を施したもの。かご室内装用に、新しい柄の化粧鋼板をラインナップしました。ビルの雰囲気に合わせて、快適な移動空間を演出できます。



カタログ差し上げます。
下記の宛先まで、ハガキか電話で、お気軽にご請求ください。

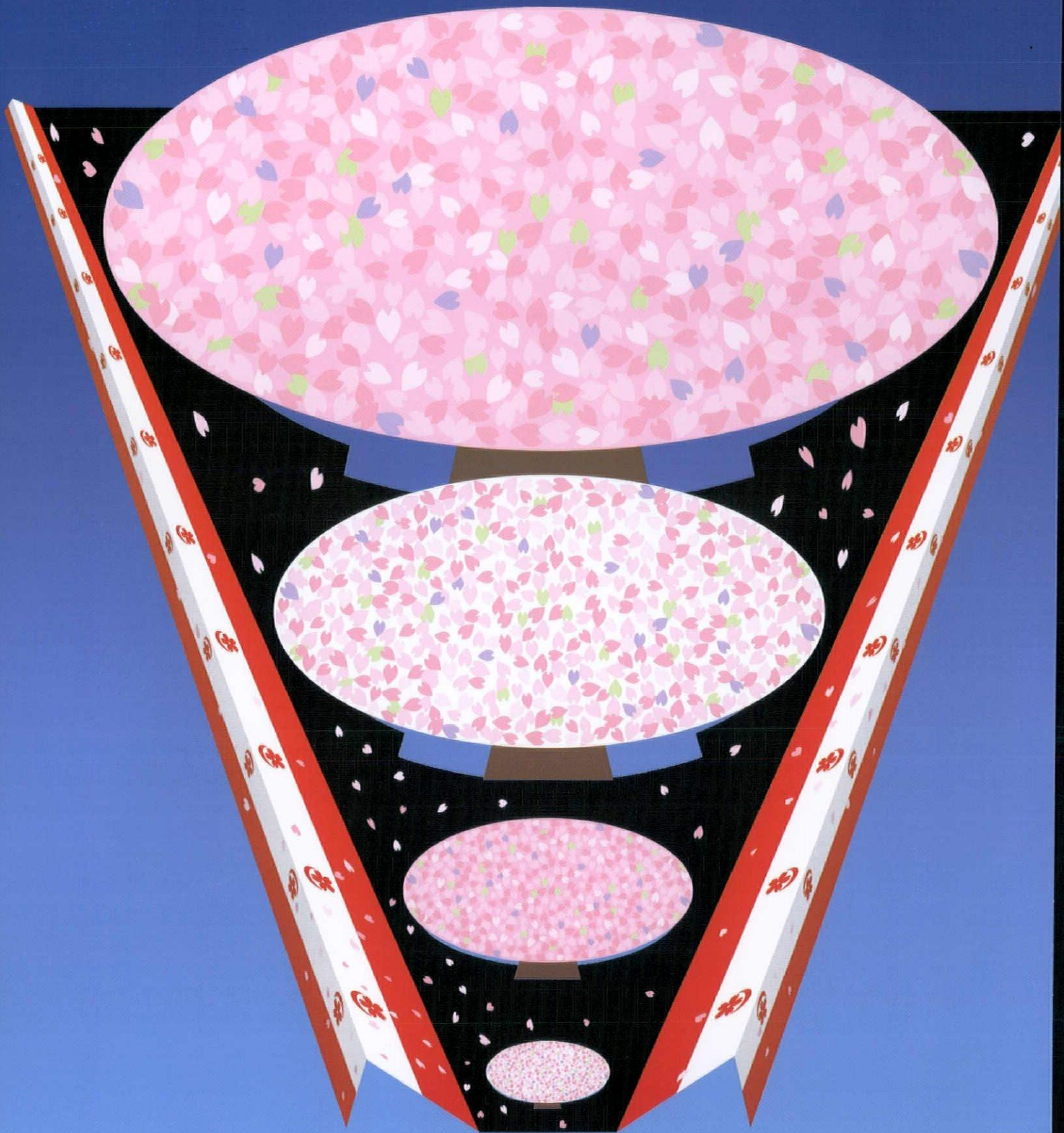
NEW

GRANDEE
三菱乗用エレベーター　グランディ

もっと、やさしく。もっと、美しく。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料請求は……三菱電機株式会社　〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20(赤坂パークビル)●本社ビル事業部 (03)5573-3747



連載❹森島紘史の起こし絵図

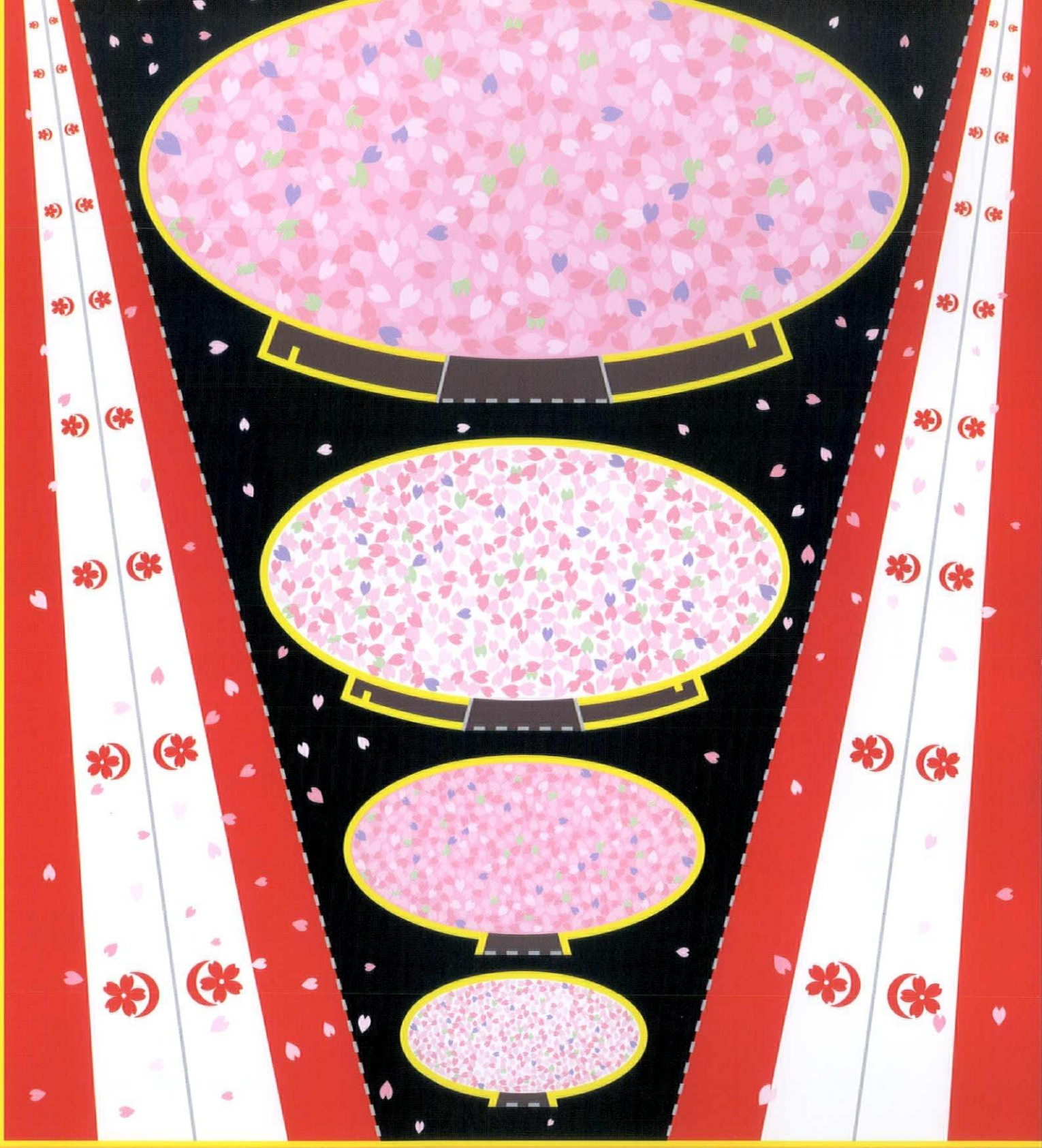
日本のかたち紙考

花見

古くは「花」といえば桜を意味していた。神代に大地を産み出すエネルギーを神格化した大山津見神（おおやまつみ）の女（むすめ）が、天上から依り降った木が桜である。

農耕民族の日本人には春告げ花であり、開花は1年の豊・凶作を告げる神聖なものであった。畑に1本の竹を立て先端に桜を一枝挿す。生け花の始まりである立花であるが、それは天と地の神々への交合の合図であり降臨を願う儀式であった。

今に伝えられる伊勢神宮の御衣には桜が描かれている。さらに日



本では仏教においても、日・月とともに蓮に代わり桜が死と再生の宇宙像曼荼羅図に描かれていく。

死のイメージと隣り合せの花見を華やかな宴に変えたのは、室町時代の婆裟羅大名、佐々木道誉であった。1366年（貞治5年）京都の西郊、町が一望できる大原野にある勝持寺で花の宴を開く。庭には、幹の周囲15mの桜が4本、その下に3m以上もある真鍮の花瓶を置き、桜の木を立花に見立てたのである。加えて一時に一斤もの香木を焚き人々を夢幻の世界へと誘った。

桜の花はみな下向きに咲く。冬に蓄えた力を一気に爆発させて、春の訪れを喜ぶ地上に花の精を降りそそぐ。満開の桜の見ごろはたったの2、3日。一瞬にして散るはかなさに、また潔さ（いさぎよ）に散らばこそ…の日本人の美学がしばしばなぞらえる。

岐阜県西北隅の散る直前に花が淡墨色に見える「根尾谷の淡墨桜」、福島県の日本最古のベニシダレザクラ「三春の滝桜」、山梨県実相寺の「山高神大桜」が、樹齢一千年を越す日本三大桜である。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授

PIONEER



レイアウトフリー、
これがパイオニアの考える業務用プラズマ。

薄さと美しさだけでは未来標準になれない。

パイオニアのプラズマディスプレイが、これまでのディスプレイの概念を変えます。

業界最薄、最軽量*
さまざまなセッティングに柔軟に対応できる薄さ88ミリ、質量30.8キロ。
取付用ネジ穴や専用金具を豊富に用意。壁ピタや壁埋め込みも可能。

高輝度・高画質
業界最高水準のパネル単体400cd/㎡の高輝度。
各色8ビット256階調/1677万色フルカラー表示。

4:3のアスペクト比
貴重な映像資産をそのまま未来に継承できるアスペクト比を採用。

マルチメディア対応
ビデオ信号はもちろん、パソコン信号などさまざまな情報表示に対応。

※1998年1月25日現在　40型電源モジュール内蔵タイプ



'97 東京モーターショーでの展示例

新登場



リモコン付属

＊画面の写真は全てハメコミ合成です。

業務用40型プラズマディスプレイ PDP-V7

標準価格 ¥1,400,000(税別)　1998年3月発売予定

50型ハイビジョンプラズマディスプレイシステム

PDP-501HD

好評発売中
標準価格 ¥2,500,000(税別)

システム構成:プラズマディスプレイ本体、メディアレシーバー、スピーカー(オンボードスタンド、リモコン付属)(配送・据付費、アンテナ工事費別)



パイオニア株式会社 ビジネスシステムカンパニー・国内営業部

東　京 ……TEL(03)3763-3137　　大　阪 ……TEL(06) 541-5088
札　幌 ……TEL(011)644-6268　　広　島 ……TEL(082)223-7985
仙　台 ……TEL(022)375-3124　　福　岡 ……TEL(092)451-2626
名古屋 ……TEL(052)262-5474　　●お問い合わせはお近くの営業所までどうぞ。

連載：世界の現代美術館探訪

美術館は生まれ変わる

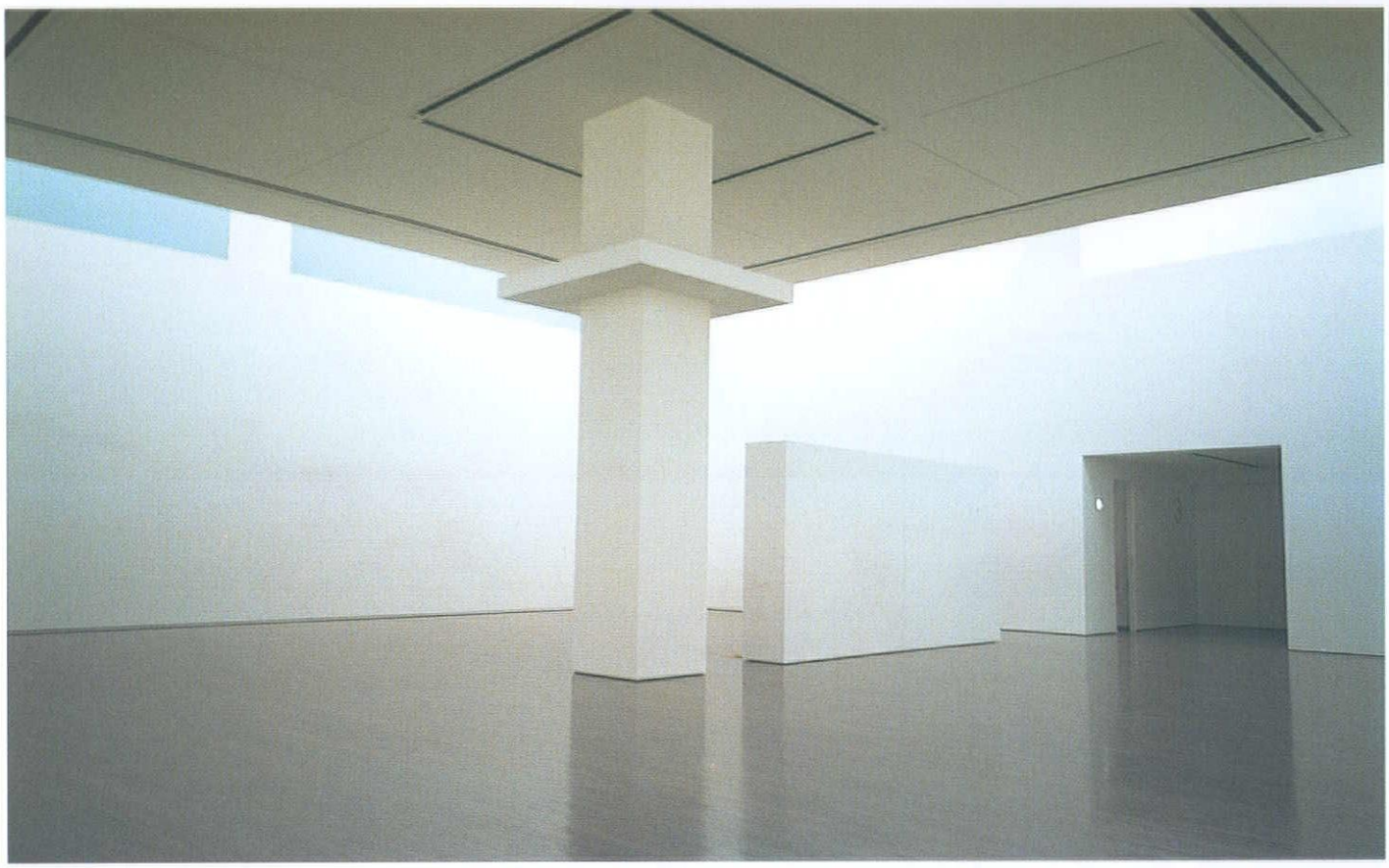
第 9 回

天の窓―スカイライトという問題構制／渡辺真理

ロサンゼルス現代美術館＋ルイジアナ美術館＋メニル・コレクション＋イエルバ・ブエナ芸術センター＋群馬県立近代美術館

■W. O. M²（21世紀美術館調査隊）
太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員
水沢 勉／神奈川県立近代美術館学芸員
渡辺真理／建築家、法政大学教授
松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師





1. 群馬県立近代美術館・現代美術棟展示室 3

「ホワイト・キューブ」の誕生

「(今日の)ギャラリーは、中世に教会がそうであったのと同じくらい厳格な規範に則して建設されている」とブライアン・オドハティは述べている[*1]。続けて彼は、「外部世界の侵入を拒絶するため、通例では、窓を設けることは避けられているし、壁はまっ白に塗られる。そして天井が光源となる」と書いている[*2]。

そのような展示空間は私たちにとってすでに見慣れたものである。彼のテクストはむしろ、今日の美術館のクリシェのひとつを的確に解剖して見せてくれているのだと考えた方がその意味するところがはっきりと見えてくるかも知れない。このクリシェ（あるいはオドハティ言うところの「規範」）は、60年代にニューヨークのギャラリーから始まったが[*3]、一般に「ホワイト・キューブ」と呼ばれている。

ギャラリーがどのようにして「ホワイト・キューブ」化していったのかについては、前述のオドハティの論考（『ホワイト・キューブの内部』）が興味深い。彼によると、それはイーゼル・ペインティングとそのフレーム（額縁）の存在と密接に関係している。

18世紀や19世紀のギャラリーでは絵画が壁を埋めつくすようにして展示されているのはきわめてあたり前のことだった（図2）。これは、展示空間の規模はずっと小さいが、中世以降のヨーロッパの王侯貴族のプライベート・コレクションの展示室である、「ヴンダーカマー」や「ステュディオーロ」にも共通する光景である。こういった展示形式を可能にしているのがフレームの存在なのである。それぞれの絵画は分厚い額縁によって隣接している絵画から分離される。画面はルネサンス以来の透視図法に従って構成されているので、それぞれのフレームの内側は別個の世界として存在することができる。絵画とフレームは窓と窓枠によく似た関係性をもっているともいえる。絵画はあたかも窓のように外の世界に対するイリュージョンをもたらす媒体として機能する。したがって、フレームが絵画の自律性を保証していると言うことができる。

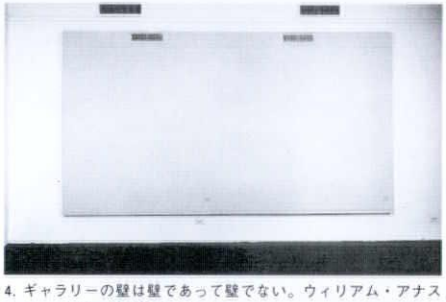
それに対して、印象派以降の20世紀の絵画は脱フレームの方向に歩み続けた。その結果何が起きたか。それまで絵画の明確なエッジを構成していたフレームが消去されると、観賞者の「眼」はフレームに代わるエッジを求める。そしてやがて「壁」が絵画を補完するものとして認知されるに至る（図3）。オドハティ流に言うなら、壁の自律性が認められるようになった[*4]わけである。ギャラリーの壁面がもはや「壁であって壁でない」ことをあらわにする作品としてはアナスターゼの1967年の作品がよく知られている（図4）が、こう



2. G.P.パンニーニ〈ヴァレンティ枢機卿の絵画ギャラリー〉



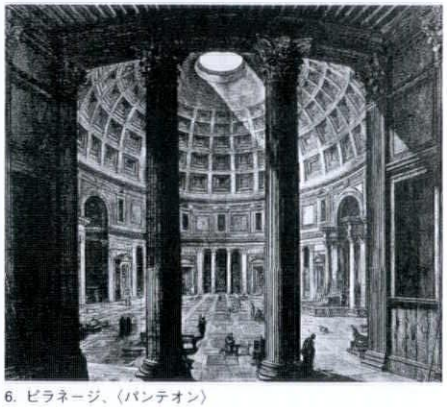
3.「フレーム」としての壁面。フランクステラの1964年のインスタレーション



4. ギャラリーの壁は壁であって壁でない。ウィリアム・アナスタジー、〈West Wall〉1967年



5. フランチェスコ1世は官舎（ウフィッツイ）の最上階をメディチ家コレクションのための展示スペースに改造した



6. ピラネージ、〈パンテオン〉

してホワイト・キューブという芸術上の意識革命は達成された。

しかし、それもすでにはるか過去の話である。ホワイト・キューブに対するアーティスト側からのリアクションについては前回いくつかレポートしたが[*5]、ここでは安直にホワイト・キューブ批判を行なう（それはさほど困難なことではない）のではなく、モダニズムがそうであるように、ホワイト・キューブも過去からのひとつの重要な遺産であるという立場に立って考えてみたい。

ヒントは「光」にあるのではないかと思った。前述のようにオドハティは「そして天井が光源になる」と述べているが、壁は今まで見てきたように重大な任務をあたえられているし、「床」には観賞者を適切に支持し、ニュートラルな壁面をディスターブしないという法が課せられるとなると、そのふたつにはチョイスはほとんどないことになる。残された可能性は天井に関わる問題、すなわちアートワークにいかに光を提供するかであるというのは誰しも気づくところで、「ライティング（採光）」の問題はこのところギャラリー設計の最もクリティカルなポイントのひとつなのである。

ライティングには自然光と人工光のふたつの光源がある。トマス・エジソンによる白熱電灯の発明（1878年）を想い起こすまでもないことだが、そのうちの人工照明はほとんど20世紀が可能にしたものと言っていい。

ただ皮肉なことにギャラリーの天井と天井照明は、モダン・アートを標榜するギャラリーの弱点だった。もちろん自然光にセンシティブな作品（水彩画など）が存在するにしても、ギャラリーの超時間性を確保するため（というお題目で）人工光のみに頼った美術館の多くは、悪しきホワイト・キューブとして批判を受けたし、実際ギャラリー・スペースとして成功した例は少ない。

つまるところ、自然光をいかにとり入れるかが焦点となった。これはおそらく自然光を排除したギャラリーの失敗という苦い経験から学んだ結果なのだろうが、メニル・コレクションの設計にあたってドミニク・デ・メニルがレンゾ・ピアノに与えた指示は明快である。「すべての展示作品は自然光の下で観賞されなければなりません。この光は、時刻、季節、天候などによって変化を続け、美術館の来訪者にそれと気づかせなくてはなりません」[*6]

ギャラリーの超時間性＝永遠性は自然と切り離されること（人工照明）によってではなく、自然とリンクすることによってこそもたらされるという信念がそこにある。

3種類の「窓」

自然光をギャラリーに導く方法は3つある。窓、側頂窓（クリアストーリー）、天窓（トップライト、英語ではスカイライト）である。「窓」は古来もっともよく使われている方法だが、「自律性をもった神聖な壁」が身上の今日のホワイト・キューブではギャラリー内に窓を設けるのは（オドハティの指摘を待つまでもなく）非常に困難である（もちろん展示室と展示室の間に窓をとるのは誰しも考える常套手段だが、ギャラリー内部の採光にはあまり効果がない）。

クリアストーリーはどちらかというと近代以前のギャラリーによく使われた方法である。部屋のプロポーションが細長くないと効果を充分に発揮できないという難点があるが、それさえ満たされれば、展示壁面を侵食しない、上方からの光という、いわば神秘的な光を手に入れることができる。美術館という呼称が適当かどうかはさておくとして、フィレンツェのウフィツィのガレリアは（図5）クリアストーリーの代表例のひとつということができるだろう。

さてそれでは天窓はどうか。ローマのパンテオン（図6）はもちろんミュゼウムではないが、ドームの頂部のオキュルスから落ちるシリンダー状の光のシャフトはいつ見ても感動的だ（もっともオキュルスは「開口部」ではあっても「穴」でしかないので、厳密に言うなら、天窓ではないのだが）。

ドームの頂部やヴォールト状の回廊の天井に天窓を設けた例はそれ以降もいくつも知られているが、画家のユベール・ロベールの〈ルーブル宮のグランド・ギャラリの屋根からのライティングのための計画案〉（c.1786年）が、天窓を美術館展示の採光に利用しようという考えのおそらくもっとも初期の例である（図7）。ロベールはルイ16世の任を受けてルーブル宮にミュゼウムを設立するために1784年にルーブル美術館の監視官に就任した人物である（革命後捕らわれていたが1801年に館長に任命された）。美術館のライティングのために壁面の窓からの採光を止めてヴォールト天井の頂部に連続する天窓を設けるというアイデアがどうして生まれたのかはよくわかっていないが、ルーブル宮はロベールの提案に従って改造された。そのため、ルーブルは一般大衆に公開された初めての美術館（1793年）という栄誉を担っているが、それ以来世界を代表する美術館として君臨し続けている。そのルーブルで用いられたことから、ギャラリーの採光といえば天窓という方程式が定着していった理由ではないかと思われる。外界と展示空間を遮断したいという願望と窓を開け

て採光を確保しなくてはならないというアンビヴァレントな状態を調停するには「天の窓」は妙案だった。天からの光には、前述のパンテオンの例でも明らかなように、どこか崇高な感情を喚起するところがあって、それも美の神殿である美術館にはふさわしいものだった。ただし、ギャラリー内には直射光は侵入してほしくないし、紫外線による褪色の問題も解決されなくてはならなかった(ガラス屋根からの漏水や結露の問題もあったことだろう)。そういった技術的な問題をクリアするために、天井面に半透明の板(レイライト)を付加する方法が考案された(図8)。レイライト(には今日ではプラスチック系の材料を用いることが多い)を設けると天空からの自然光は2重に拡散されることになるのでギャラリー内の光の条件が均質化される。またガラス屋根とレイライトの間の空気層が結露防止に有効に働く。さらに万一漏水事故があった場合でも(多少のことなら)止水面になる。19世紀型の美術館で天窓を用いている場合のほとんどはこのレイライト方式へと統合されていった。

このシリーズで美術館を神殿型と倉庫型とに二分して議論をおこなったことがある*7。これまで、神殿型の美術館の天窓について概観してきたとして、倉庫型の場合はどうだろうか。倉庫や工場の「ニュートラル」な空間がなぜアーティストに好まれたかは前に書いたが、ライティングについても、工場の作業空間もまた均質な光環境を必要とするという共通点があった。鋸歯状のスカイライトを用いた北面採光に代表される工場採光はもっとも安価に均質な光を得るための手段だったが、それは現代美術の希求する光環境でもあった。ここでは、故マックス・ゴードンが改装設計を行ったサーチ・コレクション(1984年)を例として挙げる(図9)。このギャラリーは元はと言えば自動車修理工場として1920年代に建設されたものである。

MOCAと「天窓」問題

「天窓」問題は私が磯崎新アトリエで設計に携わったロサンジェルス現代美術館(MOCA)の場合でも、設計を決定づけるような論点となった。MOCAの設計に際しては美術館側の建築委員会と設計者の間で数多くの議論が交わされたが、その中でギャラリーについては、1. ギャラリー階はワンフロアにまとめること、2. ギャラリーはできるだけスカイライトを設けて自然光をとり入れることが、設計の基本条件として定められた。このふたつの与件は太陽の光の満ちあふれる南カリフォルニアに建つ美術館に対する要求としてはもっともなものである。あの美しい光を利用しない手はない。ところが次に大問題が生じた。建築委員会にはカリフォルニアを代表するふたりのアーティストが委員として招かれていたが、そのふたり、サム・フランシスとロバート・アーウィンの意見がまっこうから対立したのである。

サム・フランシスはカリフォルニアの光がダイナミックに感じられるような光環境をギャラリーに求めた。太陽の光の変化に応じてギャラリー内部でも微妙な光条件が変化するようなスカイライトがベストである、もし雲が流れたらギャラリー内にいても雲が感じられるようにしたい、というのが彼の主張だった。それに対して、光の認識知覚表徴を作品の主題にすることの多いアーウィンは、屋外の光条件の変化を極力排除した均質な光の空間こそがギャラリーにふさわしいと譲らなかった。ふたりの議論を集約すると、サム・フランシスは鋸歯状の天窓を有する工場空間型の光環境を求めたのに対して、ロバート・アーウィンは古典的なミュゼウムのもつ天窓とレイライトによる採光を理想と考えたのである。

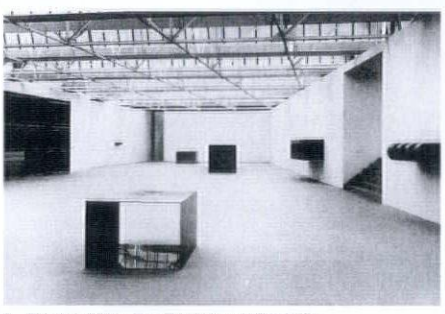
ふたりの議論は延々と続き、調停はほとんど不可能のように思われたが、磯崎新が名案を思いついた。美術館にふたつのアイデンティカルなギャラリーを設け、そのひとつには鋸歯状のスカイライトをもうひとつはピラミッド状のスカイライト+レイライトを天窓の形式として採用するという提案である。その提案はクライアントの要望に建築家が一方的に妥協したようにも見えるが、妥協であったとし



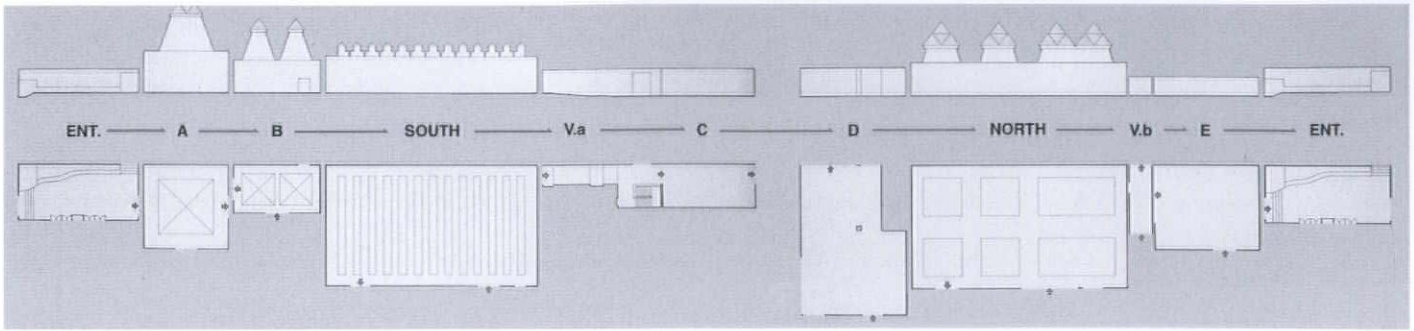
7. ユベール・ロベール〈ルーヴル宮のグランド・ギャラリーの屋根からのライティングのための計画案〉



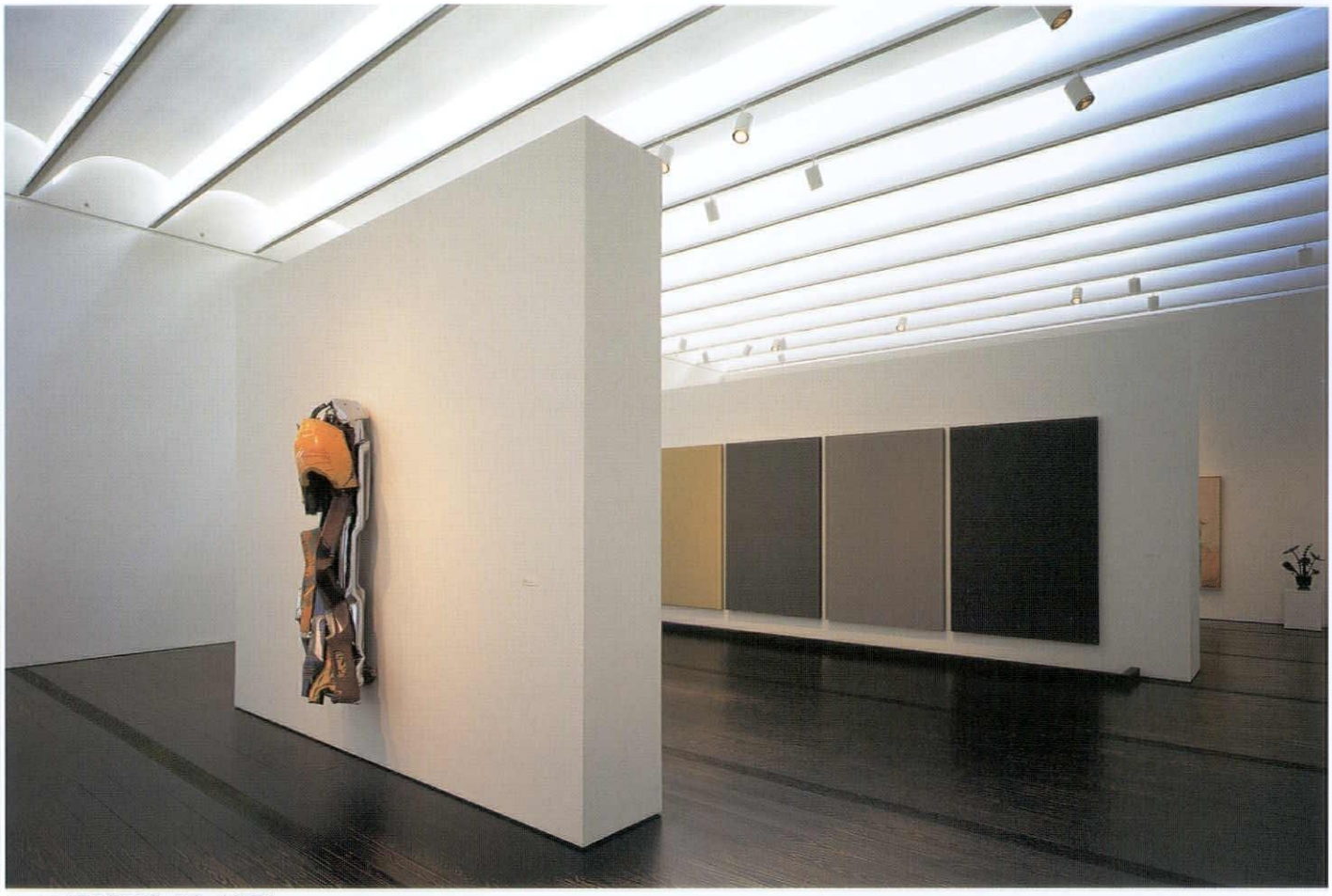
8. クレーラー・ミュラー美術館



9. ロンドンのサーチ・コレクションの展示室



10. MOCAの展示室の構成。4つのギャラリーに異ったスカイライトが使われている



11. メニル美術館展示室　写真＝古館克明



12. イエルバ・ブエナ芸術センター展示室　写真＝古館克明

たらそれは狡猾な妥協だった。結果としてMOCAは光環境の大きく異なるふたつの主要なギャラリーを手に入れたからである。サム・フランシスの提唱したギャラリー(南ギャラリー)は主として企画展示に、ロバート・アーウィンの推奨したギャラリー(北ギャラリー)は主として常設展示に用いることになったが、もちろんこれは原則であって、作品の質と展覧会の企画内容によって選択すればよいのである(図10)。これはまたMOCAが「神殿型」美術館と「倉庫型」美術館の両方の天窓形式を併せもつことになったことを意味している。

天窓に付随する技術的問題として、いかにして光を拡散させるかという問題がある。この問題を解決する理想の素材はなかなか見つからない。MOCAの場合では、後に述べるルイジアナ美術館で用いられているのと同じ、プラスチック系のオカパネという材料を用いた。協働事務所であるグルーエン・アソシエーツの担当者は製品検査のためドイツまで出張したが、どんなに貴重な材料かと思っていたら、あちらでは倉庫や工場の屋根材としてそこら中に使われているので拍子抜けした、というのが帰国にあたっての弁だった。あくまでインダストリアルな素材なのである。

スカイライトにまつわるもうひとつの厄介な問題は「夜」である。日中はギャラリーに美しい自然光をもたらす「天の窓」は日没と共に天井面の大きな黒いシミとなって展示空間をディスターブすることになる。この問題については、ライティング・デザイナーのポール・マランツが「夜間にスカイライトを均一に照らし出す人工照明」を考えてくれて解決したが、これも言うほどやさしくはない。ポール・マランツだからこそ「ノー・プロブレム」と言い切れるようなデリケートな作業なのである。

印象に残るスカイライト

以下に私の印象に残るスカイライトをいくつか列挙してみよう。美しいスカイライトが美術館の評価と密接に関わっていることが明らかになるだろう。

ルイジアナ美術館

1958年に工事が始められ5期にわたる拡張工事を経て1991年に完成したこの美術館は、すでに美術館建築のひとつの古典となった。1982年の増築工事でつくられた南ウィングの展示室は鋸歯状のスカイライトとその下に張られたガラス繊維の紗幕(しゃまく)によって美しい拡散光を得ている(同じ形式のスカイライトで紗幕のつかない展示室も備わっている)。(図13、14)

メニル・コレクション

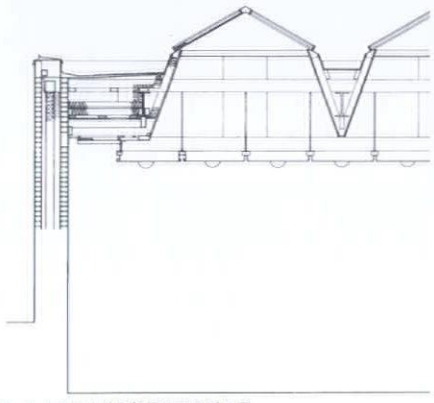
ヒューストンのダウンタウンからほど近い住宅地に建てられたメニル家のコレクションを常設展示するための美術館は、フェロセメントを使用したルーバー(建築家はリーフ(葉)と呼んでいる)が特徴である。エレガントな曲線の断面形をもつリーフは、収蔵庫と管理部門のある2階建の部分を除いた美術館の平屋部分のほとんど全てをおおっている(その一部は建物周囲の屋外空間まで延長されてテキサスの強い陽差しをやわらげた快適なボルティコをつくり出している)。このリーフとそれを支えるダクティル・アイロンの構造体の詳細については、レンゾ・ピアノの協働者だった構造デザイナー、故ピーター・ライスの魅力あふれる文章(「ピーター・ライス自伝」鹿島出版会)にゆずるとして、このギャラリーの光の美しさはマジカル(魔法のようだ)と言うしかない。1.2m間隔で平行に並べられた真白いリーフが光のリフレクターとなって、屋外空間の光のクォリティを保ちながらも微妙に制御された光環境をつくりあげている。リーフという名称もおそらく木もれ日の快適さを暗示しているのであろう。スカイライトはハリケーンの多いテキサスの気候に配慮して2層の空気層のある3重のガラスになっているが、ギャラリーからはリーフにさえぎられてほとんど意識されない。2階の通路からスカイライト群を見下ろしながら、「光を嫌うアートワークの場合はどうするのですか?」という質問を館長のポール・ウィンクラーに投げかけると、彼はよく聞いてくれたとばかりに、「アルミのカバーをスカイライトの外側からつけていくだけだからとても簡単なのです。」といってウィンクした。(図11、15)

イエルバ・ブエナ芸術センター

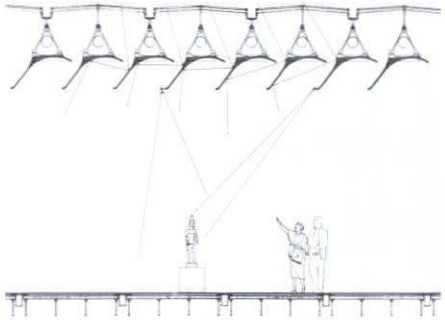
サンフランシスコ中心部のイエルバ・ブエナ地区の再開発の一環として建設された。美術館の下が他の用途に供されているというのはMOCAとも共通している(イエルバ・ブエナ芸術センターはコンベンション・センター、MOCAはパーキングという違いはあるが)。芸術センターという名が示しているように、この施設は(コレクションをもつ)美術館ではなく、もっぱら企画展示に使われるクンストハレである。その目的に合わせて、多目的スペースであるフォーラムと大、中のふたつのギャラリーが設けられている。スカイライトがあるのは中ギャラリーだが、ここではスカイライトの下に角錐台状のバッフル(反射板)が用いられている。バッフル型のスカイライトも近代の美術館が見出した自然光処理のひとつの方法だが、ここにはそのもっとも洗練された例をみることができる。(図12、16)



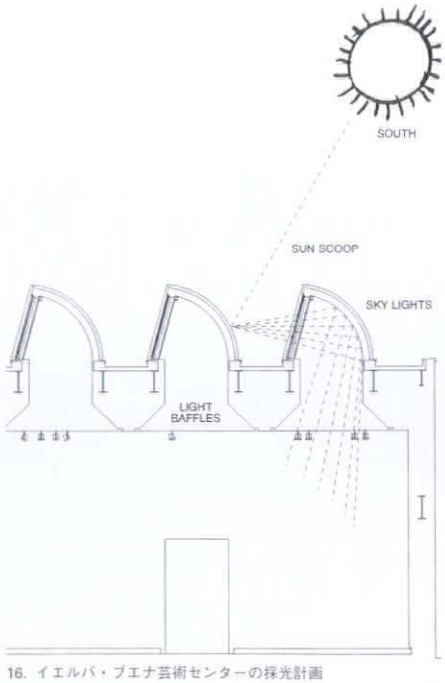
13. ルイジアナ美術館展示室



14. ルイジアナ美術館展示室の断面図



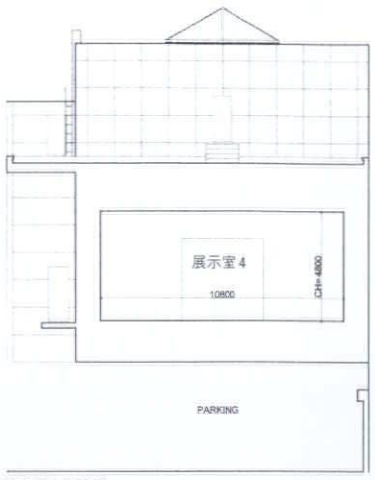
15. メニル・コレクション展示室の採光計画。自然光と人工光が組み合わされている



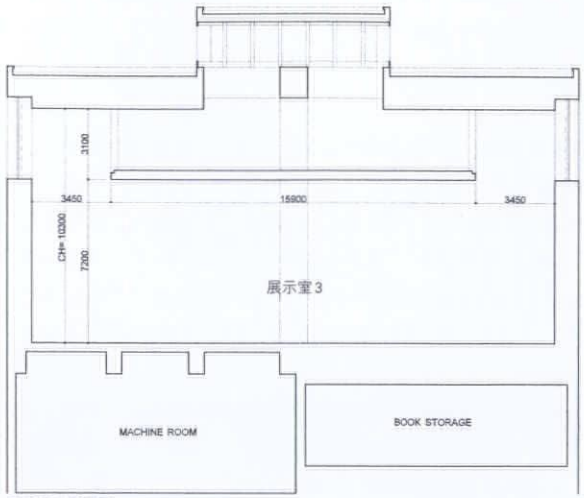
16. イエルバ・ブエナ芸術センターの採光計画



展示室5断面図

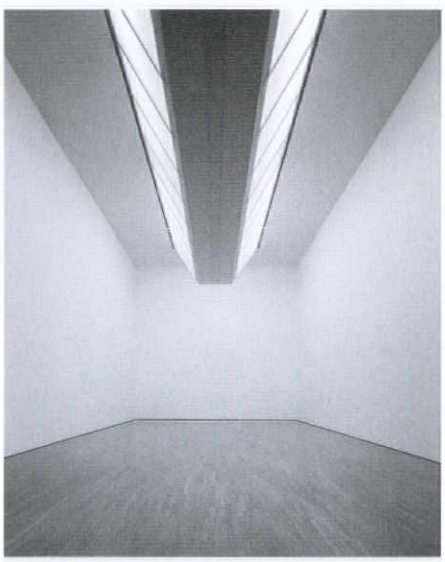


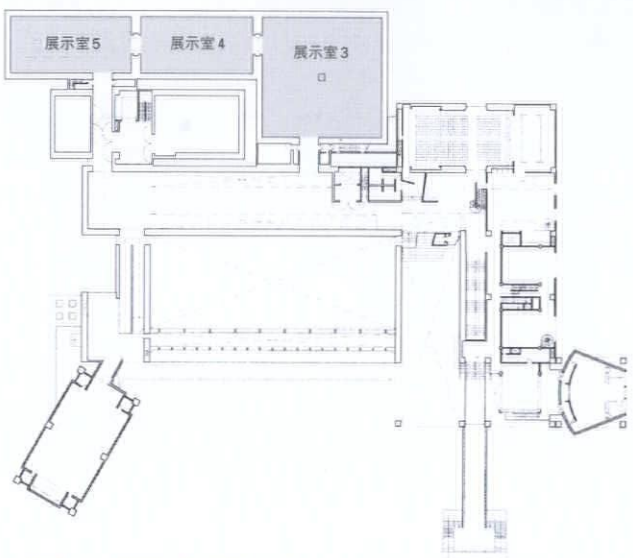
展示室4断面図



展示室3断面図

17. 群馬県立近代美術館・現代美術棟断面図


18. 群馬県立近代美術館・現代美術棟展示室5
写真提供＝群馬県立近代美術館



19. 群馬県立近代美術館・現代美術棟平面図

群馬県立近代美術館・現代美術棟

1974年に完成した美術館の背後に合計床面積約1,230m²の3室からなる展示室群が増築された。特徴は3室とも採光の方式が全く異なる点にある。連続する3室のうち中央の室(展示室4)は人工照明だけのギャラリーで、メディア・アートなどの外光を必要としない作品のための展示室であるのはギャラリー設計の定石といえなくもない手法だが、最初のギャラリー(展示室3)は室を四方から取り巻くクリアストーリーからの光が印象的である。ウフィツィ以来の(そして近代の美術館では永く顧みられることのなかった)採光方式の復権である。

もうひとつのギャラリー(展示室5)は、室の中央に集光室のようなチャンバーを設けてある。この集光室からの採光によって均一な照度をもった壁面を達成しようという、これも野心的な試みである。究極の壁面照明(ウォール・ウォッシャー)と言ってもいいだろう。

このふたつのギャラリーの「光」は室内に到達する前にあらかじめ自然光と人工光とがミックスされていることも設計上の極だった特徴である。ギャラリー内からは観賞者の「眼」をディスターブするような照明器具は極力排除したいと言うキュレーターの夢の実現である。コンピュータ・コントロールによってもたらされるカクテル光線がギャラリー内に超時間的な光環境を可能にした。その最終確認は、カスパー・ケーニッヒをゲスト・キュレーターに招いた4月11日からの開館展を待つ他はないのだが(図1、17、18、19)。

●わたなべ・まこと／建築家、法政大学教授

註

*1 Brian O'Doherty, "Inside the White Cube", The Lapis Press, P.15
*2 op.cit. P.15
*3 Maurice Besset, "Works, Spaces, Glances", Museo d'arte e architettura, Edizioni Charta, P.25
*4 op.cit. P.29
*5 連載「美術館は生まれ変わる」第5回「パーマネント・インスタレーション」(SD9711)
*6 "Renzo Piano Building Workshop Volume One", Phaidon, P.142
*7 連載「美術館は生まれ変わる」第1回「コンテナ・コンテンツ問題」(SD9707)

美術館データ

●ロサンゼルス現代美術館 MOCA
(The Museum of Comtemporary Art)
竣工年＝1986年
設計＝磯崎新アトリエ
所在地＝250 South Grand Avenue at California Plaza, Los Angeles CA90012 U.S.A.

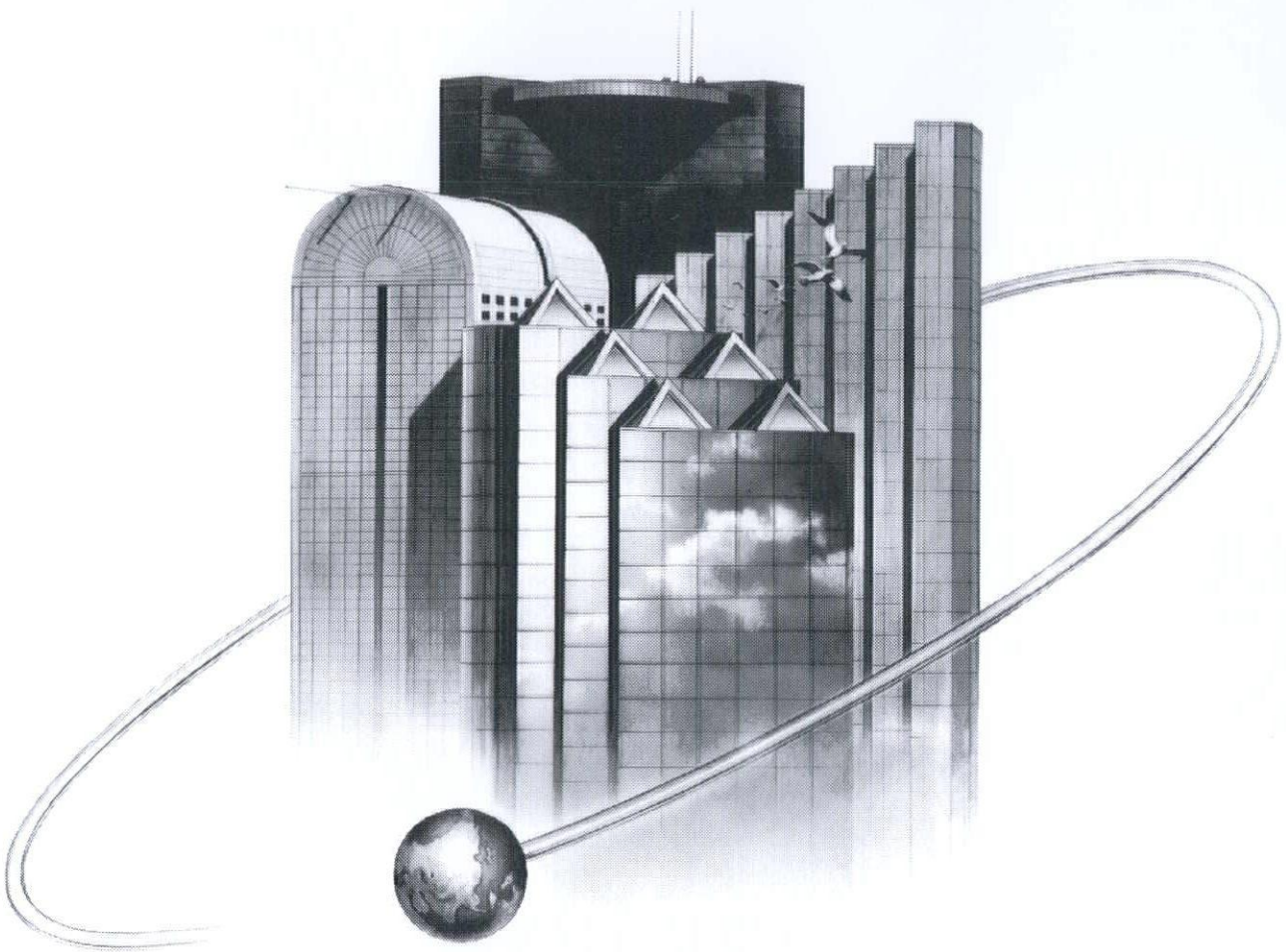
●ルイジアナ美術館
(Louisiana Museum of Modern Art)
竣工年＝1991年(第5期拡張工事)
設計＝コルゲン・ボー、ヴィルヘルム・ヴォラート
所在地＝Gl. Strandvel 13 DK-3050 Humlebæk Denmark

●メニル・コレクション
(The Menil Collection)
竣工年＝1986年
設計＝レンゾ・ピアノ+フィッツジェラルド
所在地＝1509 Sul Ross Huston TX, 77025 U.S.A.

●イエルバ・ブエナ芸術センター
(Yerba Buena Center for The Arts)
竣工年＝1993年
設計＝槇総合計画事務所+RMW
所在地＝750 Howard Street Sanfrancisco, CA, 94103 U.S.A.

●群馬県立近代美術館・現代美術棟
竣工年＝1998年
設計＝磯崎新アトリエ
所在地＝群馬県高崎市岩鼻町239

快適創造

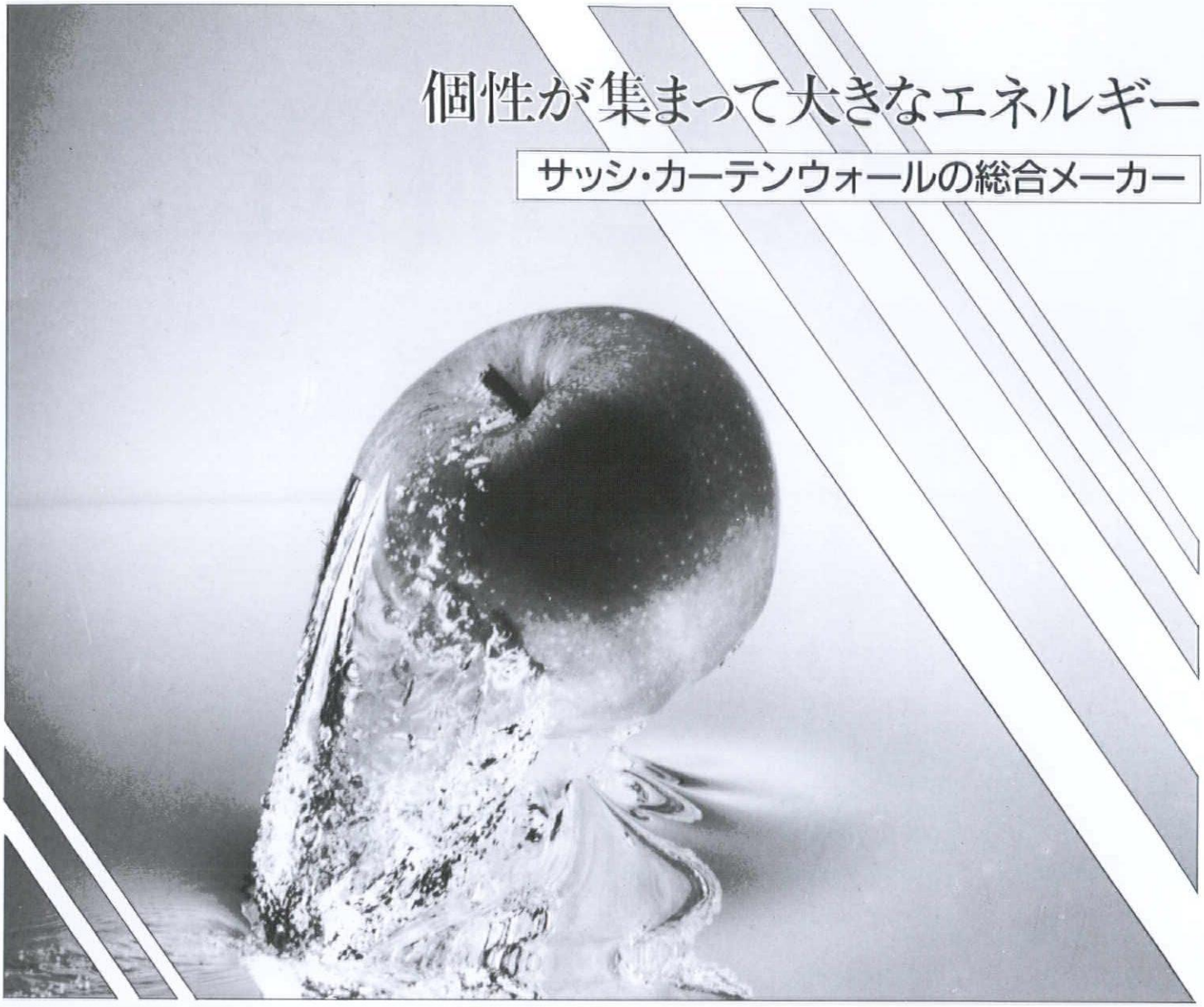


人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー

私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
〝テクノロジーとヒューマニズムの調和〟をめざす新しい時代をつくろうとしています。
とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。

昭和サッシ
昭和鋼機株式会社

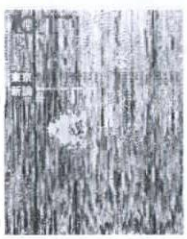
本　　社▶〒174-0063　東京都板橋区前野町6丁目1番10号
☎東京(03)3969-1101(代表)
所沢工場▶〒354-0045　埼玉県入間郡三芳町大字上富1163
明石工場▶〒674-0093　明石市二見町南二見21番3号
昭和鋼機サービス株式会社▶〒174-0063　東京都板橋区前野町6丁目1番10号
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

新刊紹介

『大江匡のデジタル・スタジオ』
大江匡+泉俊哉＝著
B5変形判　176ページ
日経BP社　2800円
著者は、事務所のデジタル化をいち早く進め、製図板のないアトリエを実現した。本書では、設計の合理化、プレゼンテーションの高度化など、CAD化の全貌をビジュアルを豊富に使って解説。建築空間と設計環境というふたつの方向から、建築のデジタル化を探ろうとするシリーズの第1弾。



『10+1　No.12』
B6判変形　224ページ
INAX出版　1500円
特集は東京新論。
80年代に起こった「東京論」は、「いかに都市を読むか」という「都市＝テクスト」が前提だった。
本書では、そうした記号論的東京論ブームを検証しつつ、それを踏まえた現在の東京の新たな現実と、東京をめぐる言説やイメージを分析する。



『ZOKEI―造形』
東京造形大学創立30周年記念事業実行委員会＝編
A4判変形　264ページ
六耀社　10000円
東京造形大学の卒業生の中で、ジャンルを超えた国際的な活動を展開する90人を選び、それぞれの代表作、近作と「造形活動への考え方」を紹介する。
論文は和文、英文両方で掲載、巻末には各作家の経歴、作品歴、受賞歴を併載。



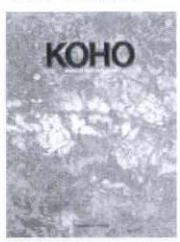
『建築形態論―世紀末、ペレ、ル・コルビュジエ』
越後島研一＝著
香山壽夫＝監修
菊判　112ページ
丸善　2800円
「部分」と「全体」の視点から、5棟の住宅、世紀末的デザイン、あるいは、オーギュスト・ペレ、ル・コルビュジエの建築を論じる。整然と運ばれる理論から結びの創作論に至る本書は、美しく正統的な建築の見方を示している。



『マッシミリアーノ・フクサス』
オスカー・リエラオヘーダ+ルーカス・H・グェッラ＝著
西森陸雄＝監修
A4変形　132ページ
グラフィック社　2500円
〈ユーロパーク〉など14作品を抜粋して紹介。そのどれもが敷地のコンテクストを重視し、それぞれ独自の方法論に基づいて設計されていることが見て取れる。序文はドリアナ・O.マンドレッリ。



『KOHO―龍村光峯作品集
フェニックスのタペストリー』
B5判変形(2冊組)　132ページ+72ページ
光琳社　5000円
伝統織物の世界を追求し続ける龍村光峯の初の作品集。彼の織物が醸し出す色調や文様の美、糸や組織によって生み出されるテクスチュアを紹介する。
帯などの染色作品を集めた「作品集」と、秩父小野田株式会社山手倶楽部の「タペストリー」の2冊組。
序文、伊藤俊治。



『アール・ヌーヴォーの邸宅』
下村純一＝著
A5判　128ページ
小学館　1600円
写真を中心に14の邸宅を紹介する「邸宅探訪」
実際に見学するときのための「アール・ヌーヴォーの街を歩く」
それにコラム、本文、年表の構成。
写真には著者らしい、細部へのこだわりが現れ、思い入れが感じられる1冊。



『迷宮都市モロッコを歩く』
今村文明＝著
四六判　202ページ
NTT出版　1500円
都市がどのようにつくられていくのかという問題に対して、フェズやマラケシュは示唆に富んでいる。
本書では、青年海外協力隊員としてモロッコに3年間滞在した著者が、植民地以前の市街地、メディナを中心に紹介する。
主要都市の詳細地図を収録。



『これで快適！マンションリフォーム』
パッソ・ア・パッソ＝著
A5判　240ページ
講談社　1500円
マンションが都会のひとつの住居形態として定着して30年あまりが経ち、さまざまな問題が現れている。
本書では、それらのひとつであるリフォームに焦点をあて、リフォームの基礎知識、室ごと、あるいは高齢者対策といった場面を想定し、248のプラン・アイディアを提供。期間、費用にも言及した実践書。



書評

『建築家の住宅論──富永譲』

評者=植田実

呼吸が楽になっていく住宅の本



「建築家の住宅論──富永譲」
富永譲=著
A5判　128頁
鹿島出版会　2500円

この本で、富永譲さんがこれまでの25年間に手掛けた、10の住宅を見直すことができる。精選された「都市の比較的小さな作品」は決して多い数ではない。しかも、それらについて現在の視点から改めてコメントするのではなく、完成、発表された時点の設計趣旨をそのまま再録するにとどめている。そうしたスタンスをとる配慮は、写真の選択をあえて新人スタッフに任せていることでもよく分かる。本の構成そのものがいかにも富永さんらしい。

過去に書かれ、発表された文章を、ただ集めただけ、それでも出版物として成り立つのが単行本という形式だが、筆者自身もこの10年を単行本の出版にかかわってきた体験から言うと、こうした本が、場合によってはいちばん読みでがある。

富永さんの建築は、それが建築誌に発表されるたびに深い共感をもって見てきた。図面をたどり、写真で確認していく楽しみは、その建築のどの片隅にも、安らぎを感じさせる場があり、しかもその場は固定せず、全体の空間の流れに洗われている。彼の住宅を見ていると呼吸が楽になっていくような気分があるが、それは上のような、隅々にまで浸透している居心地のよさと、ほど良い流動感に起因しているのだろう。それはまさに富永さん自身が意図したものであることは、その設計趣旨を読めば分かる。

この本に収められている10の住宅については、1、2を除いて実際に訪ねる機会も得ているが、その度に建築家の構想に対する同化は強まっていったように思える。そのどれもが、第三者に過ぎない自分自身が住むためにあるような気持ちにさえなったのだが、それも、富永さんがちゃんと意識している「心的現象の運動──時間のイメージ」に同化させられたためだろう。

そのように追ってきた25年間が、小さな単行本になった。これが前に読みでがあるといった、そんな本のひとつと思えるのは、その時々の同化に、今度はある距離をおいて、写真や図面や設計趣旨を再読する機会をもてたからである。平たく言うと、富永さんの説明の一つひとつを今度はまず疑ってかかるというか、それを読む自分自身の視点から一つひとつを異化させてみないと、現実の彼の住宅に、確実な記憶としては、結びつかないような気持ちに陥ったのである。

たとえば〈トポア1992〉という住宅のスタジオの「平面形状は、ル・コルビュジエの〈ラ・ロッシュ邸〉をそのまま利用している」、そしてその円弧の壁はスタジオとL字に交差する棟の断面形にも反復されることで、コルビュジエの「断片の言語は、すでに別の意味を帯びている」。つまり、その「同じカーブの曲面の交錯する場のリズム」へと形を意味が転じていると説明されている。

当時は、こうした建築言語の操作に、体験する眼もすばやく同化していったのだが、今、それを見直す余裕というか、体験と説明のあいだに空白ができている。パリの〈ラ・ロッシュ邸〉における鋭角的な体験が、〈トポア1992〉においてはより強化されたのか、あるいは観念化したのかをも含めて、それに〈トポア1992〉の充足した空間体験が、富永さんの説明から洩れた言葉で拾い上げる手がかりを、単行本によって表れた距離のなかに見出す可能性が垣間見えてくる。それがこの本を読む楽しみに変わっているのだ。

巻頭の、多分これは書き下ろしの住宅論「移行の様相──生活のリズムを生み出す枠組み(フレーム)」を読むとき、建築家として設計する立場からスタンスをとろうとする富永さんの姿勢は、さらに貫徹されている。「設計する立場」からすれば、と断りながら、その空間に住む人々の心に限りなく同化しようとしている。その美しい文章は、建築をよくわきまえた住み手のひとりの手になるもののようにさえ見える。つまり住宅をつくることと、そこに生きることとの大主題に、建築家の意識は、いわば偏向しているのだ。

筆者も、富永さんの住宅を本にまとめることを夢想していた。それは、彼が確実に手中に収めた独自の方法を説明する言葉も、その住宅の成り立つ背景としての都市や旅の光景も、歴史的批評性としてのフィルターであるロースもコルビュジエもすべて消し去った地平に、歴然と決定的な富永さんの住空間を、子どもがそこに生きて体験したことを、子どもの言葉で語るような本だった。しかし、その夢想が現実の本となる前に、より実際的な手続きで出現した本書は、富永さんの建築を愛する人々への格好の贈りものとなった。

括弧内はすべて本書より引用

●うえだ・まこと／編集者

書評

『光と影──甦る近代建築史の先駆者たち』

評者=川向正人

周囲を鼓舞しつづけた人の読者をさらに鼓舞する本



『光と影──甦る近代建築史の先駆者たち』
近江栄=著
A5判　218頁
相模書房　2000円

いま近江代表の下で幹事役として建築家倶楽部の運営をお手伝いして、ご当人と月に何回も顔を合わせている私に、本書をどこまで客観的に批評できるか、それがちょっと心許ない。本書は二部構成で、第一部は長年勤められた日本大学での最終講義、そして第二部には、最終講義のなかで触れられたご自身の執筆による論文がそのまま収録されている。したがって、本書は、近代建築史の研究書としての内容を充分に備えているわけで、個々の論文に関して、当時の研究水準のなかでの先取性や、その後の研究への影響・貢献などについて、建築史的に詳細に論評されて然るべきものだ。

だが、論文の細かな評価には立ち入らないで、ここでは、現実の建築界と建築史という研究領域との関係という、もっと大きな問題に焦点を絞ってみたい。この関係の健全な構築こそが、近江さん（こう呼ばせていただく）の中心的な関心事であり、これまで一貫して追求してこられたことだったと、私は思っている。本書を読んでも、一見話題はあちこちに飛んでいるようで、さらに深く読むと焦点が一点にぴたっと合っていることが、深い読後感として残る。これこそが本書の魅力であり、近江さんの生きざまの魅力でもある。

本書の中でも、何度か「評価」という言葉が出てくる。現実の建築界で毎日実務にいそしむ人々は、あまりに現実にどっぷり浸かりすぎて、逆に、いま自分は何をやっているのか、自分のやったことにはどんな意味があるのか、あるいは、これから自分は何をなすべきかと、漠然とした迷いとか不安を感じることがあるのではないか。「やっている本人が一番よく知っている」という表現があるが、現実は、必ずしもそうではない。同時代の同種の動きと比較したり、歴史的に流れを整理してみないと、日々の出来事や行為のほんとの意味付けや方向付けなどはできないものだ。しかし、それができないと、漠然とした迷いや不安も解消しない。漠然とした迷いや不安の原因になっているが、毎日を忙しく生きているだけでは、なかなか解けない問題。現実の建築界に対してそれを解く役割を担ってきたのが、近江さんと、本書にも登場する仲間の近代建築史家たちだったのではないか。要約すれば、近江さんが建築史家として実践してきたことは、建築界の現実の動きを観察しながら、しかし取るべき距離はきちんと取って、良いことは良い、悪いことは悪いと「評価」することだったように思う。

これができるには、現実の動きと近過ぎず遠過ぎず、ご本人の身にそなわった絶妙の距離感が必要だが、ほかにも、東京のど真ん中、駿河台の丘の高みという地理的位置やら、小林文次、浜口隆一、吉田鉄郎などの優れた師に恵まれたことも大きい。そして、自ら確信すれば、ずばっと「直言」する勇気。それも必要だ。こんな内容が、最終講義では、近江さんの普段の口調と変わらぬ調子で書かれている。読んでいると、だんだんと勇気が出てくる。近江研究室からは、建築史の研究者だけではなく、建築の実務の世界にも大勢の優秀な人材が出ている。この最終講義を読んで、その理由が初めてわかった。厳しい現実の世界を生き抜く元気の素（もと）を、研究室にいる間に、またOBとなっても、常に近江さんからもらっているのだ。心底から先生と呼ばれるにふさわしい人だ。近江栄という人物を直接知っている人も知らない人も、一度読んでみるといい。何となく現実の動きが分かり、だんだんと自分が元気になっていくのを感じるであろう。

評価といっても、盛り上がっている動きに水をぶっかけるような評価をする人もいる。だが、近江さんの評価は、やる気のある人間の後押しをする評価だ。インスパイア、つまり鼓舞する評価なのである。「出過ぎた杭は打たれない。思い切って出ろ」という最終講義の締め括りがまた素晴らしいが、詳しくは読んでのお楽しみ、ということにしておこう。

第二部の三菱煉瓦街、真島健三郎、下田菊太郎、蒲原重雄などに関する個別の論文からも、先駆者として頑張った人間には正当な評価を与えるべきだという、近江さんの人間観が伝わってくる。周囲の学生たちや建築界で頑張る人々に注いできたのと同じまなざしが、歴史上の人物にも注がれているのである。

●かわむかい・まさと／建築家、東京理科大学助教授

Book Review

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝渡辺武信



『ポストモダニストは二度ベルを鳴らす』
ギルバート・アデア＝著　池田栄一＝訳
白水社　2500円



『コスモポリタンの空間――コスモスと炉端』
イーフー・トゥアン＝著　阿部一＝訳
せりか書房　2800円

ポストモダンを超えてどこへ？

建築界のポストモダニズムの季節は過ぎ、今や初期モダニズムの再評価（岸和郎、植田実によるケーススタディ・ハウス研究など）が始まっているようだ。ポストモダンの潮が満ちてきた頃には、その歴史的必然性を擁護する論稿が無数にあったが、速やかな引き潮をきちんと論じた文章には、私の不勉強ゆえか、出会ったことがない。歴史上もてはやされた概念にはファッションとして片付けられない意味があるはずで、その意味付けをせずにポストモダニズムが終ったからモダニズムを見直すと言うのでは、新しいファッションを作り出すだけではないか。

『ポストモダニストは二度ベルを鳴らす』は建築のポストモダニズムを論じているわけではないが、建築以外の世界でポストモダンの潮流が勢いを失っていないことを考えると刺激的な本である。冒頭の総論以外はさまざまなメディアに書いた短いコラムの集積で、エイズの青年の写真を使ったベネトンの広告戦略から「軽さ」を売る煙草のポスターまで、あるいはジェームズ・ディーン神話からアンディ・ウォーホルの「独自でないものを作り出すことによる独自性」の逆説まで等々、実に多様な、そして多くはポップな素材が、ポストモダンという概念を包丁にして巧みに切りさばかれている。

著者の論旨に全面的に共感するわけではないが、近頃こんなに楽しく読めた本はない。それというのもアデアの語りが機知に富んでいるからだ。だいたい本書の題名からして、ジェームズ・M.ケインの名作ハードボイルド・ミステリ『郵便配達は二度ベルを鳴らす』（Postman Always Rings Twice）の巧みなもじり、というかスノッブな駄洒落で、その戦略は個々の短文のタイトルにまで、そして批評の文体にまで及んでいる。

著者によると、ポストモダニズムは「世界の読み方を再定義し再活性化するような新しい枠組みを作り出すことはない」「在庫調べの時代」（p.32）であるがゆえに生れた。つまり「過去の戦略を皮肉な……引用符の中に挿入することによって、それをもう一度機能させるのである。いわばポストモダニストは二度ベルを鳴らすのだ」（p.28）。

アデアはポストモダニズムの歴史的必然性を認めながら、その知的流通構造に辛辣な批判を加える。引用や入れ子構造に満ちたポストモダニズム的文脈の起源をロラン・バルトやウンベルト・エーコに帰しつつ、「映画製作者……コピーライターもまた、バルトやエーコを読んでいる。そしてその作品を『解読』しているつもりの自称記号学者よりも、はるかに賢く、はるかに抜け目がない……もともと解読できるように作られた人工的な『記号』を解読することに、一体どんな意味があるというのか」（p.44-45）と言う。

ここでの対象は広告を中心とする大衆文化だが、ポストモダニズムの建築の面白さも、その限界も「もともと解読できるように作られた」ことにあったのではないか。私はポストモダニズムの建築、とくにその先駆とも言うべき確信犯的な作品（たとえば磯崎新の〈つくばセンタービル〉）を面白がった人間だから、ここでアデアの権威を笠に着てポストモダン批判をするつもりはない。ただ自戒の念も含めて、建築におけるポストモダニズムの批評には「解読」のむなしさがあったのではないか、と指摘しておきたいだけである。

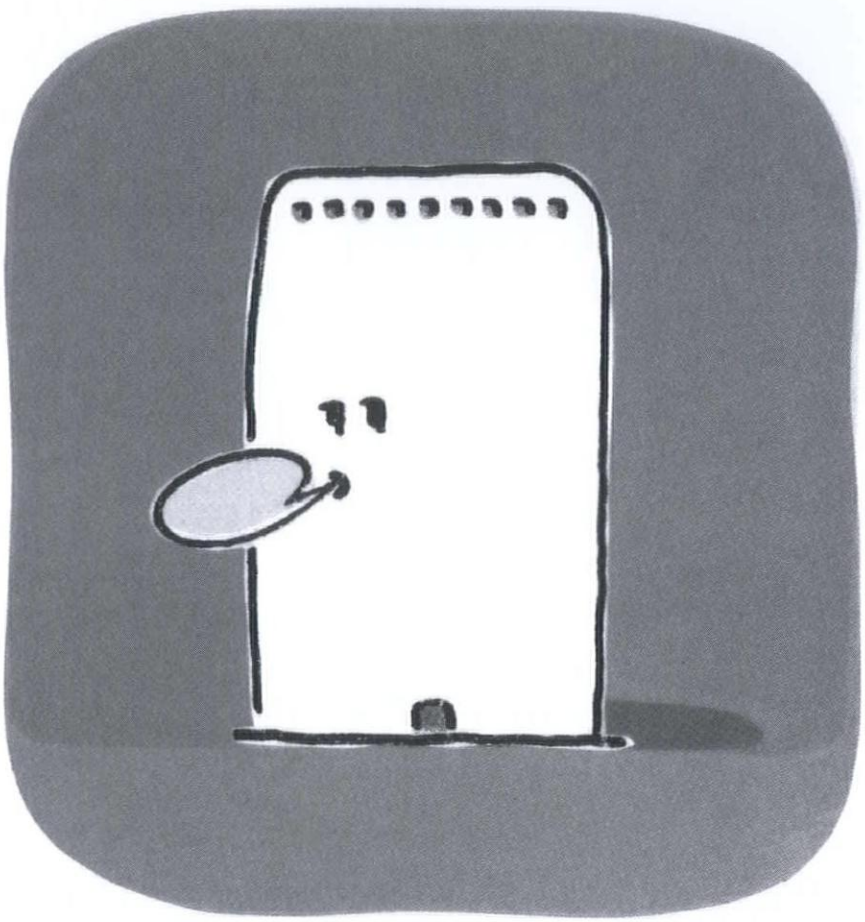
一方、イーフー・トゥアンの『コスモポリタンの空間――コスモスと炉端』はポストモダンを超える展望を開こうとしている点で、たいへん興味深い。トゥアンはポストモダニズムを「生活や文化の様式はどれも同じように素晴らしいという立場の過激な相対主義」（p.16）として批判し、モダニズムを再評価しつつ、それが多様な地域性と融合した「ハイモダニズム」という概念を持ち出す。

トゥアンは『空間の経験』で「空間」「場所」という対概念を提示した。物理的な広がりの中で特定の意味付けされた領域を「場」としてとらえる観点は独創的ではないが、それを磁場などの連想からくる「場」（field）ではなく「場所」（place）という平明な言葉に置き換えて、豊かにしたのはトゥアンの功績だろう。「コスモス」と「炉端」は、この「空間」と「場所」を継承し、文化的なニュアンスを加えた対概念である。

しかし、これは大変危ない進み方だ。なぜなら文化的な領域に立ち入ると、「空間と場所」が、19世紀末に遡るテニエスの「ゲゼルシャフトとゲマインシャフト」に収斂されかねないからだ。本書は〈ハイモダニズム〉を〈コスモポリタン的炉端〉（p.15-16）という形で具体化しようとしているが、これは著者も釈明しているように、元来矛盾した概念だ。つまり彼はゲゼルシャフトとゲマインシャフトの融合を唱えているのだが、そこには、混沌とした対象を鮮やかにふたつに分けて見せて、すぐ接合する手品のようなうさん臭さがあって安易に共感できない。最も、そのことを含めて知的刺激に満ちた書物であることは確かなのだが……。

●わたなべ・たけのぶ／建築家

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

お知らせ

「ジュゼッペ・テラーニ　ファシズムを越えた建築」展

イタリア・ファシズム期にモダニズム運動の旗手として活躍したジュゼッペ・テラーニの巡回展。建築家テラーニを俯瞰することで、建築と国家、建築と制度、あるいは建築とパトロネージの関係といった普遍的な問題を考察する機会となっている。図面、スケッチ、絵画、模型、手紙などの文書資料合わせて300点を8つのテーマで展示する。また本展のために撮り下ろした建築写真や実現しなかった計画案のCGアニメーションも展示。
会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー
会期：1998年4月11日(土)～6月7日(日)
時間：9:30～18:30　月曜休館(5月4日は開館)
入場料：800円
問い合わせ：水戸芸術館現代美術センター　担当：大橋、森　Tel：029-227-8120

岡村多佳夫企画IV　佐藤陽一展

写真によるインスタレーション。写真の透明性についての考察。
会期：1998年4月24日(金)～4月29日(水)
会場：AYUMI GALLERY　東京都新宿区矢来町114
問い合わせ：03-3269-1577

第9回フランク・ロイド・ライトツアー開催

視察先：タリアセン・ウエスト、マリン郡庁舎、その他個人住宅多数。タリアセン・ウエストではライトの自邸を訪問、リビングルームでのカクテル・パーティーや夕食会、コンサートなどが体験出来る。
旅行期間：1998年4月27日(月)～5月4日(月)
費用：488,000円
同行講師：遠藤楽、南迫哲也
問い合わせ：(株)トラベルプラン
Tel：03-3403-8911　担当：酒井

第3回土木・建築図書特別展示即売会開催

「環境共生と建築土木」という言葉をキーワードにテーマ性を持たせたコーナーを設置。一般住宅のエコロジカル・デザインからまちづくりまで幅広く取りあげる。また各出版社の土木建築売れ行き良好書も多数取り揃える。
会期：1998年4月16日(木)～5月26日(火)
会場：丸善なんばOCAT店
大阪市浪速区湊町1-4-1大阪シティ・エア・ターミナルビル5F　Tel：06-635-3225

槇 文彦展──風景の構築

代官山ヒルサイドテラスと槇文彦の30年の歩みと、進行中のプロジェクトやコンペ案を、写真、ドローイング、模型等で展示。
会場：ヒルサイドフォーラム　東京都渋谷区猿楽町18-8ヒルサイドテラスF棟1階
会期：1998年3月28日(土)～5月5日(火)
時間：11:00～19:00(月曜休館)
入場料：無料
問い合わせ：ヒルサイドフォーラム
Tel：03-5489-3648

A.ラボ第4期研究生募集

A.ラボは建築、都市、アートを対象とした研究を行う場である。デザイン研究を軸とし、プロジェクトへの参加などの活動のサポートも行っている。
講師：吉松秀樹、山家京子ほか
期間：1998年5月～11月
募集対象：大学4年生以上で、デザイン研究に時間がかけられる人
募集人数：6～8名
参加費：5,000円／月程度
申込み方法：研究してみたいテーマとプロフィールをA4判にまとめたものを下記へ送付、4月17日(金)必着
申込み、問い合わせ：〒156 -0054　アーキプロ ラボ
東京都世田谷区桜丘2-8-12アパルトマン岡庭302号
Tel：03-3439-7104　Fax：03-3439-5697
E-mail：yoshimat@da2.so-net.or.jp

「都市の記憶と再生──東京のたてものをまもる」展

失われゆく貴重な建物の保存をテーマとし、さまざまな実例や資料の展示を通して、建物を保存、活用することの意義を考える。
会期：1998年3月24日(火)～5月5日(火)
会場：江戸東京たてもの園展示室
東京都小金井市桜町3-7-1都立小金井公園内
入場料：300円
講演会「都市の記憶と再生」
日時：3月27日(金)14:00～15:30
講師：米山勇(江戸東京博物館専門研究員)
定員：40名(当日先着順)
会場：江戸東京たてもの園会議室
ミュージアム・トーク
内容：学芸員、研究員による展示解説
3月28日(土)、4月10日(金)、4月24日(金)
14:00から30分程度
問い合わせ：江戸東京たてもの園
Tel：0423-88-3300

「都市港湾のプロセスデザイン」展

「ウォーターフロント利用推進に関わる計画・構造研究会」では95年度以来2年間にわたり学識者専門家によっていくつもの都市港湾の視察、さまざまな視点からの研究討論が重ねられてきた。こうした研究会の成果として、「既存のウォーターフロント開発にとらわれない斬新な開発構想を構築し、新しいウォーターフロントの開発のモデルを示す。」という研究会の課題に対して作成されたモデル・プロジェクトを中心に、これからの港湾空間のありかたについてディスカッションを行う。
展示
展示作品：長谷川逸子＋ロンドン大学＋東京大学
宇野求＋千葉大学、みかんぐみ＋筑波大学、
岡河貢＋東洋大学、佐々木聡＋東京理科大学、
大学ディプロマ数点参加
会期：1998年4月6日(月)～4月12日(日)
時間：10:00～20:00
(初日は13:00から、最終日は18:00まで)
会場：TN Prove　東京都港区六本木5-14-35
Tel：03-3505-8820
講演、対談
日時：4月11日(土)17:00～19:00
会場：TN Prove
入場料：500円
講師：長谷川逸子(講演)
多木浩二×今福龍太(対談)
問い合わせ：建築計画工房　Tel：03-3818-5470

マレーシア・シンガポール建築都市ワークショップ開催

マレーシアとシンガポールを訪れ、現地にて建築ワークショップや講演会等を行う。
講師：ウィリアム・リム、フランク・ハート、
ビラー・ヘライツ、連健夫、田島則行
期間：1998年7月17日～23日
募集人数：20人(人数になり次第締切)
参加費：158,000円
申込先：日通旅行　Tel：03-3476-7782　担当：鈴木
問い合わせ：連健夫建築研究室　Tel：03-5436-5134

TOKYO FASHION STORY展 雑誌が生み出すファッション・フォト・スタイル

会期：1998年4月10日(金)～5月11日(月)
時間：10:00～20:30　会期中無休
会場：パルコギャラリー　東京都渋谷区宇田川町15-1
Tel：03-3477-5873
参加写真家：石田東、大沼茂一、稲葉元、新津保建秀、富永よしえ、長峯正幸、内藤啓介、BUNKO、若木信吾
問い合わせ：パルコギャラリー　Tel：03-3477-5873

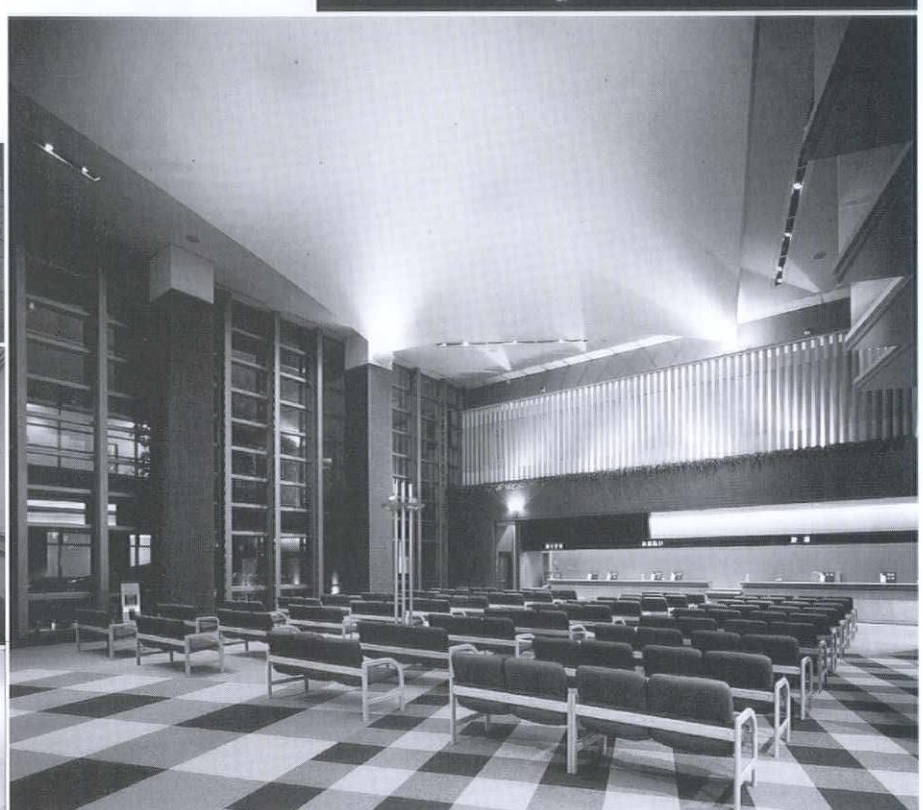
表情多彩

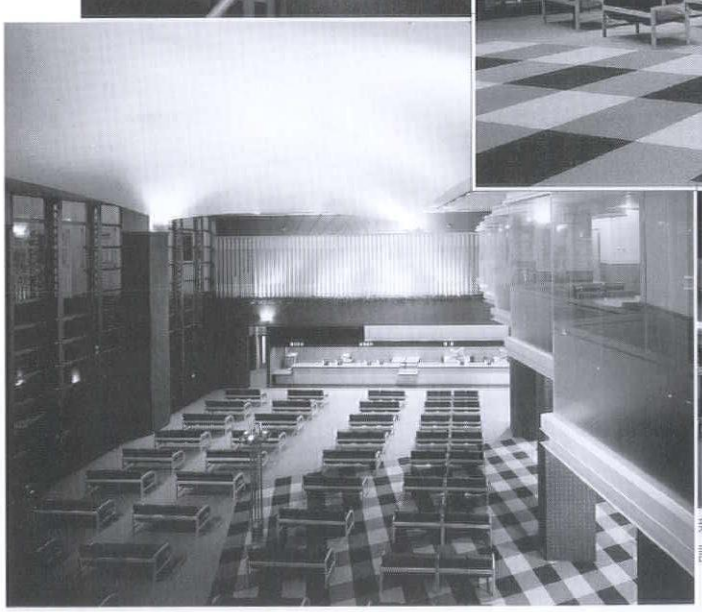
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



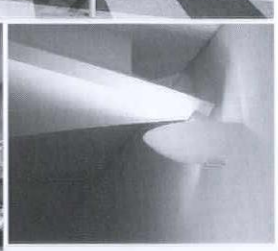












新潟県立中央病院（新潟）
設計管理：株式会社 佐藤総合計画

yamada
山田照明株式会社
本　　社／ショールーム　〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12　TEL.03-3253-5161
仙台支社／ショールーム　〒980 仙台市青葉区二日町11-11（ANDOビル）TEL.022-267-1630　横浜支社／ショールーム　〒220 横浜市西区南幸 2-20-1　TEL.045-311-1731
大 阪 支 社　〒542 東大阪市楠根 2-2-6　TEL.06-745-6811　福 岡 支 社　〒810 福岡市博多区店屋町 8-30　TEL.092-282-7635　札幌営業所　〒003　札幌市白石区菊水七条 2-61　TEL.011-811-2215
北関東営業所　〒370 高崎市上中居町 51-1　TEL.0273-26-4111　名古屋事務所　〒461 名古屋市東区泉 1-21-35-1102　TEL.052-963-8411　静岡事務所　〒420　静岡市西草深 23-9-502　TEL.054-247-0811
広島営業所　〒730 広島市中区十日市町 2-2-34　TEL.082-293-6119　鹿児島営業所　〒890 鹿児島市上之園町 4-14（第6相良ビル）　TEL.0992-58-0031　宇都宮事務所　〒802　宇都宮市海道町818-2-1002　TEL.0286-60-1381

清らか、
爽やか、
和やかな環境づくり。



■空調設備工事　■給排水衛生設備工事　■給湯設備工事　■その他建築付帯設備工事

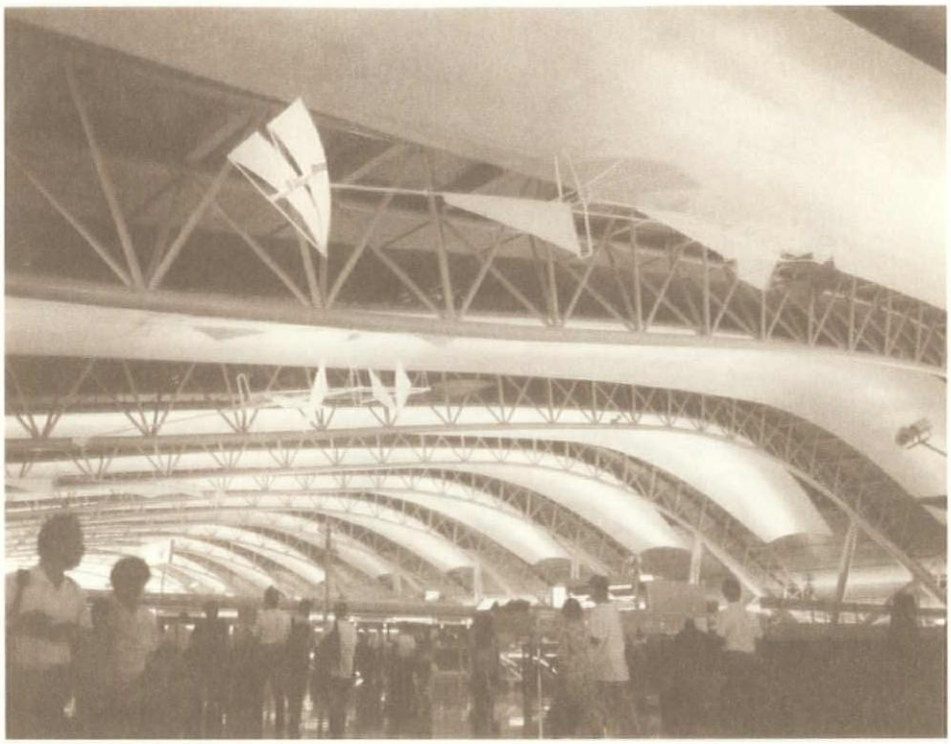
ヤナセ設備工業

good new days
人間らしい美しい未来を
ヤナセ

株式会社ヤナセ設備工業
〒105-0023 東京都港区芝浦1-11-4
電話(代表)東京(03)3455-8091

SD

5月号予告



「はてしない空」(関西国際空港)、1994／新宮晋

9805

特集1

空間演出の最前線——デザイナー、アーティストによるコラボレーション

近年、建築家だけのデザインで完結するのではなく、家具、照明、彫刻家、造形家などのデザイナー、アーティストとのコラボレーションによる建築が増えている。そこには、異種の感性やテイストが加わることによって、さらに生き生きとした空間が生み出されている。本特集は、こうした事例の実践的手法を探ろうとするものである。

紹介デザイナー、アーティスト＝

藤江和子、川上喜三郎、中村錦平、片山利弘、新宮晋、面出薫

座談会＝藤江和子+面出薫+小倉善明+栗生明

特集2

リベラとカーロの家——建築家ホアン・オゴルマンとメキシカン・モダン

社会全体が近代化の方向に進み、とりわけ芸術、思想における近代化の運動が盛んであった1920～30年代のメキシコ。そんな背景のなか、ディエゴ・リベラ、フリーダ・カーロたちとモダニズム、ナショナリズムという課題に対して果敢に闘ってきた、建築家ホアン・オゴルマン。そのオゴルマンの傑作であり、メキシコのモダニズムの象徴ともいえる〈リベラとカーロの家〉が昨年改修された。本特集では、オゴルマンの代表作であるこの住宅を中心に、メキシコの社会的、文化的背景を明らかにしながら、メキシコのモダニズムを考察する。



〈リベラとカーロの家〉、設計＝ホアン・オゴルマン

文＝多木浩二、伊東豊雄、鈴木恂、ギジェルモ・エギアルテ

対談＝多木浩二×今福龍太(中部大学国際関係学部助教授)

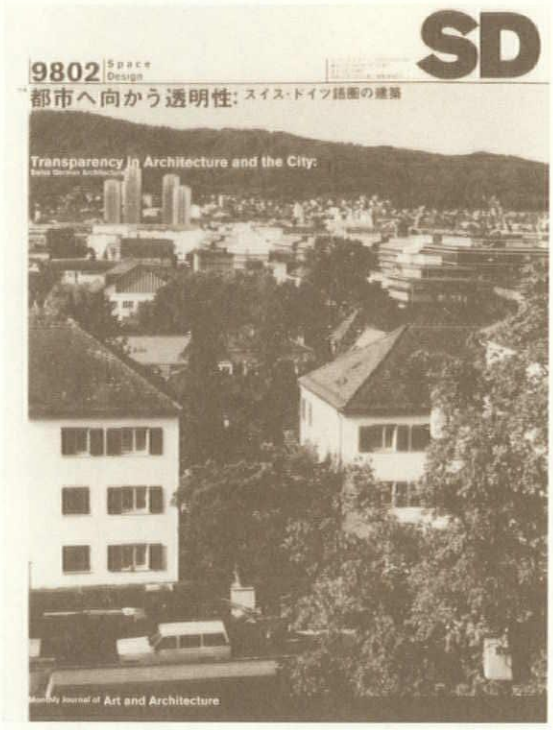
連載：

世界の現代美術館 9／太田泰人

森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 5／森島紘史

SD

バックナンバー





9802

特集

都市へ向かう透明性
スイス・ドイツ語圏の建築

ここ数年、スイスの特にドイツ語圏における現代建築には、ヘルツォーク＆ド・ムロン、ブルクハルター＆ズミ、ジゴン＆グイヤーなどの建築家の作品に見られるように、興味深い「四角い建築」が多く見られる。それらの「四角い」単純な形態の中にスイスという文脈、素材、敷地といった様々な問題を読みとることができる。またスイス・ドイツ語圏の建築家の多くがETH（スイス連邦工科大学）の出身であることも興味深い点である。

本特集では、スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながら、特にスイス・ドイツ語圏の魅力をさまざまな視点から探っていく。

紹介建築家：ヘルツォーク＆ド・ムロン、ジゴン＆グイエ、ペーター・メルクリ、ディーナー＆ディーナー、マルセル・メイリ＆マークス・ペーター、ミロスラフ・シック、ブルクハルター＆ズミ、モルガー＆デゲロ、マルケス＆ツルキヒェン
執筆者：貝島桃代、塚本由晴、ハンス・フライ、アーター・リューグ、マルティン・チャンツ、パトリック・グムアー、アンドレス・ヤンサー、マリー・テレーズ・シュタウファー

往復書簡：篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン

連載：世界の現代美術館7／カトリーヌ・グルー
連載：森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考2／森島紘史

特別定価=2,200円／本体2,095円

9803

特集

表層革命再考：
チェコ・キュビズム-ロンドキュビズム建築

チェコ・キュビズム——それはロシア構成主義やデ・ステイルにも影響をおよぼした前衛芸術。
近代建築の歴史観を少し東へずらせば、次世紀の建築に新たな可能性が生まれるだろう。本特集では現存するプラハのキュビズム建築を撮り下ろし写真により紹介する。

建築家・作品＝パヴェル・ヤナーク：〈アドリア宮〉、ヨゼフ・ホルル：〈コヴァジョヴィッチ邸〉、ヨゼフ・ゴチャール：〈ブラック・マドンナ〉、〈ブルノ銀行〉、他
文＝ヤン・ルケシュ、V.シュラペタ、新見隆、長谷川章、他
撮影＝鈴木豊

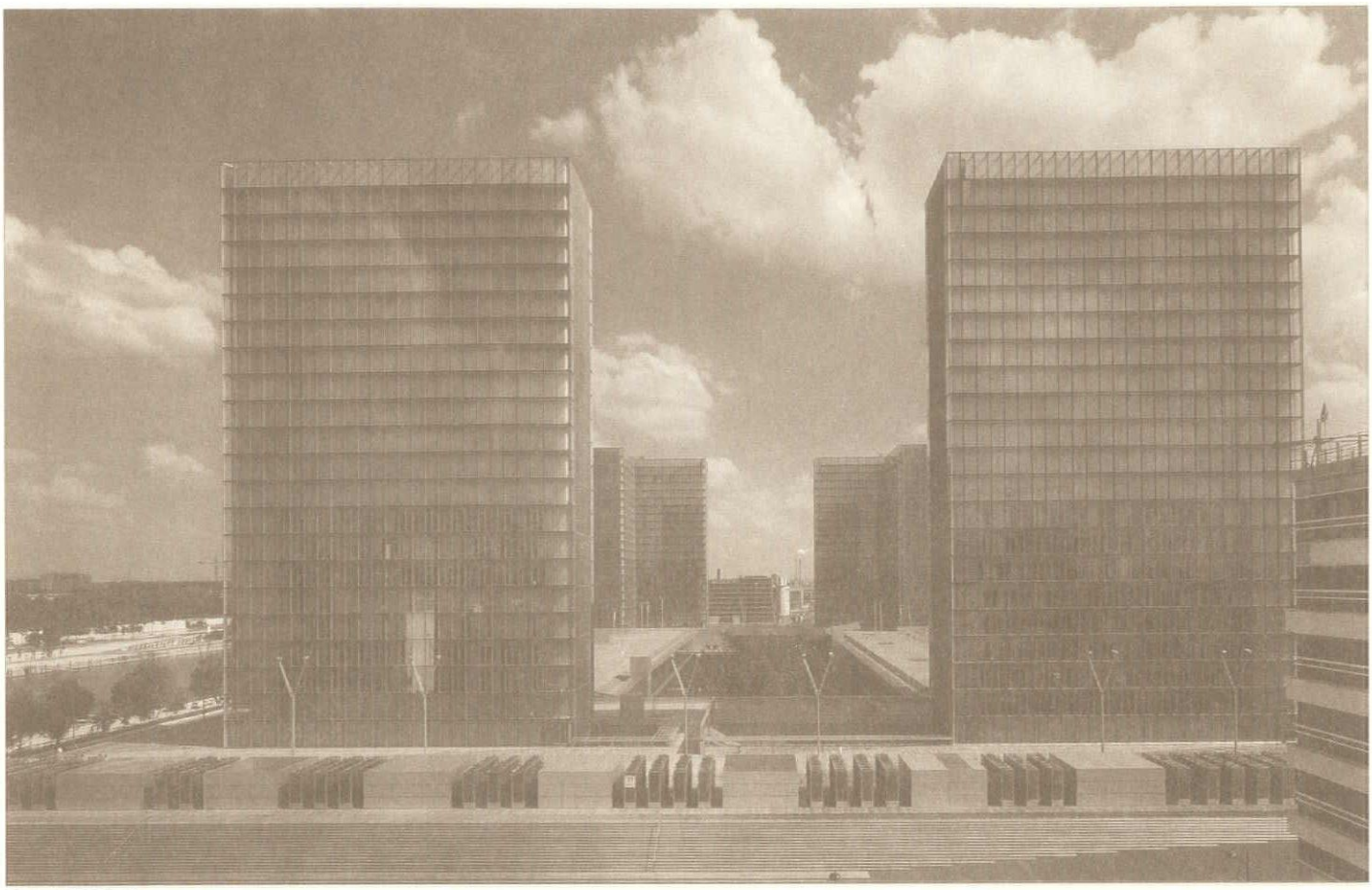
香山壽夫のドローイングと空間

建築空間のイメージと現実との間のフィードバックの手段として、建築家たちは多くのスケッチ、ドローイングを描いているが、香山壽夫もその熱心な一人である。彩の国さいたま芸術劇場（今年度建築学会賞受賞作）を中心に、ドローイング主体による空間とディテールを紹介しつつ、建築家のドローイングの持つ意味をも考察する。

文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木恂、青木淳

連載：
世界の現代美術館8／水沢勉
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考3／森島紘史

定価2,000円／本体1,905円



フランス国立図書館

SD別冊31号

本と人のための空間——図書館建築の新しい風

植松貞夫＋SD編集部＝編

総頁：168頁　定価：3500円（本体＝3333円）

内外の43の図書館を厳選し、メディアの多様化への対応、転用・再生・増築、都市型複合施設、快適な閲覧空間、巨大化と複雑化、特異な形態、大学図書館という7つのテーマの下に、豊富な写真と図版で紹介。

図書館は今、さまざまな課題を抱えている。多様なメディアの発達と普及への対処、急激に増加する図書の配架と収蔵の方法、既存の環境や建築の保全と両立する建設の方途、日常の読書室としての居心地良いスペースの作り方、高齢者や身障者に対する配慮、若年層の利用を促す工夫、など。

本書は、そうした課題の解決に役立ち、明日の図書館の姿を考える上で、数々のヒントと情報を提供する内容となっている。

収録図書館：

フランス国立図書館
イギリス国立図書館
ドイツ国立図書館フランクフルト館
ハーグ市立図書館
ミシガン大学メディアユニオン
ロサンゼルス公共図書館
ビバリーヒルズシビックセンター
オウル大学図書館、
オーデンセ音楽図書館
ハスレブ市立図書館
ヨエンスウ市立図書館
豊の国情報ライブラリー
国立図書館関西館（基本計画）
慶應義塾大学SFCメディアセンター
市川市生涯学習センター
大阪市立大学学術情報総合センター
伊万里市民図書館
湖東町立図書館、他

執筆者：

植松貞夫／図書館情報大学教授
小川俊彦／市川市生涯学習センター所長
寺田芳朗／山手総合計画研究所

SD別冊

SD選書229

サウンドスケープ

—その思想と実践—

鳥越けい子著

四六判　216頁　定価(本体1,800円＋税)

近年アーバンデザインの分野でも関心の高まりつつあるサウンドスケープについて思想と計画の両面から理論的に紹介する。カナダの現代作曲家マリー・シェーファーの仕事を基礎に都市デザインへの展開を試みる。

[主要内容]

序　章　音の風景をめぐって
第Ⅰ章　マリー・シェーファーと20世紀音楽の地平　マリー・シェーファーとサウンドスケープ概念の成立／新しいデザイン活動の提唱／音の環境芸術の地平
第Ⅱ章　音の風景を聴く　聴く技術としてのアート／音風景の解析／サウンドスケープから捉える環境
第Ⅲ章　サウンドスケープ思想に基づくデザイン活動　思想としてのサウンドスケープ・デザイン／デザイン活動における聴覚の意識化／「モノづくり」から「情況づくり」へ
終　章　サウンドスケープを生きる

SD選書230

風景のコスモロジー

吉村元男著

四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

地球環境が瀕死の重症に陥っているとき，地球の自然のなかで人類に文明の位置を明らかにするべき時代が来ている。本書では，古代世界の風景のなかに，楽園の思想を探り，持続可能な世界とは何かを考える。環境創造時代における新しい緑化，修景の技法として生み出す原理を探究。

[主要内容]

Ⅰ　コスモロジーの誕生—コメによる古代日本文明の誕生／自然における文明の位置／恐怖との闘い／コスモロジーの誕生
Ⅱ　風景のコスモロジー—共同体の風景／国づくりの風景／救済の風景／他
Ⅲ　楽園の領域：ニワの構図—楽園の構図／森の風景：神奈備の森／塔の風景：天と地を結ぶ道／自然と融和する都市の風景
Ⅳ　楽園のデザイン：ソノの構図—水平と垂直のコスモロジー／「しま」のコスモロジー／「流れ」のコスモロジー
Ⅴ　楽園の建設—古代世界の完成／寝殿造り庭園世界の建設

SD選書231

庭園から都市へ

—シークエンスの日本—

材野博司著　四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

本書は，回遊式庭園の空間特性であるシークエンス(継起性)を誘因として，「その都市らしさ」をもった日本的都市空間の回復を目指して，現代都市をいかに豊かで変化のある空間へと演出してゆくかについて論じている。

[主要内容]

Ⅰ　動きを誘う空間の萌芽—シークエンス空間の遠視
京の空間を歩いて—京を特色づける歴史的空間／「らしさ」のある地域空間／空間のリズムと「ゆらぎ」／他
Ⅱ　連続性と分節性のあいだ—シークエンス空間への近づき
都市空間の分節性／大空間と独立的微小空間／パノラマ景観と額縁的景観／見透しのきく空間と小さい眺め／他
Ⅲ　継起的回遊空間の魅力—シークエンス空間の探訪
空間のシークエンス／日本の空間の継起的展開／シークエンス空間の恵み／回遊式庭園の継起性／他
Ⅳ　日本的都市空間づくりへ向けて—シークエンス空間による演出
現代都市空間のシークエンス／継起性から見た日本的都市空間／シークエンスによる都市空間の演出

SD選書232

都市・住宅論

東　孝光著

四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

60年代末に「塔の家」でセンセーションを巻き起こして以来，多くの都市住宅の設計に携わってきた著者による都心部居住論。戦後日本の都市発展とともに変化してきた都市居住の解析をふまえ、21世紀に向けて新たな提案をする。

[主要内容]

プロローグ—私の都心居住二都物語
Ⅰ　都市居住の魅力と意義—何故、都市型住宅なのか
都市に住むという行為／塔の家の場合／住むことの単位／住み手とともにつくる／都市問題の顕在化／ひとつの仮説
Ⅱ　都市型住宅の冒険—空間素材の点検／機能から空間化へ／認識と方法／形態とすき間／ポリフォニイ建築論
Ⅲ　都市と住居のつながり—住居の外回り／都市の庭／個から集合／路地から〈都市的スペース〉へ
Ⅳ　都市の再生のために—場所の意味性：試論／街並み形成と建築／計画なき計画による都市づくり／集合のあるべき姿
小さなエピローグ

都市空間の芸術

パブリックアートの現在

カトリーヌ・グルー著　藤原えりみ訳
A5判　208頁　定価(本体3,000円＋税)

本書は現在関心が高まりつつあるパブリックアートを歴史的文脈に沿って語りつつ，公共空間の意味とパブリックアートの現代的意味を示唆する。欧米のすぐれた最新事例を30余り豊富な写真とともに紹介する。

［主要内容］

1章　公共空間とは―ディプ・ダーク・ウォーター／リエージュ通り／サーチ／芸術の領域
2章　記憶の現代性―ドラム罐の壁―鉄のカーテン／勝利の門／共和国の本質と道徳／バス・ステーション／エイリアン・スタッフ／他
3章　場から多様性へ―垂直の1キロメートル／水鏡の上の光信号／ペサンの人／プレファブリケーション／時の蘇生，長崎／サンドイッチマン／他
4章　現在の時と空間の知覚―上下の方向，現場で働く彫刻／古典的な交信機器　伝声管／ハインツのナイチンゲール／植物の劇場／9つの空間，9つの木／他
5章　プロジェクト実現のための3つの方法論―ストラスブールの市街電車のためのプロジェクト／リヨンのテロー広場／他

美術から都市へ

インディペンデント・キュレーター15年の軌跡

南條史生著
四六判　240頁　定価(本体2,700円＋税)

現代美術の最前線で活躍する著者の初めてのエッセイ集。現代美術館，パブリックアート，国際展の企画，アーティスト・イン・レジデンス等，現代美術とのかかわり合いの中で思索した，様々なテーマについて語る。

［主要内容］

1章　パブリック・アートの現在―アートがつくる公共空間／職場におけるアートについて／都市は芸術を求める／美術館と都市のはざまで／他
2章　現代美術のための空間―理想の美術館と，美術館の理想／美術館建築とは何か／光と空間の夢を訪ねて／美的精神の形象としての美術館／他
3章　国際展をめぐって―芸術の国際交流について／ドクメンタ8の現場から／パヴィリオンを越えて／クオ・ヴァディス／読み終えることのない書物のために
4章　日本のアイデンティティ―前衛の日本展／リアリティからの出発／国際展と日本
5章　アーティスト・イン・レジデンス―アーティスト・イン・レジデンスとは／世界のアーティスト・イン・レジデンス

20世紀の建築思想

―キューブからカオスへ―

杉本俊多著
四六判　224頁　定価（本体2,800円＋税）

著者は20世紀の建築のパラダイムの崩壊から再生，転生を経て爛熟に至る段階的変化を示す。さらにエコロジー，情報空間論等21世紀的テーマにも言及する。19世紀建築論である前著『建築夢の系譜』に続く、20世紀建築論。

［主要内容］

I　世紀末からの離陸／①カオスの坩堝／②古典回帰と抽象幾何学
II　理想の冒険／①ゼロからの構築／②1930年代ロマン主義／③空間構造論
III　転換／①ポスト・モダン／②タイポロジー古典主義
IV　成熟期の風景／①カオスへの旅立ち／②萌芽期の新パラダイム
結　21世紀へ

数寄屋の美学

―待庵から金属の茶室へ―

出江　寛著
四六判　224頁　定価(本体2,800円＋税)

和風建築で定評のある著者がその独自の美学をもとに，日本の古典建築と文化について語るエッセイ集。風土・建築・美術・文化など著者の関心は多岐にわたり，数々の実作を通してその思想の展開を具体的に紹介する。

［主要内容］

1章　文明と文化―風土から生まれた美意識と風物／風土に根ざした色感／不透明な光と聖／俗と聖／色気の抽象化／二元対比の美／真・行・草の美／創造とは／住居の本質／古美る／文化の高さ／ウェットとドライ／冷艶美／沈黙の美／「逆」アール・デコ／他
2章　伝統建築の美について―茶室より学ぶ美学／金閣は宙に浮いた／龍安寺・銀閣寺の庭の真行草について／数寄屋とは
3章　実作品より―丸亀の家「ペンキの数寄屋」／逆瀬台の家「日本の倉」／朧月夜の家／瓦ミュージアム／竹葉亭／トタンの茶室「荘々庵」／岡慶東京支店／三四郎の家／基督兄弟団西宮教会

北　京—都市空間を読む—

陣内秀信＋朱自煊＋高村雅彦共編
四六判・248頁　定価(本体2,900円＋税)

中国の首都北京を対象にその歴史的都市空間の特質を描く。歴史地図をもとに住宅，商業空間，官庁街など様々な表情を見せる現在の北京を解読する。アジアの都市を解析するための手引書ともなる待望の一冊。

［主要内容］

1 王の都の空間構造—いざ王の都へ／水の都／都城のコスモロジー／表徴の都市／象徴性の裏側で
2 都市を読む・北京—「乾隆京城全図」／道・土地利用／場所の論理／街区・敷地・建築
3 中庭住宅の建築文化—北京の〈四合院〉／中庭建築の空間構成／多様化する四合院／近代住宅への趣向／四合院への固執／他
4 商業空間の成り立ち—都城の商業機能／商人のまちの構造／二つの店舗形式／店舗の空間構成／他
5 盛り場の都市建築史—文化と享楽の解放区／享楽のまち・八大胡同／名所のある場所／メディアセンターとしての会館／他
6 近代都市のレトリック—近代北京を考える意味／都市近代化の原理／変容のメカニズム／北京の異界：東交民巷／中国の台頭：西交民巷／北京式里弄の出現：都市的集住への変容／偽装する近代・王府井／他
7 今に生きる北京—新生中国の理想都市／天上の前庭／他

世界都市の論理

ポール・L.ノックス，ピーター・J.テイラー共編
藤田直晴訳編
A5判　208頁　定価(本体3,600円＋税)

世界都市に関する分野の理論的・実践的なオリジナル論文13編を訳出した21世紀を占う画期的著。

［主要内容］

第1部　導入：世界都市，その理論と文脈
　世界都市研究の課題と方法／世界都市研究の到達点：この10年間の展望／世界都市と領域国家：その相互性の隆盛と衰退／世界都市における集中と中心性について／他
第2部　システムのなかの都市
　グローバル・マトリックスのなかの都市：世界システムからみた都市システムの地図化に向けて／世界都市，多国籍企業，都市階層：アメリカ合衆国の事例／世界都市仮説：周辺からの省察／シカゴ，ニューヨーク，ロサンゼルスの比較／他
第3部　世界都市における政治と政策：その理論と実践
　世界都市の再定義：文化的理論／社会的実践／地球 地域関係の理論化／世界都市の消滅と地域政治のグローバル化／付録：世界都市仮説

環境デザイン学入門

—その導入過程と展望—

G.T.ムーア他著　小林正美監訳　三浦研訳
A5判　200頁　定価(本体3,600円＋税)

人間と周囲のあらゆるスケールの物理的環境の相互関係を探究。得られた知識を，政策・計画・デザイン・教育に活かすため，生活の質の向上や人間行動を理論的に解明。21世紀に向けた学際教育・研究の実践的な啓蒙書。

［主要内容］

第Ⅰ部　環境デザイン学の試み
　1章—環境デザイン学とは何か　2章—この分野の歴史と影響　3章—目的，価値，方向付け　4章—枠組みによる組織化
第Ⅱ部　環境デザイン学で議論される重要な問題
　5章—理論，概念の問題　6章—場所の問題
　7章—利用者の問題　8章—社会行動的な現象
　9章—プロセスの問題
第Ⅲ部　環境デザイン学の実践に向けて
　11章—環境デザイン学を発展させる方策
　用語解説　付録A，B，C

環境保全と景観創造

—これからの都市風景へ向けて—

西村幸夫著
A5判　328頁　定価(本体4,200円＋税)

歴史や文化を見すえた都市計画こそ必定である。新まちづくりを支援する歴史的環境保全の思考の枠組と，景観創造へ向かうこれからの行政施策を，理論的・実践的に展開。英米の事例から日本まで扱う本邦初の大系書。

［主要内容］

第Ⅰ部　イギリス・アメリカにおける歴史的環境保全
　1章　英国シビック・アメニティ法と保全地区制度
　　シビック・アメニティ法(1967年)以前／制定とその後
　2章　英国の環境保全運動
　　土地所有による環境保全という運動論の成立／他
　3章　米国の都市計画制度と歴史的環境保全の系譜
　　歴史的環境保全制度の確立／国家歴史保全法／他
第Ⅱ部　わが国の歴史的環境保全と景観コントロールの現段階
　4章　日本の歴史的町並み
　　歴史的環境保全運動の展開／歴史的町並みの現状と課題
　5章　都市デザインと景観コントロール
　　都市デザイン思潮の現在／四則演算の都市計画／他
　6章　環境学習へ向かうまちづくり
　　子どもたちが参加する町並み学習活動／都市計画と環境教育／他
　結章　都市風景の恢復へ

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami: Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth.** ¥1,988



9701 Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Intoroduces majar works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the bueuties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metoropolises in Asia and how they will look in the feature. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Text: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Theatro G.verdi,etc ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space: Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail of through the architect's own drawings. ¥2,000

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition
Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

アルミ外壁材

アルカベール タイル調

●

ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ株式会社



アルカベール タイル調
タイルグレイ

ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ㈱では，アルミサイディングながら窯業系サイディングに劣らない質感・重厚感のある，ヨコ目地タイル調の成形加工を施した，アルカベール タイル調を新発売した．

特長

①二丁掛タイル(227㎜×60㎜)ヨコ目地調仕上げで，タイル張り風の柄，質感を表現した．

②表面に細かな凹凸をつけた特殊高耐候性ラミネートフィルムにより安心できる耐候性を有している．

③既存アルカベールタテヨコ兼用張り(ＳＫシリーズ)と共通の本実式の嵌合形状で，ヨコ張りなどとの組合わせ施工で任意のコーディネイトが可能である．

④デザインはタイル調ながら，アルミサイディングの持つ耐候性，軽量性，加工性，断熱性，経済性までも兼ね備えた割れないタイルとして，幅広いニーズに対応できる．

⑤設計の自由度も広がるタイルベージュ・タイルグレイ・タイルレンガの３色のカラーバリエーション．

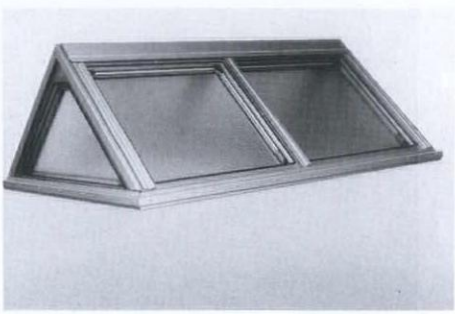
●

スカイライト結露防止システム

DEW DRY

●

三洋工業株式会社



三洋工業㈱では，スカイライト結露防止システム，DEW DRY（デュードライ）を新発売した．　DEW DRYは，同社製スカイライト，サニートップシリーズのＶ型・Ｆ型向けに開発された商品で，外気温－12℃，室温22℃，室内湿度70%R.H.を下回る環境において，室内側採光窓面ならびにアルミ枠材表面への結露発生と滴下を防ぐ．　同システムは，基本的に①結露防止ユニット②ジョイントボックス③結露防止制御盤の３点から構成される．　結露防止ユニットは，サニートップの採光窓枠内に収納されるもので，本体は断面がＺ形状のアルミ枠材で構成され，内部にはベルト状の防露ヒーターと網入りガラス（またはポリカーボネイト板)が取付けられている．　ジョイントボックスは，防露ヒーターと電源ライン（結露防止制御盤の出力端子）とを配線するための中継ボックスで，内部には安全装置を兼ねるサーモスタットを内蔵．　結露防止制御盤は，露点の計算を行い，採光窓の室内側表面に結露を発生すると判断した場合はヒーターへの通電を行う．　室温ならびに湿度センサは盤内に内蔵され，外気温センサは盤近傍の室外に設置する．　出力は３回路取れるので，１㎡の窓であれば１回路当たり８窓，３回路合計で24窓まで結露防止を行う．

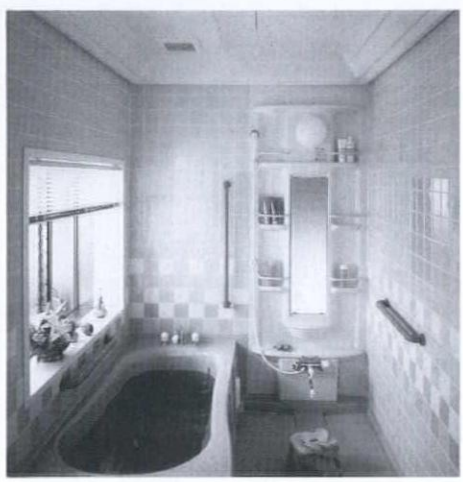
●

システムバスルーム

サンイーバス

●

三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業㈱では，普及タイプのシステムバスルーム，サンイーバスを新発売した．　サイズは0.75坪と１坪の２サイズ．　壁材はタイル，ＦＲＰ(繊維強化プラスチック)，塩ビ鋼板の３種類．　カラーはグレー系とピンク系の２色．　天井はすっきりしたフラット天井とルーミー天井の２種類．　ドアは採光面の広い高級框ドアと開閉の省スペースの２枚折り戸，いずれも樹脂板を採用した．　設置場所やサイズ，ドアや窓の取付，浴槽・床面の配色や壁の材質など，サイズ，色，タイプを好みにあわせて選べる．

特長

①高い保温や断熱に効果を発揮する素材（ＦＲＰ）で一体成形された浴槽と床（洗い場）は，すき間がなく手入れが簡単で，防水・耐久性の面でも優れている．

②浴槽の底面と腰掛けスペースには，凹凸パターン処理を施した安心設計．　また，浴槽につかりながらの肘掛けスペースは，立ち上がる際の支えにもなる．

③浴槽のまたぎ高さは，約40㎝と低く抑え，お年寄りや子供たちにも入浴をしやすくしている．

④床面は自然の風合い，質感が素足に心地よい岩肌調の仕上げは，すべりにくさにも配慮した．

⑤大型収納パネルは，おしゃれなスリムミラータイプ．

ＹＫＫアーキテクチュラル プロダクツ株式会社
東京都千代田区神田和泉町１番地
〒101-0024　Tel　03-3864-4134

三洋工業株式会社
東京都江東区亀戸６丁目20番７号
〒136-8502　Tel　03-3685-3452

三協アルミニウム工業株式会社　広報室
富山県高岡市早川70番
〒933-0957　Tel　0766-20-2332

●
タイヤ

TY387

●
横浜ゴム株式会社



横浜ゴム㈱では，トラック・バス用オールシーズンラジアルタイヤの新商品，ＴＹ387を新発売した．　発売サイズは，11R22.5　14PR～12R22.5　16PRの4サイズ．　価格は全てオープンプライスである．　ＴＹ387は，同社が新たに開発した，偏摩耗抑制理論ＭＳＣ（Maintenance Saving Concept）を採用することにより，耐偏摩耗性を向上させ，省メンテナンス化を図ったことが特長である．　5本のストレートグルーブとスラントグルーブからなる洗練されたデザインのトレッドパターンを採用することにより，高いウェット性能と快適性を確保した．　また，新パターンは摩耗によるパターン変化も少なく，長期にわたる性能維持を実現した．　ＭＳＣ（メンテナンス・セービング・コンセプト）はタイヤにかかるエネルギーやストレスを効果的に吸収・分散することにより偏摩耗の発生を抑制するもの．　ＴＹ387では，ＭＳＣから生まれたＳＣグルーブ，ＳＣリブ，ＳＣサイプの3つの技術を採用している．　また，同社独自のタイヤ設計理論STEM-2（タイヤ負荷状態総合性能向上理論）の採用により走行時のストレスを抑え，耐久性と耐摩耗性を高水準で両立した．

横浜ゴム株式会社　広報部
東京都港区新橋５丁目36番11号
〒105-8685　Tel　03-5400-4532

●
フローリング

WOOD FLOOR

●
株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは，フローリングの新商品WOOD FLOOR（ウッドフロア）の見本帳を発表，同時に新発売した．マンションなどの集合住宅における防音問題に対応した優れた遮音性を持ち，業界初のＦ１（JAS）規格適合品のため（従来品はＦ２規格）ホルムアルデヒド放出量を大幅に抑えた健康に優しい商品である．

特長

①ホルムアルデヒドの放出量を木質床材で初めて，従来品の10分の１にあたる0.5mg/ℓ以下に抑えた．
②マンションや集合住宅に最適な，遮音性能ＬＬ-40，ＬＬ-45の優れた性能を持ってる．
③表面に無機抗菌剤を練り込んであるので，優れた抗菌効果がある．
④温度・湿度の変化によって起こるフロア表面のひび割れを起こりにくくする加工がしてある．
⑤合板部に害虫（ヒラタキクイムシ）から守る防虫処理がしてある．
⑥施工した時の厚みがカーペットとほぼ同じ（11～13㎜）になるので，ドア下部の納まりもよく，リフォームに最適である．
⑦ロスが少なく施工や運搬にも便利な２枚１ブロックタイプの規格である．

株式会社サンゲツ　営業推進課
名古屋市西区幅下１丁目４番１号
〒451-0041　Tel　052-564-3111

●
ベビーチェア ベビーシート

ベビーチェア ベビーシート

●
ＴＯＴＯ



ＴＯＴＯでは，トイレブース内に設置し外出先でのトイレ使用時に赤ちゃんを安全に座らせておく，ベビーチェア，トイレ入口スペースなどに設置し，おむつ替えや赤ちゃんの世話が楽にできるようにする，ベビーシートを新発売した．　それぞれに，機能の充実した標準タイプと省スペースタイプの２タイプ計４タイプがあり，省スペースタイプは狭いトイレブース内にも設置可能．　ベビーチェアは両脇，股の三点支持で座らせた赤ちゃんをしっかり保持する．　標準タイプでは，両脇を保持する安全ガードが，赤ちゃんの体形に合わせて前後に調整できる．　省スペースタイプは，座面が折りたためるため，800㎜×1,200㎜程度の狭いトイレブース内にも設置可能．　ベビーシートはベビーベッドを置けないスペースにも設置できるよう，座面が開閉式となっている．（収納時の前出寸法253㎜：標準タイプ）手前に開くと高さ800㎜の座面が現れ，ここに赤ちゃんを寝かせると，無理な姿勢を取らず楽におむつ替えなどの世話ができる．省スペースタイプは，収納時の前出寸法が100㎜と更に薄形で900㎜×1,500㎜程度のトイレブース内にも設置できる．

価格（ベビーチェア　写真タイプ）
73,000円

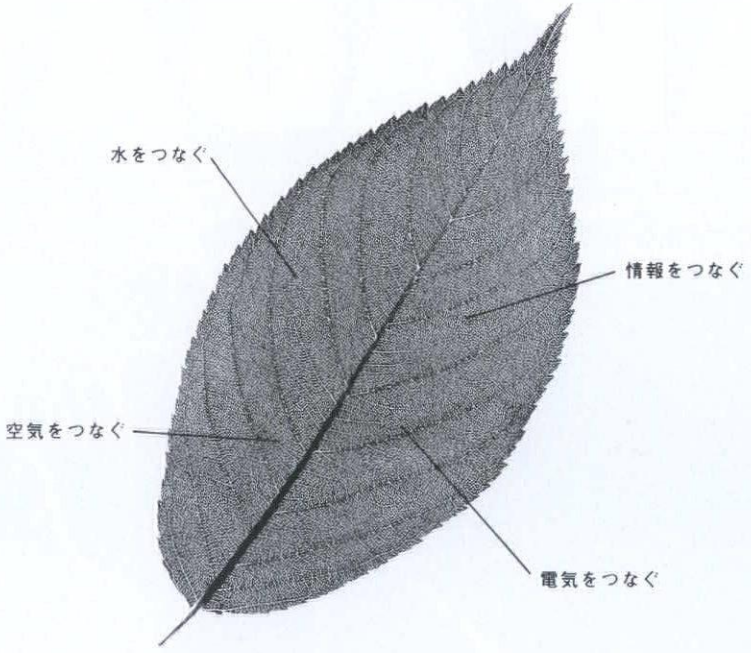
ＴＯＴＯ　広報室　東京広報グループ
東京都港区南青山1丁目24番３号
〒107-0062　Tel　03-3595-9422

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

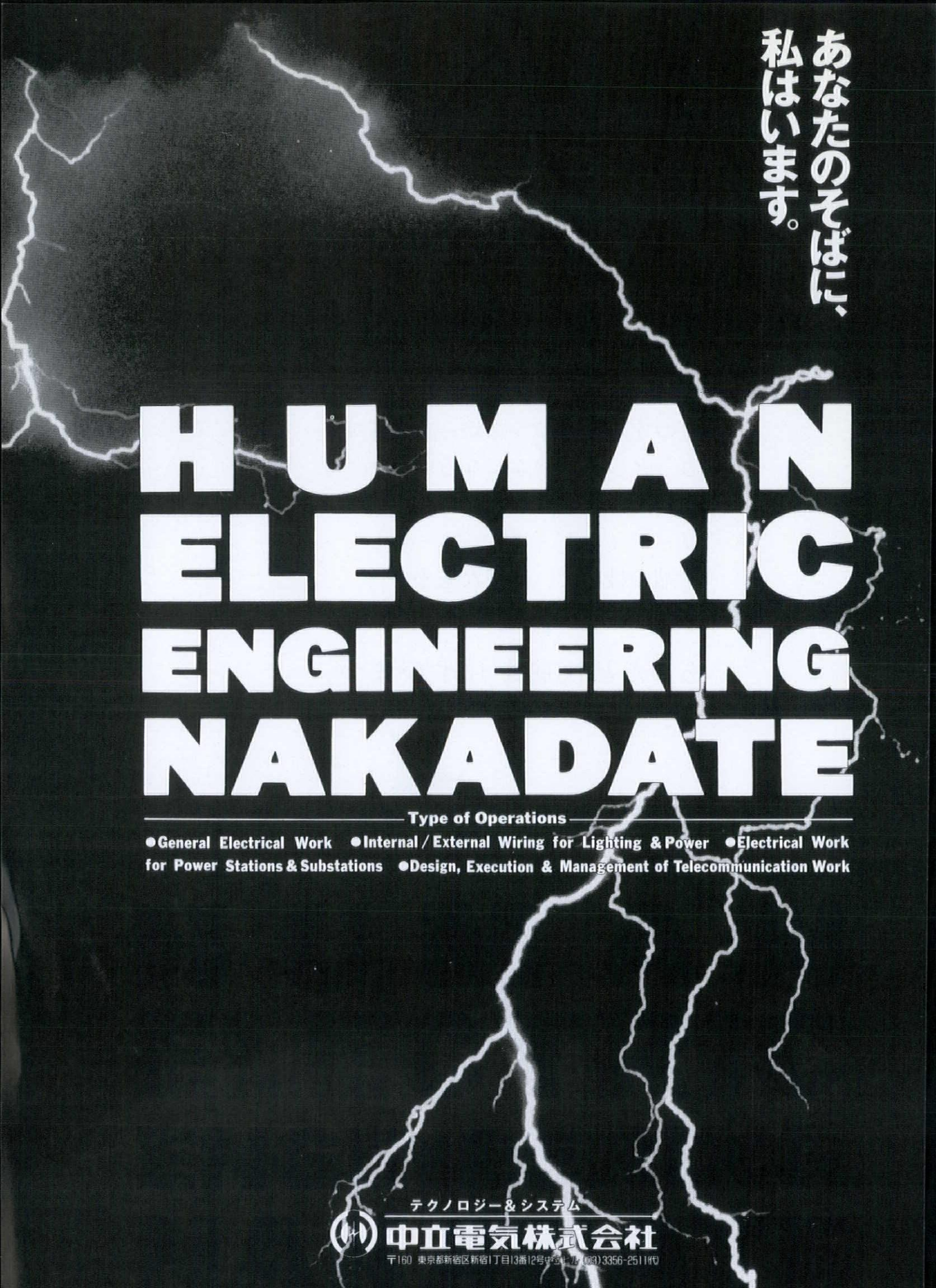
私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



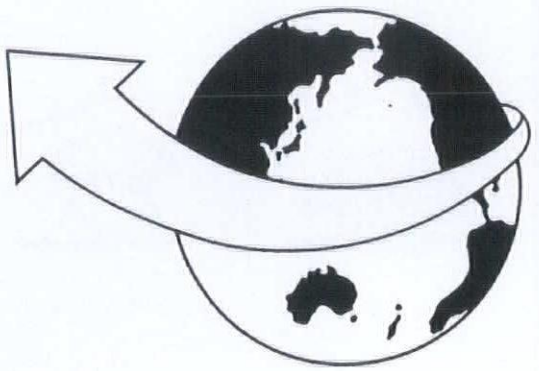
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他


あなたのそばに、
私はいます。
HUMAN
ELECTRIC
ENGINEERING
NAKADATE
Type of Operations
●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work
テクノロジー&システム
中立電気株式会社
〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号中立ビル (03)3356-2511(代)

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大阪支社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

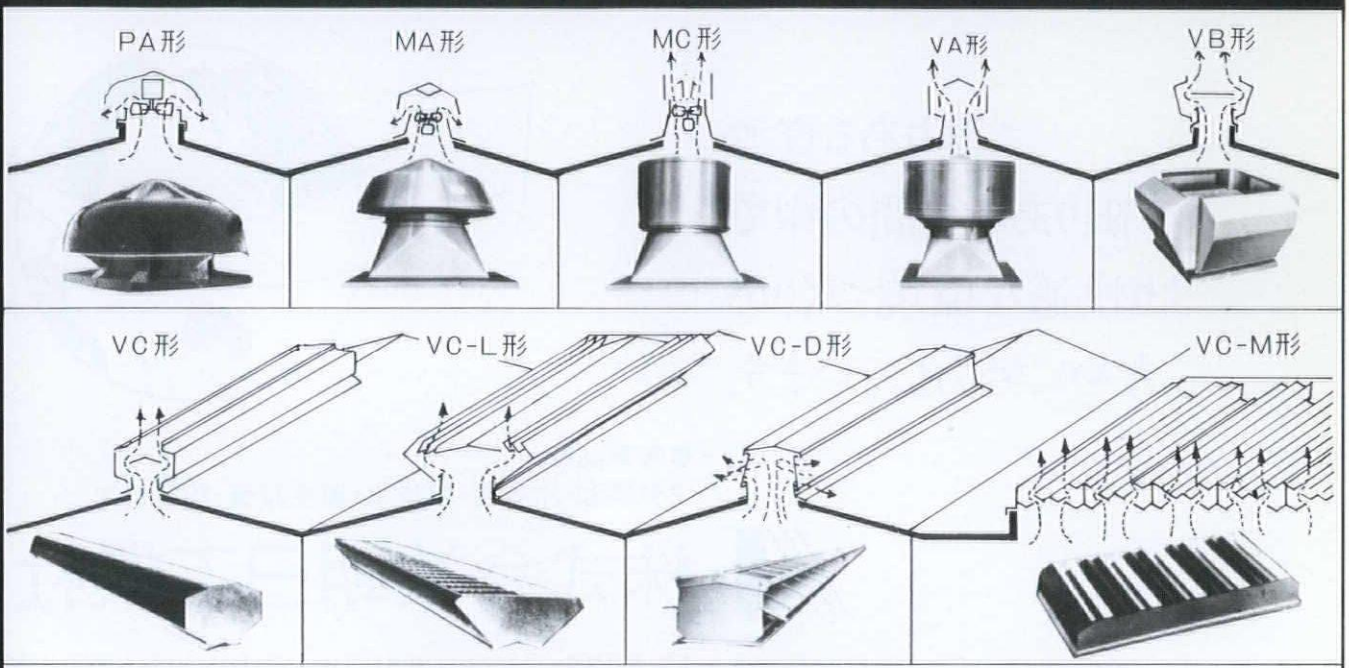


先端技術で、システムする。
TOENEC
株式会社トーエネック
本　店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06) 305-2181

坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

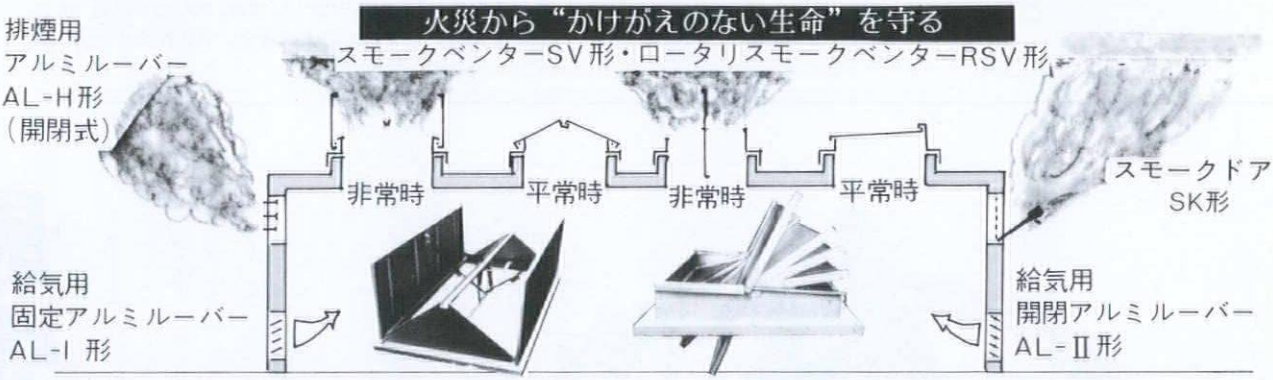
強制換気・自然換気装置

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



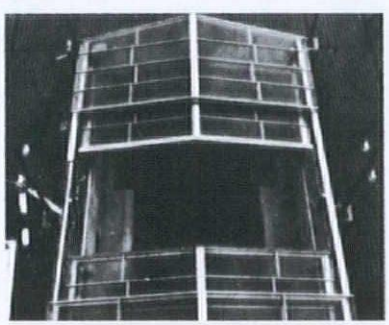
排煙・ルーバー装置

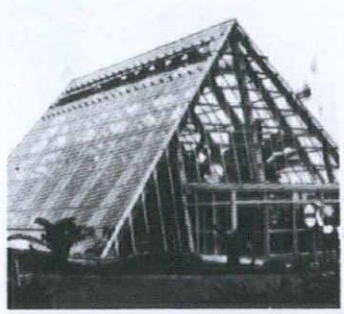
火災から“かけがえのない生命”を守る

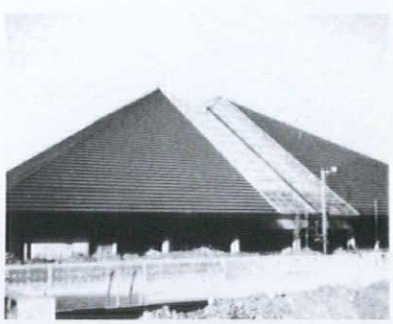


採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103-0027	電話 東京 (03)3271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131-0032	電話 東京 (03)3619－2221(代)

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

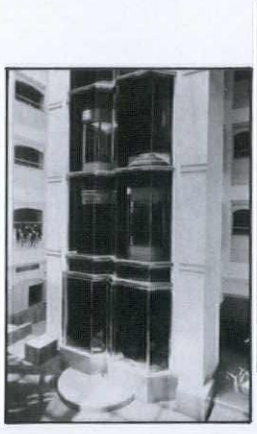
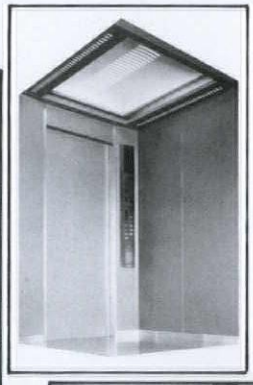
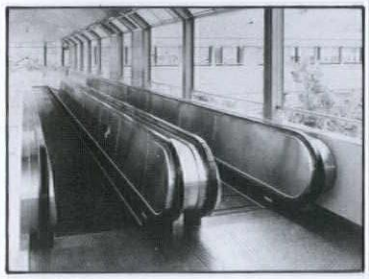
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

ア　㈱朝日工業社――A17
カ　㈱関電工――A3
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
サ　三機工業㈱――107
㈱坂本商会――A18
シ　新日軽㈱――表4
昭和鋼機㈱――108
ス　住友電設㈱――A15
ス　高砂熱学工業㈱――表3
大興物産㈱――A8
ト　東光電気工事㈱――A12
㈱トーエネック――A17
㈱東芝――A20
東洋熱工業㈱――113
ナ　中立電気㈱――A16
ニ　日本電気㈱――A9
日新工業㈱――A10
㈱西原衛生工業所――A11
ハ　パイオニア㈱――100
フ　㈱ブリヂストン――A1
ホ　ホテルイースト21東京――A7
マ　松下電器産業㈱――A2
ミ　三菱電機㈱――79
ヤ　矢崎総業㈱――表2
㈱ヤナセ設備工業――116
山田照明㈱――115



乗る人の気持ちを考える。
そこから始まる技術、
すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、そのまた子供たちが安心して利用できるエレベーター・エスカレーターづくりを。
そのために東芝が理想としている技術をひと言でいえば、それは、技術を感じさせない技術。乗っていることを感じさせない技術こそ、私たちの理想です。
人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の気持ちを考えたアメニティ空間へ。
私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境づくりに取りくんでいます。


東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 東芝　　昇降機事業部

本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング)　TEL(03)3457-4613